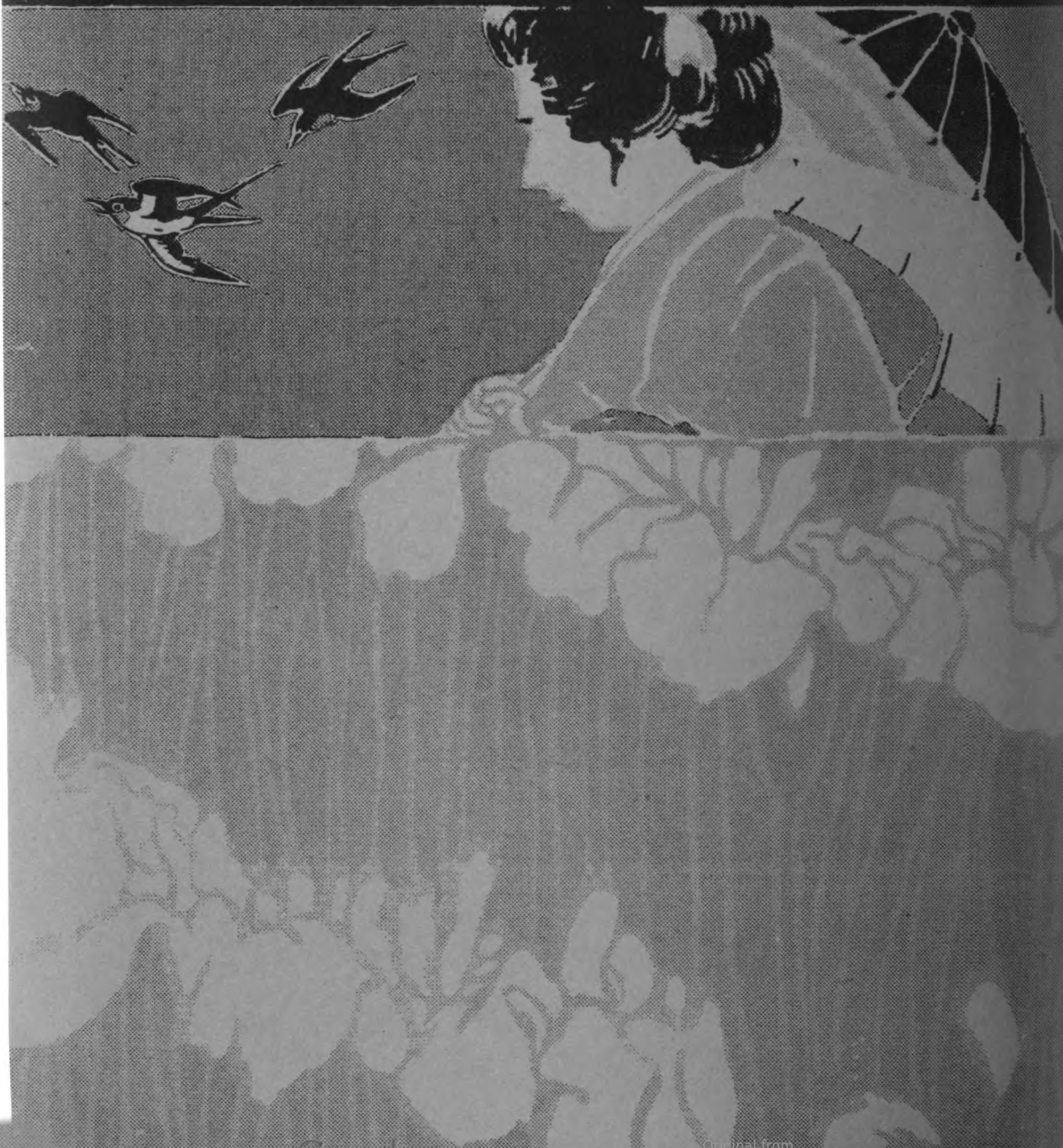
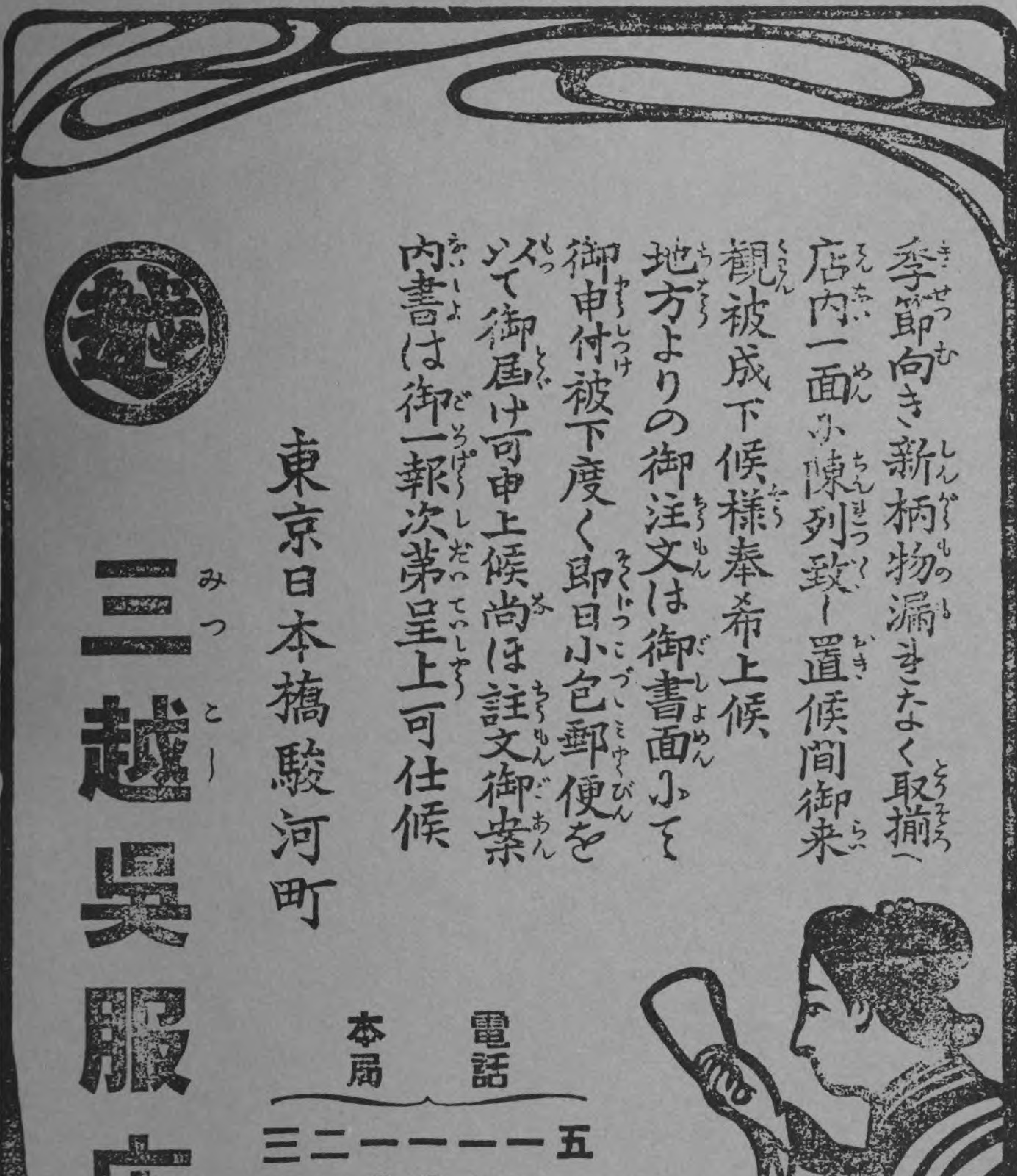
女鑑

第十六年第六號




季節向き新柄物漏れなく取揃へ店内一面に陳列致し置候間御来観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて御申付被下度く即日小包郵便を以て御届け可申上候尚ほ注文御案内書は御一報次第呈上可仕候
東京日本橋駿河町
三越呉服店
電話本局
五一一五
一二一七
一七九三
一八五六
一八六〇
二二二二
三二七八

女鑑 第十六年 第六號 目次

近刊豫告

文部省體操遊戲取調委員坪井玄道、井口あくり、可兒德、川瀨元九郎、高島平三郎諸先生共著

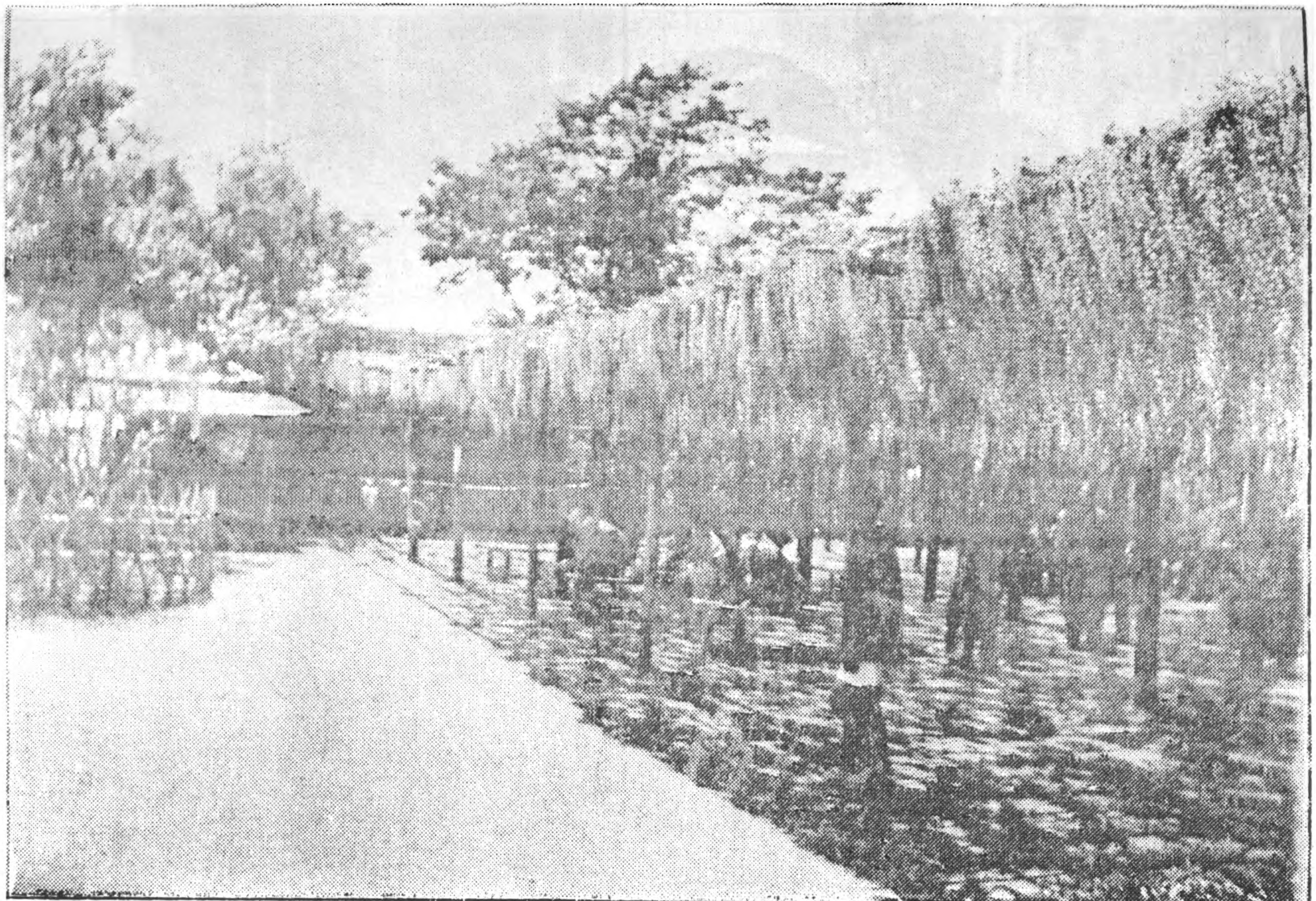
體育の理論及實際

菊判 三百餘頁
洋裝 全一册
定價 未定

本書は本年一月十五日文部省より官報を以て發表せられたる體操遊戲取調報告に基き同取調委員高島平三郎川瀨元九郎可兒德井口あくり坪井玄道諸先生が其各條項を敎育、生理、及實地上より一々詳細に說明せられたるものにして設備、動作等は詳密なる挿畫によりて懇切叮寧に示しあれば此書を繙くものは親しく諸先生に就て指導を受くるの思あるべし、而して新式體育要項は全體網羅して遺す所なし故に學校に於ては勿論一般體育に志す人士は必缺ぐ可らざる要書なり

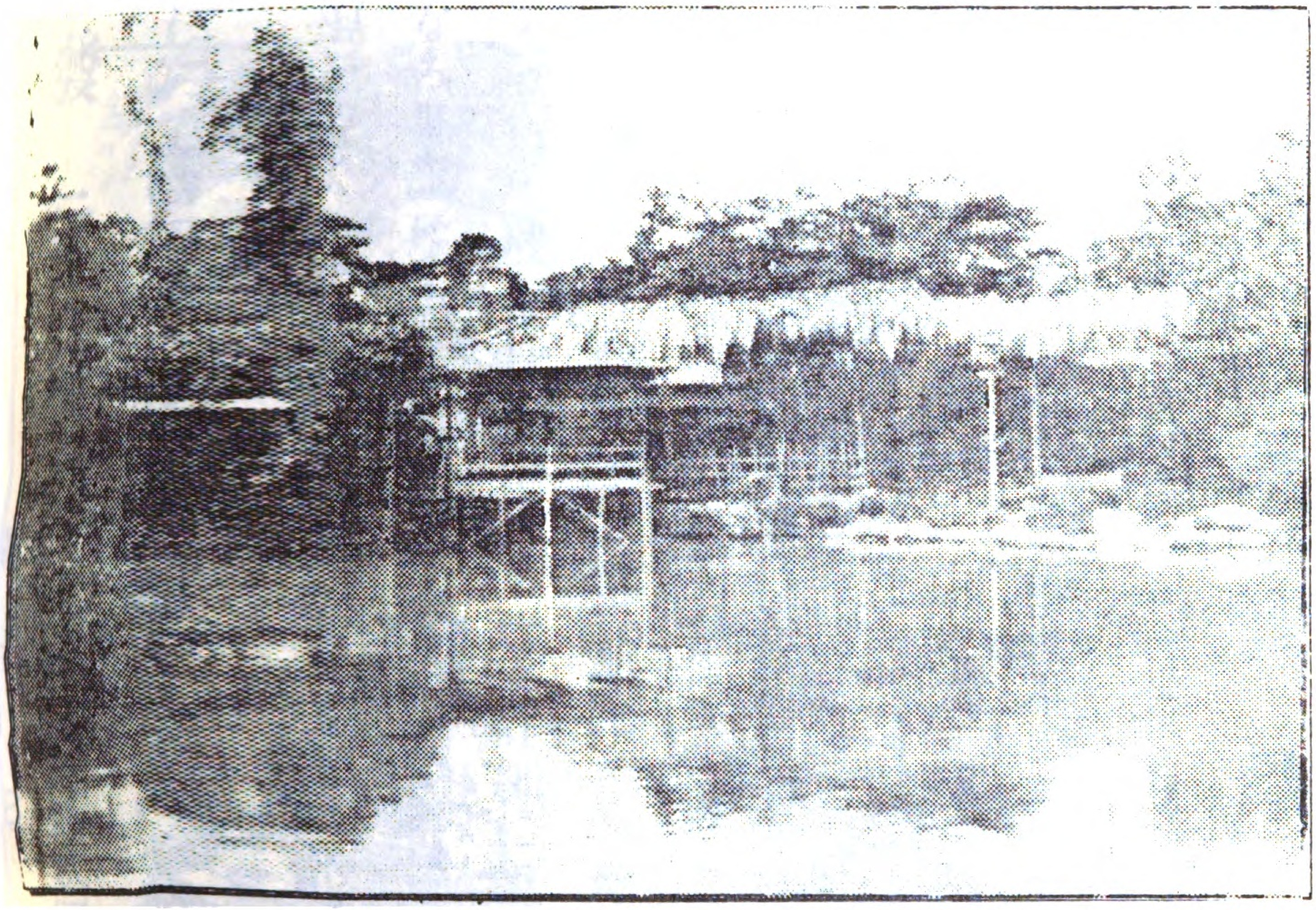
發行所 東京築地貳丁目 株式會社 國光社

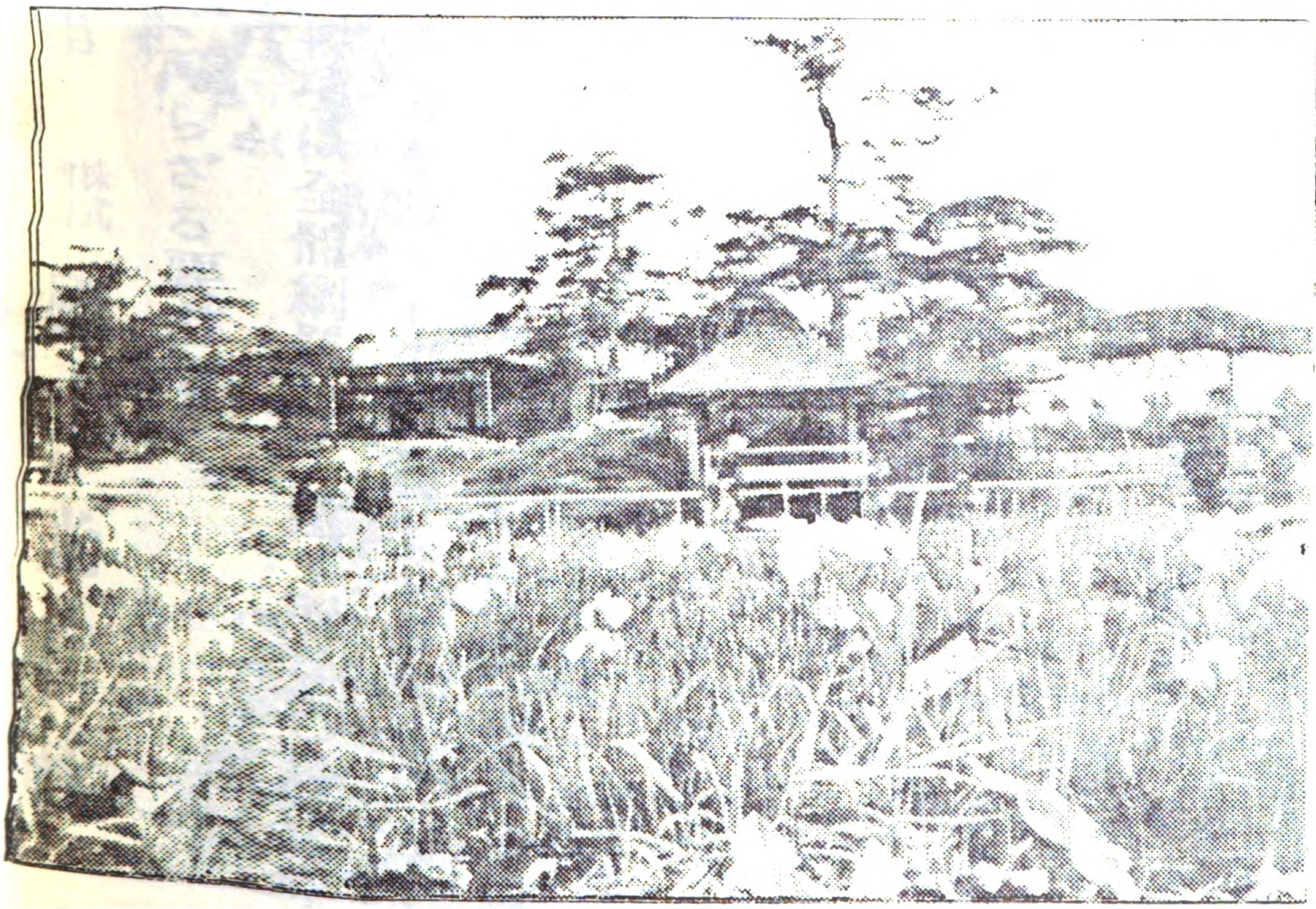
粕壁の藤



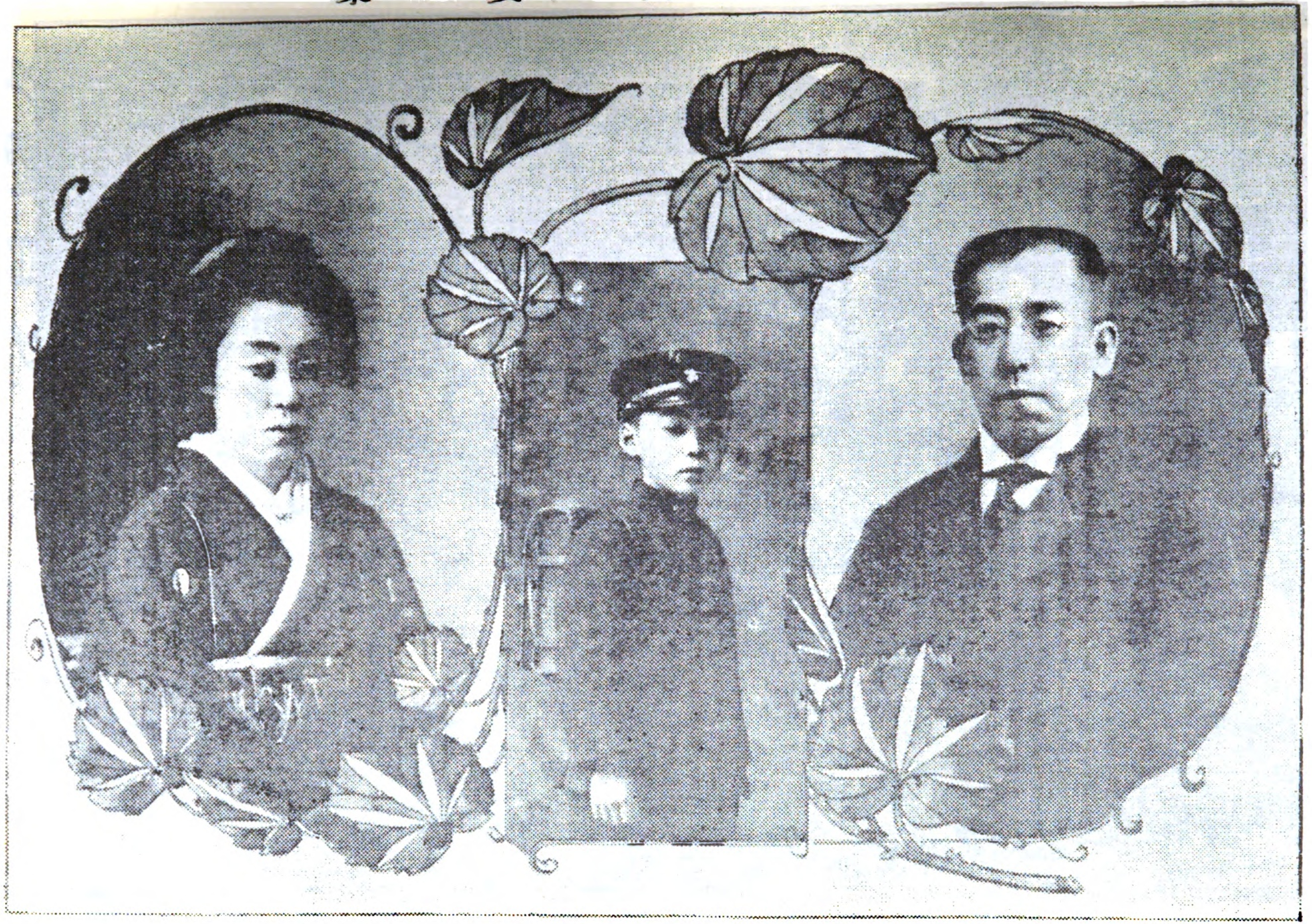
男爵德川厚君撮影

五月の花


清水谷の藤


堀切の菖蒲

徳川田安家



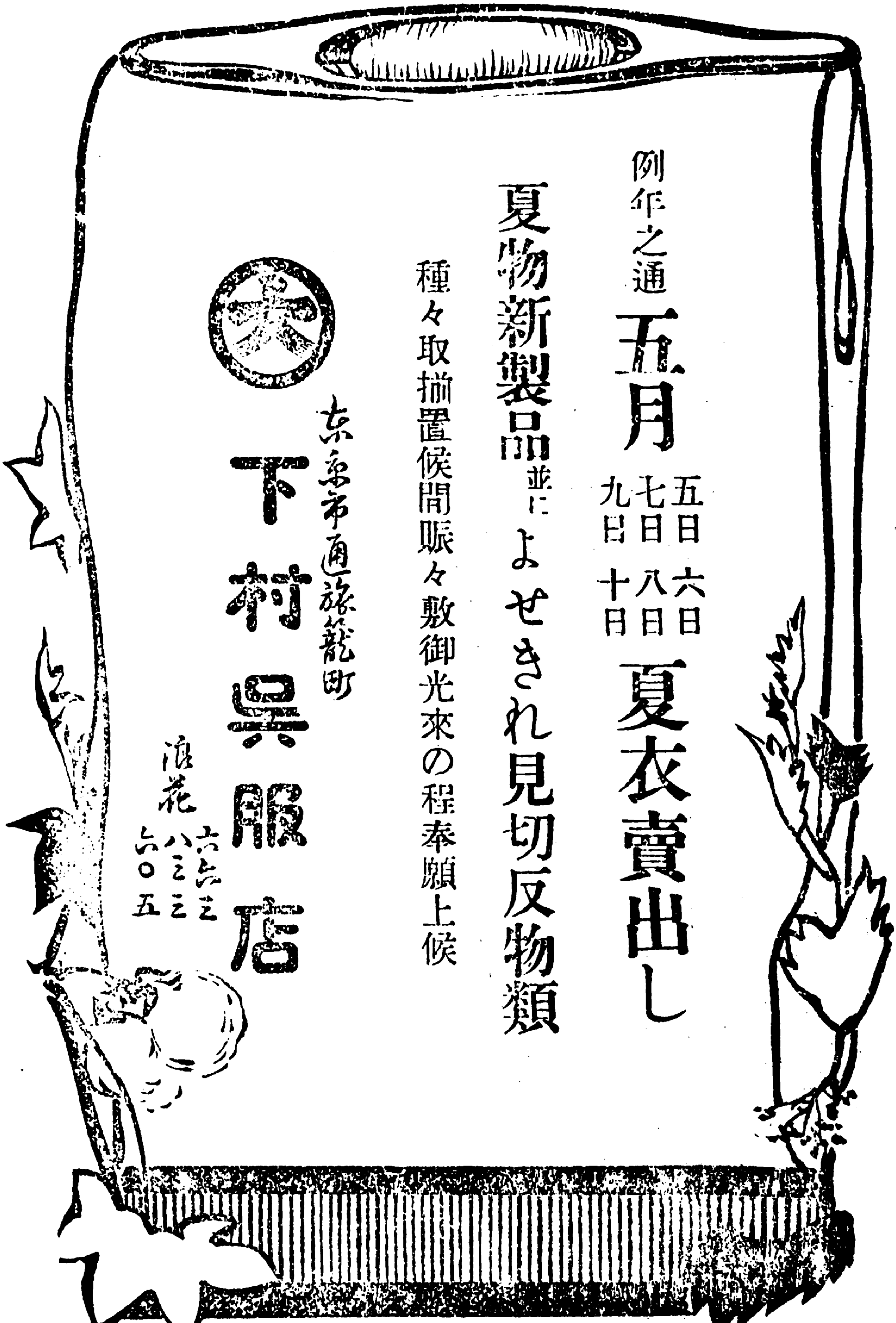
伯爵 徳川達孝君

令夫人 同 知子君

世嗣 同 達成君

華族女學校卒業式




例年之通
五月
五日 六日 七日 八日 九日 十日
夏衣賣出し
夏物新製品並によせきれ見切反物類
種々取揃置候間賑々敷御光來の程奉願上候
東京市通旅籠町
下村呉服店
浪花
六六三
八二二
六〇五

幼兒の就膳



幼兒百態の一（以下續出）

井伊直方君撮影

繪畫の稽古



被布姿の先生が　跡見玉枝女史

女子商業學校卒業式



前例右より四番目　校長　和田垣博士

前例左より四番目　學監　嘉悅孝子女史

水戸高等女學校卒業式



見よ！大發展大擴張の婦人世界！

大好評　**婦人世界**　大好評

五月三日發行　毎月一回　**第五號**　一册拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九十錢　一年分一圓七十五錢

口繪

◎久邇宮妃殿下と若宮妃宮殿下◎
◎東伏見宮邸内日本婦人衞生會◎
◎各女學校卒業生總代と製作品◎
◎華族女學校及女子大學卒業生◎
◎跡見女學校卒業生並に教職員◎

彩色石版　**繪手本**

◎藤見……中澤弘光
◎花と小犬
◎杜若……跡見花蹊
◎躑躅……中澤弘光

▲**婦人の日常生活法**……村井弦齋

◎婦人は何が一番大切か◎朝は如何に床を離るべきか◎厠には何時行くべきか◎いろいろの惡い習慣◎齒は如何に磨くべきか◎顏は如何に洗ふべきか◎洗面水は何を交ふべきか◎手拭は如何に使ふべきか◎鼻は如何に洗ふべきか◎石鹼と洗粉とは何れが好きか……

▲**女學生に家事を見習はしむる法**……星常子　嘉悦孝子

△妻君重寶記……　▲便利なる西洋家具

▲**繼母の鑑菊池博士夫人**……樂石生

△女子の天職……理科大學長理學博士　箕作佳吉

▲婦人の衞生……醫學士　伊庭秀榮

▲家庭菓子製法……　▲生花指南

▲嘘つく子供の所置……大村仁太郎

△**莊田平五郎氏の家庭**……古月庵

▲家庭料理……赤堀峰吉……石井泰次郎

△小兒の食物……ドクトル　加藤照麿

▲**女學生墮落の眞相**……松齊

△最新流行の婦人靴（十二頁の長篇女學生父兄必讀）

▲新形洋傘……

▲投身せる一婦人……ちどり

△わゝ可笑しい……鶯亭金升

▲**出產時の心得**

▲家庭おぼえ帳

△男女學生の交際……女子大學學監　麻生正藏

▲美人となる法……みどり

▲女子不可見記……鬼門外史

△**小說—秋子**……長谷部湘雨

▲育兒問答……　△衞生問答……

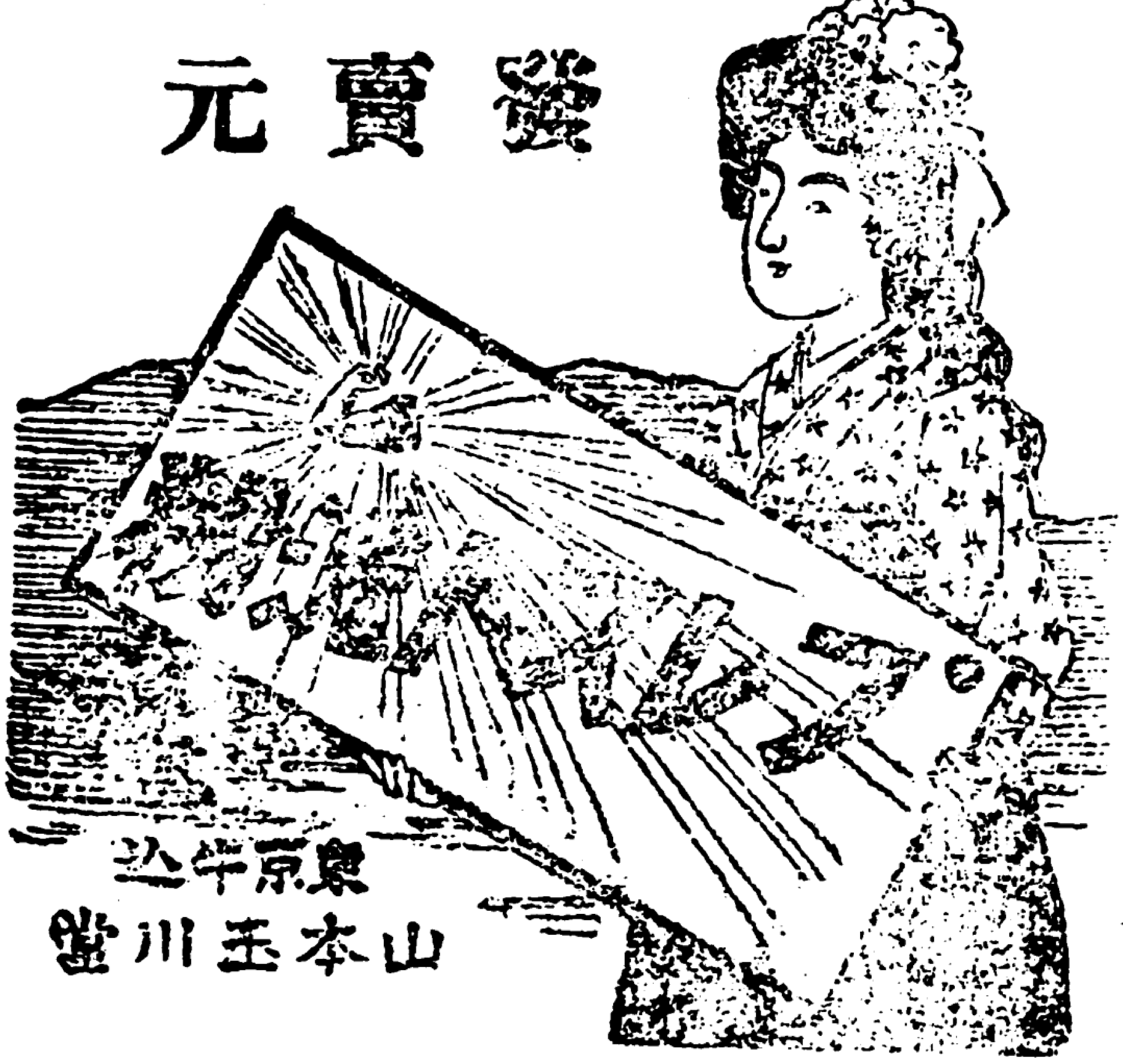
特別附録　矯風悲劇

女道樂　脚本……村井弦齋

懸賞　讀者文藝

發兌元　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本●　（電話新橋八七四番）　賣捌　各書店

日本一手
發賣元



○プレスト洗粉は品質純良にして色を白くし皮膚を滑にし光澤を出す

○プレスト洗粉は普通の洗粉の如く多量に用ふ可からず壹袋を以て六七回の入浴に適す

定價　小袋入貳錢　大袋入拾錢
小鑵入七錢　大鑵入拾五錢

清心丹は興奮、清涼、收斂、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポッケット用、携帶用に便利なるニッケル鑵入の設けあり定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥舗賣藥舗にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御要求あらん事を乞ふ



本舗東京市元大阪町

高木與兵衛





第十六年　女鑑　第六號

新上京の女學生に

今春笈を負うて上京せし女學生、これを一列に立たしむれば、萬里の長城と其長さを爭ふに至るべし、豈盛んならずや、

然して是等多數の女學生、如何なる目的を抱いて上京せるや、言ふ迄もなく、申分なき女子となるべき素養をつくらんが爲なるべし、故山に別れ、父母に遠かり、螢の光り暗く、雪の色冷たき窓に、學術を研き、技藝を究めんとする勇氣、實に感服の外なきなり、

されど現時の東京は、この新來の女學生を迎ふるに、完全なる準備ありやといへば、女學校の如きも悉く完全なりと云ふを得ず、就中看板のみ大にして、其の實の擧らざるものもあるべく、世上一般浮華に流れて、靜かなる窓に讀書せしむるを許さず、四面の誘惑は、惡風に感染するに易

し、清淨無垢の女子を東京に遊學せしむる、危險といへばこれ以上危險なることはあるまじ、さりながらもし之を危險として恐れんか、女子は足を一歩をも戸外に出すを得ざる也、然も危險はこの外界の惡風習、惡誘惑よりも、女學生自身の薄弱なる意志なり、もし當初の意志にして、些の動く所なくんば、學術を研き、技藝を究むるに於て、東京は最も多くの便利を有する也、

予は新來の女學生諸君が、清淨無垢の身と、遠大の志望とをもつて、上京せられたるを信ずるを以て、一言を呈せんと欲す、

まづ一見したる所、諸君が質素なる風采、實に千金の價値を有せるなり、さればこの風采を、速に撮影して机上に置き、朝夕之に向ひて、風采の異る所なきかを検せよ、もし些しにても、その寫眞を可笑しと思ふ念起らば、その時は既に危險の淵に臨みたるものにして、直に其の念を警戒せざる可らず、世には自家頭上の蠅をすら追ひ得るもの少し、何ぞ他の上に及び得べき、自身の制裁は、自分の意志以上のものはあらず、常に自ら警戒せよ、少くも其風采に警戒せよ、

木綿着の肩に重きを感ずるやうになりては、なか〳〵學藝研究などの重荷を擔ひ得らるべきものにあらず故に諸君が今後數年は、操行を重んじ、學術を研き、技藝を究むるに一意専心なれ、あらぬ念を起して、邪路に踏入ることなくんば、品行は自ら修め得べく、當初の目的は、滯りなく達し得らるゝ也、而して諸君が校門を出づる時、更に一言する所あらん。

家庭の趣味

家庭には理屈または窮屈、すべて屈の字は不用なれば、たゞ安らかにたひらなるべく、女子が家庭を睦く

するには、その心掛として、常に用意こまやかに、物事に愼み深かるべし、
午前九時他より一尾の鯛を貰ひたりとせんか、この鯛は晝餉の膳に上るべきものと定まり、さて十二時近くなりて、これは如何に料理せんかとあはてる如き、又午後五時には夕飯の仕度にかゝらねばならぬを、まだ三時なれば、手を遊ばして置くも勿體なしと、裁縫などに取かゝりたるは殊勝なれど、二時間に何程まで針の運ぶべきかには無頓着にて、日暮れて初めて釜の下を思出し、手をつけたる仕事の片付さへも出來ぬごとき、又今朝は六時に家を立つといふ人の爲に、六時に膳をあてがひて、食後に寸時の休憩はおろか、箸を執る間をさへあはたゞしくせしむる如き、又臺所を預りながら、八百屋の前を何を並べありしかも知らずに通り過ぐる如ぎ、毎日の事にも用意の缺くるもの、常に用意深かるべき女子の、實際十中八九を占むる如きは、事まことに小なる如きも、家庭は斯ることより面白からずなりゆくものなれば、女子は常に役にも立たぬことにくよ〳〵するをやめて、家庭に立つて常に趣向あるべく、かゝる用意にハキ〳〵とありたきことなり、言葉ばかりのハキ〳〵にあらで、

又物事につゝしみ深かるべし、無邪氣に立働く女子も、つゝしみなければ、所謂お座のさめることあり、高笑ひをして人の感情を害ふ如きは、つゝしみ淺き出來事にして、牛賣損ふ出來し立に至つては、以ての外の事なり、

要するに女子はやさしく、物しづかに、用意こまやかに、つゝしみ深くして、申分のなきものといふべくこれの揃ひたる女子の、家庭に采配をふれば、家庭は睦まじく治まるなり、趣味のなき、面白味のなき、人の長く腰を落着けられぬ如き、窮屈なる家庭には、まだ其家に女子らしき女子の取締なき故と知るべし。



女子と技藝

伯爵　大隈重信

女子、殊に日本の女子は、甚だ指の先の働きに妙を得て居る、此點に於ては、世界いづれの國の女子に比較しても劣る所はあるまい、又女子は優美なる姿勢と特性を有して居るから、美術を學ぶには最も適して居る、即ち女子は得意の指の先を働かせて、大に技藝の美を發揮せねばならぬ、少くとも女子は身に一藝を附けて置かねばならぬ、

女子が技藝を學ぶは、絶對的に獨立すべきものとしてゞはない、何うしても女子は妻といふものにならねばならぬ、妻となるに於ても、大に習得して居らねばならぬ事である、一家は必ずしも口の先のみで支配が出來るものではない、大に手足を働かして初めて團欒の樂を見ることが出來るのである、

書籍を見るにしても、倫理書を見ねばならぬと同時に、技藝書をも見ねばならぬ、たゞ人に倫理が結構であるからと云うて、働く事の厭なやうなものに如何ほどつめ込んで見た所が、何の役に立つものではない、支那は昔から孔子を尊んで、口では倫理のやかましい國であるが、それと反對に昔から正直な人物が少い露西亞の如きは、國民が聖書を懐にして會堂に行くことには甚だ力めて居るが、さて露西亞人は正直であ

らうか、其行ひは聖書を見ぬ人よりも、聖書に遠かつて居るのが多いやうである、云ふ間に行へといふことが、至言であらうと思ふ、

女子が技藝を覺えて置く必要は、恰も國に兵備ある如きもので、兵備は平和の保證で、決して戰ふが目的ではない、併しいざ鎌倉となれば、また大に目ざましく活動せねばならぬ、女子の技藝に於けるも、また同じことであつて、直に獨立する爲にといふ譯ではない、たとひ生家はいかに富裕であつて、技藝は悉く他人の手に委ねることが出來るとしても、其富裕は昨と今と必ずしも繼續するものとも限らぬ、嫁せば又直に境遇が變つて來る、その境遇がいかにまた變動するかも知れぬ、かゝる時に於て、身に技藝があれば己を恃むといふ念も強く、これが爲に貞操を保つことも出來る、又いづくまでも技藝を以て身を糊する必要がないにしても、慈善をしたい、人の急に赴きたいと思ふ場合に於て、生家や良人の金をあてにせず、己が技藝より得たる報酬を以てするといふ事になれば、甚だ趣味もあり、之を受けた人も、その徳に感ずることであるから、その心掛がほしいものである、然らば技藝は實益の擧るばかりでなく、慰みとも樂みともなるべきものである、一家を治める上に於ても、技藝を習得し、それを活用することが主要である。

女子の心得

法學博士　阪谷芳郎

女子の心得を述ぶるに就ては、先づ女子と男子と事情の違ふ點を論じて置かなければならぬ、

第一に男子と女子とは身體の構造が自然違つて居る、男子の身體の構造は强壯に、女子は柔和に、生理上出來て居る、併ながら之に就てもいろ〳〵學者の研究があつて、野蠻國に往くと、反對と云ふ程でもない

が、殆ど男子の方が柔和で、女子の方が骨々して居る様な處がある、日本の中でも伊豆の大島、或は琉球とか云ふ様な處は、女子が強壯で、却つて男子を養ふやうになつて居る、琉球邊の事を聴くと、極端なる話のやうであるが、女子が魚などを賣るとか、種々身體を遣ふ仕事をして、男子は家に在つて蛇味線を彈いて居る、恰も内地の男子が、琉球の女子で、琉球の男子が内地の女子である、尚其他にも其例が澤山ある、右の如く野蠻社會（琉球を指す譯ではない）には存外女子の體力が強壯である、併ながら一般普通の文明の國に在つては、女子は軟弱に、男子は強壯であることは事實で有る、英吉利のダアヴインと云ふ學者の述べたる自然淘汰法と云ふ處から、常に身體を遣つて居れば、女子でも強く、遣はなければ弱くなる、ソレ故或は華族の若様と云ふやうな人は大層弱く、山出しの下婢などは、女でもなか／＼強い、此二つを比較して見ると、男子の身體の強壯にして、女子の身體の柔弱なるも、所謂自然淘汰法で有るソレ故今日文明社會の女子の弱いのは天性であるか、若くは社會の習慣が、自ら女子をして柔和にならしめたのか、是は一の疑問としなければ

米國女子教育談

元來米國の大概な學校は、他の學校の教授なぞの來訪の際に、其學校内に宿泊せしむる設備がありますが、私も其學校附きの壯麗な宿泊所内に泊つて、五日も十日も懇切に接待して呉れました、私しが今學校と云ふのは、女學校の事ですが、米國では大概男女合併ですから、別に女學校と申して區別して呼ぶ必要がないです、宗教と女子教育ですが、御承知の通り米國では基督教が社會普通の思想で、政治も商賣も社會の事は、基督教を根基として居りますから、日本の如く佛教とか基督教とか、無宗教とか云ふ様の區別を見る事は決して出來ません、何れの女學校でも、必ず祈禱なり聖書朗讀なりはあるが、是れは決して宗派的信仰の動作ではない、米國では日本の如く、倫理とか修身とか云ふ特設の課目なき故、米國の各女學校のクリスト教は、先づ日本の倫理科とも見るべきであります、ソレですから近來米國の牧師社會では、女學校に宗教を入れねばならぬと云ふ議論が起つて居る位です

ばならないが、兎に角普通に論ずれば、女子の體力は甚だ柔和で有る、次に脳力は如何、亞米利加、英吉利邊の學者の中には、頻りに論が有つて、或は婦人の脳髓と、男子の脳髓とを權衡に掛けて試驗すると云ふ樣なむづかしい事をして居るが、是も男子の脳力はいろ〳〵の艱難に出會ひ、又いろ〳〵むづかしい事を考へても、よくソレに堪へて往くことが強い、ソレに反して婦人の脳は何事にも堪へる力が乏しい、併しながら是にも說が色々有る、而して體力の議論より、脳力の優劣の議論の方がむづかしい、けれども是れも男子の口からさういつてはをかしいが、現在の處を見ればどうしても男子の脳力の方が能く發達して居ることは疑ひなき事實と思はれる、やはり是も自然淘汰法で、將來學校の教育、教育會等の勢力如何に因つては、何う變化するか、先づ現在の上に就ては、人體の構造が體力脳力共に、男子と女子に強弱の區別あることは許して置かなければならない、

第二女子は他に嫁さなければならない、ソレ故生れ落つるから、他に嫁すべきものであると云ふ觀念を養

米國女子教育の特長は弊害と見ればズン〳〵と改良し、自由の發達を遂げるやうになつて居る事で、英國なぞでは決して出來ない事です、畢竟新聞の國土たる天惠でせう、女子教育發達の弊ですか、私は女子の教育は何程向上發達を遂げても決して何等の不都合はないことを茲に斷言します、よく世間の半可通は、米國では新聞事業が馬鹿々々しい程發達した爲に、其弊害は實に仕方がない、日本なぞでも新聞紙なぞは餘りに發達せぬ方がよいといひ、女子教育も其れと同じ筆法で女子を無暗に大切なものと信じて、餘りに十分な教育を施すと、手も足もつけられぬ女が出來ると申して居るやうですが、之れは云ふ迄もなく新聞紙なり女子教育なりの眞正の進歩なり、發達なりを誤解して居るからです、成程米國では新聞社の組織は發達して居ますが、其頭腦なり大精神なりは、決して發達も進歩もして居りません、發達進歩と云ふのが、組織や外形でなくして、眞正な發達ならば、何程進歩しても、國家人類の慶事でこそあれ、更に何等の弊害のあるべき筈がありません、（麻生正藏氏談）

つて置かなければならぬ、而して嫁した後は、父母に事ふるが如く舅姑に事へ、義兄弟姉妹に義務を盡さなければならないと云ふ事が有る、ソレが亦どうしても男と女と違うのである、

第三に子女の養育と云ふ事は、女子と離るべからざることで有る、輙ち子女が生るれば、是非女子の手で養育しなければならない、其滋養分は母の體に附いて居る、勿論近來は牛乳で小兒を育てることが始まつて來た故、男子と雖も育てられぬことは無いと思ふが、天地自然に考へて、何うしても小兒と云ふものは母の爲に養育せられて、十歳前後になるまでは、母と離るゝことが出來ぬ關係がある、只其關係を文明の力で、色々の方法を以て切放すことは出來る、即ち牛乳を以て育つるとか、或は富める者は乳母を雇ふことが出來るか、ソレは自然の働きを文明の力で分離するのであつて、何うしても滋養分と云ふものは、母が與へて行かなければならないのは自然の道理であると思ふ、

此三つの點と云ふものが、男子と女子と違ふて居るのである、ソレ故世の中の仕事を受持つに就て、何う云ふ違ひが起るかを考へなければならない、固より世界は人間の共有物であつて、其人間は男女と分れて居る、即ち世界の仕事は男子と女子とで分擔しなければならない、其上に何う云ふ違ひが起つて來るかと云ふに、第一に婦人は時間に差支の多いと云ふことが有る、男子三百六十五日強壯ならん限り仕事が出來るが、婦人は何うしても天地自然に三百六十五日男子と同じ樣に働くことは出來ぬ、第二には婦人と云ふものは力を要する業務には適當しない、其力は體力と腦力とに拘らず總て力を要することに適當しない、是は即ち身體の構造の上から斷定せられる、ソレからして又婦人と云ふものは情に強ひ、此情に強いと云ふことは、時間に差支が有り、力を要する業に適せぬと云ふ處から、外に出づることが男子の如く多くないソレ故に精神の發育が快豁には參らぬ、家に在ることが多い故、恕と云ふ心が女子には少ない、男子は廣

く交り、さま〴〵の人に接しなければならぬから、自分の氣に向いた者は愛し、氣に合ないものは憎むと云ふやうなことはしない、自然おほまかに心が養はれて居る、處が女子は外に出て交はることが少ないから、從つて心が狹く、恕すると云ふことがない、而して道理よりは情に支配され易い、殊に女子は外に出づるのが少ないに由つて、從つて人と語らふことがすくない、夫等の原因よりして自ら心も狹くなるので有らうと思はれる、人と語るは大に精神作用に關係の有ることで、心に不快に思ふ事も言葉に發して仕舞うと避けて了ふ、其例はいくらも有るが、よく世の中には愚痴を云ふ人が有つて、半日も心に思ふことを言ふと濟んで仕舞ふ、爾う云ふ樣な事で言つて了ふと濟む、男は論をして了ふと捌ける、處が女子はさうは往かぬと云ふのは、前に述べた如く、家に居ることが多くて、人に多く接する機會が無いからで有らうと思ふ、そこで男女の事情が違ふ上から、婦人は時間に差支へ、力を要する業務には適しない、又情が多くて、道理を情の爲に曲げると云ふ此三點が起つて來るのである、而して其上から色々の問題に就ての議論が生ずるので有る、

則ち政治上に於ける婦人の關係を說けば、婦人と云ふものは政治上に何う云ふ關係を持つて居るかと云ふ問題が起つて來る、少しむづかしい話になつて參つたが、抑も人間が此世に生活して居る間は、いろ〳〵の關係が有るが、殊に政治には男でも女でも離れられん關係が有る、如何となれば國と云ふもの丶中に人間が住つて居る、ソレ故國の事務を扱ふ上に、誰しも一部の關係を免かるゝことは出來ぬ、其事は大樣三つに分れ、輙ち立法、行政、司法の三つである、立法は帝國議會の如き處で、法律を制定し、其法律を行ふのが行政、裁判の事を司るのが司法、而して法を造る人間を撰ぶに就て、撰擧權、被撰擧權と云ふ問題が起つて來る、即ち國の政を行ふには法律と云ふものが無くてはならぬ、其法律を作るには立法者を要す

る、立法者を要するに就ては、立法者を撰ぶ權と、立法者に撰ばるゝ權とが生じて來る、其立法者の被撰權と撰擧權と云ふものに婦人の關係が起つて來る、

ソレから又法律を行つて往く處の、所謂行政と云ふものを二つに分けると、軍政、民政で有る、ソコで法律を行つて往くにも、婦人が行政官となり得るや否や、又成つて往くべきものか否かの問題である、

ソレから司法に就ては、婦人が裁判官となつて宜いか、辯護士となつて宜いか、檢事となつて宜いか、陪審官となつて宜いかの問題が起つて來る、大へんにむづかしい事になつて來たが、併し是等は大切なる問題で、教育社會の將來に於ては充分に研究して、日本の婦人は斯う云ふ事に就ては、斯う云ふ風にして往くが宜いと云ふ考へを極めなければならぬ、

ソレからして前述したる所は、政治上に就てゞあるが、又社交と云ふ事も起つて來る、社交とは政治を離れて、社會で交つて往くのであるか、社交上では交際を主とする、其交際に婦人は何う云ふ關係を持つて居なければならぬが、又公共の事業、慈善會、赤十字社の事業の如きものには、何う云ふ職務を持つて居らなければならぬかと云ふ一つの問題が起つて來る、ソレからして又國の經濟の上から論ずれば婦人の勞力は經濟上に何う云ふ關係を持つて居るか、

又宗教上に於て、婦人は何う云ふ關係が有るか、古來の歴史、現今の有様に於て、國の宗旨を維持する力は大に婦人にある、其宗教の上に持つて居る婦人の勢力は、益々進むべきものか、果して婦人として宗教上にどれだけの關係を持つべきものかと云ふ問題が起つて來る、

又教育の上に就て、婦人は家庭教育は固より擔任しなければならない、ソレから又小學校、幼稚園も婦人に適當して居る、併しながら中學大學の教師も、婦人に適するか、又此職務を授けて差支が有るか無いか

と云ふ問題が起る、
ソレから又家事上の關係に於て、男子と婦人との相違は如何、政治家に嫁する人は何う云ふ考へを持て居らなければならないか、又實業家に嫁ぐものは如何、貴族に嫁する者は如何、平民に縁附く者は何うと云ふやうな、家事上の婦人の職務と云ふもの丶問題が起つて來る、
夫等の問題に就ては、亞米利加・歐羅巴に於ても、種々議論のあることで、將來女子教育に大に關係を有して居る、而して其問題の歸する所は、婦人と男子との事情の異なる處から生じて來る、關係結果を問題として論ずれば、斷案を下すことがさ程むづかしい事ではないのである。

女子教育界に望む

文學士　藤岡繼平

女子教育は近時益々勃興の氣運に向へり、されど之を男子の教育に比すればなほ諸般の點に於て缺陷多く根柢浮動して未だ確立せず、將來に於て解決を求めつ丶ある刻下の問題亦尠からず、蓋し女子なるものは舊來歷史の裏面に裹まれて其動靜の知らる丶もの少く、世人も亦度外視して肯て注意を放たず、專門の史家と雖も亦深く探究せざりしは、益々其痕跡を失はしむるに至りき、爾來史的研究の進むに連れて、漸く此方面を研究するものありて、大に小に其研究の結果が史蹟の面に於て、女子の手腕が如何に重大なる關係を有せしかを發顯せしに止まり、教育界に於ける其地位其勢力に就ては、唯二三特殊の女流が現今に遺したる著作に由て其文學界に於ける技倆を認めたるの外、未だ何等の深き調査研究をも經ざるなり、女子の過去の經歷が斯の如く不明にして、果して女界刻下の問頭が決定せられ、以て將來の舞臺に効果を呈せ

しめ得るか、現今を知らざれば將來を卜する能はざるが、何處までも確かなる道理ならば、現下を決するに既往を顧みざれば、能はざるは又まさに見易きの理にあらずや、然るに今の所謂女子教育者は西洋諸國の狀況を詳知して巧みに之を利用すると稱して未だ過去の史蹟に徵して考案を下すもの少なきは、甚だ予の遺憾とする所なり、さりとて予は泰西の狀態を視察し、良所を採り來て之を活用せんは、素より深く希がふ者・我邦の如き幼稚なる斯界に向ては、必ず然かせざる可からざるを知る、然れども唯此方面にのみ傾注し終るは予の採らざる所なり、現時獨國の學者社界には、女に高等教育を授くるを不可とする、聲高

北京女子教育談

博士夫人 服部繁子

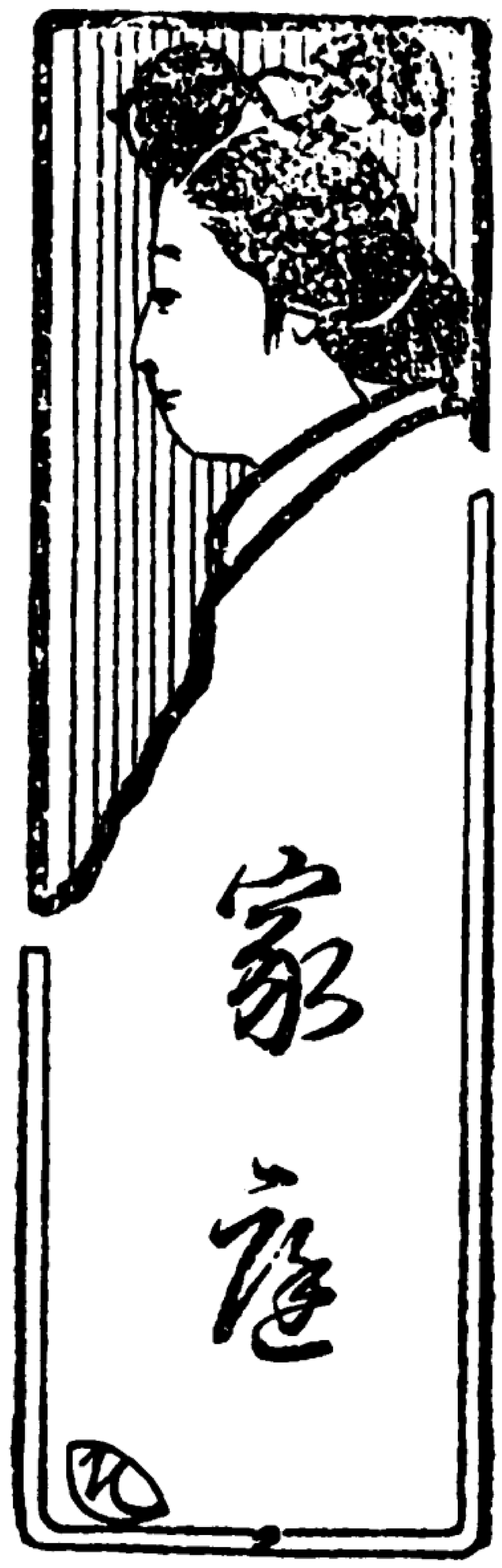
近着の東京諸新聞紙に、現時清國にて教育に從事する日本婦人は、何れも八十圓以上二百圓以下の月俸を受け居る云々と記しあれど、南清地方はいざ知らず、北清地方にては抑々俸給を受けて、教育に從事し居る日本婦人は、果して幾人ありや、北清に於ける風氣開發の急先鋒ともいふべき天津は、現時女學校及家塾にて日本婦人を聘し居るもの、僅かに三ヶ所に過ぎず、之に對する手當は、多くは前記新聞紙の記すところの最低額の半額に上らず、此等の日本婦人は、何れも清國開發といふ大目的大希望の爲めに、俸給などを度外におきて、半ば獻身的に事に從はれ居るなり、北京に至りては殊に甚だしきものあり、現時北京にて女學校四五ヶ所あるも、其中日本婦人の關係を有するものは二ヶ所とす（外に一の家塾あるも今暫く之を算せず）此二學校の中其一は豫教女學堂と稱し、自分等夫婦が沈鈞といふ清國人夫婦と合同經營する所に係り他の一は淑範女學校といひ、東京高等商業學校支那語教師張廷彥外一人の創立する所にして、萬事清國人の手にて經營し、日本人は教授の外、何事にも關係せず、豫教女學堂は中流以上の家庭の女子のみ入學せしめ、月謝は毎月銀一元を徵す、淑範女學校は無月謝にして專ら中流以下の家庭の女子を入學せしむ、兩校共に私人が自己の私財を投じて、設立維持するものなれば、學校の經濟は中々困難にして、到底教師の俸給などを支出する餘裕あるなし、此地の習ひとして、私立學校にては教師に對し、俸給を支出し得ざる場合には、教師は凡べて名譽教師として、馬車代と稱する若干の謝銀を贈るの風なるも、此二個の女

學校は馬車代すらも、贈り得ざるなり、されば此二個の女學校の教育に關係する日本婦人は、馬車代をすら自辨し、全然無報酬にて、清國婦人界開發の事業に從ひ居る次第にて、目下豫教女學堂の日本教師は、自分の外には八旗高等學堂教習佐伯信太郎氏の夫人及び龜田操子服部升子二女史あり、此の三女史は何れも日本にて教育の經驗を有するものなり、龜田氏は開校の初め、自分より呼び寄せたるもの、服部氏は教育に從事し度き志望にて、自分方を賴り來淸せるところ、恰も豫教女學堂に教師を要するにより、其の方に用ゐたり然れども此の二女史共に學校よりは、一錢の俸給も手當も受けず、自分等に於て別の方法に依り、毎月極めて少額の手當を贈り、專ら事業其物を、樂みとして、献身的に從事し貰ひ居るなり、淑範女學校の方は、自分は時々見廻るのみにて授業を爲さず、自分の夫の從事せる當地の大學堂に教習たる、理學士氏家謙曹氏の夫人、及肅親王家の家庭教師木村芳子の二女史、專ら教授に任じ、服部升子史は豫教女學堂より兼任して、其事を助く、此二學校とも日本婦人の外に、清國婦人をも教員として聘し、專ぱら漢文を教授せしめ居るが此清國婦人たちは、日本人が清國女子に對する一片の親切心より、一錢の報酬をも受けず、自ら進んで其教育に盡力する義氣に感じ、我々本國人にして豈之れに如かざる可けんやとの奮發心より、皆無報酬にて日々來校し、教授に任ず、此の他日本婦人が、此くの如く義俠心を以て教育に從事することは、痛く此地の清國人を感動せしめ、清國に對する思想行動の上に於て、日本人と西洋人との間に大なる逕異あることを覺らしめたり、此地に向け新に開かるべき女學校は一二有り、此れにて假令日本婦人を聘する事ある可きも、其の待遇は最初一ヶ年位は前記二學校の現況と多く異るを得ざるものと知るべし云々、

く、多く生理的より立論したるものにて、斯道者の宜しく參考すべき議論なりと雖も、かれ大家の言ひけん如く果して女子が智能は全く受容的にして創造的ならざるか、亦果して女子は人智の發達に嘗て何等の貢獻をもなさゞりしか、這般の問題は唯に生理學上の斷定にのみ憑る可からず、廣く深く女子の史蹟をも研究の上ならでは俄に決定する能はざるなり、若し人わり本邦女流の文學上些少の遺殘物を見たる外何等の研究を爲さずして、直に女子に高等教育を授くるの無益を速斷せんか、輕早無謀も甚だしと言はざる可からず、さわれこは局外者が一時の放談に過ぎざるにせよ、實際斯界當局の人殊に博識名望ある女流にし

て、此方面に忠實なる指導者を以て自ら任じながら、なほ温故知新の事には極めて冷淡にして進んで眞摯なる研究を試みんとするものなきは、慨歎に堪ざるなり、近時一般の女學校に於て家庭との聯絡に注意し女子大學を始め漸く體育、生理の事に改良を加へ、修養を務めつゝあるは頗る喜ぶべき事たりと雖、素是等は有形の事、顯はに其効果良否を認むるを得れど、かの精神教育に至ては、急に其結果を知る能はざると同時に、元來無形の事にしあれば、未だ確固たる主義基本なく實に區々浮漂するは、少く女學校の教授を參觀せば思半に過ぐるなるべし、たとへは斯道者は何故に本邦從來の女子に向つて垂れたる訓戒を斟酌して現今の社會に充て、併せて外國のものを折衷して、尤も形式に流れずして實行に適切なる然かも必須なる訓戒を施して兒女の感動を深くし其精神の教養を果さゞるか、斯く言はゞ人或は我邦在來の訓戒なるものは、悉く漢學者流の偏狹なる範圍を脫せざるべく、以て今日に適切ならずと語らん、單に一方面を見ば此言或は然らんも、能く全般を察すれば強ち然か斷ずるを得ず、勿論在來本邦學界の指針は主として漢學にありければ、教訓類は凡て其範圍に包括せらるべしと雖も、なほ其訓戒者が其時代の風尙を參照して巧に之を融化したるもの少しとせず、今一例を擧げんか、今を去る事五百五十年の昔鎌倉代の中頃にあらはれて、本邦修身書の魁として有名なる十訓抄が、妹脊の語らひは友道の層一層深くなりしものなるを述べて、子女が其夫を撰ぶを是認し、愛着のたづなは強ちに嚴酷を以て律すべからざるを諭したる寬大なる教誡の如きは、全く今日の論旨と合するに非ずや、德川時代のものは然かく寬大ならずと雖も、尙は取捨宜しきを得ば、今日に恰當する良訓頗る多し、かの貝原益軒氏の女大學の如き、福澤翁は一も二もなく之を反駁し、其全部を非認したりと雖も、翁は勿論其身を貝原益軒當時の時代に置て其時世より立論する所謂評論の第一要義には何等の頓着をもなさずして、二百餘年以前の教訓を執て、爾來種々の事情に由り長

足の進歩をなせしが爲に、世態に於て人情に於て將た風儀に於て史上未曾有の大變動をなしたる今日に於て、適切ならずと云ふは、聊か酷評の厭ひあり、よし又其中に現下に不適應の訓戒少からずとするも、翁の批評の如く全然排斥し去るべきものなるや、殊に貝原氏の女子教育に於ける意見態度に對して、翁の評論が恰當なりや否や、餘り言葉尻を捕へて其人格を誤認せざりしか、予は是等諸點に於て俄に翁の評論に賛同を表する能はざるもの、翁の新女大學亦其全體に於て不可なしと雖、尚ほ缺損の點なかりしか、以上詳細の點に至ては玆に說き及ばずと雖も、兎に角益軒氏がかの時代に此敎を作りて能く女子の弱點を指摘したるに服せざる可からず、蓋し女子なるものは、其天性に從ひて飽迄も優和にして、何處までも情深く涙なからざる可からず笑なからざる可からずと雖も其泣くもの其笑ふものが兎角瞬間の激情に止まりて、其泣く所以其笑ふ所以を直ちに忘却し去るの傾向あるは、最も女子の弱點とする所、十訓抄の記者が賤しき女は忍ぶ心なければ物嘆き深きも唯一時にて直ちにさりげもなき風となるは大に心劣りせらるゝなりと痛論せしは、女子の弱點を看破して餘りあり、貝原氏が女は容よりも心の勝れたるを善とすべしと論ずるの章亦是に外ならず、男子亦此缺點あるもの少なからずとするも、こは概して女子の通有性なりと云はざる可らず、此意志の堅軟耐久力の强弱は實に女子が將來社會上に於ける地位の高下を左右する主動力には非ざるか、是等の事在來の敎訓に說く所頗る多し、まさに顧慮すべきの重事にあらずや、予は今日女流の敎育者が其敎導しつゝある女流の歷史に於て、往々等閑にするの傾きあるを見て甚だ遺憾に堪へず、將來大に此方面に眞摯なる研究を希望すると同時に、かの幾多の雜誌等が、唯典式の解釋に止まりて、一も刻下の問題を學術的研究する者なきを見て、甚だ慊焉たらざる者、未だ幼稚なる女流の學界なりとは云へ、斯く氣運の勃興したる當時、是等の眞面目なる攻究を希望するも敢て不當の要求に非ざるを知る。



家庭の規律

醫學博士　高木兼寛

家庭教育上目下私の最も必要を感じて居る事は、精神の修養である、精神は肉體と智識の所有者であるから、善く之を養成して强壯なる身體と智識とを適當に應用せしめる必要がある、勅語に『德を樹つる云々』、又終りに『咸其德を一にせんことを云々』と仰せられてあるが、德を樹つることは、即ち同胞國民たるの義務を善く盡すことである、從つて其德は如何にして樹てるか、其德は如何なるものであるかと云ふ必要の問題が起つて來る、勅語にて御示しの通りに、一々之を實行するを得るに至れば、完全に德を樹つる事が出來たものと云つてよい、併し之を全然實行すると云ふことは、却つて通常人の爲し得べき所でないから、玆に一定の標準と云ふものを樹てゝ、之に依つて其德を一統するのが最も可からうと思ふ、

此一定の則なるものは、今新に製造する事は出來ないけれども、古來此方面には數種の敎がおつて、其歸着する所は殆んど同一であるやうに思はれる、即ち釋迦、孔子、キリスト等の設定したものを指すのである、翻つて今の世間の狀態で見ると、人類は、肉體の發達に智識の進歩を合せる時は、此に完全な人物を生ずるが如く思はれて居るけれども、其實肉體、智識の發達のみを以てはその目的を達し得べきものでなく、人と云ふものは、肉體と智識より成立つ物であると同時に、精神の獨立をも認めなければならない、精神と肉體とは、何處迄も別個の物と見做して、特に精神の養成を謀り、之に强壯なる肉體と智識とを持たしむるの必要がある、之れ即ち、精

神の修養を以て家庭敎育上の必要條件と認むる所以である、而も若し之に反して吾人々類が、體格强壯今日の所謂文明の智識のみを發達せしむるやうなことがあつたならば、之が所有者たる精神は其用を誤まり、一身は勿論社會をも毒するに至ることがあると深く信じて疑はない、

抑も精神即ち靈なるものは、吾人の身體に居住する事、恰も吾人が吾人の家屋に住するが如きものであるが、家屋が破壞して、其影を地に殘さゞるに至つたからとて、其家屋に住居したる人も同時に滅亡して了ふとは言ふことが出來ない、喜怒哀樂の情を發する始に於て、肉體に何等の異變なく唯感情の發動するが如きは、必竟肉と靈とが相獨立したものであると云ふことを證據立てる、依つて此に宗敎の要がある、

元來宗敎といふ文字は宗の字を解剖して見ると、家に示すとあつて之を詳かに云ふと、家の法則と解釋しても差支無く、大きく云へば、宇宙の法と申しても不可無からうと思ふ、家の法則なるものは、家風、秩序を維持する上に缺くべからざる物であつて、若も家にして法則なければ、其家に住居する家族は、團欒の幸福を得る事が出來ない、此に於てか家の主宰者たるものは、一家族を引率して各自其向ふ所を知らしめ、平和を計り、充分共に幸福を享くる樣に勤勉致すべきもの、家族なるものは、戸主の命令に應じ、違背することなく、各自の業務を勉勵し、戸主をして滿足せしむる義務あるもの、又婢僕なる者は主人に對し、忠實に勤め、怠らざる樣心掛け、之を實行するの要あるものと思ふ、斯くすれば一家は平和であり、延いては國家の平和を來す、此の法則は人類の生存上最も必要にして缺くべからざる物であるが故に各自戸主とも之を實行しなければならぬけれども、或は家業のため、或は不能のため、或は其他の事故により、自ら吾が家族を統率して其法則を實行すること難き場合が尠なくない、是に於てか或る偉人が出でゝ一定の則を設け、大々的に之を實

行せしめるやうになつた、即ち精神修養に關する一種の専門家の出來たる所以、又宗教専門家の出來たる所以である、之れ恰も肉體の疾病に當つて吾人が手療治で之を癒やすも何等の妨げ無いけれども、不慣故に容易に之を治し難い所から、専ら其藝術を修めたる専門家、即ち醫者に托すると同一である、今日の教育社會で、家庭がよいから小供の出來が善い、家庭が悪いから小供の品性が悪いと云ふ事を常に耳にするが、所謂善い家庭には家に秩序あつて、戸主は戸主の職務を盡し、家庭は共に其指揮に依るを以て、善い家庭が出來、悪いと云ふ家庭に在つては、家に秩序がないから悪い家庭が出來る、即ち甲にあつては宗教を奉じて居るから小供が善く出來、乙に在ては宗教を奉じて居ないから出來る小供も悪いと云ふ事に成るのであると思ふ、この法則言換れば信仰は、赤子の時から養成して置かないと、成長の後俄に之を修習し難き者であるから、苟も家庭に於て後進者を養成するに就いては、吾人は各自一定の標準に由り、之を深く信ずるの習慣、俗に云ふ所の信心を養はなければならんと思ふ、

歴史に徴するに、生存中幾萬の人士を感化するのみならず、死して後も幾十萬、幾百萬、幾千萬の人を感化し、幸福を享けしむるが如き大事業を爲した人は信心家の外に發見する事は、吾國に於ても諸外國に於ても決してない又古より今日に至るまで、彼の所謂宗教を其専門家に任ね、國民之を顧みざる時は、國力漸次萎縮する跡が明である、之に反して、一般の國民が精神教育に熱中する國々に於ては、國は富み、兵強くして、長く幸福を享くる物の如く見ゆる、此事實は吾が國内に於ても、充分明かに成つて居て、信心家の多い縣は一般に富んで風俗も亦比較的美なる樣に思はる、一段人民が宗教に熱中する國々、即ち、米國、英國、獨逸等の如きが日の出の勢ひを成して居る樣で御座います、彼等のも必畢此故であつて、彼等は體力と、智識の發達の外、確に精神の修養に努めて居る、

家庭雜感

棚橋絢子

◎私は嫁を貰へば唖になれ、といふ事を、常に姑となつた人に向つて云うて居りますが、兎角一方は年がよつて氣が短かくなる、若い人は行屆かぬ、一方は何でも云うて見たくなる、相手は云はれると厭になるといふ風で、この間がなか〳〵うまく行かぬ、それは兩方に缺點があるので、互に讓るといふことがなければならぬ、近き話で或學士の夫人が、良人の洋行中に少からぬ資産に疵をつけたが、その間に無論面白からぬ行爲もあつたに相違ない、數年の後家計の傾いた所へ良人が歸朝して、始めて騒動が持上つた、後に世間ではこの家に姑もあつたといふことに氣付いたとの事であるが、如何に姑の唖になるのはよいとしても、斯う極端に唖になつては困つたものである、

◎一家を處理するのは、順序をよくし、規律を正しくせねばならぬ、これがうまく行けば、年中さう忙がしい思ひをせずにすむのであるが、順序がわるく、規律が立たぬと、同じことを三度も四度もせねばならぬ事になる、そして物が整頓をしないのである、朝起きて戸をあけるには、どれを初めにして次はどれ、又障子をはたくにしても、敷居柱を拭くにしても、それ〳〵順序を定め、顔をあらひ髪を結ふにも、器具の取扱と順序を考へてすれば、手早く手奇麗に出來る、それを一つ變則にして見ると、その時は早いやうでも、あとの始末の時間を計算すると、甚しい相違になつて來る、それから物事をするには、成るべく早く片付けることゝ、注意といふことが肝要である、例へば盥に啖のある水を流し元にあけるにしても、先づ流し口に水を徐にこぼし、流れ足を見てどうッと一時にあけさへすれば、啖が流しの板に殘つて居るやうな事はない、又洗ひ水を下流しにあけるにも、あたり構はずザアと勢ひよくこぼせば、埒が早く明くやうであるが、今度は掃く時にそれが

稀有の長壽者

子孫七十人の老媼

雛の節句の佳日に生れて、月日も白酒に酌み重ぬる事茲に百五歳の老媼、今も尚矍鑠として春を樂しむあり と云ふに至りては、如何に目出度事どもならずや、神戸市宇治野町二百三十二番に住む保田きぬこそは、此長壽を保てる目出度老媼なれ、生れは實に、文化三年三月三日の上巳の節句の日にして、家は本年七十七歳の娘とみと二人暮しにて、漬物屋を營み既往今來の樂みの夢を繰り返し居れる由なるが、子としては娘とみの外三人の悴ありて、兄は市松と云ひ七十歳、次は亀太郎とて六十六歳、末子は甚太郎とて六十歳、皆身の老を忘れて長壽の母に孝養怠りなく、養料を貢ぎ居れりといふ、今この稀有の老媼が攝生法及び目出度一家の狀を當人の口より聞くがまゝ左に記さん、

▽長壽の要求　きぬは壯時より働くを好み日一刻とても身體を動かさぬ事なく、酒は一滴ても口にせず、これ今日の長壽あらしめし基なるべく、今は耳の遠きと齒の無きばかりを不自由にして、他は湯に入るさへ人手を借らず、されど年が年なれば若き人と同樣の働きは出來ざれど、持て生れし働き好はヂツとして居るに堪へず、毎日の如く門に出でゝ日向に背を曝すを、せめてもの樂しみとなし居るとぞ、

▽食事の規律　かゝる勝氣の老媼とて去年までは、徒らに遊び居るが、勿體なしと手づから草履などつくり居たるも、本年に入りて止めたるが、尚三度の食も嚴重に、量を定めて三度々々キチンと食し、夜は眼が冴えて眠られぬ所より、寢床の中にて菓子蜜柑を少しづゝ食するを常とせり、その健康なる證はこの老年となりても、他にて案ずる程寒さを感ぜず、されば冬季に入りても弱るといふ事を知らずといふ、

▽珍らしき齒　この長壽者の血を受けたる娘とみは、其強健亦母に讓らず、同人は母の健かさを語つて曰く『母は妾にも噛めないやうな蛸を食べますから、それは惡から、うと申すと、皆抜けて終つた齒が又生えかけたから、硬い物が食べたいと云つたのには驚きました』と云へり、きぬは不思議にも二三本づゝ齒の生え代りし事今日まで二度なりと、その眼の明かなる事も人並優れ却つて娘のとみよりも確なる程なりと、

▽子孫七十人に達す　同人は今日まで醫者に掛りし事僅か三度切にて、夫も藥鑵二三本にて治りしと、かゝる目出度き老媼の家には、又目出度き事が重なるものにて、現在の子孫曾玄孫までを加算する時は七十人に達し、中にも孫に當る同市楠柄西詰の靴屋吉田梅藏の妻おもよは年々子を產みて、十五人の子持なりとは、世にも珍らしき目出度き一家といふべし、

稀有の分娩者

十九人の生母

麹町區飯田町三丁目十番地に帝國徽章商會とて、盛に各種の徽章を製造する鈴木梅吉

（四十九）なる人あり、其妻クニ女（四十七）は男子九人、女子十人を擧げ目下又妊娠中にて來る六月が臨月なりとは、珍らしき子福者といふべし、主人鈴木氏の語る所を左に記すべし、

▽現在十一人　クニ女は明治十四年一月長男太一郎、翌年十月長女田鶴十六年八月次男梅太郎、十七年七月二女富榮、十八年十一月三男滿太郎と五ヶ年間に五人を擧げ、次の二年を休みて、四男梅次郎（二十年四月生）五男德次郎（二十一年八月生）三女ヨ子（二十二年八月生）四女リメ（二十三年十月生）六男周三郎（二十四年十一月生）と又五年間に五人を產み又二十五年を休みて翌年五女マツ（二十六年五月生）六女タツ（二十七年七月生）七女マツ（二十八年八月生）七男國七（二十九年十一月生）と今度は四年間に四人を儲け又々一年休みて八男豊八郎（卅一年八月生）八女ヌイ（卅二年六月生）九男小兵衛（卅三年八月生）九女ミヨ（三十四年十一月生）と四年に四人を生み又二年を休みて十女セイ（三十七年一月生）を擧げたり、即ち都各十九人の子女にて、冬よりは夏の出產多く、又滿太郎、周三郎、國七、ミヨの產れしは何れも十一月にて、其翌年は必らず子のなかりし事等は、最も注目すべき事ならん、十九人の内現存せるは、男子五人、女子六人にて太一郎、田鶴、梅太郎、富榮、梅次郎、豊八郎、ミヨ、セイの八人は天折したり、

△母乳の不成績　天折せし八人の内次男梅太郎、九女ミヨは里子に遣はし梅太郎は乳母の不注意にて乳房の爲めに窒息し、ミヨは肺炎に罹りて死亡したる者なるが、太一郎、田鶴、梅次郎、富榮の四人は全く母乳の質惡しきが原因にて死したるなり、斯の如く最初の中は子女の生育せざりしを遺憾に思ひ、クニは十八年中伊香保の湯治に赴き一ヶ月程にて歸京したるが、其後分娩せしは三男の滿太郎、即ち現今の總領に當る子なり、兩親は如何にもして滿太郎を育て上げんと苦心中、宮內醫師の勸告によりて、斷然母乳を廢し、專ら牛乳を飲用せしむる事となしたるに、果して肥立ち好く、五男の德次郎のみを乳母を雇ひて育てたるに、是も強壯にて、九女ミヨの外は病氣に罹りし事なしと云ふ、

△クニ女の生國　クニ女は群馬縣藤岡町の生れにて、兄某は同町の收入役を務め、頗る人望あり、町長の交代三たびに及べど同人のみは依然として其職を變へずとなり、是も身體壯健の方なれども、クニに及ばずクニの鈴木方に嫁ぎたるは、明治十三年即ち二十一歲の春にてありし、

△攝生と嗜好　妊娠し居ると云ふ程なるより、自然攝生に心を用ひ、飯は常に炊き返しにあらざれば粥を用ひ、牛乳は結婚以來一日として休みし事なく、酒は一滴、烟草は一吹も口にせず、水菓子も一片位口にする程に過ぎず、夏冬ともフラ子ルの股引を穿ち、疊の上に直接に座せし事なく、客來など餘儀なき時の外は必らず座布團を用ひ何れかと云へば冬季よりは夏時に多く心を注ぎ、好物は「すし」なれど夫れすら成るべく遠ざけ居れり、

若竹

ふしなれてすだつ雀の羽風にも
靡きやすらん軒のわか竹

邪魔になるといふ事になるから、甲の仕事をする時には、乙の仕事との關係をも考へねばならぬ、何でも物は後に手數をかけずして片付くやうにしさへすれば、一家は常に瀟洒として、氣持のよいものである、臺所から奥へ行けば、その序に臺所へ下げるものはないかと見廻はつて、手當り次第に始末して行くといふやうにすれば火のついたやうにバタ〳〵と忙がしさうにするに及ばず、いつの間にか物が整頓して行くのである、

◎落すな、施せ、これは女子の最も注意を要することであらうと思ふ、家のうちには、隨分多くの落し物がある、拾ひ人がよくなければ朽ちて仕舞ふものがある、紙屑は落ちて居る、絲屑は落ちて居る、油が落ちて居る、炭が落ちて居る、油や炭の落ちて居るといふのは可笑しいやうであるが、入らぬ所に灯が點いて居たり、入らぬ所に炭が火になつて居るなどは落ちて居るも同じことである、茶がらを枕の心にしたり、蜜柑の皮に掃除屋の香ひを防ぐなども拾ひ物の德である、それから衣服をほどいてそのまゝ簞笥に寢させて置く、小切を山の如く積んで置く、これ等はまことに道具ふさげの外役に立てぬ仕方だ何でも物は世間へ出すやうに心掛ねばならぬ、さうすればその德で自分が不自由をせずにすむのである私はこの拾ひ物は幾つして置くかしれぬ、そして常に若い方々に見せて居る、その一例としては、先頃一郎(令息文學士)の所へ、半襟をくれたものがある半襟といふが既に妙であるに、それは兩端に繡模樣があつて、着れば隱れる所にあるので、差支はないが、これは藝人などの裸體になつて見得をするものはしらず、普通の人では美しい繡模樣を見せる機會がない、素よりあつてたまつたものではない、して見れば見えぬ所にこの美しい模樣を寢さして置かうより、世間に出したいと思うて工夫した結果、兩端の模樣のある所で紙入が二つ、中はまだ工夫中である、何かになるであらうなど、當なしに仕舞込んで簞笥の底にくさらせるなどの事はしたくないと思

ふ、

◎いつか私の傳らしき物を讀賣新聞で見たことがあるが、その中に私を引立てやうと思ふたのか、借錢で首の廻らぬ所を漸く切拔けた、などゝ云ふことが書いてあつた、借金をしてもよい程であれば、私は其當時困らずとも、いかやうにも樂に切拔ける事が出來たのである、借金をつくるは家に疵をつけるも同じことであるから、私は借金をしたことは一度もない、否一度これは借金のまゝのがある、私が十餘年前女子成立學校に通勤をして居る或日、車代に小さな金のなかつた所から、三錢だけ不足をその小使に借りた事がある、さて數日を經て學校に行き、小使に返金をしやうと思へば、小使はその前日急に解雇になつて、行衛未だに不明であるから、これは一生返金される事が出來ずに終ひはせぬかと心配して居る、それに付けても、かりそめにも借金をせぬやうにせねばならぬのである、借金は人を卑屈にするものであるから。

家庭のおもかげ

遠山稻子

某の所に主婦と姑と非常に中の惡い家がありまして毎日〳〵朝から晩まで口論の絶間は無い位です、處が此家には小供も二三人ありましたが其家の小供は他に出て小供同志遊んで居りましても、兎角甲に向つては乙を譏り乙に向つては、甲を嘲ると云ふ樣な仲口を利きまして、夫が爲に何時か小供等の娯樂の團隊を破裂させて仕舞ふ樣な事を致して誠に善くない性質を持つて居りました、夫から何うして此小供が斯う云ふ風な性質に成つたかと云ふ事に就て其原因を研究して見ると、其母親と祖母とがお互に爭論を致しては立腹の餘りに、頑是も無き子供に向ひ、母は祖母を、祖母は母を惡ざまに云つて聞かせて小兒の同意を求めるのです、而うすると始の内は小兒は何時も母親の贔負をして居りましたが、それでは祖母の機嫌が惡いので、小供ながらも追々研究して、

其結果祖母に對つては母を惡ざまに云ひ母に向つては祖母を惡く云つて、兩方の歡心を得んことを努めました、而うすると祖母も大に滿足してお菓子の一個も餘計に遣ると云ふ風に致しますので、小供は善い事を發明した氣になつて一向兩者の間に立つて蔭事を云ふ事を務めました、夫が段々高じて來て遂には他人に迄及ぼす樣に、成つたのだと云ふ事で御座います

實に此小供も始め其慈母を惡ざまに云ふに忍びずして、祖母に逆つた頃は未だ〱持つて生れた所の善と云ふ性を失はなかつたので、元より子の母に於けるは斯くあるべき筈です、然るに斯くては又祖母の意を損せん事を恐れて、追々に心ならずも祖母の前を繕ふために、已を得ず母を誹つたのであるけれ共、諺にも習性となると云はれた通り、段々夫が度重なるに從つて、果は母を誹謗する事を何とも思はぬ樣に成つて仕舞たので茲に至つて愈々小兒の心の内には、道德とか德義とか友愛とか孝悌とか云ふ樣な美德を塵ほども止めなく成つて佞奸邪曲なる人と成り終つたのであります、之も皆其原を質せば決して、小兒の罪でも無ければ小兒の悪いのでも無い、結局、此祖母と母との日常の言語動作が相俟つて無理に此神聖なる正直なる小兒を邪道に導き陥れたのであります、實に怖れても愼むべき事ではありません、

心ばえやさしき玉姫町の貞女

淺草區玉姫町百六番地飯塚峰吉(卅八)の妻お勝(三十)といふが、永らく病の牀に臥す良人を看護し、頑是なき三人の子供を養ひ夜の目も寢ずに手内職して、朝な夕なに攻め寄する貧苦と闘ひ、幽かに其の日の烟を立て居る健氣なる振舞ひは、誰れとて褒めぬものはなく、界隈切つての評判となり居れば、訪づれて其の實況を見たりしに、誠に其の噂に違はざりき、玉姫町といへば附近の淺草町と共に淺草區内の細民窟として名を知られ、芝の新網下谷の萬年町四ッ谷の鮫ヶ橋など、並び稱せらるゝ處にて、此の邊は人夫日雇稼ぎの者多く、中にも此の玉姫町百六番地といふは、玉姫稲荷の鳥居前にて、俗に三十六軒長屋と呼ばれ、間口

六尺の三疊一間汚穢いことは驚くばかりにて、此の附近の貧乏町をランピキにかけて結晶させたるごとくなり、此の不潔至極なる長屋の中に唯擦切の煎餅蒲團一枚あるのみ、おかつの話に依れば、一昨年の十一月までは橋場町九十號地に住居して、夫峰吉は玩弄物の張子の面を作ることを家業にしお勝も見様見眞似に其職を覺え込みて仕事を手傳ひ、足らぬながらも其日〳〵の生計を立て居たるが、新奇の玩弄物が殖えるに伴れて舊來の玩弄物は捌けが惡く次第に家業も隙になりて、貧乏に逐ひ廻され、殊に弘太郎(八)とく(六)ゆき(四)といふ三人の子供ありて、一入の難儀を重ね到頭橋場にも住み兼て、此處へ引移り來しなりしとぞ斯る汚穢しき家なれど、家賃は月に一圓五十錢此處へ移り住みてよりは峰吉は洋傘の修繕を家業として、朝早くより道具を擔いで市中を歩き、お勝は爪掛の内職を勉めて唯だ子供の成長するを樂しみに共稼ぎして暮し居る中、昨年の八九月頃より夫の峰吉ふと煩らひ出したれど、家業に出れば親子が忽ちに饑えに迫るにぞ、醫士に診て貰ふことは夢にも出來ず、買藥さへ出來ず、無理にも毎日道具を擔いて片呼吸になりながら呼步き、少しばかりし賃錢を得て、親子五人は粥なり湯なりを啜り居りしが、十二月の中頃よりは押しに押したる病勢は、一時に重りて峰吉はドッと床に就きたり

お勝は櫛卷の髮の紛れ毛を指にて梳き上げながら、眼に涙を湛えながら『稼人に煩らはられましたので、私も一生懸命に内職を致しますが、女の事でございますから、良人の看病やら三人の子供の世話やら、中々手が廻りません、田中町の峰さんといふ親切な醫士に、お藥を頂いて居りましたが、心臟が惡い上に、酷く胃腸を痛め、喘息さへ手傳つて居るのださうで日増しに身體が衰へて參りました、其れで區役所の方々のお差圖で永樂病院へ診て頂だきに參るつもりでございましたが、身體の利かぬ病人の事で、ツヒ其儘になり病氣は次第に重りますし、其の上日々の食事さへ、親子四人は頂くことは出來ず、假令自分は頂かなくとも、病人や子供には粥の一杯づゝでもと思ひましても、中々毎日の事で、或時は一日に一度ぐらゐしか頂かぬこともございました、到底も此の儘にして居りましては良人の生命にも關はりますが、何を申すも私が内職をいたしましたところで、子供や病人の看護の隙に致します仕事ですから、夜まで掛つて日に七八錢が精切りでございますが、御覽の通り乞食同樣の姿で稼いで居りましたところ、先頃長男の弘太郎が風邪の氣味で、大變な熱が出て、夫と一緒に枕を並べて臥つて仕舞ひました、藥一服飲ませることは出來ません、咳を強くせきますので、弘太郎も日増しに痩せ衰へて、私は什麼に心細く思ひましたでございませう、責ては警察署へでもお願ひ申して、良人の病氣だけでも、全快させて遣りたいと、淺草町の交番へ願ひましたところ、區役所の方で特別扱ひとかにして下すつて、良人と倅れは養育院でお世話をして下さる事になり實は今日同道しろといふ仰せで連れて參りました、自分の家に居るのは今朝まで、是からはお慈悲の方からお世話になる身せめては良人と倅とにお米のお飯でも食させて遣りたいと思うて居ります。



國と風俗

理學博士　坪井正五郎

今日日本の土地、即ち北の樺太から南の臺灣まで擴がつて住んで居る人間は、皆日本の人民　天皇陛下に對して言へば、悉く日本の臣民であります、此後何う云ふ事があつて、日本が更に大きくなるかも知れないし、又大きくなることを望むのでありますが、若し或る土地が日本の領土になれば、其上に住んで居る人も日本の人になる、又日本の臣民になるのであります、けれども國が擴がると同時に、其上に住んて居る人の性質が、俄かに變ると云ふことは有間敷きことである、後の事を云はぬで、現在の有様で言つて見ても、北の方に居るアイヌも日本の臣民である、又廣く言ふ日本人の中でありますけれども、此内地に居る日本人と云ふものとは、容貌體格又風俗習慣も違つて居る、臺灣も其通り、臺灣には眞ン中に大きな山があつて、西と東の二つの部分に分れるのでありますが、西の方比較的平な部分には内地から行つた多くの人と、以前支那に居つた人が移住して、臺灣の人となつたそれ等の人とが住んで居る、此支那から來た者のことを臺灣土人と唱へる同じ臺灣の住民でも、此方は臺灣土人と謂ふのですそれから山を境として、東の方の山の多い地方には昔から住んで居つた野蠻人が澤山居る、其方の人間を之を臺灣の番人と謂ふ、斯様に臺灣に住んで居る人の中にも、内地から行つた者と、支那から移つて來た臺灣土人と云ふものと、古くから住んで居る臺灣の番人と謂ふものとある、是等は皆容貌體格風俗習慣を異にして居るものでありますが、今日では北の端のアイヌから南の端の臺灣の番人まで、悉く日

本人と云て居る、して見ると今の有樣でも、日本人と云ふものは同じ種類の人から成立つて居るのでは無い、唯だ日本の國の人である日本の臣民であると云ふことに付ては同じことであるから、それは差問ないけれども、生れ付の性質又生れてからの習慣に付て言つて見ると、是等の間には幾つもの別がある、此の如き違ひを稱して人種の別と唱へるのであります、是は單り日本のみではありませんで、他の國に於ても同じことである、隣國の支那に就て言つて見ますると、彼の廣い土地に居る者、悉く即ち支那の政府に支配されて居る者は支那人には相違ないけれども、其中に細かい別は扨措いて、大きな別を言ひましても、



二つある、其一つは漢人、もう一つは滿人、此二つがあるのであります、漢人と云ふのは是は昔からの支那人で、古く日本人は之を唐人と言ひました、もう一つの滿人の方はもつと北の方の滿州地方に居た人であるが、段々南の方に擴がつて來て、古くから居つた支那の人を征伏して、今では勢力を有して居る、此滿人が重に支那の事を治めて居るのであります、此二つを籠めて今では支那人、或は清國人と言ッて居る、それであるから支那の國民或は臣民としては一つであるけれども、生れ付の性質から云ふと二つある、之が人種の別である、チヨッと見た所では違ひが無いやうだけれども、詳しく

風俗を見ると色々な區別がある、最も著しい事を言つて見ますると、支那の女は足の大きくならないやうに、子供の内から布で捲いて縮めると云ふことゝがありますけれども、それは支那全體に行はれて居るのではなく、漢人と云ふ方の人達のする風俗である、同じ支那人でも滿州種の人は、足を縮めると云ふことをしない、足を縮めると云ふことは、名高い風習ではありますけれども、決して支那人全體の風俗ではない、又もつと違つた西の方の國々、歐羅巴邊りの事を調べて見ても、一つ國の中に違つた人種の住んで居る例は澤山あります、今日本と同盟國になつて居る英吉利の如き、深く其有様を知らない人は、皆吾々の知つて居る英吉利人、其話す所の言葉も無論英吉利語であらう、斯う云ふやうに思ふのでありますが、蘇格蘭や愛蘭邊又は小さな島杯へ行くと風俗が違つたり言葉が違ッたりして居るのであります、同じ英吉利人と他國の人が見て言ッて居りますけれども、其中には英吉利語で話せない人があるケルト言葉と言つて英吉利の言葉とは違つた言葉で、話す者から、それは國民としては英吉利人であるけれども、人種としては違つて居るのであります、斯樣に一つ國で違つた人種が居る例もありますが、それと又反對で一つ人種が違つた國に跨つて居ると云ふ例もあるのであります、近き日本の例で云つて見ると、臺灣に居る支那種の人を臺灣土人と謂ふと云ふことは、今申した通りでありますが、それと同じ人達が無論矢張り支那にも住んで居る、それであるから今日まだ風俗が充分變らない間は、往來で吾々の知つて居る支那風の人を見ても、それが隣國の支那の人であるのか、或は吾々と同じく日本人の一部分たる臺灣の土人であるのか區別が出來ない、容貌も體格も衣服も同じである、例の辮髮を後ろに下げて居ると云ふことも一致して居る、同一の人種であるが一部分は支那一部分は日本に屬して居るのであります、又北海道に行つて見ると、北海道の或部分に樺太アイヌと云ふものが居る、北海道のアイヌと

大體似て居る、それは嘗て日本で樺太を日本の領地だと言張つたのでありますけれども、露西亞と樣々の談判の結果遂に露西亞に取られて仕舞つた事がある、其代りに僅か許りの千島を日本に貰つた、其時分には日本の兵備もまだ充分で無かつたから、據なく取換へたのでありますが、其時分の日本の政府は樺太に居る人民に向つて、露西亞人になりたければ其儘其土地に居れ、若し又日本の人になりたければ北海道に引越すやうにと言聞かせた、そこで或者は樺太に居りたい、或る者は日本人になりたいと言ふて願出た、其爲に同じ人種でありながら、北海道に居るものと樺太に居るものと出來た、即ち一部分は日本の人民であり、一部分は露西亞の人民であつたのです（今日では樺太在住のアイヌも日本の臣民になりました）斯樣な譯であるから、日本に居る人は必しも日本の人種と云ふ譯には行かず、支那に居る人は必しも支那の人種と云ふ譯に行かない、何處の國民何處の人種と云ふことは、或場合には丁度旨く一致して居ることもありますけれども、多くの場合には喰違ひになつて居る、それで一種類の人民が方々の國に擴がつて居るのもあり、又一つの國民に幾らも人種を含んで居ることもあります、

斯樣に考へて見ると、世界に居る澤山の人と云ふものは之を二通りに分けることが出來るのであります其一つは國の政治に依つて分つ、即ち是は日本人であるとか是は英吉利人であるとか、是は露西亞人であるとか云ふやうに、其國の政治に依つて分つことが出來る、もう一つの分ち方は、國の如何に拘はらず生れ付の性質、人種と云ふものに依つて分つ、同じ人間であるけれども國に依つて分つのと、人種に依つて分つのと二つの分け方がある、他の最も分り易い例を引いてお話すると、東京に澤山の學校がある或は女學校と限つて言つても宜い、所が其處に通學する人達の族籍は何うかと云ふと、或は東京府の人もあるし、神奈川縣の人もある、何處の學校には神奈川縣の人ばかり行く、何處の學校には茨城縣の人

ばかり行く、即ち何處の生れ、何處の縣の人ばかり行くと極まつて居らない、故に學校から出た人達が同窓會抔を開いて、隨分縣の違つた人達が友達となつて寄合つて遊ぶことがあります、又それと違つて同鄕の人が集つて事をすると云ふこともある、鄕里は同じことであるけれども通學する所の學校が違ふと云ふこともある、或は鄕里は違ふ所の人であるけれども、何處の學校に通ふと云ふことを以て其仲間を拵へれば仲間が出來る、又同じ故鄕の人が集まると同じ仲間が出來る、それと同じことに世界の人間を、丁度今申す學校に依つて分つ樣にする事も出來る、又鄕里に依つて分つと云ふやうにする事も出來る、(但し人種の場合では本原地が鄕里に比すべきものである)世界中の人間は其地方々々に依つて樣々の違ひがあるけれども、其違ひと云ふものは國に依ての違ひと、人種に依つての違ひと斯う二通りあるのであります、

そこで國に依ての違ひと云ふのはどんなものであるかと云ふと、或る頭になる人を戴く、日本で言へば天皇陛下でありますが、國に依つては帝王と云ふものが無く、大統領抔と云ふ者が立つて居るのもある、孰れにしても頭に立つ人がある、それに從て大勢の人が生活して居る、それと異つて人種と云ふもので繫がつて居るものもある、それはどう云ふ事柄で一致して居るかと云ふと、身體の組立又言葉、風俗習慣、斯ふ云ふ事が人種に付て異同があるものである、近く日本の例を採つて言へば、北海道に居るアイヌから臺灣に居る土人、或は蕃人に至るまで、悉く日本の法律に從ふ筈になつて居るのであります、國の成立から言へば、アイヌであらうが、臺灣の蕃人であらうが、均しく日本の人として扱ふのである、けれども日本人となつたからとて、俄かに言葉を替へて仕舞つて、アイヌも決してアイヌ語を使つてはならない、日本語を使へ、臺灣の蕃人も悉く日本語を使へと云ふ譯には行かぬ、從令强いてさう言つた所で、急に學べるもので無い、又風俗習慣も

假かに改められるものでは無い、悉く內地の人と同じ着物を着せると云ふ譯には行かない、其他食物家屋でも同じにすると云ふ譯には行かない、又同じにする必要も無い、して見ると風俗習慣又言葉とか云ふやうなものは國と云ふものに、附いて居ると言ふよりは人種に附いて居ると言つた方が宜いのです、從つて此類の事を說くに當つても國と云ふ方から見ずに人種と云ふ方から見るのが正當であるのです。

花の巴里

文學士　齋藤一如

元來日本人は歐米の人とさへ申せば、派手で立派な事ばかりをして居る樣に思つて居る人が多いやうに考へますが、實際先方へ行つて觀察して見ますると案外爾うばかりではありません、尤も交際社界に立つ人とか、又は極上流の人になると、隨分驚く程立派に致して居られますが、夫れ以外の人は決して朝から晩まで派手やかにして遊んで居るやうな事は御座りませぬ、元來佛蘭西人は貯蓄心に余程富んで居りまして、可成の財產家の婦人で衣服を拵へるにも三枚丈け造る準備が出來てから始めて一枚を製ると云ふ樣な風で、佛蘭西の人は、戶內の樣子と戶外のありさまとは余程違うので御座います、又佛蘭西の人は表面を飾ることが中々上手でございまして、同じ物でも大變能く見える樣に致します、夫れから身體の扮裝方が上手で、下女のやうなものでも、實に善く衣服を着こなしますから、暫時巴里に居つた後に、英吉利に行つて見たら、市街を往來する英國の婦人のきもの丶着方が、余程をかしいやうに見えます、最も之は上流の人や、交際社界に出る人は別です、夫から亞米利加に行つたら、モウ一層見惡いやうに思ひます、そして日本はと云へば、これは着ると云ふ事が關の山で、着こなしの所までは行きません、但しこれは洋服の事を申すのであります、鳥渡めづらしく感じましたのは、佛蘭西の上等の婦

珍らしき忠勤なりし日本の老女　珍らしき倹徳ある佛國大統領夫人

四十六年勤續の老女

麹町内幸町なる子爵相馬順胤氏の邸に、十五歳より六十一歳の老後まで、四十六年間いと忠實に勤續し、ツイ此程定命盡きて此世を去りし船橋多尾と云へる老女あり、その生前の經歷こそ、大に世の龜鑑として傳ふべきものなれ、同女は舊遠州掛川藩主太田備中守の典樂船橋敬適の長女にして、弘化二年本郷駒込なる太田家の下屋敷に生れ、十四歳の時太田家の奥殿に侍女に出で太田道淳公の令孃綾子のお側女中となりしが、翌年綾子の相馬家先々代の當主充胤公の許へ嫁せられし際、お里方付女中として相馬家に奉公したるなり、

▼綾子夫人に愛さる　斯くの如ければ、綾子夫人は同女を二なき者と目を掛けて慈しみ、暇あれば自ら手を取らんばかりに、習字讀書其他和歌の道など、何くれとなく丹精を籠めて愛育措かざりしかば、同女は深く其恩に感銘して、只管忠勤を勵み居たりき、

▼三代相恩　斯かる内、同女も既に年頃に及びしかば、父母親戚は良緣を求めて婚嫁を勸めしも、同女は綾子夫人に親しみて、一々之れを卻けて、遂に同邸を去り兼ね、一度も婚儀を結ばす、數年前綾子夫人の逝去後も、猶同邸に勤續して、十五歳より六十一歳迄四十六年の間充胤子、誠胤子及び當代順胤子の三代に仕へ、同邸に一生奉公を爲したるは實に珍らしき篤實の女子と云ふべし、

▼水を浴びて神に祈る　先年所謂相馬事件なるもの、起りし時の如き、同女は殆ど寢食を廢するまでに心痛して、邸内の相馬神社に祈願を籠め、夜な〳〵水行を取りて、御家の無事泰平を念じたりと、

▼同女の性質　同女は品行方正態度嚴肅にして、能く上を敬ひ、下を憐むの情に富み居たれば、老女として永年女中等の取締りを爲し居たるも、内外の評判は至つて能く指圖の下に立働く女中等は、嘗つて怨嗟の聲を發したることなく、只管命に從ひ推重心服し居たりと、

▼外泊せる事僅に一回　年幼き十四歳にして、父母の膝下を去り、爾來同邸にて人となり、遂に一生奉公を爲せる同女は、同邸を我家の如く思惟して、四十六年の長月日嘗つて濫りに外出したることなく、先年亡父の年忌に當りし時、其法要を營むべく上總松尾の菩提寺に參詣せる際、一夜實妹の家に一泊せる外、自己の用向きにて外泊したること、前後に一回もなかりし、

▲相馬家の手當　昨年の秋不圖病床に就きたるより、同邸にては他ならぬ同女のこととて、早速濱田醫學博士の診察を受けしめたるに、胃癌との診斷なりしかば、親戚を招き、協議の上下谷徒士町に一戸を借りて同所に移住せしめ、手厚き待遇を與へて治療を加へしも、藥石効なく遂に此世を去しとなん、

佛國大統領夫人の美談

世界の贅澤を、玆一つに寄せ集めたる、巴里にありて、人も羨む大統領夫人にてあり乍ら、下に述ぶる如き、勤儉謙讓の美德に富める、佛國大統領ファリエル夫人の行ひを見ば、學校卒業後に、將來の貴婦人のみを理想とする今日の我が女學生諸嬢たるもの、顧みて自ら戒むべき處も尠なからざるべし、夫人は今日大統領の夫人となりても依然として中流社會の婦人たる舊慣を變ふることなく、先づ第一に大統領が外交上の大宴會を開くことあれば、肉や野菜の種類を擇み出すは、屹度他人ならぬ夫人にて猶ほ其上に昔通り、朝早く人先に起き出でて町に買出しに、行くを常とせり、元來巴里の市民には、今回ファリエルが大統領となれるに就て、ファリエル氏は果してフォール氏のやうに奢侈の風俗に浸み了るべきか、夫れともルーベー氏のやうに始終質素なる平民的生活を持續くるかに關して、疑ひを挾み居るものなけれど、大統領夫人が夫れが爲に貴族的になるべしなど云ふことは、誰一人として疑ふものもなき程なり、斯て夫人が自分にて町に買出しに出懸くる間は、ファリエル家の平民的思想は、何時までも其の近邊を感化して止まざるべし、そを何故と云ふに、ファリエル夫人は其の家族にては、ファリエル氏以上の權力あれば、此の夫人がある間、ファリエル氏は其の舊慣を捨てゝ、貴族的になるなど云ふをは出來る筈なければなり、元來クレメント・アルマンド・ファリエル氏が、今日の如く佛蘭西の大統領になり、一廉の大政治家となれるも、此の夫人ありてこそ、其次第と云ふは、元來ファリエル氏は、若き頃至つて惰け勝ちの青年なりし、當時ガスコニー裁判所の書記たりし氏の乃父をして、ファエルは到底物になる見込なしとまで斷念せしめたる程なりしが、此のフリアエルが、一度今の夫人を見て、深き戀の淵に落つるや否や、夫人の歡心を得んが爲に、夜の目も寐ず、必死に勉强し始めたるより、間もなく、校中第一の俊才と呼ばれて、瞬く中に首尾能く學校を卒業するに至れり、斯て此れより以後夫人の内助の功空しからず、遂に今日の地位に達したる次第なるが、偖ファリエルが大統領となりて後第一に當惑したるは、夫人の町の買出し物一件なり、いかに質素なりとて、夫れは大統領の體面にも關はると云ふ、家族の中より起りし非難は、隨分と激しかりしも、夫人は斷然として聞き入れず、勿論一平民たる時よりは、多用なることなれば、幾人の召使は雇ひ入れたれども、女許りに下僕とては一人もなく、夫れさへ出來る丈けは儉約して、舊來の美風を維持せんと力めつゝありと云ふ去れば巴里に於ても、ルーピロンの別荘に在りても、夫人は常に未明に起出で、自分の手にて食事の支度をなし、始終臺所に出懸けては、用意の充分なるや否やを見廻るに、懈りなきのみか、又た夫に仕へて少しも差出がましき振舞なく、何事も其の命令に從ひて、徹頭徹尾家庭の妻と云ふ字通りに妻たる道に、僅かも背くことなしと云ふ敬服すべき事ならずや、

人服の裁縫店では、美貌の婦人を澤山雇入れて置きまして、人が注文に參りますと、其婦人に美しく造りたる種々の着物を着せて、種々の容子をさせて見せまする事で、夫を注文に行つた人が見て、あれとか之とか決定るので、又中には、彼方の飾裝を此方に付けるとか、此方のかざりを彼方に付けるとか云ふ樣にして、爾うして身體に何度も〳〵合せて拵へますから、立派に出來る筈で御座います、夫れに佛國の仕立屋は、身體の肥つた人は、痩せた樣に、小さい人は大きく見えるやうに、又色の黑い人と白い人、又黃色い人と、其人に依つて、形や色に合うやうに造つて呉れます、夫から帽子屋に行つても其通り顏の長い人と丸い人とに由つて帽子の格好を變へて呉れます、夫が爲に大變好く見えるやうになります、而う云ふことなんぞは、さき〳〵では日本でも眞似ることが出來ませう、只今ではまだそんな巧者な仕方もありませんから、洋服を召す方々には御不便と思ひます、

コヲーセットなんぞでも、ちやんと其人々に適うやうに、寸法を取つて作りますから、大變好く合つて心持が宜しう御座いますが、日本では西洋人の身體に合せて拵へただけの長いのを持つて來て着けますから、苦しくて堪らない譯でございます、

佛國に行つて案外におもひましたのは、歐州に往くと、どんな家でも電氣燈や電話などは備つて居りませうと思ひましたが、往つて見ましたら、存外立派な家でも其等の設備のあるのは思ひの外少なう御座いました、私どもが從來外國人の事を耳に致しましたには、派手やかな立派な華美の部分の事のみが多くございましたが、實際行つて見ますとそんなに華美贅澤に裏も表も無いと云ふ風ではありません、夫はモウ善い事も中々あるやうでありますが、申までもなく何でも歐州の風を日本に寫して必ず善い事ばかりではありませぬから、歐州の事を見て歸つて來る人は、能く〳〵日本の風に合ふ樣なことを玩味して持つて來ないと、或は日本の國體や、或は日本の

風俗に適合ぬ事もありませうから、時には日本の善い所を毀損事もありはしないかと思ひます、
感心いたしますのは外國の婦人は獨立の精神が充分でございます、そしてなか／＼善く働いて能く遊ぶ丈の事に致します、それから又凡ての事に大變に規律が立つて居る、又日本の家庭と違つて、訪問の時間も決定つて居りますから、出入にも無駄をせず、働くにも都合がよろしうござります、又臺所の事に致しても誠に便利に出來て居つて、六七階の高き所に住で居る家でも水などは水道が引いてありますから臺所へ行き一寸栓を廻せば何程でも水が出て來ますから、水を汲む手間もなく、又何か料理する時には瓦斯が引いてあつて、其栓を開ければ一時にスープも出來、肉も燒ける、菓子も出來ると云ふ樣な譯で下女二人要る所は一人で濟むと云ふやうで、日本に比較ると大變都合がよく出來て居ります、
又學校に往く生徒も女の兒なんぞは誠に質素で、小學校中學校高等女學校、夫から佛蘭西の貴族の行つて居る學校へ行つて見ましても、いづれも多く黑い色の切にてつくりたる上着を蔽つて居ります、そして大變に歐州の人殊に佛蘭西の人は愛想が宜しう御座います、
夫から佛蘭西には、世界第一等と云ふ樣な大變な大きな勸工場の樣なものがございます、ボンマルセーと申まして、大きさは一町四方位もありまして、四階になりて居りますが、其所には食物を除くの外は人間が生れてから死ぬるまでに使用すべき品物は、美術品贅澤品日用品又はあら物その外何でもあるので御座います、實に夫れは立派で、そして正札付で誰でも安心して買へますのでございます、夫れからモウ一ッありますが、之はマガザン、ループルと云ふので之も大變大きな物で御座います、
夫から感じましたのは巴里の市街が實に綺麗でございます、石を敷き又セメントのたゝきもありますが此節で、良い町には木を縦に敷いてあります、其上を馬車が通るので、朝夕は水道の水がひとりでバッ

ト出て市街の兩側を流れ人が來て掃除するのです、夫で夜分でも澤山の瓦斯燈が輝いて居つて晝のやうでございます、立派な賑やかな町に往くと、夜は格別店のかざりが奇麗でわつて實に立派でございます巴里の公園は幾所もありますがその中ボア、ヅ、ブウローンと申す公園は紳士淑女の散歩する處にて、日曜の午後からは美麗しく盛裝した人達が、馬車で揃つて散歩して居りますが、其樣子を見ると此國の人は貧乏と云ふ事は知らんかと思ふ位で御座いました、

巴里では通常の貸家には湯殿が少なうございますが佛國の人は餘りお湯にはいりません、湯によくはいる人でも月に二三度位ださうです、夫で湯屋へ這入に參りますと、一度が四十錢から一圓以上位致すさうです、

歐羅巴は日本に比べますと、物價は中々高うござります、殊に贅澤品とか玩具とか云ふ樣なものは實に高いやうで、私が年末に方々へ贈り物をするのに、日本から持つて行つたもので足りませぬから、お菓子を買ひに參りました、夫は尤も巴里で一二を爭ふ菓子屋で（人に贈るには名高い菓子屋の印が無いと不可）ございましたが、一番小さな安き菓子箱にて十圓から下は無いのでございます、

佛國の料理は大變美味のでございます、私は大變好みました、又麵包『バタ』の甘味いことは他に類がないさうです、佛蘭西でものを食べて居つて英吉利へ參りましたら普通の家庭にては不味くて困りました、之はどなたでもさう申されます、

郵便配達などは巴里では存外徐々わるいて居ります其代りに電信郵便と云ふのがわつて、夫は局から局へ管の仕掛けがありまして壓搾した空氣で郵便物を吹きおくるのです、此の分は普通より直段も高く且つ紙や封筒にもきまりがござりますが、大變に早く屆きます、夫から劇場へも往つて見ました、オペラへも行きましたが夫は國立で御座いますが、實に何うも彫刻から裝飾なんぞの立派なことお話にならぬ

位でございます、オペラで無くても外の劇場でもなか〳〵立派でございます、又舞臺の上へ出る役者が時によりては百人位出て參る時があります、夫から又或劇場などへ行つて見ますると、隨分思ひ切つた社界の惡口の演劇をして居ます、オペラと云ふのは日本で云ふと能の樣なもので誠に優美でございます申す言葉も普通の言葉では無くて皆謠つて居るので御座います、

パリスでは交通の便も大變宜しうございまして、地下の鐵道もあれば地上には電氣鐵道もあり馬車もありと云ふ樣な風で、一寸外へ出るにも誠に便利でございますが、日本では車代に澤山懸る上に東京などは實に廣いから困つて仕舞います、あちらでは無論人力車はありませんが辻馬車が居りまして、又價格も決定つて居りますから掛價を云つたり、又減價ると云ふ樣な事が無くて大變に宜しうございます、一寸乘つて何町の何番地の誰某の所までと云つて乘るとちやんと其所の門へ卸して呉れます、辻馬車の賃錢は市内なれば遠近にかゝはらず一走り六十錢酒手十錢か二十錢位です、

歐州では下女を雇いますのに、一ケ月の給金が二十圓位で、下女の洗濯物も食事も主人持でございます召使の者を買物に遣ると五分のコンミッションを取る事に決つて居るさうで案内書まで出ております、夫ですからホテルなんぞに使はれて居る者などは成るだけ餘計に買物に行きたがつて居ります、夫からをかしいのは、遠方から物を持つて來るとか、又言ひ付けて屆けて呉れた人には、二十錢位の金を使の者に遣るのでございます、下女でも外國の下女は責任を重んじて大變に能く自分のすべき事丈は致します、其代りに自分の爲すべき職權を他から手を出されると非常に心持を惡るく致します、又責任以外の仕事と申すと仲々ヤッテ呉れませぬ、

パリスには日本のものを賣つて居る家があつて其所に行くと味噌、酒、醤油、お米、鑵詰類、奈良漬なんでも日本のものを賣つて居ります、奈良漬は一斤

が二圓四五十錢位、鹽煎餅の一鑵にて日本では二十五錢位のものを二圓で買つた事がありました、然し大變便利で日本人は仕合せ致します、

活花の師匠

豫見道人

女の師匠藝で何が一番早く物に成るかと云へば、花を活けるといふ事である、そこで小供の時分から花を活ける事を習覺えて、それが身を助ける不仕合せになると云ふのよりは、中年から手取早く習つて、見た所體裁がよくて、敎へればお師匠樣たるに變りがなくて、斯うして遊んで居るのよりは、といふ所より思ひ付いて師匠の仕度にかゝるが多いのである少し家らしい家には、必ず床の間なるものがある、既に床の間ある以上は、掛物なかる可らず、而して掛物の前にこの床の間を飾るものが一二品入用である、その一品には必ず生花が撰ばれるので、見た所一番不生產的のもので、存外需用の多いのは、この生花である、

花を活けるといふ藝は如何なる事であるか、髮結床一流に挿入れたのでは、あまり風情がないから、その風情をつくるやうにするのが、この生花の道の行はるゝ所以である、

一瓶の中に四季折々の花を挿入れて、それに風情を作る、到底沒趣味の人に出來る藝ではない、少くも一通り以上の分別がなくてはむつかしいことである隨つて活ける人、またその時々によつて花の趣が變る譯である、

又花を活ければとて、住なれた土を離れて、見も知らぬ水に活けらるゝ事であるから、人間でさへ水が變れば病氣になるといふ程であるに、まして草花などであつて見れば、それ相當に水に馴染むやうにせねばならぬ、即ち花卉によつて、其水を揚ぐる仕方が幾通りもある、故に花を活くるには、まづ花の出

生を心得て　この水を揚ぐる工夫をも覺えねばならぬ、生物學の一冊位は心得て居らねばならぬ、

次に風情をつくるといふのであるから、無闇に造り花のやうに枝をためるにも及ばぬが、少しはためねばならぬ場合があるから、そのため方を工夫せねばならぬ、さもなければ折れる憂ひがあるから、このため方さへ工夫が付けば、辛夷等一二の花卉の外は大抵少し位は自由になるものである、兎に角に花を活けることに於て、覺え置かざるべからざる事である、水を揚げる工夫とが二大要件である、

斯の如き研究より工夫を要する藝であるから、花を活けるといふことは、容易な事ではない、この師匠をするのであるから、花に對して羞づる事のない人格をも要するであらう、然るにその實際は、理屈の百分の一ほどでもない無造作なものである、

もはや今日となつては、花の風情、即ち花の姿も、大方定まつたものとなつて、或は池の坊とか、遠州流とか、古流とか、未生流とかいふ風に定まつて、それ以上奇拔な工夫をするものはない、あれば野心家がもし池の坊より出づるとすれば、池の坊霞山流といふ風に一派を立て丶、その家元となるのであるが、その花姿は依然として池の坊で、其範圍を拔出る長所があるではない、水揚の法も、ため方も更に工夫する必要もなきまでに研究が出來上つたので、師匠が新に頭腦を痛めるに及ばぬ事である、

そこで先づ花を活けることを學ぶには、四季に分つて瓶中に挿入する花卉が幾種類あるか、これを水揚するには幾種の方法があるか、これをためるに幾種の仕方があるか、師匠が悉く之を敎へ、習ふ方に手帳一冊を用意せば、以上は半日にて卒業することが出來るであらう、それから花姿であるが、何流はどういふ形といふのが極つて居るのであるから、これも常識の發達した人ならば、一寸見ても出來る事である、然る所問屋なるものが、さう安くは卸さぬので、生花のお師匠樣なるものが、門戸を張ることが出來るのである、

この生花の稽古をするには、初傳、中傳、奧許、皆傳、家元相傳と斯うあるのであるが、家元相傳といふのは、家元が家元を讓るべきものに、他言を禁ずることを宣誓せしめて敎へるのである、即ち秘法を授くるのである、この秘法を知つて、諸流に通ずることも、斯道のすべての道理を會得することも出來るのである、然るにそれ迄の諸傳は、貰うて如何なるものかと云へば、古歌の一つ位に、習ふた課目が書いた位のものである、心あるものが貰へば、理屈をひねる一材料たるに過ぎぬので、宜しく噴飯すに過ぎないのである、世間の生花の師匠なるもの丶多くは、この皆傳以下の人で、たゞ花姿ばかりを一つ鑄形によつて敎へられたまでの事で、藝術としては半日の價値しかないものである、即ち初傳以上皆傳以下の傳授といふのは、月謝以外の利得を貪るに過ぎないので、これは金さへ出せばいつでも得られるもので、藝の如何に拘らぬのである、もとより藝に何程むづかしき事があるか、むづかしいと稱する所は、家元ならでは知らずに濟むやうな仕掛になつて居る、

それを世間の多くの女の師匠は、風流心から起つたのでなく、これを覺えて置けば、小遣錢乃至生活費を得るに便利といふ點より習ひ覺えたのであるから花に對しては、天とか地とか、前添とか根じめとか云ふ名を覺えたに過ぎない、それに生花の師匠風といふ一種の風姿と、妙な切口上とを第一の武器として、いつの稽古も同じ仕方と、同じ事さへ云ふて居れば濟むのである、

それに稽古が一六とか、三八とか、月に六度が、大抵お定まりであるから、一年中變つた花を活けることが出來る、姿は同じでも、花は違つて、見た所別種の感が起るのが、師匠が弟子を長く繫ぐ事の出來る、自然の手段となるのである、

敎へる材料は右の簡單なる藝を長く引張つて敎へるに過ぎないので、敎へる利得は、習ふ人がまづ花でもといふ人であるから、月謝の外に折々の附屆があ

り、生花會の催しをして、其上り高の幾分を得るとか、花屋と連絡をつけて、其の上前をへづるとか、少し枝がためらるゝ位になると、そこで褒めあげてもう初傳をお受けなさいとなる、それが皆傳まで、月謝以外の利得を得る道となるのである、その外に、生花の女師匠の内幕へ入ると、本誌には書くに忍びぬほどの事も演じられるのである、されど花に對して快感の起らざるやうにては、人間も無價値のものであるから、これを插して樂む藝も大に發達せしめねばならぬ、而してこれはまづ女子の仕事に編入すべきものである、男子が、而も車でも挽ける力のあるものが、被布姿が何かで、勿體なき日かげを、ブラリシャリと暮すは、甚だ其意を得ぬ事である、この文實は多くの生花の女師匠の内幕とでもいふべきものを書くつもりで、筆を執り初めて、つい横道に入つて理屈となつたのである、終に臨んで、生花の藝を女子専有の仕事として推擧すると同時に、今の多くの女師匠諸君に、花に對して耻かしからぬ心を以て、之に當りたいことを希望するのである、

●新來の露公使夫人

前公使ローゼン男が國旗を捲て退京せしより、茲に三年の星霜を閲し、日露兩國再び善隣の誼を結び、去八日始めて入京したる新來の露公使パフメチエフ氏夫妻、同十一日迄帝國ホテルに滯在、十二日早朝霞ヶ關の公使館に引移られしが今其の夫人の素性を聞くに、元墺都駐剳なりし

▲米國公使の令孃なれば、英語は其本國語にて露語よりも巧みなりとか、パフメチエフ氏と結婚せしは二十年以前なれども、未だ一人の子を儲けず、着任早々二人の令孃ありなど誤り傳へられしが、共に二十歳を一ツ二ツ越したる希臘婦人にて、夫人の召使なりと、公使は打見たるところ年齡五十二三の背の低い、肥つたブツキラ棒の男なれど、

▲夫人の風采は、丸顔の色白にて米國生れには、珍らしき小作りなるが、流石は外交官の娘だけに、萬事如才なき挨拶振、最も愛嬌に富みたる氣輕の氣質とて、過日の如きは馬車を驅つて市中へ買物に出ること兩三回、半藏門外の某商店へは、テーブル、椅子などを購ふため再度まで立寄りしと、



謡曲千代田の宮

大和田建樹

常磐なる。松の緑も春くれば。〳〵。今ひとしほの色そひて。十かへりの花までも。さかゆく蔭はおもしろや。げにもくもらぬ君が代の。千代田の宮の朝日影。のどけき空にひかれつゝ、友よびかはし舞くだる。鶴の毛衣かさねても。民のよろこびよもつきじ。おもしろや。君が代は。ちよともさゝじ天の戸や。いづる月日の限なければ。天下泰平長久に。天下たいへい長久に。治まる國のためしとて。御庭の松の枝ごとに。飛びちがひ飛めぐり。羽うちかはし翼をならべ。立まふ鶴のこゑ〳〵に。千秋萬歳の齢を君にさゝげ奉り。よろこびうたふや雲のうへ。よろこびうたふや雲のうへに。姿は見えずなりにけり。

折にふれて

佐々木信綱

いと車ひく手とゞめて家出せし
　わが子の上をまた思ふかな

をさの音にはとりのこゑ世の中の
　ひゞきはきかぬ我すまゐかな

けがれたる人のこの身の唯しばし
　神にちかづく夜のねむりかな

乳吞子の泣く聲やみて川ふねの
　ともし火さむし利根川の水

おばしまによりてねむれる順禮の
　横顔さむくさす夕陽かな

いくそ度この子なくばとおもひけむ
　悲しきなかに生れたる吾子

世の中に求むることのあらされば
　憂ふることもなき身なりけり
この文箱わが身とゝもに埋みませ
　今はのねがひこれ一つのみ
ほのくらき竹のした道われ行けば
　一すぢ見ゆるさと川の水
わらぶきに庭鳥かひてむつましく
　妹脊すまへり川ぞひの家
ゆら〳〵と渡ればゆらく柴ばしの
　下にうづまく谷川のみづ
わたつうみに入る時あらん若草の
　下ゆくながれよし細くとも

蠶がい

小川直子

いでや此世に生れたらむもの、此國に生れては此國を強うし、此里に生れては、此さとを富まさむとおもふこそ、國に報ゆる道の眞心なめれ、されば女の身なればとて、いかで空しう過すべきことわりやあらん、おのも〳〵力の及ぶ限りは、何にまれ盡さまほしきわざなりかし、さて女の手業種々あめれど、中にも蠶を養ふ事こそむねとすべかりけれ、さるは彼唐土にも、遠く古より始まりて、貴きといやしきをいはず、此わざにいそしむ習ひなりとぞ、彼宿瘤は桑を摘みてことものに心をうつす事なかりけるも母の敎を守りたるらん、されば母が此わざに心を盡せるさまも思ひやられぬかし、さて此の蠶を養ふさまをきくに、其いそがしき大かたならず、あまたの女、老たるも若きも汗になりつゝ、つげのをぐしをもとらで、朝な夕なに心をこめ、しばしやすらふ暇もなく、夜さへに起き居つゝ生ふしたつるとぞ、さるを何れの御代なりけむ、彼唐國に蠶を養へる賤の女、ひと日都にのぼり來て、歸さの道すゞろに涙のいで來て、雨も雫とそほちつゝ、手ぬぐひをしぼりけるとかや、如何なる故にかといふに、都少女のみやびたるどち、綾うすものを身にまとひ、長きひめ

もて遊び暮せるは、蠶を養ふ人にあらずとて、うれひ歎きたりとき丶傳ふる、實にことわりなる歎きならずや、されど我瑞穂の國はいともかしこけれど、今の后の宮、御國の爲に大み心を盡させ給ふ事、いみじう深うおはしましければ、そのかみ雄略天皇が后の宮、あるは女御更衣の君だちにまで、このわざに身を盡せよと詔ありて、すゝめさせ給ひける故事をさへおほしいでさせ給ひて、御親ら桑をも摘ませ給ひ、はた御身近うめしならさる丶女房だちにも、物せよとのたまひて、いと多くせさせ給ふなりと、ほのかに承り傳へかしこみて、今はしもこゝかしこの刀自の君達、よめよ娘よいざ御國のためにいそしめと、そゝのかしたてゝ、いそしむ習ひとはなりにけり、さればきのふより今日、去年よりは今年と進み行く世ぞ、いと賴もしうかしこき業なりや、

卯の花に一きは黒し柚の飯
時鳥鳴くや踏張る片おぶみ
けふの灯は明日の煙や蠶寶

吉野山

幽花子

つまがため
　こゝろづくしもあらしふく
　　よし野のやまの冬のそら
　　花にまがひてふるゆきも
　　袖のなみだを添ふるなりけり

いのちこそ
　つきせざりけりいまよりは
　　ふたゝび夫に逢ふよしも
　　なみだにくもるよし野山
　　なげきの雪こそふり積りけれ

見るとても
　うれしくもなしますかゞみ
　　こひしき人のかげをだに
　　とめぬ形見とおろ〳〵に
　　うけしこゝろやいかに悲しき

いつしかと
　なみだにくるゝ日のかげに
　　夫とつまとはふたみちに
　　別れこそすれあひしたふ
　　こゝろはおなじ道や行くらん

葦船

山田枯柳

たけき陽神の心には
など陰神のなかるべき
いとし子すてし葦船の
行くへを看め伊奘冊の
尊は磯に泣き伏しぬ。

限りもしらぬ大海の
波を枕の旅ごろも
吹く潮風にさらしつゝ
いく夜すごすか葦船の
行くにまかせて蛭兒神。

『あゝ行ける哉わが蛭兒
再び歸ることなかれ
汝がその足のたゝんまで。
あゝ行ける哉わが蛭兒、
潮の中に入るなかれ、
われらは汝をすてしとて。

あゝ行ける哉わが蛭兒、
海の極の島國に、
汝が身を寄よ安かに』



陽神のもてる瓊矛の
光にまさて日のひかり
遠きうな原てらしつゝ
瑞穗の地に風なぎて
あゝ葦船の行ける哉、

一天の浮橋わが身には
憂ひにいたる道ぞかし
高天の原の神集ひ
樂しき昔ゆめに見て、
なげく甲斐なき我身哉

磤馭盧島にすまひして
八尋の殿のあさ夕の
樂しかりしは少時にて
天の柱ゆるぐまで

悲しき涙おつるかな。
折しも起る風の音
嘯く波にゆられつゝ
あはれ葦船流れ行く
海の極の島國に
あはれ葦船流れ行く。

胡蝶の日記（三）

白井千代梅

猶昔しのばしくて、稲葉の露袖にかけつゝ、近き小島に上りて見渡せば、いとゞいひしらぬ眺めに哀れまさりて、しばし松が根に休ひつゝ詠める、

とぶ鳥の飛鳥の川も淵は瀬に、變るとふなれ湖の、名に流れてし象潟は、地津御神のあらぶりに、昔にあらずなりにきと、聞る物からいかでその、俤をだに見まほしみ、旅の衣のはる〴〵と、立出來つゝ駒ならむ、岬の山の岩ねふみ、こゞしき道も曳く杖に、縋りて蹤つ日を遮る、木立だになき長濱の、苦しき路も菅笠を、蔭と賴みて兎に角に、來つゝを見れば海なせし、水は何らぞ涯なき、小田の稲葉に露置て、風吹そよぎ漕渡る、舟はいづらぞ總角が、水草苅り積み駒ひきて、行かふ見ればおもほへず、袖ぞしほれぬ打むかふ、宿世の山に影映す、昔を偲び遠近に、殘る小島の松風に、ありし世を問ひ千萬に、斯くてもあかぬ象潟を、元つ姿に白浪の、立かへしつゝ見るよしもがな、

きさかたや稲葉そよぎてふく風に
浪うちよせしおもかげも見ゆ

猶あかぬ物から、日も闌ぬ、疾といへば皆立出ぬるに、稚き法師の殊更に出來て、彼處なる碑をも御覽じな殘し給ひそと、手を指し教ゆるぞ實に物好みなる同士とや思ひけむと、かたはら痛う思へど、猶床しくて木深き山路分つゝゆくに、小やかなる洞ありて其傍にぞ碑は立てり、文字夥多ゑりたるを、人々寄りて讀むを傍にて聞けば、天にましますす豐岡姫をい

はひ奉れるとぞ、寛政八年秋田の侍從吾妻の博士に選ばせて建つとあり、黄金の峯の西谷なる碑よりは一尺ばかり高くて、上に龍の形二つぞゑりける、こはかけまくも畏き天照御神にして、蠶飼の遠つ祖に在す、かかりければ婦女は殊に仰ぐべき御神なりけりと、やがて、

ひくまゆの遠くみ神のをしへより
　末の世ながくつたふこのわざ

そりつゝくれば、程なく先に渡りし橋邊となりぬ、此川も昔は大舟いりし港なりしとかや、佐かたぬし彼寺に扇忘れて最暑きにとて呟き玉ふに、供なる女の拾ひ來ぬれば、返さすとて其扇に代りて、

しら露もまたおかなくにいかなれば
　わが身にのみは秋のきぬらむ

彼の鹽屋あるわたりより舟に乗りぬ、鹽木數多つみぬれば、いと所狹けれど、廣き沖邊にまた此方の岩のたゝずまひ、浦わの樣など、長閑に見つゝ行くに、風荒く吹きにたり、浪高うたちて舟は打あげられ、また倒に落入るやうなるに、現心も失てふし沈みぬ、其後はしらず只夢の樣にて過ぐ、瀧の浦と云ふ所にて舟より上れど、なほ舟心の惱しければ、海人の苫屋にしばし憩ひて出づ、湯の田といふ所に出湯ある見むとて立寄れば、井の樣につゝ井筒据たるより湧出るなりけり、家は大やかなれど只三つのみあり、又荒崎の釜と云ふは、吹浦の名所に侍れば見せ參らせむとて、案內するまに〳〵細き草道分つゝ行けば、後はなべて岩山にて廣からぬ濱なりけり、岩の狹間より泉流れ出るを釜とは云ふとぞ、潮と間三尺ばかり隔て、斯く淸き水の出るぞ怪しき、將た得も云はれず、をかしき形の岩どもの、此處彼處にあるを、こもまた八十八潟の眺めともいはましなど猶見渡すに、沖邊はいとよく晴渡り、風吹くまに〳〵白う浪の花咲きて、釣舟どもの見えつ隱れつ漕ゆく樣など、常にもがもなと打誦しぬめり、此後方の山なん最と險しく侍れど、この瀧までの足ならはしに登り給へと云ふにぞ、こゝしき岩の陰路を傳ひ登るに、過

來し駒泣せも及ぶまじう險しかりけり、松柏生茂りたる中に岩室あり、彫れるとなく自から不動み人形あらはれさせ給へば、岩屋不動と稱へまつるなどいふに、氣恐しき樣にて近うも得よらず、海禪寺の山廻りて日の入つかた、又吹浦に歸りぬ、廿九日、空のさまも雨催ふなり、從者にも病む者も有ればとて、今日は止まりぬ、巳の時ばかりより降出て小やみなければ、男子どちは斧の柄も朽すてふ業に心を入れて居れど、此處には紛らはすべき業しなければ、刀自双紙もがなと求め給ふに、佐かたぬし、さは是をとて出し給ふを見れば例の唐歌なり、

きのふ舟路にて見し、大師崎わたりの巖の樣こそ、此處らの眺望に增りて妙なりしを、一目だに見ず過つるを、巖の甚く怨みたる心を作りて、おのれらを笑ふにぞ有ける、こは昨日の扇のさがなき物言や憎かりけむ、頓て其返しにとて、

しほ風は吹通へども日を遮ふる、木立しもなく白浪は、打寄れども搦ぶべき、清水もあらぬ眞砂路を、炎きに侘て心のみ、急ぐとすれど皆人の、辿りかねつゝ今はたゞ、詮術もなく鹽木積む、海人の小舟に辛くして、乘りつゝ來ればわだつ海の、心を荒み浪風に、打搖らるれど丈夫は、遠き沖路にむらきもの、心をはるけ疊なす、岸の巖に玉なせる、言の葉そへて終日に、見つゝ來ぬとふ手弱女の、身はかひなしや夏草の、萎へしごとく舟ぬ路に、なびきこひ伏し烏羽玉の、夢に過來ぬ見ざりしと、怨む岩より見ざりつる、我はわが身の恨しきかな

玉くしげふたゝびかよふ浦ならば
　見るめなしとも侘ざらましを

日暮れぬれば土器とり出て、人々酌交す、此家に三夜やどりぬれば、女子らも語らひ馴て互に名殘を惜むやうなり、卅日、今日も猶晴れば、今一日と主人のとゞむる物から、

浦浪にしほたれはてし旅ごろも
　なに今さらに雨をいとはむ

と急がるゝに、人々も同じ心にや強て出立つ、細き山路を分けのぼるに、左の方に森池といふあり、爰にて雨は晴ぬれど、

風ふけばこずゑの雫おちそひて
いと〻ますらむ森いけのみづ

また簑輪といふ村を過とて、

雨はれていまぬぎ捨したび人は
みのわてふ名を聞もうれたし

ゆき〳〵て、落伏村なる永泉寺に至る、山門うち過ぐれば、細き流れありて、橋うち渡したる彼方に、木高からねど古りたる松二本あり、鶴亀と號しとぞ、一本は萬代こめて植つるにや、いりもて見れば眩きまで磨きなしつ〻、佛の御前きら〳〵しう輝き渡りて最高し、後の山なる七不思議てふ所を見むとて、頭白き僕の箒もて到るを案内に立つ〻分登るに、日は照りつれどさし交す松柏に、影だに洩らねば、苔路いと滑かなり、座禪石とて丈は六尺ばかり、廣さは莚一枚ばかりにて、後へ高なるあり、又自然石の地藏尊苔衣きて立せ給へり、

とはゞやな露のみかゝるみ山ぢに
いく世かさねし苔のころもぞ

横笛

響花女史

梅津の里の春かぜに　そよの匂ひも懐しく
大井の川の月かげも　霞にこめて哀れなり
往生院と名のみきく　寺は何處とゆふ月夜
此處に彼處に佇みて　尋ぬる方も朧ろなり
住わらしたる僧坊に　念珠の聲を聞すまし
御態いかに在すらむ　見たさに來つる我心
浮世の事は捨し身も　きけば心の動くらむ
見る共なしに差覗く　障子の隙にうつる影
袖はなみだに裾は露　打しほれつゝ面瘦て
尋わびたる態見れば　大道心もよわらでや
夢まぼろしの世中に　見にくき物を片時も

見て何かせむ慕しき　人を思ひて戀もせめ
横笛ならで誰が世に　我思ふ人あるべしや
たゞ嚴めしき父母の　仰を背く本意なきに
これぞ浮世と振棄て　嵯峨野の奥に墨染の
清き心となりぬるを　今更あひて何かせむ
門違へにかざる人は　なしと告るを情なく
いと恨しと思ふらむ　涙おさへて歸りゆく
後生をねがふ念佛の　障碍は茲に在ねども
飽で別れし吾妹子の　慕ひ來つるか心うき
あさなゆふなに紫の　雲のたなびく高野山
茲は浮世の塵もなく　衣の袖もいとかろし
然耳ならず我妹子も　思ひ亂るゝ黑かみを
そりて心も墨ぞめに　なりぬと聞ば猶更に

綠陰集

阿井飛洋

文書

我もまた思ひをこめて筆とりて
文かきのこし後の世の
人に見せなむいにしへの
　人のこゝろの文に見ゆれば

夏山陰

あづさ弓春を忍べる人あらば
尋ね來よとやさくら花
おなじ色香を殘すらん
　わか葉すゞしき山下かげに
あづさ弓春を忍べる人あらば
尋ね來よとやうくひすは
聲なつかしく呼ばふらん
　わか葉すゞしき山下かげに

郭公

雨のふる夜にまた月に
　待ちに待ちにし郭公
思ひがけなき闇のうちに
　初音きくこそうらみなれ
月の夜も雨のふる夜もほとゝぎす
　きゝこそあかせやまもとの里

雨後新樹

村雨のなごりの露をとゞめおきて
　若葉のうへにてる月を見ん



痲疹と種痘

醫學博士　弘田　長

痲疹は一度煩ふと二度は致さぬ病氣で、大概小兒の時に病つた人が多いから大人には自然罹る事が無いと云つても宜しい位であります、

病氣の性質は非常に傳染し易く、流行性感冒の樣な工合に、一家の內に一人發生すれば必ず他の兄弟に傳染つて、免れる事は極めて稀である、流行性感冒と違つて居る點は、流行性感冒は何回も罹るが、痲疹は一度罹つた者には感染しない、

痲疹に罹つて難澁するのは咳の出るのと、咽喉や、鼻が惡く成る事で、一體此病氣は極危險な病氣であつて、小兒は之が爲に肺炎を發して、殪れて仕舞うやうな恐れがあり、又鼻から耳へ病氣が移つて耳の病氣を惹起したりする事は屢々ある、

而も最も怖るべきは此病氣を發する時か或は其病後に結核が起つて來る事であります、古來、痲疹とは人の熟知して居る病氣であるから、自然人の耳に慣れて怖れない樣になつて仕舞つたのであるが、之は以ての外の義で重體に陷らせずとも濟む塲合にも、取扱ひが輕忽なために重い容體に成つて取返しのつかぬことが屢々あります、

斯う云ふ事は人の母と成つて居る人は餘程注意しなければならん、病勢の强い時分には熱もあるし、咳も澤山出たりするから誰も注意して居るが、熱も散じ咳も殆んど出ないと云つて宜い位になると大概平癒したものと思ふ人が多いが、之が抑も失策を起す多くの原因に成つて居る、凡て傳染病は病勢の輕重に係らず、全治した後にも容易には身體の血液が發病前のやうに回復しないものだから、當分の內は身

體の抵抗力が著しく弱つて居る、夫故外觀は全治した樣に見えても內實は却々爾うで無い、其時分に平日の通りな取扱ひをして、早く新鮮の空氣を吸はせた方が宜からうと云ふ樣な事から外へ出したり、又身體が不潔であるから早く湯に浴れやうと云ふ樣な事をする人があるが、之が甚だ惡い事で、爲に痲疹を再發したり、痲疹でなくとも氣管支加答兒を強く起したり、又は肋膜炎を起したり其他種々の重い病氣を惹き起すのであります、

此種の出來事は痲疹の流行毎に數次實見するのであつて其都度種々注意をするけれども、母親達の耳には容易に入らぬと見えて、何時も同じ手ぬかりがある、痲疹が發したら母親は注意をして、病中は勿論病後と雖も充分長く保護をしなければならぬ、何れの家でも沐浴を急ぐのが第一に宜しくない、入浴は何時でも出來るから而う急ぐには及はぬ事と思ふ、どうせ一度罹るものならば、痲疹は幼年の時に罹つた方が善いと云ふ事を人が申します、大人に成つてからは概して幼年の時よりは病勢が強く成ると云ふ說がある、或點までは理屈があるが、併し痲疹を小供にさせると云ふ事は餘程考へなければならぬことであつて、流行の時季に由つて順良なる痲疹と、性質の惡いのとあるから、其邊も餘程注意をしないと却つて大患を醸すことになるから、第一に小兒の其當時の體質は痲疹に罹つても堪へ得るや否やと云ふ事、又其當時の流行の痲疹は性質が順良なるか否かと云ふ事を聞糺さなければならぬ、只一も二もなく一度煩つた方が利益であると云點にのみ注意したのでは誠に危險である、極く極端の例を擧げると、私共の子供は痲疹に罹つて居るからと云つて、殆ど平素の風邪の樣に思つて、醫師にも連れ行かぬと云ふ事が、下等社會ばかりでなく總ての事を心得て居らるゝ人の中にもあるが、斯くの如きは以ての外の話であつて實に危險千萬である、兎に角一の傳染病であれば、輕症にもしろ醫師の監督を受けて看護すると云ふ事は最も必要であらうと思ひます、

次に種痘の事をお話し致しますが種痘の時期に就ては種々說がある、大體に就て云ふと何時種ても差支無いのである、日本では多く春と秋とに於て種る樣ですが、只氣候が好いとか或は地方なんぞで都合が好いと云ふ樣な點から定めたのであつて、別に春と秋とが種痘の爲に善い時期であると云ふやうな事は無い、時期と云ふ事に就てお話をすれば、小兒の健康の狀態を見る事が一番大切である即ち、其小兒の健康が其當時種痘に堪へ得るや否やと云ふ事を確める事が一番肝要な事であります、

尙一つ注意すべきことは、其當時麻疹とか、インフルエンザなどの流行して居るかなどの事も能く察して、若し右の樣な病氣がある時であつたら、延ばした方が宜からうと思ふ、一年の中で夏季は汗の出る時であつて殊に小兒は種々の病氣に罹り易い時であるから、盛夏の時は見合せた方が宜しい、小兒が健康な場合でも、齒の生へる時分は注意するが宜しい、何故と云ふに齒の生へる時分は、小兒が種々の疾病を惹き起し易い時であるから、此時は成るべく避けるがよろしい、併し右は總て天然病が流行しない時であつて、若し天然痘が流行し始めたと云ふ場合に於ては、總ての條件は取り消さなければならぬ、何故と云ふのに、此時の問題は、若しも猶豫をして居つて



天然痘に罹つたら、どうするかと云ふ重大なる問題が起つて來るから、其場合には大概なら種る方が宜しからうと思ひます、

初生兒には何時種ても善いと云ふ事に成つて居りますが、或る論者は生れて直ぐ種へる方が宜しいのみならず、種へる方が寧ろ相當であると云つて居ります、其説に從ふと生れた以上は何頃何時天然痘が流行るかも知れないから直ぐ種へた方で相當である、之は却つて子供には危險が無いと云ふ事になります

私も或年の天然痘が流行り始めた時分に、生れて二週間或は十日位の子供に種へて見たけれども何の危險もなかつた、少數ながら私の實驗に依ると極く小さな子供でも種痘から起る熱などは強く無い樣に思ふ、寧ろ私の種た場合には熱が低かつた、けれど素より少數の實驗であるから、確たる事は云はれないのである、

葉ざくらや雨にされたる傘の骨

看護上の注意

醫學士　久保杏林

看病をするには、無形の技能を以てするのと、有形の道具を使つてするのとの二樣あるが、先づ第一に看護法に大切なのは、一の深切なる情愛といふものが一番必要である、

看病をするに其の技術に屬して居るものは、病人を慰藉すること、病人の容態に注意すること、及び病人の取扱ひ方、之は單に直接病人の身體の取扱ひはかりでなく、其の周圍のものにも注意しなければならぬ、例へば戸障子の破れ目から風の吹き入るを防ぐ如き事にも、

それから看病に使用する道具は種々あるもので、到底普通の家には皆備へ付置くといふことは、經濟の點から云つても出來得べからざることである、故に或場合に於ては、日常使つて居る所の道具類をも轉じて看病道具に流用することが肝腎である、

外國では看病に入用な道具を損料にて貸す所が出來ました、これはまことに名法であると思ふ、何故と云ふに、普通の家で病人のあつた時に、一々其の道具を大金を出して購うても、其病人が治れば、最早不用に歸して仕舞ふのであるから、在つても役に立たぬ、それ故一時入用な時だけ借りて使うて、又不用になつたら返すといふ様なれば、金も多くは要らず、從つて好い器械を充分に使ふ事が出來るからして、自宅の療治でも充分よく出來る譯である、然るに我邦今日の有様では、看病の方法は學んで知つて居つても、其道具が手許に無いために、充分術を施すことが出來ぬ、といふことは實に殘念なことであります、

この道具の中にも種々ありて、一の道具があるために、大に看病人の手を省くことの出來る器械もあり、又熱でもある病人に付ては、其熱を量る器械、それから又大小便などを取つて置く必要のある病人の時は、便器及受便器を備へ付けるといふことは、是非しなければならぬ、凡そ此看病道具には、金屬製、硝子製、護謨製、木製及び紙片、布綿の類で拵へたものもあるが、其内には是非木とか紙とか、或は硝子等にて製造せねばならぬものもあり、又必ずしも其品ならずとも、宜しいものもある、で必ずそれに依らざればならぬものは格別、左もないものは、成るべく輕便なる且つ破損の憂なき安全なるものを撰ぶは必要であらうと思ふ、

例へば、金で拵へたものは、破れないけれども、冷めたいとか、或は硝子製のものは、透明にして且つ錆びる等の憂はなけれども、破損し易く、且つ破れた場合には危險であるとか、又は護謨製のものは撓やかであつて冷たくもなく、且つは腐蝕する憂もなくして、先づ今日の所では、一番宜しいやうであるが、その替り日本では未だ此細工が充分發達せぬ爲價格に至ると高過ぎるといふ憂ひがある、其代りには我國にては一閑張とて經木の上に紙を貼つて、其上に上手に漆を塗つて拵へた器があるが、これはま

ことに、何れの點から云つても申分なき品故、これが澤山に出來るやうになると大に便利であると思ふ又木製のものは、不潔物が附着し易く、又天氣の寒温等によつてくるひが來ることがある、この外陶器もあるが、これは漸次廢れて用ひる人が少くなつたが、其理由は、目方の重いのと、不透明なのと、毀損し易いのと、冷めたいのと種々缺點が多いからである、それから綿、紙片、布帛の類は、殆んど皆特別品で、他の物では代りがない位である、が西洋あたりでは性質のよい紙に乏しい故、油紙を拵へるにも、薄地の絹などを使ふこともあるが、日本には善良なる紙に富んで居るから、そんな面倒な事をするには及ばぬ、

それから看病の注意の爲に、食料と飲料に就ていさゝ述べやう、まづ食物は、食べて其物が直に吾人の滋養になるのは、消化するにも隨つて容易でない、故に熱の高い病人や、又は永く病氣で居るものは、身體が衰弱して居るから、食べた所の滋養分を消化して、己の身體を造り立てるといふ働きも同様に衰へて居る、故に消化するのに手間の入る滋養分に富んだものは却つていけない、さう云ふ時には矢張、粥とか、粥湯とかいふやうな、消化し易いものゝ方がよろしい、又病人に向つて身體が衰へては成らんと云つて、餘り多く食を與へる時は、却つて腹中にて消化せずに腐敗するから、これも宜しくない、

食べた物の中にて消化せずに、其のまゝ糟になつて腹中を通り拔けて出て往くものがある、これは一寸考へると、不用なものゝやうであるが、實際はさうでない、此の糟が腹の中を通る時に、腹の運動を勵まして行くので、便の通じをよくする、然し又さうかと云うて、餘り不消化物を餘計に食べると、通じ過ぎて腹下しになる、これはまた宜しくない、もし餘り食物に注意し過ぎて、滋養に成るものばかりを食べて居ると、今度は通じが遠く成つて來る、さうすると、又身體の爲に宜くないから、それを防ぐには、前述の如く、糟になる野菜のやうなものを、憎

類に混じて食べると宜しい、
食物の中で、水は口から這入つたら、其のまゝ出て來るものやうに思はれるが、決してさうでない、其水は血液とゝもに、身體諸部を循環して、不潔な所を洗ひ流して、終りに小水と成つて出て來るものである、且つ其の循環中に、身體に害わるものは、之を取集めて來て、皆此小水とゝもに排泄するのであるからして、此の小水は不潔なものと云ふよりも、寧ろ身に毒なものである、それ故に身體の中に溜めて置くと非常に害を及ぼすものである、斯く血液を混じ分けて有害のものは、排泄し、無害なものは再び血液とゝもに身體諸部を循環せしむるといふ樣に致すは、即ち腰部にある所の腎臟と稱する臟腑の働きである、
然るに、これから追々夏になると、誰でも小水の量の少くなるのは、一は汗になつて出るからでもある又一つは小水が濃くなつて、其中には害になる分子を多く含んで出るのであるかくして、假令小水の量は少くとも、決して、身體の害になる樣な事はない、
この樣に腎臟と小水とを漉し分けるも胃腸で、食物を消化するも心臟の血を輸送するも、肺臟にて呼吸の働きをなすも、皆各自に働きては、其職掌を盡すことが出來ぬによつて、諸職工を總べて指圖をする神經といふ頭がある、これが身體中の總棟梁であつて、筋骨なども其命令で働いて居るのである、
神經といふものは、白い筋であつて、之は皆電信電話に用ゐてある針線に比すべきものである、發信する所の局は腦と脊髓であつて、それを受ける所は身體中の筋骨及臟腑である、
それが耳目の如き部分には、電話同樣の仕掛であつて、發信機が耳目にあつて、受信機が腦にある故に、光線が目に這入つて來ると、之を受繼いで、腦の方に傳達するのである、
又骨といふものは、只身體に硬固な形を保たしるめ爲に出來て居るので、然しながらそれが一本では身體の運動が不自由であるからして、方々に筋々をつ

けて屈伸の出來るやうになつて居る、

乳の話

其三　初乳に就て

農學士　牧　忍

初乳と云ふのは分娩の當初に於て、分泌する一種の乳でありまして、其成分性質は全く普通の乳と異つて居ります、而して此初乳から普通の乳に變ずる間の日數は、動物の種類に因つて違ひます、例へば人乳では分娩後四五日立てば、全く初乳の性質を失ひますが、牛乳では日々初乳の性質が減じますけれども、全く其性質を失ふ迄には二週間位を要します、併し乍ら婦人及び牝牛が乳房の病氣に罹りますれば又初乳を分泌するものです、從つて初日の初乳と二日目の初乳とは、其成分が違つて居ります、即ち乳は其分娩後經過の時日に依つて、其成分が違つて來ます、『オイグリング』氏が『モントフーチル』種の乳に就て試験した結果は次の表に示す通りです、

分娩後日數＼成分	比重	水分	蛋白質	脂肪	乳糖	灰分
分娩當初	一・〇七	七三・一七	一九・三	三・六四	一・〇〇	一・一八
分娩後十時間	一・〇五	七八・七七	一三・六〇	四・〇〇	一・四三	一・五五
同二十四時間	一・〇四	八〇・六三	一〇・七五	四・七五	二・八五	一・〇二
同四十八時間	一・〇四	八五・八二	五・五六	四・二二	三・四五	〇・九六
同七十二時間	一・〇三	八六・六四	四・三六	四・〇八	四・一〇	〇・八二

此表に示す通りの分娩の當初より、時日を經るに從ひ、其蛋白質及び灰分の量は著しく減少しますけれども脂肪や乳糖の量は漸次増進します、比重は漸々輕くなります、之は脂肪の量が増加するからです、尚初乳では其蛋白質中には純粹蛋白質多分を占て、乾酪素（蛋白質の一種にして凡ての乳の中に主として含まれ居るもの）は唯其一部に過ぎないのですが、日を經るに從ひ純粹蛋白質は漸次其量を減じて、終に乾酪素が其大部分を占むる樣になります初乳は白黄色でありますが、時としては血液の混る爲

に赤褐色を帯ぶる事があります、甚だ粘厚なもので強き臭味があり、其上少し鹹味がありまして常に酸性反應を呈します、其中に初乳體と名付ける一種の成形元素があります、それは乳線細胞を將に作らんとする物質の混合物です、其形は圓き桑の實の如き形狀を呈しておりまして、其中には肪脂の滴を含んで居ります、それが互に紐狀の物質で結び付けられて居ります、尚特異なことは、此初乳體内に澤山の細胞核があることです、初乳の成分は普通の乳の成分と違つて居りまして、固形物の量は普通の乳の二倍若くは二倍以上あります、從つて此比重も非常に大きいものです、脂肪は通俗に考へる程澤山にはありませぬ、普通の乳と殆んど同じ位です、最も著しく異る點は純粹の蛋白質の含量の多いことです、普通の乳では乾酪素の含量（凡四、パーセント）の方が純粹蛋白質の含量（〇、八パーセント）より多くありますが、初乳では全く其反對です、人の初乳には乾酪素はありませぬ、初乳を熱すれば凝固しますが、

其理由は主として純粹蛋白質の量が多いからです、（純粹蛋白質は卵白の如く熱に因つて凝固する性質のものです）糖類は多量にはありませぬ、寧ろ少い方です、斯樣に純粹蛋白質を澤山に含んで居りますから、濃厚で消化し易い營養品であります、其上多量の灰分を含有して居りますから、產兒の筋骨を構成するに必要な成分を供給するに適當して居ます、又初乳は下痢の効がありますから、之に因つて母體内に受けて營養品の殘滓を排掃して、產兒の胃腸を清潔ならしめ、從つて消化器を健全にする特効があります、世人往々誤想して初乳を有害のものとなして、分娩の當初は之を產兒に飮ませずして、他の藥汁を與へますのは、誤れるの甚だしきものですから、產母の健康の許す限り、初乳を飮ましむることが必要です、



家庭理科

燐寸の話、銹の話、

山下謙堂

前に述べた酸化の例は、強い熱を加へると云ふ一つの媒介をして化合させるのでありますが、化合の媒介は必しも熱を與へると限らず、電氣を通じたり、或は光に逢はせても、化合の媒介となるのがあります、水素と酸素の混合物に電氣を通じますと、火を附けたと同樣爆發して化合します、又水素と鹽素との混合物を硝子器に容れ、之を日光に逢はせますと忽ち爆發して化合します、化合の媒介も斯樣に元素によりてそれ〲違ひますし、同じ熱の媒介にしても其の熱の強い弱いに大差違ひがあります、燐寸の尖の藥は、其の小箱の外に塗つてある藥の處を、一寸擦り合はす時に起る位の輕い熱で忽ち燃え出すのであります、それから水素と燐素と化合した燐化水素といふ瓦斯は、空氣中通常の温度で燃えます、此等が極く僅の媒介で化合する例であります、

此處で燐寸の事を少し述べませう、燐寸には、黃燐製のと赤燐製のとがありますが、黃燐製の方は、餘り發火し易い爲に危險にもあり、且毒性があるゆゑ餘り使ひませぬから其方は略して、通常多く使ふ赤燐製の方について御話します、

燐寸の藥料の本となるものは燐でありまして、此の燐に黃燐と赤燐とがありますが、其赤燐は本と黃燐から製したもの故、本を云へば黃燐であります、黃燐とは、赤燐と區別する爲に其の色が黃であるから名づけたので、元素としての名は燐といひまして、護謨の片の如き柔軟な物で非常に酸化し易いものでありますから、空中に置きますと通常の温度で酸化し、初めは白い烟を出して居ますが、少時する内に燃え出します、若し空氣中指でゞも摘むと、指の温度の爲忽ち燃え出して大火傷をします、それ故之を貯へるには、水中に入れ置き、之を切るにも水の中でします、此の燐には強い毒性がありまして、人間

其他動物が若し誤つて少しでも之を飲みますと、忽ち倒れるといふ恐ろしい物であります、

右は黄燐の話しでありますが、赤燐は黄燐を熱して製した物でありながら、不思議にも性質が全く變りて、少しも毒性がないのみか、火を發する事も黄燐の様に容易でありませぬから、危險でありませぬ、其の色が赤いゆえ赤燐といふのであります、

さて燐寸は如何にして作られてあるかと云ひますと其の軸木の尖には、鹽酸加里と硫黄（又は硫化アンチモニー）を混合した物を附け、それから其の小箱の外面に赤燐と過酸化マンガンと細い砂の混合したのを塗つてあるだけであります、そこで此の燐寸の尖を小箱の外面にて摩る時は、少しの赤燐が尖に附き、此の摩り合ふ時に起る熱の爲に發火して化合を始め、硫黄や鹽酸加里の混合物が急に燃え出して、燐寸の軸木に燃え附くのであります、此の燐寸の發明も、畢竟燐の容易に化合して燃える性質を利用したのであります、之を往時燧石を金にて打ちて出る火花を火口に附かせ、之を附木に燃え附かせた時代の事に比べて見ると、如何程の便利か量られませぬ此れも全く昭代文明の御蔭であります、

次に唯今申した燐化水素の事を序に申ませう、燐は燐酸石灰となりて、人間其他動物の骨に多く含まれてあり、又種々の化合物となりて腦髓、神經、筋肉等にも含まれて居る物で、其の死體が腐敗すると、自然に分離し、水素と化合して燐化水素となるのでありますから、兎角墓場抔で地の隙から出る事があります、それが空氣中の酸素に逢ふと忽ち酸化して、ポロ〳〵ッと燃えます、俗に墓火とか、幽靈火とか云ふて恐れるのは是であります、又暗夜硝子戸棚に入れある魚肉抔が、青白く光りて、氣味惡るく見るのも皆燐の光であります、

右の外全く媒介なくして容易に化合する物が澤山あります、生石灰に水を注ぐと忽ち燃えるのも、石灰が水素と化合して水化石灰となるのであります、石灰を運搬する途中で、雨に逢ひて火を起す事は往々

見ることであります、家に於ても石灰の扱ひには注意せねばなりませぬ、但し斯く水を注げば火の出るのは生石灰とて新しい間の石灰で、久しく空中に在つた物は、水分と炭酸とを吸ひて化合し、炭酸石灰となり居りて危險はありませぬ、

右の通り元素に依りては、容易に化合して種々な變が起りますから、油斷して居ると、思はぬ不都合の出來る事があります、臺所で一番手近い事が、金物の錆びることであります、庖刀でも注意して使ふと、其の錆びる事即ち腐る事が餘程違ひます、凡べて鐵は、乾燥いた空氣中では變りませぬが、濕つた空氣中では錆び易いものであります、此れは鐵が空中より水分と炭酸を引いて化合し、水化鐵となり炭酸鐵となるのであります、それゆゑ鐵物は濕り氣を避け、乾燥いた處に置けば錆び難いものであります、鐵の錆は毒にならぬからまだ構ひませぬが、銅の錆は緑靑といふ有毒物でありますから、餘程注意せねといけませぬ、銅も乾燥いた空氣中では變りませぬが、濕氣中では容易に錆びて、緑靑(炭酸銅)となりますから、必能く乾かして置かねばなりませぬ、眞鍮も銅と亞鉛の合金ゆゑ銅と同樣であります、其れ故銅や眞鍮の器は、大抵其内面へ白鑞とて錫と鉛の合金を塗りて、緑靑の出來るのを防ぐ樣にしてあります、其の外面でも毒物が附いては危險でありますから、十分の注意が肝要であります、

それから軟鐵製の火斗抔の面が燒て錆となり、少しづゝ鱗の如く薄片となりて剝げ去りて遂に破れたり銅線製の餅網などが何時となく細り行きて、遂に切れるのも、畢竟不斷火に燒ける度に、空氣中の酸素と化合して離れ去るからであります、近來鐵製の鍋抔に釉をかけたのが流行しますが、此は一方からは鐵氣の防ぎとなり、一方からは酸化の防ぎになり、至極好い工夫であります、其他鐵線に亞鉛を塗つたのも、鐵葉が鐵板へ錫を塗つたのであるのも、皆酸化の防ぎに外ならぬのであります、

金物類は又鹽水、硫黃の蒸氣抔に逢ふと、殊更錆び

易い物で、庖刀鍋釜等でも鹽水が附いて居ると、暫くにして錆になるのは常に見る事であります、硫黄氣で錆びるのは温泉場等で能く見る事であります、つまり硫黄と鐵が化合すれば硫化鐵となり、釘を打つて置いても幾程もなく腐つて仕舞ひます、銀の時計が黑色になるのは硫化銀、銅の物は硫化銅となります、箱根の底の湯温泉は硫黄泉で硫氣の殊に強い爲、温泉宿で電氣呼鈴を掛けても、其の銅線が早く腐つて用を爲さぬやうになると聞きました、序に温泉場で能くある事ですが、若い婦人方が立派にお粧をして宿に着いて、早速入浴して段々顔首から身體を洗ひ、さて座敷に歸りて鏡でも取り出し、髮を梳くといふ段になりて、忽ち自分の顔や首が黑くなり居るを見て、急に騒ぎ出し、其の原因に氣が附かず大層心配する間に、宿の人に聞いて、其の白粉の鉛分が硫化した爲めなることを知り、漸つと安心するのが幾らもありますが、此も初から知つて居れば、其の積りで白粉を洗ひ落して入るとか、又若し黑くなつたとした所ろで、何も心配もしませぬ、斯樣な時は其の儘打捨て置いてかまひませぬ、數日の内に落ちて仕舞ます、

意匠料理

中島鎮子

極手輕に出來る意匠料理を二つ三つ、諸孃の膳頭にすゝめ參らす、

▽三韓征伐見立のうち

筍のせみ皮　其柔かき部分を短冊に切りたるもの
蒲　鉾　これも同じく短冊に切り、
糸三ツ葉　揃へて二寸ばかりに切り、
獨　活　これを細く斷ちて、

これを卵餡かけとなして、山椒の新芽又は山葵をかけて食すれば、其味最も美なり、

その意味は、筍と卵との黄色を虎に見立て、蒲鉾と三ツ葉にて十文字形の鎗をきかして、獨活を獨活と

して、清正の活動を賞讃せる趣なり、

▽二十四孝のうち、

筍　これを程よく切り、

卵　黄味を去り、白みのまゝを裏漉にかけ雪の如くにして筍の上にかけ、旨き清汁をかけ、山葵をつけて出す、

▽墨田の春

鳥貝　これを程よく煮て

櫻海老　是も同じく煮て椀中に入れ

もやし又は糸三ッ葉を入れ、清汁となす

その意は、鳥貝を都鳥に見立て、櫻海老を花に擬らへ、三ッ葉を河中の蘆にきかしたる也、

◎筍のせみ皮に貝の柱　筍を短冊に切りて酢にひたし、貝の柱を入れて食すれば妙なり、

その外異りたる酢のものなれば

辨當料理二つ三つ

◎小慈姑に小田原燒竹輪　この二品を旨煮にす

◎獨活に燒しんじよ　これも二品を旨煮に、

◎筍に小田原燒竹輪　この二品を同じく旨煮にしてもよし、又餡かけにするもよし、

流行のいろ〳〵

其の二三を記せば、△夏向の肩掛と手袋　猫綿の兩面ブラシに代り夏向用として顯れたる肩掛は、毛又は絹のレースなるが、是も非常の速度を以て流行しつゝあり、毛織の安直なるは、一圓四五十錢、絹織の上等なるは七八圓まであるとかや、又手套も絹レースにミットの附きたるものを、最も當世好みとすべし△前髪と髷　丸髷と云はず島田と云はず總じて前髪と髷とを出すこと大方の流行なり中には此長き髷の上部に束髪用の髷止めしたるもあり△袴と短胴服　ヅボンは追々細くなりて、近來公使館附外國武官の如きは、殆ど我股引と擇ぶ處なき程のものを穿てり、一般の新形も四吋幾許と云ふ寸法の由なれば、袖口と大差なきなり、又是からのチヨツキは、相變らずリンネルならんが先頃三越の流行研究會に於て案出されたる革製のものは、値段の割合に見榮えなきより、未だ流行の域に達せず



奇特なることゞも

英國婦人の受賞

英國人ミニ、ハンナ、リデル孃は、明治三十三年本邦に渡來し、慈善事業に盡力したるの廉を以て、今回賞勳局より左の如く藍綬褒賞を賜りたり、

夙に慈善事業に志厚く、明治三十三年英國傳道會社の囑を受け、本邦に渡來し、偶々熊本市本妙寺に遊び、路傍に乞丐せる癩病患者多數あるを見て、愀然として惻隱の心を起し、遂に之れが救濟を企圖し、爾來百難を排し、資金を募り、經營數歳終に熊本回春病院を創め、尋て會社の囑托を辭し、專ら力を維持擴張に竭し、已に其の患者を收容するもの八十六名、財を費すこと五萬餘圓、又出張所を設け旅療せしもの前後四百餘人の多きに及ぶ、其成績著明なりとす、仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒賞を贈與し其の善行を表彰す

乃木夫人と麻布小學

乃木大將は先頃麻布小學校へ金三百圓を寄附したりしが尚ほ聞くに、去二十日の正午頃乃木夫人が大將の名刺を出して、同校長に面會を求め、横二寸竪三寸位の紙包みに、兩令息の受持教員たりし人々の姓名を記したるを取出して「是は子供等が寫眞なり、一々教員方の御目に掛りて、御禮を述ぶる筈なれど、略儀ながら紀念にとて、御手許より配贈せられたし」と賴み、尚ほ兩令息通學當時の小使を尋ねたれば、今は當校に居らざる由を答へたるに、御手許にて判る事なら、其生死及び所在を確められたしと依賴したる後、更に水引の結び目正しき一封を取出して「是は唯子供等が御厄介になりし印にまで、御當校にお納め下されたし」との事に、既記の如く「兎も角お預り申上げ、何れ改めて何分の御挨拶致すべし」と告げ、夫人を校門まで見送りたるに「御面倒なれど、當時の小使殿の安否住所を確められたく、呉々もお願ひ申し置くなり」と繰返し最と懷かし氣に校舍の硝子窓を見返りつゝ、坐ろに懷舊の情に堪へざるものゝ如く、供をも連れずイソ〳〵と自邸指して歸り去りたれば、校長は其心根をこそと察して、後姿を見送りつゝ不覺の涙に咽びたりと云ふ、

忠魂菩提塔の建設

日露戰役に名譽の戰死を遂げたる勇士並びに病沒者の遺骨は、各師團又は旅團に於て各遺族に送りつゝありしが中には引取人なき遺骨等も多くあるより、各師團に於ては各區に於ける戰時婦人會に託りたるを以て、同會にては種々協議の末、彌よ芝公園增上寺内に一大忠魂菩提塔なるものを建設する事に決し芝區戰時婦人會長男爵千家夫人より各會員に趣意書を送れりと



春の光

（上）

江戸靜川

午前九時二十五分銚子發の上り列車は、華奢かなる都の人、質朴なる田舍の人を滿載して、青毛氈に黄色な花紋を散らしたやうな、詠め美しき田野の間を縫うて走る、麗朗な景色は是れにも盡きず、見渡せば彼方の丘の上には殘んの櫻の花白く、此方の茅屋の軒には桃の花紅ゐに、晴れたる空を翔け行く鳥の影、平和の天使こゝに來りて遊べるかとも見ゆ。

『今ン日はハア誠に結構なお天氣で。』

卷手拭に足袋跣足の、四十女は隣りに腰掛けたる村會議員らしいチョビ髭の男に話しかけた。

『さうだの、結構な天氣で――、時に結構なで思ひ出したが、沙河の戰爭で死んだちう噂のあつた作右衞門の忰、何ンとか云つたけ、オそれ〳〵、幸太は無事で凱旋したちうでねえか、眞の事か。』

『眞の事どころか、お前樣ピン〳〵して歸つて來ましたゞよ。』

『さうか、夫りや何んより結構なこンだ。』

『夫れも是れも皆ンなお前様嫁御の丹精だね、嫁御の信心が届いたんだし。』

『フー、夫りやまた何う云ふ譯だか、聞きてえもんだ。』

『何う云ふ譯ッてお前様、其の沙河とか大佛とかの大戰えのあつた後、何んちう便りも無えので嫁御が可愛さうだつたよ。』

『フー、心配したべえ、ありや旭町の久作どんの娘だッけの。』

『さうさ、町育ちだで浮氣だッぺえなんて嫁た當座は村中で噂をしたもんでしたがの、何うして豪え貞女での、お前様。』

『何ン歳になる。』

『嫁入ッて來た時が十七で、今年や二十一になるだ、まだ盛りだね、夫れでも御亭が不在だちうので、辛太どんが歸つて來るまでは、紅いもんたら襷一ッだつて掛けやしない、見上げたもんだし。』

『出征軍人の妻たるべきものは其れ位えの心掛けがなくちやなんねえ、何ンでもナア亭主の苦勞を知ンねえやうな嬶アなら持たねえ方が宜えだ。』

『まだお前様それぱかりぢやない、御亭が軍さに出て行く時己が十九の厄年だで、御亭の身體に若しも災難があつちやなんねえてんで、猿田神社へ日參したゞ、雨が降らうが、風が吹かうが、鴉の鳴かぬ日はあつても、アノ嫁御の日參の缺げた日はなかつたよ、私は初めてあんねえな貞女を見ました哩。』と眼を芝叩く。

『さうか、そいッは豪え、感心だ、何ンせ猿田神社て云や、日本一の武術の神様鹿島香取の兩大神が東夷を御征伐なされた時の道案內、道案內て云や可笑いが、其の今で云や斥候見たいなお役目を被爲つた神樣

だで、屹度武運長久、幸太君を守護つて被下つたに違ひねえ。』

『さうかの、夫れぢや猶更ら嫁御の一心が通つたに無理はねえな。』

『通るともよ、學校の兒童どもが能く唱つてるではねえか、石に矢の立つためしあり――ツて、一心ほど恐しいものはねえ。』

『談話の間に汽車は飯岡、旭町を過ぎて、砂白く、松青き干潟に着いた。

『ぢやア此所で別れるだ、俺はこゝにちよッくら用事があるだで……。』

『降りるンかの、また歸りに一所になりやすべえ、私は横芝に降りやすが用がなしか、有りやすなら次手に何所さなりと寄つて來べいが……。』

『別に用ッちやねえが、ひよッと途中で喜藏の野郎に出會すやうなことがあ



つたら、過般の嫁の口は何うするだちうて、野郎の胸さ篤ッくりと聞いて念押して來てくらッせえ。』

『吾作どんの娘ッ子の縁談か。』

『さうよ。』

『屹度告げるべえ。』

『賴んだぞ。』

悠々として禿頭赭顔の村會議員がプラットホームに降り立つて、眼の前の大時計の針を敬々しく視上ぐる間に、車掌が合圖の笛長閑に響いて、汽車は動ぎ始めた。

停車場を出ると間もなく繪に描いたやうな小松原を左右の窓近く眺めて駛る、見ると幾千本となく立ち列らんだ松は品を作つた女のやうに、矗乎としたのも中には無いではないが、多くはくの字形に何に嬉しきか、何に羞恥む



かの態おもしろく、夫が汽車の駛るにつれてクル〳〵廻轉する狀、恰度丈の高い西洋婦人の舞踏を見るやうである。

（下）

汽車の八日市場に着いた時、最前から談話對者を失つて、淋しさうな顔をして窓に凭れかゝつて居た、彼の四十女の目を驚かすものが乗込むだ、否なこの女のみではない、總ての乗客の視線は電力で惹引けるかのやうに、等しく其方に向つて注がれたのである。

夫れは卑賤しからざる服裝をした二三の婦人に送られて、この三等室に乗込むで來た、十六、十七、十八と一齢づゝ違ひ位ゐの三人の女學生である、何れも愛らしい花の盛り、品のいゝ廂髪に蝶來つて戯れるかと疑はるゝリボン美しく、襞の正しい海老茶の袴に踵の高い靴、振りの袂に燃え立つやうな襦袢の袖、携へた蝙蝠傘と信玄袋を網棚に上ぐる時、夫れがヒラリと飜へる、繪で見るやうな美しさである。

『夫れでは身體を大切にね。』は窓の外

『お母さんも御健全に。』は窓の内

別れの言葉のまだ終らぬうちに、汽車は長い其の八日市場の町裏を、目前に見つゝ進むのである。

三ッの頭顱は窓より外に、刻一刻小さく見え行くプラットホームの人を懐し氣に顧りつゝ、紅、白、青のハンケチを、微吹く風に打ち振れば、乗客は魔の怪に壓はれたやうに、無言でぢッと夫れを眺めて居る、四十女は殊更らに——。

プラットホームの人もモウ見えなくなつた、三人は同じやうに窓から首を引ッ込めて、行儀正しく腰掛に腰を卸し、互いに顔を見合はせて、一人が笑めば、また一人、終には三人一同にハンケチを、其の花蕾

のやうな唇頭にあて丶微笑めば、一同の乘客も其れに釣り込まれて嫣然とする、正午に近い太陽の光線は正面に硝子窓を透して此の平和なる一室を照らして居る。

『姉さん、貴女屹度送つて頂戴よ。』

『何んでしたか、姉さんはモウ忘れちやッたの。』

『アラ、姉さんモウ忘れちやッたの、ホラ、昨晩賴んだもの。』

『靜子さんのお賴みは餘まり數が多いから、姉さんなんか記臆が出來ないわ。』

『アラ、あんなことを被仰つて、御本と夫れから造花の見本だけだわ。』

『ア丶夫れなの。』

『夫れですよ、彼れは千葉なんかでは買はうたッて無いのですから、ねえ姉さん、忘れては不可ないことよ。』と姉の手を確と握つて

『大丈夫よ、モウ忘れるもんですか、東京へ著けば直ぐにでも送つて進げてよ。』と是れはまた妹の顏を懷し氣に

『眞個に……。』

『嘘だッたら何うします。』

『何うしてッて厭やだ、姉さんは彼ンなことばッかり、憔すンだもの、酷いわ。』

軈て滊車は横芝に著いた、彼の驚ける四十女は、此の三人の少女の傍を離るゝを厭ふものゝ如く、殘り惜し氣に降りて行つた。

談話に盡きたる三人は、汽車の進行を始むると同時に、淸く澄める聲張り上げて、何某の大家の作にかゝる『春の光』を合唱するのである。

野には花、空には鳥の聲して。

黑薔薇

松田竹嶼

何時の頃か知るに由なきも、往昔或る國に一人の王ありけり、一身に榮華を萃めし王の貴殿なれば、如何でか美々しからざることのあるべき、五層六層の高樓は、眼の前に蜃氣樓を見る如く、宏壯華麗いふばかりなく階、天井、柱など、絶代の豪奢を盡して金銀を鏤めたるは、見るに燦として眼眩むなり。何は廣濶なる庭苑には數多く花壇を設け、世にあらん限りの花を集めたれば、四季ともに花を斷たず、常に錦繡紅羅を織り成せり、そが中に一株の黑薔薇ありけるが、何の時何人の植えたるか定かならず、又如何にして種子のこぼれたるか知らざれど、年々に繁殖して今は幾萬の黑き花を開きて、園中の花卉多けれど其美は是に優るべきもの一本もなし、去れど此黑薔薇は、誰れいふとなく不思議なる恐ろしき魔力を有するとの噂ありて、障るものは愚か、其傍に近寄るものさへなし、何故に恁く恐るゝかといへば、若し此花を手折らんには、其人は忽ち人たる姿體を變じて虫類と化し、如何なる手段を以てするも、再び人の位置に還へるを得ざるなり、或る時剛慢なる一役人ありて云ふやう、恐ろしき魔力を有すとは云へ多寡が植物なり、如何でさる幻術のあるべき、吾れ一花を摘みて衆人の惑ひを解かんと、人のとゞむるをも聞かで花の一本を摘み取りけるに、こは如何に、見る間に其役人は姿體やらしき蛇に變じたりき、又或る時宮女の一人が

去る恐ろしき花とは夢にも知らず、其美しさに見惚れて、何氣なく一本を手折たるに、これも忽ち見るも恐ろしき毛虫と變じたりき。恁くも不思議なる魔力を有する黑薔薇は、花は咲けども其美を語る者なく、只魔物として王の庭苑に名高かりき。

王は最も温厚篤實の人なるも、王妃はこれに反して剛頑執拗然かも不遜の性なりき。されど其容貌の美は、花も耻づべく、月も曇るべければ、世には妾ほど美しきものはあらざるべしと、常に其美を誇り給ひき。一國を主宰する王は、國中何とて其頤使に從はざるものなければ、此執拗不遜なる妃に對しても一言能く壓抑すべきこそ至當なれど、善良なる性は能くこれを壓する勇氣なく、寧ろ妃の怒に觸れざらんことをのみ一意とし給へば、多くの臣下宮女も又妃に對しては、常に岌々乎として危惧の念を抱かざるものなかりき。妃が一度怒り給へば、宛ながら惡鬼羅刹の如く、恐ろしさ譬ふるにものなく、然かも臣下宮女に罰を加へらるゝことの嚴なれば、一同は常に黑薔薇と王妃を懼れて、一日も安き心はあらざりけり。

或る時王と妃とは、隣國の王を饗應すべく招待せんと思ひ給ひき。妃は此時こそ他に類例なき贅澤を盡して、他の國王が夢にも見る能はざる盛宴を開かんとて、力の及ばん限り美しきものゝみを集めて來賓を驚さんと思ひ、先づ食堂に於ては前例なき粧飾を施さんと意匠を凝らされし。妃が執拗なるは毫も人の説を採用し給ふことなく、何事も自から手を着け給はざるなく、先づ料理部屋を、あらゆる珍寶珠玉を以て手づから粧飾し給ひき。而して最後に食卓を飾らんとて、花室より最とも珍らしく美しき花を蒐めんとし給ひしに、思はざりき茲に不時の珍事こそ起りけり、そは外ならず、温室に於て切らんと憶ひ給ひし花は、園丁の不注意なりし爲、不幸にも害虫の爲に葩を喰ひ散らされき。妃の激怒は如何ばかり、終日狂女の如く哮り狂ひて、臣下を罵り、宮女を叱咤さるゝも、王は知らざる眞似して、只其怒りの靜まるを待ち給ふのみ。

又官人宮女等も今は慰めん言葉もなくて、總て手を束ねて怒の解け給ふの時を待つのみなりしに、妃は何か思當り給ひしことのありけん、宮女等を御部屋に招きての給ふやう、妾は好きことを思ひ浮びたりと、宮女等は妃の怒り稍々薄らぎたるを見て、皆心の中に喜びつゝ、して如何なる好きことを思ひ浮び給ひしかと異口同音に申上ぐれば、更に妃のの給ふ樣、此度隣國の王を招待するに、最とも美に、最とも珍らしき花もて食卓を飾り、此後何人も再び擬し能はざる粧飾をなさんと思ひしに、圖らざりき園丁の不注意により大切なる花を失ひたれば、他に食卓を飾るべき花なくては叶はじ、去れば園中にある彼の黒薔薇は世にも稀なる珍花なれば、彼の花を切りて玉壺に挿まんと思ふ、イザ園丁に命じて彼の花を切り來らしめよと、これを聞きたる宮女の總ては、顏色土の如く變じて、互に眼と眼を見合せて頓に答ふる者もなきに、妃は遲緩し氣に急せりて、早や〱園丁に切り來らしめよ、妾が命を用ゐざれば、後庭に養ひつゝある猛虎の檻中に汝等を投じて喰はしむべしと、睨めつけられたる恐ろしさに、宮女の一人は急ぎて園丁を伴ひ來りけり、妃は園丁に向ひて、汝が不注意は食卓を飾るべき花なきに至らしめ、今は他に用ゆべき相應の花なければ、彼の黒薔薇を以て飾らんと思ふ、早や〱彼の花を切りて來るべしとの給ふに、園丁は階下に跪きて惧れ慄きつゝ云ふやう、他の御命令なれば決して違背し奉らざるも、彼の黒薔薇を切ることのみは御許し給はれかし、妃殿下も知ろし召す如く、彼の花は世にも恐ろしき魔力を有するものにて、手折るは愚か手にだも觸れなば、立ちどころに臣が生命は終るべし、花を切れとの給ふは、これ臣に死を賜ふに同じ、何卒妃殿下には格別の仁慈を垂れ給ひて御許し給はれかし、然かも食卓を飾り給ふ花の失せたるは全然臣が罪にあらず、一夜密に害虫の來りて葩を喰ひたるにて、全く罪は虫にあるを、臣が生命を絕ち給ふは、餘りに慘刻にはおはさずや、何卒これのみ平に御許しをと、涙を潸然と流して歎願しけるに、妃は

嘲笑を以ての給ふやう、實に汝ほど世に卑怯なる男の子はあらじ、汝が花を切ること能はずとあれば、汝が如き卑屈漢には最早賴むまじ、されど能く聞けよ、妾が有する庭園に、如何でさる恐ろしき花のあるべき、妾の命令に依りて切り取らるゝ花は、冥加なり、名譽なり、如何でか魔力などあるべき、假令ありしとて妾が折れよといふに、如何で魔力を逞うするを得べき、妾が權力の前には花の魔方も鈍るべし、否な花の魔力なかるべし、妾は妾自から手折るべきにと、常には美しき眼も、今は血走りて四邊を睨み給ひし眼光は、稻妻の如く鋭く走るに、宮女も園丁も、石像の如く立ちすくみて、言句を發するもの一人としてなかりき。妃は一座の者が悍れ慄くのみ、吾れ切りて奉らんといふ者一人もあらざれば、忿怒益々激しく、新月の如き眉を逆立て、更に言葉を改め、恁く宮女多く侍るに、一人として妾が命を聞く者なきは、妾より黑薔薇が恐ろしきか、さても腑甲斐なきものゝみかな、此國を支配なし居る妾よりは、只雨露の惠みに、漸く生命を繫ぎゐる無言の花を恐ろしと思ふなるか、妾は自ら花を折るべし、されど妾が身に、花の魔力を逞しうする能はざりし時は、汝等は其まゝにはなし置かざるべく、如何なる嚴罰を受くるかは今より覺悟なし置くこそ好からめと言ひ終らるゝや、ツカ／＼と花園指して足を運び給ふに、宮女は諫め奉んとは思ひしも、日頃の御氣質にては何條思ひとまり給ふべき、今は御心のまゝに任せんより外なしと、妃の跡に從ひ往きつゝ、猶も互に私語するやう、今日迄長き年月を仕へ奉りしも、恁くまで恐ろしき妃殿下とは思はざりき、花の如き美しき御容貌に似氣なく、御胸の内には惡鬼棲むか、毒蛇蟠るか、世にも恐ろしき彼の黑薔薇を手づから折り給はんとは、其惡鬼の導く業か、其毒蛇の誘ふ業かと、怪しみ恐れて從ひ往くに、妃の憤怒の前には恐るゝものなく、百花繚亂の花園幾つか過ぎ給ふ、怒れる歩みに、綾羅の裾長く引かれたるは、恰も毒蝶の狂ふにも似たるか。

妃は程なく、彼の黒薔薇に近より給ひしが、此時黒薔薇は、黒絨の如き光りを放ち、香氣馥郁として魔力ありとは見えず、妃は花の傍に佇み宮女を顧ての給ふやう、卑怯なる汝等は妾が爲すことを見よ、一國を主宰する國王の妃の威力を見よと、黒薔薇の多く咲けるが中に、一層大きくて艶なる一輪に、やをら右の手をかけて折らんとし給ふに、枝は容易に折れんともせず、遅緩かし氣に左の手をも添へて尚ほも折らんとし給ひしが、此時花は昨夜の露を帶びて日光に輝く色の艶やかさ、折られんとして滿枝動けば、花ははらく〵今にも散らん風情、折るは絶世の美人、折られんとするは、類ひ稀なる黒薔薇、美人仆るゝか、花折らるゝか。

妃は珠玉を延べたらん如き腕に力を籠めて、やをら折らんと爲せり給へば、花は亂れて片々と散らんとする折しもあれ、忽ち天の一方よりおどろと響く雷の音、見る〵内に空曇り雲起りて、颯と吹き來る嵐に、可惜黒薔薇は散りて落花微塵、妃は兩手を枝にかけたるまゝ霎時空を睨んでおはせしが、再び天地を裂くばかりに雷轟き、天地晦朦只見ゆるものは嵐に翩飜たる妃の白衣のみなりき、折しも一層激しき雷鳴と共に黒雲サッと舞ひ下ると見れば、緩々として黒雲は妃を包みけり、朦々漠々、廣き花園は雲に掩れけるが、宮女は此恐ろしき天變地異に愕き、宮中に逃れて慌くと王に告げければ、王は大に驚き給ひ、そは容易ならざる大事なり、猶豫はならじと急ぎ花園に往き給へば、此時既に空は靜穩に復して、麗朗たる春の日の暖さに、蜂蝶は樂し氣に花園を飛び狂へど、王妃は何處へ往き給ひけん姿は見えず、只散りたる黒薔薇の紫色に變じたるが、地上に錦を敷きたる如く散るのみ、王始め官人宮女は、闔中隈なく妃の行衞を探りたれど、御在所の分らざるに、王は再び黒薔薇の下に來り給ひて、やよ黒薔薇よ、汝は何故に吾が最愛の妃を隱じたる、速かに妃を出だすべしとの給へど、魔力こそ有すれ如何で植物の答辭あるべき、王は妃

を思ひ給ふ情禁じ得ず、涙ながらに四邊を見給ひしが、一段堆く地上に黒薔薇の散りたるに、不途眼を注ぎ給ひ、ツと寄りて葩を掻い退け給へば、そが中より妃の冠りおはせし黄金の冠こそ顯れたり、こは訝しと冠を取上げ給へば、不思議や冠の中より紫色燦爛たる胡蝶顯れて、何處ともなく翩々と飛び去りぬ。王は最愛の妃を失ひ給ひてより、花を見、月を見そなはしても、或るは又山海の珍味を味ひ、美妙の音樂を聞き給ふも樂しからずとて、日々怏々として一室に籠居し給ひしが、群臣は斯くては國家の一大事なり、早く妃の御行衛を探り出し、王の御心を安堵しまゐらするに如かずと種々に憂慮したりき。或る日官人の一人、王の居室に伺候して、此都の桃町に一人の祈禱者ありて、これが卜筮は一として命中せざるなしと聞く、直に召されて妃殿下の御行衛を御諮問ありては如何にと申上ぐれば、王は甚く喜び給ひ直ちに其祈禱者を召されき。祈禱者といふは童顔鶴髮にして、雪を欺く頤の髭は長く腹に垂れたる仙骨高き一老翁なりしが、恐るゝ色なく王の御前に進みければ、王は禮を厚くし辭を低しの給ふやう、余が最愛の妃は、黒薔薇を折らんとして夫れより姿は失せたり、願はくば仙師の卜筮に依りて其在處を知るを得ば、余の喜び譬ふるにものなく、而して仙師の欲するところ余は應せざるなく、以て仙師の望むところのものを送り其勞を犒はんと、祈禱者答へて曰く、こは卜筮する迄もなく、愚翁は此間の出來事を能く知れり。妃は常に心惡しく在せしかば、神の怒りに觸れ蝶と化し給ひしなり。然るに此都より三千里を隔てたる地に仙樂園となん呼ぶ花園あり、此花園に一株の美人草ありけるが、此花の雫を一滴、妃の化し給ひし蝶に吸はせんには、蝶は忽ち以前の妃に復すべし。されど仙樂園は、山の嶮岨なるを幾個所となく越え、川の深さを幾筋となく渉らざれば往くこと能はず、王若し誠意妃に邂逅せんと欲し給はゝ、是等多くの艱苦を忍びて仙樂園に往き給ふに如かずといへば、仙師の言余は了知せり、して余が妃は今何處に在るやと王は問ひ給へ

ば、祈禱者は首を左右に振りつゝ、否なそれは今言ふを要せず、王が嶮山を越え、深川を渉られつゝある時、圖らずも妃の化し給ひし蝶に邂逅せらるゝことあるべし、こは夢々疑ひ給ふ可からず、申上ぐることは早これ迄なり、イザ御暇致すべし、終りに臨み申し上げたきは、吾が勢を犒はんが爲、吾が望むところのものを得さすべしとの給へど、吾れは浮世を捨てゝ老後を樂しむもの、何んぞ珍寶を望むべき。然かも王の善良なる御心は常に民を恤み給へば、吾れは君の眞心に對して妃を助けまゐらすべき方法を告げ奉りしのみと言ひ終りて宮殿を辭し去りぬ。

王は其翌日、供奉の者さへ連れず、只一人漂然として王宮を出で給ひて、仙樂園の方向と覺しき方を辿りつゝ往き給ふこと數日なりしが、今までは善盡し美盡したる宮殿の内に、三千の佳麗に傅かれ、座するに温かき蓐あり、出るに駟馬の引ける玉輦ありて、天下意の如くならざるなかりしに、今は馴れぬ長途の旅に面痩せ給ひ、然かも野に草を蓐とし、山に樹木を家根とし、一夜を明かさせ給ふ艱苦は實に憐れなる御境遇なりけり。

往き給ふ程に、彼の祈禱者が言ひし如く、峰聳え、人跡とても稀なる嶮山にさしかゝり給ひしが、何れの方向こそ仙樂園なるかと暫し思案にくれ給ひし折しも彼方の山間より一人の男の子、手に赤き美しき美人草を持ちて來りけるが、王は此男の子に仙樂園の道を聞くこそ好からんと、やよ男の子よ、仙樂園へは何れの山を越えなば往き得らるゝやと聞き給へば、彼の男の子のいふ樣、此附近には見馴れぬ人と思ひしが、さては御身は仙樂園を尋ね給ふなる旅人か、して何故に仙樂園へは往かんと志し給ふかと、王曰く、吾れは仙樂園に生ずる美人草の雫を得んが爲めに、恁くも馴れぬ旅路に迷へるなりと、男の子曰く、さては仙樂園に美人草の雫を得給はん爲とな、されどこれより往き給ふに及ぶまし、何故なれば吾れは今仙樂園に

往きての歸り路なり。これ見給へ、これこそ御身が得給はんとする仙樂園の美人草なるを、然かも花の雫は花蕋に充ち滿ちたるを、イザ御身にまゐらすべしと、手にせる花を差出すに、王の喜びは如何ばかり、其厚き志は謝するに辭もなけれど、君が萬艱を侵して折角得られたる美人草を受けんは本意にあらずと云ひ給へば、男の子は呵々と打笑ひて、謙讓も程こそあれ、これより仙樂園に往き給ふには、今日まで越えられし山よりも尙ほ嶮峻なる山幾つ越え給はでならぬものを、况して夫等の山中に魔性の者棲み居りて人間に害を加ふること甚し、さる艱苦を甜め、さる危險を侵し給はで、今は容易に仙花を得られ給ふにあらずやといふ。王心の內に倩々と思はるゝ樣、實に此男の子いふ如く、此の處にて望む美人草を得ば、これより苦しき旅路を彷徨ふにも及ばじ、さらば其苦患を脫れて、男の子が持て來し美人草を受くるこそ上策なりと、去らば御身の言葉に從ひ、其美人草を受くべしと、頭顱を下げ恭しげに兩手を出し給へば、男の子は宛も嬉し氣に打ち笑ひつゝ、能くこそ吾が言葉を用ゐ給ひしぞ、イザ美人草は御身に送るべしと王の手に渡せば、不思議や王は見る〳〵內に一疋の蜂とはなられける。さては彼の男の子は魔性の者なりしかと悔み給へど今は詮なし、縱令蜂とは化したりとも、如何で志せし仙樂園に行かで置くべきやと、兩の翼を張りて飛ばんとし給へば、彼の男の子は腰なる袋を取るよと見れば、王の化せられし蜂は、忽ち袋の中に入れられたるぞ憐れなる。

王の化せられし蜂は袋に入れられしまゝ、彼の男の子の家に持ち行かれたるが、此處に大きなる蜜蜂の箱ありて、多くの蜂は晨に夕に花を探り蜜を吸ひ來ては此箱に貯ふるを以て、彼の男の子は此蜂蜜に口腹を滿しつゝあるなり。王の化せられし蜂は袋の中より出されて、此群蜂の中に入れられたるが、群蜂の中には一疋の頭領の蜂ありて、若しも群蜂が終日花に浮かるゝのみにて多くの蜜を吸ひ來らざれば、此頭領な

る蜂は鋭き劍にてしたゝかに刺すを以て、群蜂は頭領を惧れて、命維從はざるはなかりき、さる程に王の化せられし蜂も又、日ねもす山野を飛びまはりて蜜を得るに苦しみけるが、或る日草花多き山野に出でしたゝか蜜を吸ひて、花の木蔭に霎時憩ひて倩々思ふやう、吾れは一國の帝王に生れ何に不足なき身の、仙花の雫を得んとて、馴れぬ山路を歩行きし苦患さへあるに、魔性の男の子に欺かれて、今は淺ましくも蜂と化せられたるは、宿世如何なる惡業の報ひなるかと歎きつゝありしが、傍に人のある樣子に、大きなる眼を瞠りて見れば、一人の若者手に弓と矢とを持てるが立ちてあり、蜂は身動きもせず霎時彼の若者を凝視めたるが、若者は獨り言にいふやう、仙樂園は彼の蜜蜂男の子が使ふ蜂の爲に花園を荒らさること如何ばかりなるを知らず、園主は甚くこれを憂ひ、吾をして蜜蜂男の子の動靜を密偵せしめられたり、時恰も好し、四邊に窺ふ魔性の者もなければ、矢文して此地の樣を知らせんと思ふと、持てる弓に矢を番ふて、滿月の如く引き絞りて、今や放たんとするに、蜂はさても好き機會を得たるものかな、此好機を逸しては何の時か仙樂園に往くを得べきと、密に矢にとまりけるが、若者が兵と放ちし矢は、矢響きして數百里の山川を越え、彼の仙樂園と覺しき仙園の門扉へグザと計りに立ちぬ、蜂は喜びて門の内へと舞ひ入れば、實にや仙樂の花園とは此處ならん、異香を放つ珍草珍花は其數幾百萬なるを知らず、紅黄白紫咲き滿ちて滿園花ならざるはなきに、蜂は霎時恍惚としてありしが、斯くては望みも叶ふまじと、翼を張り美人草あるやと飛びまはれば、滿花の中に一株の美人草の今を盛りと咲き滿ちたるを見出したり、この花よ、この花よ、此花の爲めに余が艱苦は如何ばかりなりしぞ、イザ一滴を吸ひ試んと、花の蕋に口を當てゝしたゝか吸へば、不思議や忽ち以前の王とはなりぬ、さても有難き天の惠みと、地を敬し天を拜し、他の一輪の雫を携えたる瓶へと入れ、これより妃の蝶の行衛を探らんと彼の門より出れば、紫色燦爛たる一羽の蝶の

長途を舞ひ來りしなれば、翼破れて舞ふべき力もなくて、地上にハタ〳〵と翼打ち叩きつゝあるに、見れば此蝶こそ、妃の冠より顯れし紫色の蝶に紛れなしと、彼の雫を吸はすれば、見る〳〵内に蝶は花も羞らう王妃とこそはなりてけり、吾が妃か、妾が王かと、互に犇と抱き付き、暫し嬉し涙に咽びぬ。王は恁くてあるべきにあらざれば、妃を伴ひ急ぎて故國に還へりしが、妃はこれより王の真心に感じて前非を悔ひ、行ひの總ては慈愛と温順とを以て、民を恤み、王に傅かれ給ひしかば、上和下睦、國豐に家榮へけるとか。而して彼の黒薔薇は枯死して蹟をとゞめずなりしとか、芽出たし〳〵。

小說投稿者に告ぐ

同じ筆を動かすにしても、小說をつくるといふことは、むつかしい、面倒な仕事也、筋が面白なければならず、文が面白なければならず、何處かに取る所がなければならぬ也、本誌に小說を募集し初めてより、この號で二回、一回每にあつまるもの數百、よくも作れたもの也、よくも集まりたるもの也、さて作者の勞を思へば、あだおろそかに見てはならず、さりとてはあだおろそかに作られたる如きが多きに驚かされたり、就中文字を見たばかりにて、これが婦人の筆に成りしものかと、開いた口の塞がらぬも少なからず、せめて文字だけでも辻褄のあふやうに書いて貰ひたいもの也、字數は五六頁に收まる位より少ければよし、さればとて一頁や二頁では物になるまじ　小說の材料はいづれより取りてもよし、それをまづ作者が父兄なり長上に聞いて貰ひて、少しも顏もしかめずに濟むものに限る、齒の浮く如きものは閉口なり、

原稿は掲載の前月五日迄に受けしものにて、沒書になりしものも返稿せぬことにしたり、

懸賞小說　貳等

東京　關谷すゞ子

仁王

『離別を需めたのは、本人が申出たのでございますか

とは年頃三十位の、痩せた色の青い、鼻下に薄い髭のある男の言葉である。

『本人が何うの斯うのといふ必要はない、私は小夜子の實父で、其實父が離別を需めるのですから、何にも不思議はないじやありませぬか、

とは三十位の男に對して坐せる、年輩は六十餘りのデップリ肥ッた、赧ら顔の男の返辭である。

若い方は、名を鶴田弓雄といふて、西洋畫を以て世に知られた男で、年は若いが、油繪も、水彩畫も、巧妙の手腕を持つて居て、其作品に對しては先輩も常に感歎の舌を卷いてゐる程で、然かも世間は其作品を歡迎して、これに對しては多額の畫料を投ずるを惜しまぬが、弓雄は努めて畫筆を持たうとしない毎日々々附近の畑や、小流れの邊りを逍遙して一日を暮すが、此逍遙は別段寫生をするのではなく、野原に柔かい草でもあると、其上に横臥して、空に鳴く雲雀を見上げたり、地に咲く菫を摘みなどして、宛も小兒の遊ぶやうなことをしてゐる。其性質といへば至極暢氣な、家事などは一向に構はない、構はないのみならず、米櫃に一粒の米がなくッても、泰然として愕かない、米がない位は何んでもない、眼の前に大山が崩壞れかゝるとも、自若として何處を風が吹くかといふやうな風をしてゐる。其小事に拘泥せぬところは、如何にも美術家の本體を備へてはゐるが、餘りに小事に拘泥せぬ過ぎる、弓雄の先輩や友人は、如何にし

て鶴田は那麼に暢氣であるが、鶴田は職業たる繪畫を好まぬのではなからうかと、疑問の矢を放つ程であるが、鶴田は自から好んで畫界の人となッたので、興が來れば夜夜中であらうが突と臥床を出てパレットを手にする、夫れが出來上ると、見るものをして實景に對するやうな思ひあらしむるのである。這麼有樣であるから、鶴田の生活向きは實に苦しい、其苦しい中を襤褸も下げず遣つて往くのは、妻の小夜子の働きで、小夜子は翌朝の米にも差閊える場合は、常にあり勝ちではあるが、夫れを良人に相談したところで良人は己れには解らない、何うかして泣いてくれと、向ふ河岸の火事を見るやうに至極冷談であるから、秋の夜長もまんじりともせず、一夜槍栗算段に胸を痛めるのである、小夜子は石田金兵衛といふ金滿家の女であるが、弓雄の先輩が懇意なところから、將來畫を以て大成すべき人物といふところで媒妁を試みたが、金兵衛も鶴田弓雄の名が丹青界に錚々たると、一つは女小夜子が美術文藝家の良人を欲するといふところから、其媒妁に應じたのであつたが、深窓に人となつた小夜子は、米を炊ぐ道も充分に心得がないので、鶴田方に嫁いだ最初こそ、下婢を使ふて何に不自由なかつたが、弓雄が努めて作畫をせぬところから次第に家事は困難に陷つて來るので、藝術家は金錢以外のもので、金錢を度外視するやうでなければ不可[illegible]と理屈を付けて、父金兵衛に無心を言ふて居たが、最初の內こそ子の愛情に惹かれて、其要求に應じては居たものゝ、所謂佛の顏も三度とやらで、今は餘りに度重なつて來て、而かも性來の拜金主義は、遂に其金談に應じなくなつて、何時も弓雄の腑甲斐ないことを罵り、二の句には離緣をして貰へといふのであるから、今は小夜子は父に對しても金談を持ち込むことが出來ず、遂に家政整理の名の下に、下婢を解雇して了ひ、掃き掃除は愚か炊事までも、馴れぬ手業に遣つて退けるやうになり、然かも債鬼に向つても自から猶豫の談判を試みるなど、三年前の小夜子の面影は夢にも見ることは出來なくなつた。

家賃の滯り皆濟を家主から嚴談受けて、今日翌日と延ばした結果、今日は愈々切迫詰つて來て最早一日の猶豫を乞ふことも出來なくなり、其上に米は一粒もなく、米櫃を振り動せば五合桝のみゴト／＼音がする哀れな有樣に、弓雄の友人知己に相談しようにも、既に借盡くしてゐる今日此頃、小夜子は最早一文の融通も出來なくなつて、餘義なく良人の何うかしてくれ俺には解らぬの返辭は極り切つてはゐるが、所謂膝とも談合とやら、涙ながらに愬く／＼の始末と訴へたところが、弓雄は例に依つて何うかしてくれ主義を振りまはしたが、小夜子はいつかな動かず、那麼暢氣な言ふ場合ではない、最非とも今日は金策して戴かねばならぬと懇々と搔き口說いたので、有繫暢氣屋の弓雄も餘程感じたと見えて、では此間描いた繪の畫料を未だ貰はなかつたから、今から往つて取つて來うといふことになり、弓雄は自から出馬したが、半日程經つて弓雄は嬉ゝ嬉しさうな顏をして歸つて來た、留守に小夜子は家主から二度も三度も催促を受けたが、今主人が取りに往つて居りますからを、唯一の楯として斷つて、弓雄の歸へるのを今や遲しと待つて居たので、直ぐと飛んで出て御歸へり遊ばせと云ひつゝ弓雄を見ると、弓雄は丈一尺ばかり、古銅の仁王を、宛も大事さうに抱いてゐるので、貴方夫れは何んでございますかと聞くと、ウンこれかと云ふたばかり、其まゝ畫室に這入つて、床の上に其仁王を置いて、實に傑作だと見入ッてゐる、小夜子は氣が氣でなく、貴方畫料は如何がでございましたかと聞くと、弓雄は漸く我れに還ッたやうな風で、小夜子を顧みて、畫料はないよと平氣で居る、小夜子は只ないでは困るではございませんかと、急き込んで聞くと、弓雄は恬した顏で、實はね先方へ往ッて畫料を請求すると、直ぐと五十圓出してくれたが、歸へり道で、寄るとはなしに不途骨董屋に寄ッたところが、此仁王が店に出てゐるではないか、見ると實に傑作だ、欲しくて堪らんから價値を聞くと五十圓といふから、持ッてゐた畫料の五十圓で直ぐと買ッて來たのさ、小夜や御

覧よ、骨格の工合は、實に云ふに云はれぬ妙味を持ッてゐるではないか、何人の作か知らんと倘も仁王に見入ッてゐるので、小夜子は餘りのことに呆れて霎時言葉も出し得なかッたが、今日差迫ッてなくてはならぬ金で仁王を買ふて來るとは、餘りに無頓着過ぎると、有繫婦人の愚痴に返ッて、心の中で弓雄を怨んだが、とは云へ悠穏世事に無頓着でこそ、藝術家の藝術家たるところで、此處は愚痴を溢してゐるところではない、今一と息自分が奮發して此無頓着な良人を助けて益々世間に名を擧げさせねばならぬ、併し最早金談を申込む處もないが、何んと言はれやうが搆はぬ、今一度父に泣き付いて見やうと、直樣父の金兵衞方に往つて、實は恁く〳〵の次第だから、金を貸して下さいと泣き付いたところが、貸すどころの段ではない、父は大立腹で、愈々鶴田には愛想が盡きた、迚も將來は見込みがない、那麼者にクッ付いてゐるよりは早々離別を申込むが好いと、何うしても承知せぬ小夜子を其まゝ抑留し、金兵衞は直ぐと弓雄方に遣ッて來て、離縁を申込んだのである。

離縁の申込みには、如何に無頓着な弓雄も驚くと思ひの外、例によッて平氣な顔で

「お話は能く解りました、では御言葉に從ひ、小夜は離別致すことにいたします。

と此處に愈々弓雄は破鏡の歎を見ることになッた、弓雄は夫れから道具總てを賣つて、只繪畫の道具と、彼の仁王とを持ッたなり飄然として何處かへ旅行したらしい、近邊の者は勿論、友人知己も一人として其行先を知る者はなかッた。

○　○　○

小夜子は實家に抑留されて以來、良人を思ふ情切なるが爲に、次第に痩せ衰へて一種の氣鬱病らしくなッて來た、父金兵衞の心配は一と通りでないところが、醫師の云ふところに依れば、鎌倉邊へ轉地療養させ

たが好からうと、金兵衛は直ぐに付添人を添えて鎌倉へ小夜子を轉地させたが、醫師の見るところは有繋に違ひなく、小夜子も山碧に沙白き鎌倉の風色を見ては、次第に病氣も回復して來て、風暖き夕暮などは、濱邊を逍遥する程になッた。

同じ鎌倉の、小夜子が假寓してゐる近邊に、宏壯な別莊を構へてゐるのは子爵櫻町春房であるが、櫻町が或る夕暮濱邊を逍遥した折、圖らずも小夜子を見たが、小夜子が櫻町の亡妻に生寫し似てゐるといふので櫻町子爵は何となく小夜子を懷かしく思ふた、これも一種の戀であつたらう、子爵は人を以て小夜子の身元を調べさせたところ、小夜子の父は、小夜子が鶴田弓雄に嫁したことは秘して居ッて、相手さへ好くば、初縁として再び嫁せしめん下心であッたから、櫻町家が調べても、金滿家の令嬢で初縁だといふことであッたから、子爵家から相當の人を以て婚儀を申込んだ小夜子は決して承知しなかッたが、金兵衛は向ふは華族で、然かも一萬圓の支度金が出るといふので、嫌やだといふ小夜子を無理往生させて、遂に此婚儀は成立ッた、一年前までは豆腐屋へも質屋へも駈け込んだ貧乏の妻君が、一躍して子爵夫人と傅づかれ、出づるに馬車あるといふ榮達は小夜子は更に嬉しくは思はず、心の内では泣いてゐるが、父の金兵衛は大得意で、歩行くのを見れば何となく肩で風を切ッてゐるやうである。

習々たる惠風に都の春の賑やかさ、此櫻時を見込んで、上野公園の第五號館で西洋畫の展覧會が開かれたが、萬を以て數ふる出品畫の内に、所謂鷄群の一鶴と見えるは仁王の油繪で、筆者は誰れかといふに、嘗て行衛の知れなかッた鶴田弓雄で、代價は三千圓といふので、其代價の高さと共に、評判は都下に鳴り響き、新聞紙は近代の傑作だと褒めちぎるが、誰れとて三千圓を擲つて、此名畫を吾が物に爲ようとする者はなかッたが、或る貴顯の夫人が入場して、三千圓をもの丶見事に擲つて此名畫の賣約をした。鶴田弓

雄の名は益々世間に知れ渡つて、詩界の名譽を一人背負ひにしたが、偖此夫人の乘つた馬車の歸るの見れば、麹町區永田町の櫻町子爵家であッたさうである。

懸賞小說　選外　秀逸貳篇

夢

長野　福澤咲子

上

丁度去年の五月の初めであつた、春のやはらかな日が、一日中うらゝかに輝りかゞやいて、西の山際に金色の雲と遊び戯れつゝ、かすかに笑みを洩らして居つた、今迄庭に樂しげに遊びまはつて居た小鳥は、軒端に來りて、しきりに夕餉に餘念がない、

カア／＼と鳴きつゝ五六羽の烏が、彼方の森をさして飛び行きたる時は美はしい太陽が山にかくれた後であつた、そして美はしい夕榮は、杉の木ドをあかるく處女の顏をさつとあからめた、

少女は少しく頭をさげ、西方をすかしながめつ、又うつむきて青々とした芝草ふみしめつゝ、彼方の瀧——瀧と云ふても百尺も二百尺もある瀧ではない、ほんの築庭にある六尺ばかりの瀧——の方へ行つた、そして綠の如きふさ／＼した髮を瀧にうたせ、身振ひしつゝかたへなる大きな石に腰うちかけて、一人泉水の面をうち眺めて溜息をつき、つきては、空を眺めぬ、

枝もたわゝの智慧の實を味ひそめし昨日今日の彼女の胸の中、如何なる憂き事や宿るらむ、

誰か彼女の煩悶を知り得べき、

瀧の音は小さき胸に美妙なる音樂の如く響きぬ、恰も天津乙女のしらべさせ給ふ琴の音、それの如く、又或る時は森にさへづる瑠璃の歌かと疑はれ、ある時は玻璃盤上金鈴を轉ずるかと欺はれぬ、

されど天女は立ち去り給ひしにや、美はしき音色は次第にうすらぎぬ、はては狂蝶の花にたはむれ、花瓣の落つる音の如く、遂に蟲の葉に颯ぐ夕風の如く、次第に遠くなり行きて、彼女の耳を散れぬ、

彼は怪しみぬ、

美妙なる音樂は遠音に響く一彈の音と化しぬ、

乍ち彼女の目には、騎兵の一隊映じぬ、つゞいて見ゆる歩兵砲兵、乍ち見えて、忽ち失せぬ、

怪みはまさりぬ、まさりまさりて恐怖の念は小さき胸に滿ち滿ちぬ、暗黑なる空には長蛇の炯々たる雙眼の如き明星二つあるのみ、忽ち見ゆ一つの電光、忽ち聞ゆ一大爆聲、
見よ見よ彼女の胸中、今は悽然――今は怪訝――今は恐怖――今はつゞいてひゞく爆聲、閧聲、銃聲、
渾沌たる夜色は大砲小銃の彈光を以て明らかになり、彼女の前面は一大戰場となれり、
燦たる勳章は彼が胸にきらめき、夏猶寒き三尺の秋水は右手に握られ、眼光炯々たる一士官は乍ら彼女の前に現はれぬ、
士官は岩上に立ち、きつと前面を眺め、大喝一聲……傳騎全隊にむかひて突擊を命ぜよ、
傳騎はかけ去りぬ、
折しもヒユー〳〵と音を立て、空を切り、火花を散らし飛び來れる一砲彈は、すはや士官の立ちたる岩に中命……
アレー父樣、
おゝ夢、夢であつたか、
あゝ恐ろしい、あゝこはい、ほんとに夢であらふか、
彼女の疑ふは宜なり、彼は不知して眠りたるなり、
あゝ夢でよかつた、それにしても氣にかゝるのは父樣、父樣は今頃何ふして居られるだらふか、
四日の月は今しも西の山に沒せんとして、杉の木の間よりもれくる影かすかに波にうつりて、さながら金襴の如し、
萬籟寂として瀧の音のみすがすがし、

下

こゝは日あたりのよい泉水のかたはら、二間四方の離亭、南の障子をあけはなち、庭の白藤の咲き初めたるをあどけなく眺め居る二人、
アノ母樣、昨日より今日は大變開きましたれ、
年の頃十五六の色の靑白い、さりながらどことなく愛嬌おりけの娘、束髮頭しかとゆひ、白、楓のやうな手を母の膝にのせて靜かに母にむかひて話しかけぬ、
ソウ大變開きましたれ、もー兩三日で滿開となりませう、
と三十五六の色の白い中丈の婦人は答へぬ、
其音調と云ひ、其身振りと云ひ、他の田舍婦人と異なりて見えぬ、
娘は何やらむ云ひたげに、身體をもがきながら、やう〳〵口を開きて母に問ひかけぬ、
母樣アノ夢と云ふ物は惡るいがよくつて、善いのが惡るいつてそう、
母の面ぶせは少し翳りぬ、
御前はいつも突飛な事を問ひますのれ、夢なんかよいつて惡るいつて、何でもありませんよ、
でも母樣、妾し大變惡るい夢を見てよ、
どんな夢を見ました、御話し、大變惡るいつて、
あの………、
娘は言はうとして、母をかへり見て、口をつむぎうつむきぬ、
どんな夢だの、早く御話し、

母にせめられて、彼女は口を開きぬ、
あの父様の………又口ごもりぬ、
父様の――そしてどんな夢
母の顔色は――變りぬ、
父様の戦死………。
娘は情迫りて後を語り得ざりき、而して哭しぬ。
御父様が戦死……君……君子……ほんとに……妾も昨晩……。
目は涙にて閉ざされ、聲はたえぬ、
嗚呼此涙！いかに貴きこの涙!!!
折しも二三羽の五十雀は、藤のたなに來りぬ、
暫くして母は語をつなぎ、
君子御前はいつ御覧なの、オイ君子、
娘は泣きたほれしまい、
はいあの昨日……夕方あまり頭痛がして困りましたから、ぶらぶらと庭へ出て、庭の瀧で頭を冷しました處、大變氣分がよくなりましたから、あの大きな石に腰かけて、近邊の景色をみて居る間に不知々々眠りました、そしてあの恐い大きな夢を見て居ると、父様が、
又話しはとぎれぬ、やうやうにして語りつぎぬ、
父様が御出でになりましてね、父様は大變御立腹の御様子で、みなに突貫せよつて、命令なさいました、すると憎い憎い大きな鐵砲彈は……、
と君子は又も哭して終りまで語り得ざりき、母の心中を察してか、己の情にせまられてか、
あゝ父様も戦死、屹度戦死に違ひない、私の……
後を言はんとして急にやめぬ、
いや戦死なんぞなさるものではない、惡るい夢は善いと昔から云ふて居る、屹度父様は御手柄をなされたに違ひがないよ、君泣くではない、そんなに御前が心配すると、かへつて御前の病氣がいつまでたても癒りませんで、親不孝になりますよ、
と母は吾が昨晩見たる夢と、君子の見たる夢と一致したるにいたく氣をうたれしが、吾が子に心配させじと、乍ち夢てふものゝ信ずべからざるを説きて、己が愛孃君子の病氣に差し支へなきようにつとめたり、
でもあの私、どーしても父様が氣にかゝつてなりませんわ、
なに父様は屹度偉大御手功をして、露奴を打ち破り、そして來年の今頃は目出度御凱旋なされるに違ひありませんよ、あれ御覧、あの奇麗な鳥……君御覧、
藤棚のかなた籬より泉水のむかふの楓の木、もみの木を尾長鳥の飛びまはるなりき、
折しも號外屋の鈴の音、四方になり響きぬ、
「サツ日本帝國大勝利號外……
母様號外!!!

君子は陸軍少佐大村芳道の長女なりき、去年の四月薦刈る信濃國松本の里を後にして、遙々東都にのぼり、學びの門に入りしかど、不幸にして、其身は病魔の襲ふ處となり、今年四月幾日と云ふに故郷に歸り、母兼子のもとに養はれ居るなり、天性學問好の彼は、病みつゝも猶讀書に耽りぬ、或る時は如何に臆持き母上も、彼を怪まずに居られざる時もあり、彼女の小さき胸には、煩悶を以て滿たされぬ、彼の病氣の爲に彼の父の爲に、彼の病氣は彼を厭世ならしめ、彼の夢は彼の煩悶を幾層倍せしめぬ

貞操

岡田南無子

晝でさへ往來の餘り繁くない裏通り、夜は猶更寂として凍つた大地に下駄の音も遠くになつた。

「だつて兄樣。」

六疊の室に猫板の上へ洋燈を載せた長火鉢を隔てゝ兄に對してお春年よりは少し老けて居るが、眼の淸しい髮の濃い一寸目立つ容色、と云つて凝乎と洋燈の火を瞶めたが。

「勇樣の位牌に對したつて……又お姑樣だつて妾一人を賴みにしておいでなんだし、弟も姉樣々々て慕ふんです物。假令妾に子がないからつて其樣な冷たい心に成れやしませんわ。」

兄を見上げた瞳は恨と憤に燃へて、耳は熱し頰は熱る、

「お前の氣質じやそうだよ、だがさ、考へて見ても詰まらないじやないか。未二十四と云ふ若さで一生埋れて仕舞ふのは。」

苦笑した兄の彦造、或商店へ通番頭の身である。

「ねへー……そうじやないか。」「………」

「お前はそれでもいゝのかい……。」

「詰まらなくても何でもよう御座んす、妾にやそんな道に這つた事は出來ませんから……。」

憤の餘りに聲も強くなる。が兄は依然冷かな態度で。

「名譽の戰死だつて仕舞つちや、から駄目さ、」

何程情を立てたつて通じる氣遣はなし、其樣な堅い事計り云つてちや此浮世が渡られやしない。」………「まあ……兄樣……。」

兄が言葉はお春はあきれたのであつた。

夫は天晴君國のために勇ましく戰死を遂げ、妻の自分は戰死者の遺族と云はれて肩身を廣く、只此事は夫の名譽を損はぬよう、自分は如何なる事を忍んでも、夫と血を分けた事を世に成出させてと、堅く決心したので有たが、今日しも兄が呼び寄せた譯を何かと思へば、自分を賴む人々を捨てゝ由緣せよとの話、眞身の兄の今日が日迄慈く情ない人とば思はなかつたにと、不覺悲しくも成て來ていつか淚は目に宿る。

暫しは二人無言で柱時計音のみ高く、冬の夜の寂寞を破つて今しも俥ががうくと行き過ぎた。

「えゝ……おい如何したんだい……私だつて一人の事だからな……惡い事は云はない積だが……。」

促す言葉に答もせず下唇を嚙んだが、やがてはふり落つる淚を襦袢の裏で拭いて。………「兄樣……」

「何だい。」と冷かに。

少し躊躇だが決然した聲で。

「兄樣……妾の身を其樣にまで思つて下さるのは有難う御座んすが、妾我儘者ですから何卒此儘捨てゝ置いて下さい、一切構はないで下さい。妾は構つて下さらなくても眞逆に兄樣に御迷惑を掛けるやうな事はしませんから……。」

南山の役に勇ましく戰死した歩兵上等兵杉浦勇吉の妻お春は、姑義弟によく盡し貧によく鬪ひ類稀れな貞婦であると、近所界隈で婦人の模範として評判するのである。



庭園と美術

子爵　秋元興朝

現今の日本の庭園は、實に日本固有のもので、他に類を見ないのである、然し其原は支那朝鮮あたりの庭園を摸して造り、若しくは印度の庭園を想像して築いたのが、爾來時代を重ぬるに從つて今日の形狀を成すに至つたものか、又は始めから日本に特に起つて、今日までの變遷をしたものであるか、其は餘程調べて見なければ分らないが、既に足利以降の庭園が、全く日本特有の形を成して居るものである以上は、今日の庭園を日本の發明に由るものと稱しても決して誤りはなからうと思ふ、

偖此庭園が至る所に行はれて、大廈高樓のある所必ず庭園を見ると云ふやうに至つたのは、何に起因するかと云ふと、一は世間の人の言ふ如く、日本は天然に山水の美に富み、從つて美術思想が疾く發揮せられて、其結果として到る處庭園が造られ、山なき所に山を見、河なき所に流れを見ると云ふやうになつたと云ふのも無論原因であらうと思ふ、然し直接の原因は第一に交通の不便なるに歸さなければならぬ、即ち最も古き時代の人の別莊などが如何なる處にあつたかと云ふと、多くは天然の山水の下に大廈を建て、其山水を見て樂しんだものである、市街の邸宅の前に庭を造るに至つたのは其よりズット後の事のやうに思はれる、蓋し舟車の便が甚だ少かつたのみならず、一時内亂の爲に群雄割據の姿となつて敵國の間を通らなければ天然の美景に接して風光を樂むことが出來ないと云ふ事情から、追々各地に庭園を造つて自ら樂むと云ふ事が行はれて來たやうである、是が足利時代の庭園の進歩の始まりであらう

と思ふ、

又第二は德川氏の政略の爲に促されて起つたことゝ思はれる、德川氏が大名を封じやうと云ふ考から、諸侯を半年は江戸に置き、半年は國に置くと云ふやうにして、所謂參勤交代なるものを始めた、乃で諸侯は必ず半年は江戸に居ることになつたが、容易に野外に出て樂を取るなどゝ云ふ事が出來ない所から下屋敷と云ふものが江戸に於ても又國に於ても大層立派になつて、それに伴つて庭も大に發達したやうである、是等が各地に於て庭園と云ふ思想が著しく發達した所以であると思ふ、要するに庭園の進歩は交通の不便と束縛の結果と云はなければならぬ、

さて今後庭園は如何になるであらうかと云ふと、益々開明に赴くに從つて、日本の如き面積の狹い所では、著しく土地の價格の騰貴するは必然のことであるから、市中の邸宅の前などに庭園を搆へるのは極めて不經濟で、有益な高價な土地を玩具に供するのは宜しくないと云ふ趣意から、個人的庭園の歡迎されなくなる時代が遠からず來らうと思ふ、又縱しんば稀に近郊の家屋に附屬して庭を作ることがあつたにして見ても、家屋の搆造が從來のものとは大きに違つて來るに相違ないと思ふ、全然歐米の風を用ゐるにもせよ、又日本風を用ゐるにもせよ、現今のものよりはズツト建物が高くなることは疑を容れぬことであるから、其家屋に對して從來の形の庭の釣合はぬことは無論である、

さて家屋と庭園が釣合はぬとして見た時にはどうするか、詰り西洋風の庭を其儘用ゐるにあらざれば、別に新案を建てなければならぬと云ふことになる、乃で其新案と云ふことになると、自然考も色々あるであらうが、試みに自分の考を云ふて見ると、從來は西湖の景とか、松島の景とか云ふものゝ全景を縮めて小く庭に造出す考ばかりであつたが、それでは何分にも小く低くなつて、迚も高い家屋に適する譯にはいかぬ、故に今後は寧ろ一局部の假令ば日光の裏見の瀧とか、近江八景の中の石山の景とか、若し

くは想像の景にして、其通り一局部を限って現はす心持で庭を作ると、景色が大きくなるから樹木も大きなものが植ゑられて、高い家屋に相當する庭が出來やうと思ふ、

其時分になつて庭の造り方で、もう一の考ふべきことは配合の事である、此點を從來の庭園に大に缺けて居るやうに思ふ、勿論庭は主として綠色を取らなければならぬが、綠にしても幾種類もあるから、其等を光線學を標準として適當に木配りをし、又春の花にしても秋の紅葉にしても、又石などにしても、樣々な色があるから、是等も其配合の宜きを得るやうにし、又化學を樹木の培養に應用すると云ふ如きことが必要になるであらうと思ふ、コンドルと云ふ人の著はした庭の本に、日本の繪畫は寫生が少くて天然に遠く、歐羅巴の繪は主として寫生から出て天然に近い、然るに庭は丁度其反對で、歐羅巴の庭のヂョーメトリカルであるよりは日本の庭の方が餘程自然に近くなつて居る、歐羅巴でも追々天然に近い方を好む樣になりつゝあるから何れ庭の構造も一變するであらうと云ふやうなことが書いてある、是等に依つて見ても、庭としては日本の方が彼よりも優つて居るらしく思ふ、



日本の庭園の方が優つて居ると考へられる事に就て末松謙澄氏が面白い説を述べて居る、氏の説に依れば、凡ての學術技藝で言葉の多くなるのは學術技藝

の一番發達した徵である、例令ば西洋に於て法律や醫學の言葉は實に豐富であつて、日本では誠に不足である、故に飜譯をする時に當つて隨分困る事がある、是は法律や醫學が彼にあつて、著しく發達して我に於ては從來其思想に乏しかつた何よりの證據である、然るに今庭園の事になつて見ると、西洋よりも日本の方が言葉に豐富である、假令ば手水鉢とか鉢前とか垣根とか云ふやうな言葉は西洋にはなく、凡て庭園に關する言葉と言つては彼には甚だ少いのである、是が何よりも西洋の庭園に比して日本の庭園の方が優つて居ると云ふ證據である、と斯う云ふ說である、誠に一理ある說と考へるのである、

さて日本の庭園は西洋よりも優つて居るとした所で總ての點に優つて居ると云ふ譯には行くまいから、將來の庭園としては、大に改良を加へなければならぬ點があると思ふ、其改良の方法の一としては、前に云ふた家屋に應じて庭を造ることや、光線學を標準として配合を好くすると云ふやうなことも、無論其要點であらうと思はれる、そこで又從來の庭が餘り一定の模型の中に跼蹐して、人造の痕跡が明白で面白くないと云ふことに付ては、從來の法則を破つて一の新案が既に現はれて居るのである、即ち特に深山幽谷の如き形狀に造出す法である、是は故益田克德氏などは、餘程巧に考案されたやうである、

又庭に素と家屋を本として之を裝飾する庭と、庭を本とするものとがあるやうである、家屋を本とする方になると、法則と云つては語弊があるか知らぬが英語で云ふスタイルとかフォーミュラーとか云ふものがなければならぬと思ふ、なぜとならば西洋館にしても、希臘スタイルとか、レチザンスとか、クイン、アンとか云ふやうな色々なスタイルがあつて、其一定のスタイルの下に建てられるやうである、日本館にしても御所形書院とか、武家形書院とか云ふて是も一定のスタイルがあるやうである、故にさう云ふ家屋を裝飾する庭園は、矢張一定のスタイルのあつた方が宜からうと思ふ、然るに又庭を本とした

方は、如何なる好いスタイルでも、スタイルの下に造られることになると、拘束される氣味があつて、窮屈になるから、寧ろ故益田氏の案出した新式の自由なものが宜からうと思ふのである、

斯樣に庭の造方を改良するに就ては、種々な考ふべき點があるが、要するに日本の從來の庭園の形式は將來に於ては甚だ不適當にならうと思はれる、殊には不經濟と云ふ點から市中繁華の地に於て、從來の如き大なる庭園は追々歡迎されなくならうと思ふ、隨つて現に存する有名の庭でも、遂に潰ぶされなければならぬことになるであらうと思ふ、甚た惜いやうではあるが、國の發達の上からは寧ろさうなる方が望ましいので、自分なども一日も早く其日の來らんことを望む位である、然し現存の庭が無くなるのみならず、其形式まで皆無くなると云ふのは、折角是まで進步した日本固有の庭園に對して、誠に惜むべき次第であるから、切めて圖形になりとも止めて保存したいと云ふ考へで、實は取調べたものがある即ち其取調べたものと外に庭園を寫眞、繪畫、圖の三つに寫取つたものに說明を加へて、一括して書物にして置いたならば、後世に至つても日本固有の庭園の如何なるものであつたかゞ分らうと思はれる、

今我國に繪畫は大分流行して居るが庭園の方は、然程でもないやうである、是が庭園の方が金も多く要り、地所も多く要るから、好んで造るには容易でないからであらうと思ふ、然し其趣味は各々大なる特色があつて互に優劣があるやうである、之を比較して云ふて見ると、繪畫の庭園に優つた所は、畫題が山水に限られずに人物と云ふものもある、其人物も細く云へば宗敎的人物とか、肖像とか、其他幾種もある、又花鳥、動物、其外萬般の物を拉へて畫題とすることが出來るから、其畫題の廣きことは勿論、從つて意匠を施す所も多端であつて、此點に於いて庭園に優る數等であらうと思ふ、併し又庭園の例で云ふて見ると、繪畫は幾ら大きくても紙面が三間に六間位が限りであつて、それより大きい繪畫は餘り

外國にもないやうに思ふ、然るに庭園になると何萬坪と云ふ廣い場所を持つて居る、又繪畫は光線や空氣を示して、立方的に描倣す方法もあるが、詰りは平面的のものである、庭園は之に反して立方的のものであるから之に對しふ意匠を施す範圍はなかくく山水畫どころのものではない、故に新に庭園を造るのは、名人が繪畫を描くよりも、意匠の豐富なる上に於て、一層技術を現はすことが出來得るであらうと思ふ、但し庭園は山水に限られて居るから、此點は繪畫のやうに意匠を多端に逬らせることは出來ぬ斯様に繪畫と庭園とは互に優劣のあるものであるが自から其趣味に特色があるやうである、

庭の立方的なることに就て茲に一の注意を要することは、西洋では平面的の繪畫ですら、光線の採方で立方的に見えるやう描く、之に反して日本では立方的のものまで、動もすると平面的にするやうな僻がある、例令ば圓穿りの彫刻物などを見ても、實物を直に彫刻したやうには見えなくて、平面的の繪を彫刻したやうに見えるのが多い、庭も無論立方的のものであるべき筈であるのを、茶の湯の庭を除くの外舊來の庭はどうも平面的の傾きがあるやうであり、斯くの如く立方的のものを平面的にすると云ふのは總てのものを一旦東洋流の繪として腦に納めて、それから庭なり彫刻なりにレプロデウスする癖が附いて居るからであらうと思はれる、是は將來注意して矯めなくてはならぬことゝ思ふ、

繪畫に就て

跡見玉枝

世の中がだんくく進んで參りましたから、女子だから臺所の事位して居ればよいと云ふ譯には參りません、と申すと臺所を輕視するやうでありますが、決してさうではありません、臺所の事は女子の尤も大切な事でありますが、早いお話が米を炊くことをすると同時に、その米を得るといふ事も必要でありま

して、たとひ自分は養はれるに安心な地位でありましても、其安心な保證に、いざといふ時の用意の職業を覺えて置く必要があらうと思ひます、

その職業はと申しますと、いろ〳〵ありますが、女子の性格に最も適しますのは、繪畫であらうと思ひます、繪畫は女子の仕事には皆關係をもつて居りまして、刺繍の摸樣でありますとか、直接下繪其他に必要な事を除きましても、すべて形を覺える助けにはこれに上越すものはありません、

一寸旅行をしても、何處の景色は斯ういふ工合であつた、そこに咲いてゐた花はこんな花であつた、宿屋に泊つたら斯う云ふ形のめづらしい器具があつたといふ風に手帳が賑やかになつて、何時までも紀念に殘る土産が澤山出來るのであります、

それでありますから、實用の上にも、娯樂の上にも優美な趣味を持つて居ります、然るに世間ではそれをたゞ慰み物の一つとして、その癖生花でありますとか、點茶でありますとかは、少しよい家庭には用ひられて居りますが、この繪畫を稽古させるといふのは少いやうであります、

されど繪畫が女子に必要なることがだん〳〵世間に解りまして、學校の課目の中にも加へられたことでありますが、それが時間の少い故でもありませう、ほんの申譯同樣の仕事になりまして一向役に立つほどの成績が見えません、それで猶女子の學校には、たゞ居候的課目とせずして、今少し物になるやうにしたいものであります、隨つて繪畫專門の學校が女子の爲にもほしいのであります、さもない時には、少い時間の爲に、役に立つと申しますより、一寸胡麻化しのきく、素人目を相手の繪畫をつくるやうになります、それと繪畫を敎へるにも學ぶにも、今少し眞面目にして貰ひたいと思ふことが澤山ありますが、それは今云ふに忍びませぬ、花の形さへも出來ぬうちに、曲線の美でもありますまい、

飛付いて蛙つめたし木下闇

女鑑新聞

紀元二千五百六十五年　西暦一千九百四年　清暦光緒三十一年
明治三十九年五月一日火曜日　乙巳

▼投書　この新聞諸面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の長物にて女鑑の讀者には自然ロハで見らる、譯
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人紫式部　編輯人　淸少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地　株式會社國光社

論說

地方の女子

地方に住む人は、智識の度も後れ風采の美も跡野なるは、都會に住む人に一歩を讓らざるを得ず、然れども、淸き空氣を呼吸して、快濶なる原野海濱などに望む、この點、能く、衛生と體育とに益を得ること多く從ひて、活潑なる精神は、この强固なる身體にこそ宿るべきけれ、況んや惡しき風俗に染むこと無くして上れる代のさまを存せる、素朴の風、これぞ物事に單純熱心なるを致す所以にして、其風采の美も、智識の低きもまた遂に嫌ふこと無く、都會の人は、いつも、地方の人に押し出だされて、新陳交代するの歴史を繰りかへすり理なりける、然るに、頃日地方より、都に上り來る上流の婦人を見れば、大抵、都下の流行を逐ひて、髮の結ひやう、衣裝の好み、髣髴、都會婦人と紛るゝの狀をなし、否、寧ろ、其よりも、奢侈の度高きをさへ見ることあり、是果して、褒むべき事か、而して其智識と德義との如何を問へば、或ひは都下の弊風のみ移りて、美風は一つも、地方を感化すること無しとは、彼れ心ある人の歎辭にこそあれ、抑も、地方婦人の特色は、溫厚にあり、質朴に在り、着實にあり、單純に在りて、決して彼に求むる所は艶麗優雅、敏捷機智にあるにあらず、希はくば、爾來必らず、吾等に代はりて、能く優者の地位に立つべき地方の同胞姉妹よ、ゆめ、都會浮華驕奢の風に染むこと無くして、御身等が熱心と質朴と、以て、能くこの嫌ふべき狡猾と奢侈の俗を矯むるの原動力たらんことを勉められよかし、

> **女の長所**
>
> ▽外交術▽非常に慈悲深い▽男の及ばぬ術策がある▽平氣で所信に巧みで、談判等には男の及ばぬ術策がある▽平氣で所信を實行する▽聽覺が鋭敏で想像に富んで居る▽直覺も烈しいが記憶もよい、信仰の力も多い(某學者の說)



文苑

待杜鵑　東久世通禧

今宵また月ばかりをやながむらん待つ夜ふけゆく山ほとゝぎす、

初時鳥　黑田淸綱

ほとゝぎすなく初聲にあづさゆみ春のこゝろは離れけるかな、

舟中杜鵑　高崎正風

ほとゝぎす枕の上に聲すなり、磯山ちかく舟はこぐらし

渡水鷄　大口鯛二

里の子にわたりをとへば水鷄なくかはかみさして敎へけるかな、

都　小出粲

こゝろあるかぎりは茲に集ひけりみやこぞ人のにしきなりける、

雜報

清國派遣女教員

東洋婦人會の創設にかゝる同所は目下志願者募集中なるが、志願者は東京在留の女學生よりは、地方良家の子女に多く、中には父兄が態々附き添ひ來り、宿所萬端に就き依賴する者少からず、是等は取敢へず、同會は確實なる人に依賴して監督せしむることゝせり、最初理事者は、入學申込者甚だ少かるべきを憂ひしが、事實は之に反し豫定外に超過したりと、

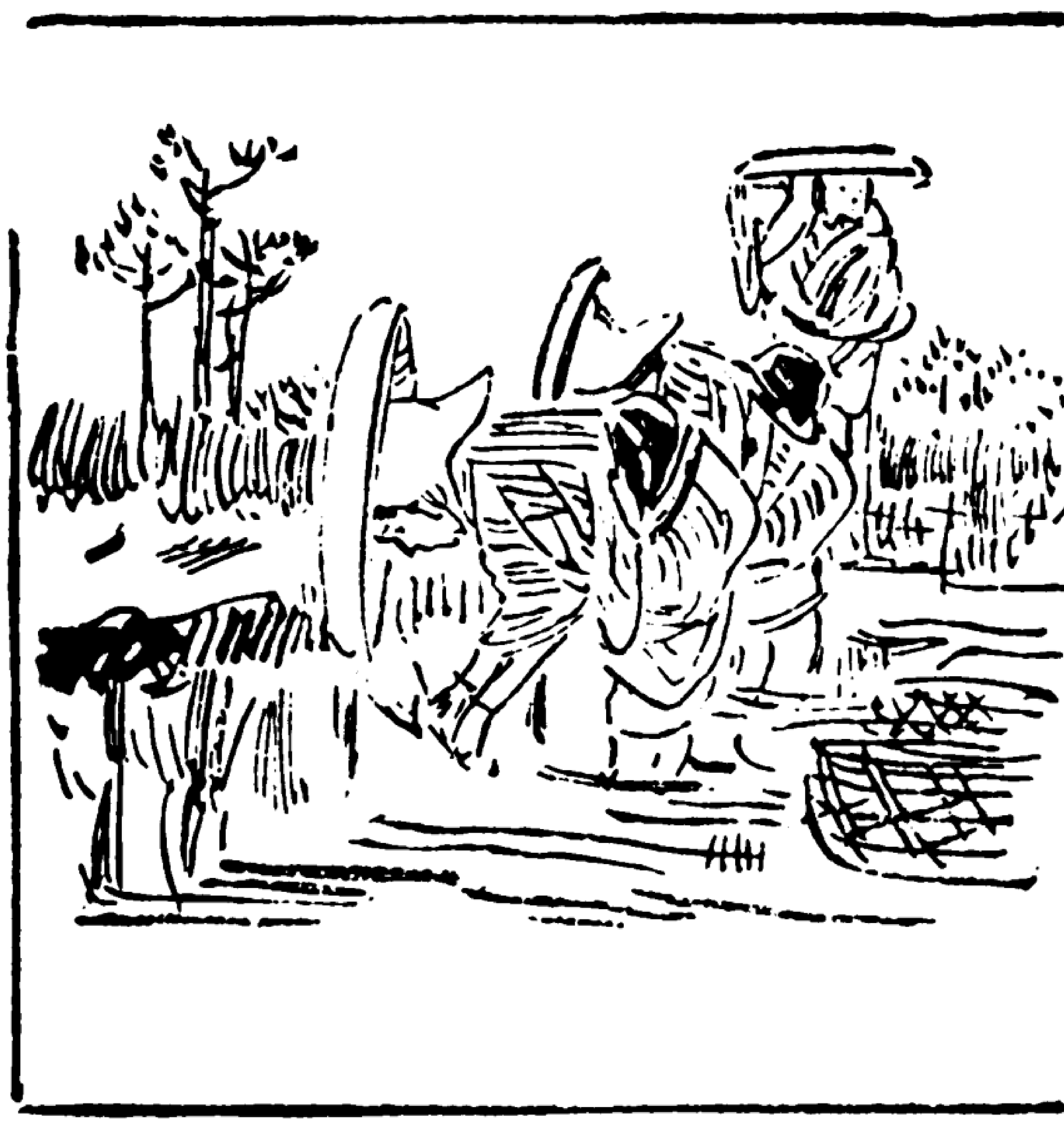
街鐵の女子雇員

街鐵にて女子を採用せしは、一昨年の暮にて、初め三十餘名を會計株式、調査の事務に當らしめし處元來女子就業の目的は夫れに依り永遠に生計を立てんとするにはあらで、嫁入仕度の一時腰掛に過ぎざれば、稍々仕事馴れし頃、辭職する者多く、且つ少しく腦髓を要する會計株式等の事務は、女子に不適任なりしかば、斷然是を廢し、今は簡易にして最も機械的の仕事なる、乘車券調査に當らしむるのみにて、目下應募者は、高等女學、尋常師範、高等小學の卒業者十二名あり、年齡は十六歲より廿四歲迄の未婚者に限り、日給二十五錢乃至四十錢にて、執務時間午前八時より午後四時迄とし、休暇は一ケ月二日間の規定なるが、概して女子は事務には忠實に頗る綿密なるも、男子に比して缺勤多きは、種々家庭上の都合と生理上の關係なりと、

卯の花や郡にまれなる娘の子

造花の好景氣

數多き婦人の手內職中、造花は最も手綺麗なるのみならず、將來又た有望の職業なるより、女子の技藝學校にても、盛に此の本科生徒を養成し居れるが、大阪にては現に專職、內職を合はせて四千五百餘の職工を有し、一ケ月約五萬圓を產出し居り、東京の職工は、一千二百餘名に過ぎざるも、大阪にて製出するよりは、上等の品を作り居れば、優に三萬五千圓以上の產出を爲せり、是等の花の中にて薔薇は不斷に需要あれど、其他は季節に隨ひて異同あり、是等は米國への輸出も尠からずといふ、其手間料は先づ花一輪にて一錢三厘位の相場なるが、平均一日に二十五錢の花を製し得べく、卅錢以上の收入ある勘定なり其の以上は所謂腕次第にて、花籠物を專門に製すれば、可成りの所得あるべしと



鳩の豆賣

淺草觀音の大慈の御誓此世の中に有らん限りは、たゞ賴めとは仰せらるれど、扨たゞは賴みにくき故賽錢は是非はづまればならず、從つて月々の堂の收入も多き譯なるが、其廣前の兩側に、鳩の豆を商ふ老婆連の收入も亦尠にならず、平日は平均五十錢、一日十五日其他命日には六七十錢あり、七人の豆賣老婆之を株として、日毎に出店し、其株は二百圓以上の價すと

社會

愛國婦人會

◎總會　去る十二日總裁閑院宮妃殿下の御承諾を得、本月廿日上野公園に於て開催することは決定したるよし

◎同參列員　昨年同樣　皇后陛下行啓あらせらるべきに、加へて戰後の爲、參列員非常に多かるべく旁々廣大なる會場を要するが爲め今年は別項の如し上野公園と決定したるなり、又同會へは成るべく多數の會員を參列せしむる爲、服裝の如きも制限せず、本月末日以前の入會者へは、悉く入場券を交附する筈なりと、

◎靖國神社臨時大祭　本月同社臨時大祭には、新に合祀されたる遺族約一萬五千人が、全國各地より上京する筈なるが、愛國婦人會にては、昨年同樣牛ヶ淵公園に場を設けて、遺族の休憩に供へ、評議員幹事等の肩書ある貴婦人總出にて、遺族を接待し、茶菓の饗應以外に、閑院宮妃智惠子殿下の御染筆にかゝる、和歌の軸物等を贈與する由にて、當日は例により種々餘興の催しもありと、

東洋婦人會

◎新事業　東京婦人會主事清藤秋子氏が清國觀察の結果、清國の開導は、女子教育に須つ所最も多く且つ女子教育の開導は、日本より適當なる女教師を派遣するより急なるはなしとの考へを起せしが、先般來朝の載澤殿下を始め、那洞外相其他の大官も、矢張同一の見解を有し、清國婦人開導のことは總て東洋婦人會に囑望せられ居ることなれば、鍋島會長始め、同會の重なる人々協議の末、同會の事業として、愈々先月より清國派遣女教員養成所設立のことを可決せり、生徒入學資格は、高等女學校卒業及高等師範、女子大學卒業程度にて、修業年限は一ヶ年半なりと云ふ、

◎新會員　張之洞氏は古來の習慣として、如何なる事情あるも、外國婦人を引見せしことなかりしが東洋婦人會の清藤河原の二女史が武昌に遊びし際は、空前の破格を以て、兩女史を其の邸に引見せしのみならず、張婦人は清藤氏に詩を贈り夫妻愈々武昌幼稚園に兩女史を訪ひ、爾來大に女子教育の急要を感じ、同幼稚園教師丹ゆきゑ武井初子を直に家庭教師に聘用し又數日前鍋島會長宛、張之洞夫人劉之嘉、子息夫人黃靜成　其他家族が、東洋婦人會々員たらんことを申込み來りしを以て、鍋島會長よりは直に承諾の旨回答ありたり

◎主義の紀念式　近日三輪田高等女學校にては、校長の主義なる質素を旨とせる紀念式を行ふ由

世界の珍話

▽一丈八尺の鬣　米國カリホルニヤ州イングルウツトといふ地のヂルドツドといふ人の所有せる馬は鬣の長きこと世界一なるべく其長一丈八尺あり、色は銀鼠にて馳驅する時は中々莊嚴の觀ありと

▽巴里市の狆　巴里の貴婦人間にて、狆が非常に流行し、過般も目方千三百グラム（三百四十六匁）の小さき狆が、價二千圓を以て、賣買の契約に、未だ不足を稱へし由

▽倫敦市の乞食　同市警視廳にては、大に乞食狩を勵行せるが、流石は倫敦、乞食して門戶を張り居るもの四千人、一人一週間の所得平均三十志（十五圓）一年の總貰ひ高三百萬圓の巨額に達するより

▽沈默俱樂部　といふは倫敦にあり、會員は十名を限り、會場は田舍より倫敦へ通ふ汽車内にあり每日市に通ふ人の出發にて新聞を讀まる仕掛に成居れり、其間沈默

新話

母子十一年目の邂逅

京橋區築地上柳原町四活版業北村平次郎の妻しげ(卅七)は今より十一年前齋藤金之助なるものと、橫濱市福富町三丁目に世帶を持ち居る頃、金之助との間に擧げし菊次郎(今年十八)と云ふあり、しげは其後菊次郎を金之助の手に殘して離緣となりしが、しげは元來勝氣の性質とて、其頃人の話に、米國桑港へ行けば、大金が儲かるとのことを聞き、懇意の人に賴みて、遂に明治廿七年の春、女の身一つにて桑港へ渡りしも、橫濱で聞きたる話とは、雲泥の違ひなるより又もや橫濱へ戻りし後は、所々方々を渡り步きし末、緣ありて今の夫北村方へ緣付きしが、夫婦の仲に子供のなきため、しげは頻りと先年橫濱へ殘せし忰菊次郎の事を思ひ出せしが、流石に今の夫に此事を明かすも氣兼、一人淚を呑込み居りしに、同じ思ひの菊次郎も父は五年前病死せしより、今更便るべき人もなく、只實母に逢ひたき一念より、別れし當時並んで寫せし一葉の寫眞を取出しては、悲嘆に暮れ居る内、風の便りに、汝の母は明治三十八年中三州豐橋在に居りしとの話を聞き、早速豐橋に至りて、諸所搜し求しかど、更に〳〵不明なるより止むなく〳〵も歸濱せんとする折、又もや或人より、其しげと云ふ婦人は目下東京築地に、無事に暮し居るとの話を聞き、又もや其足にて東京には來りしも、何分雲を摑むやうな搜し物とて、是亦目的を達し得ず、スゴ〳〵橫濱へ立歸り、活版職工となりて、某工場に通ひ居しが、母の事は片時も忘れる間なく、朝夕神佛を祈りし甲斐あり、此程漸く前記北村平次郎の妻となり居るを確め、母の寫眞を携帶して、去月三日の夜十時頃、北村方へ尋ね行きたり、然ればこそ母のしげは直ぐにも名乘り、逢ひたきは山々なれど、夫にまだ事の仔細を解り置かれば、心を鬼に、汝の尋ねる者とは違ふとて、情なく云ひ放ちたるに、菊次郎は證據の寫眞を取出して、篤と見較べし上、如何に仰せらるゝとも、自分の母上に違ひなしとて、押問答の最中、主人の平次郎が夜業より歸宅し、委細の事情を聞きて、思はず貰ひ淚に袖を絞りつ、結局菊次郎を座敷に通らせ、玆に始めて十一年振り、母子の對面をなさしめ、盡きぬ話の夜の更くるさも打忘れけるとはいともめでたく、さるにても親子の愛こそ尊けれ

瓶中心得

折柴園主人

名器と珍花

他家に至り、名物の花器に挿花を所望せられし時は花を多く挿すべからず、過ちて花器を損ずる恐れあればなり、又早咲四季咲等の珍花を挿す時は、一種にて姿足らずとも苦しからず、必ず添花などせず、手早くすべし、姿を作らんとて矯折る事を恐るゝ故に、

曲形の花器

至つて曲なる花器を取扱ふ時は、花の取合せ肝要なり、花器を古木と見立て、それより若枝の出でたる心にて挿すなり、花に格別の曲あること悪し、草花にも同意なり、

垂撥の取扱

掛物季なしの二幅對ならば、中を季節の場所に定め垂撥を掛けて時候の花挿すをよろし、三幅對ならば中幅を遠慮し、垂撥をかけ花を挿花と三幅對にして其時候を床へ移すべし、其外折釘なき處には垂撥を掛けて花挿る也、掛釘の止床より指尺にて六つ目、疊よりは七ツ目也、此垂撥は琵琶箱の蓋より初まりたる物なり、且又掛花には限らず置花を挿して季節を備ふるもよし、

四時の花器

春は竹中口、唐銅器、細口、百度を、夏は唐銅廣口薄端、盤銅を、秋は土の中口、船、薄端を、冬は細口、百度、瓢などを用ふ、

四季の水際

流儀により花器の水を四季に高下して、是を四季あいしらひ、といへり、甚誤りなり、總じて花器の水は一様に入れる事、器の差別なく四季同様なり、竹の花器を鋸の儘といふも此故實なり、夫れ四季の水際あしらひといふは、花體の留の花腰まで水際あしらひの事なり、尤も四季に高下あり、夏は高く冬は卑く、是れ夏は陽氣盛んなる時故陽中の陰を顯はし

て高くし、冬は陰氣盛んなる時ゆゑ陰中の陽を顯はして卑くするなり、利休も花窓より出ざる花は生ぬべしといへるは、此水際あしらひの事なり

花器と挿花

▽懸花器には山の景色を象り、木の山より麓に垂れ臨みたる如き有樣に▽獅子口にはその口端に障らざるやうに挿し、床掛に掛くる挿方は横側より見するやうになし、平席には垂撥に掛けて正面より見するやうになし、床柱の釘は床がまちより上四尺三寸とす▽一重切は長く眞の枝を遣ふべからず▽二重切以上には上下花形を變へるをよしとす、其花は山野水の次第ありて、上に山の木、中に野草、下に水草を挿すべし▽籠には弦の有無によつて異る、弦ある籠に挿したるときは下に置き、弦なきは懸けて用ふべし、弦の左右見切らざるやうに注意して挿すべし▽釣瓶は一つ釣し一つ置くべし、釣索を見切らざるやうに挿すべし、若し索なきときは二つ重ねておくべし、これも花器に花の障らぬやうにすべし▽砂鉢には總て低く挿すべし、木物を挿すをよしとす、若し草なれば數多くすべし▽馬盥には水草に薊などの類を挿すべし、木の物を挿すべからず、もし木物を挿すときは、草の添物あるべし▽對瓶は同じ花の紅白をとり、異なるやうに挿すべし、但しこれは祝儀などに用ふ▽亂杭には高き花器に木物を挿し、低き花器に草物を挿すべし、三瓶合せて挿すときは山野水の意を用ふるなり▽橋杭には上に古木の太きものか草物ならば數多く挿すべし、下の貫穴には閑淸に小草を挿すをよしとす▽月形の花器には細き鎖にて床の上に釣り上ぐるものなり、挿方は陰暦の上旬、中旬、下旬によりて異り、上旬は向ふて左の方へ流し枝を出し、中旬は流し枝を後へ出し、下旬は右へ出す、これを月形三箇の秘事といふ先づ上十日の間は月光右より滿つ、中十日の間は月光圓かにて、下十日の間は月光右より虧くるものなれば月の虧げたる方へ流し枝を出すものなり、以上大抵花器の用法は盡せり、

雜錄

生活の一生面

文學士　伊藤南陽

人の結婚をすると云ふは、今までにない一個の新しい關係に身を置くことである、結婚以前の我生活にも種々の意味は有つたに相違なからうが、併し結婚以後の我生活は更にそれよりも新しい、それよりも廣大な意義に滿ちて居るものである、結婚は人生を尊貴ならしめ、これ迄の性質を化へて更に高く、更に深く、更に博く、更に柔かならしむる物である、先づ男に就いて云ふて見やうなら、その從前の義務といふものは、自分のために注意し、自分のために謀り、自分の爲に準備をすれば、それで善い樣なものであつた、けれども結婚をすると、之と共に新しい義務が起つて來る、爾後は最早自分ばかりの爲に生活するのではなくて、妻のため、子供のため、又もつと大きくいへば子孫後裔即ち人類の利益のために生活するのである、我か爲す處のことは妻にも子にも關係を及ぼす、そこで如何しても私慾に克たねばならぬ樣になつて來る、

私慾に克つて他人に幸福を與ふるならば、我も亦幸福を得らるゝのである、私慾を恣にするならば、成程一時は幸福を得られぬでもないが、他人はそれがために、大にその幸福を害せられ、そして其の反動が、早晩我に及んで來る、それ故、現在も將來も、其幸福を得たいと思ふ人は、一時の私慾を忍ばねばならぬ、そして私慾を忍ぶことが即ち愛である、夫婦の間には此の愛がなくてはならぬ、

世の中に何が偉大で、何が幸福であると言つて、夫婦間の能くをさまり、二體一身となつたのほど、偉大で、又幸福なものはあるまいと思はる、これは人

間存在の必要を悉く符へさするものである、又人間の得らるゝ最大幸福をこれから引き出すことが出來る、人間の最も高尚な最も純潔な、最も利己を離れた目的といふものは、無垢清淨な夫婦の愛情からして出るのである、最も完全の性質といふのも是から生み出さるゝのである、美術、文學、發明、哲學、慈善、其外一切の人類を利する事業の最大なるものも、又之を原動力とするのである、綠野が其衣裝を着飾り、百花が其美と其芳香とに誇り鳥が美服を纒ひ美聲を發するといふのは、皆生殖力の初まつた時である、蟋蟀の鳴き、螽斯の歌ふのも皆雌を呼ぶ聲に外ならぬ茫々たる原野、森々たる山林の寂寞を破る無數無量の聲は、その調子と、その美醜と樣々違つて居るけれど、その愛情の響きであるといふとだけは皆一つである、そして人類に此愛情か具つて居るが、人類の繪畫や音樂を愛するといふのも、詩歌や彫刻を好むといふのも、畢竟は此の愛情のなさせる所爲である、人類は此愛情を持て居るから、美なるものも好むやうになる、加之又樂しいもの、愛らしいものをそれ〳〵辨別し認識し得るのである、此の愛情に由りて、人間の才智はズン〳〵伸びる又其諸々の力は何れも強くなる、又其人物といふものが自ら上つて來る、そして其生活を導びくに、正しい宗教を以てするならば、諸の道德が著しく發達



する、これほど此の愛情の勢力は強いものであるが、これは、斯う強くなくてはならぬ道理がある、即ち世渡りをして往く間には、自分の體力、智力、道德力等の不足からして起つて來る危險がある、この危險を承知して居りながら、如何して責任を負ひ、危險を冒し、義務を盡さんとの決心が起るべきぞ、女にしても然りである、此愛情が強くなくては、誰か妻たり、母たるの責任を負ふに至るべきぞ、女といふものは、男よりも、もつと困難を忍び、危險を冒さねばならぬと言つても善いものである、それであるのに、若し此愛情が無かつたなら、如何して己れの前途を、悉皆男に任せて了ふことが出來やうぞ如何して良人に先き立たれるかも知れないのに、母としての苦痛、危險を冒すに至るべきぞ、

さて男にして若し夫婦間の歡樂幸福を全うしやうと思ふならば、決して女を我が情慾の犧牲としてはならぬ、却つて此情慾を、我理性の配下に屈服させ、我道念を以て之を牽ひて行くべきである、言を換へていふて見れば、妻の權利、妻の慰樂、妻の希望を無視してはならぬ、然るに結婚を以て、その慾を恣にする容易の手段、合法の手段と心得るやうであつたなら、それは以ての外の心得違ひである、失望落膽に陷るは、極り切つて居る、

それは何故かといふに、愛情が主人公であるべき筈であるのに、情慾が主人公となつたのであるからして、その結果として心が無政府となるからである、心が無政府であつて、如何して家庭が治まつて行かれやうぞ、如何して一身が修まらうぞ、夫婦間の清淨なる快樂、幸福は、愛情と理性とに支配せられて居る清淨なる人の得べきものである、滿身情慾の團塊である賤しい者流の味ふことも出來ぬものだ、

人間は若いものと、年寄とを問はず、男と女との區別なく、愛情と情慾の關係を知らねばならぬ、愛情は如何程立派で、如何程偉大で、如何程強いものかを知らねばならぬ、愛情を賤しいもの、低いものと考ふる弊より救ひ出して、人間の幸福上大切の要素

たる地位に挽回せねばならぬ、人間最高の幸福と此愛情とを關係せしめ、愛情の名に於て禮拜せられて居る劣性をその位より引き卸し、夫婦と云ふものを最も清い、最も神聖の人倫たらしむることは、即ち誰しも盡力すべききことである、

瓊子内親王

三島江月

一

我國古へより烈女節婦多かる中にも、橘逸勢の女父を慕ふて陸奥へ共に下りしは、孝女の鑑として、誰れ知らぬものあらざらん、然るを彼の元弘の亂れ世に、帝は遠く隱岐の小島に遷幸あらせらるゝや、孝養を盡さん一念に、やんごとなき金枝玉葉の御身をも賤の女に窶し、はる〳〵伯耆の國までは御供したまひしに、遂に叶はでたゞひとり、彼の島見ゆる山陰に、草の庵を結ばせ給ひ、早く治まる御代となりて還幸あらせ給ふやう、祈願せさせ給ひし甲斐ありていよ〳〵帝の都に還らせ給ふ時は、共に歸らんことを促し給ひしをも辭したまひ、遂にはうら若き御齡にて、此の山寺に隱れさせ給ひし、瓊子内親王の御事跡は、空しく青史の上にも傳はらで、御德を稱へ奉る人なきこそ、かへす〴〵も遺憾の極みなれ、いでや姫宮御事跡の大要を記述して、ともに頌德し奉らむかな、

瓊子内親王は、建武中興の英主後醍醐天皇の皇女にまし〳〵て、安養内法親王と申す、御母は權大納言爲世卿の女、贈從三位藤原爲子の方なり、御幼き時よりいとも聰明におはして、文書の道は申すも更なり、管絃のわざにも堪能に、殊に至孝の御譽れ高く御兄姉の間もいと睦ましかりしかば、帝も此上なう愛でさせ給ふ、

斯くして、姫宮御幼少の時は、いとも温かき九重の大宮裏に生ひ立せ給ひしなり、然るを母君爲子の方は、病の爲に早く此の世を隱れさせ給ひしかば、日

頃孝心ふかき姫宮の御歎きは如何ばかりなりつらむ、それより後は、一しほ帝を慕はせ給ひ、常に御傍に侍りて、ひたすら孝養のみぞ盡させ給ひける、春は盛りの花の宴、秋は錦の紅葉狩、折にふれ時にしたがひて、皇女の詠み出でたまへる御歌は、一しほ帝の愛でたまふよすがとなり、朧ろなる春の夜ごろ、あるは澄みわたれる秋の月を眺めたまひて、興ぜさせ給ふ折しも、皇女の奏で給ふ妙なる琴の音は殊に御心を慰め、かつは逝きたまひにし方を御思ひ出の種ともなりて、いよ〳〵憐れのものと思し召させ給ふ、皇女もまた慕はしき御母君の早や此の世にましまさねば、孝養つくし奉るべきは帝、親しくすべきは兄妹よと、片時も孝友の念忘れたまはぬのみならず、上は大内に仕ふる女房より、下は賤が家の海人少女に至るまでも、いと慈しみたまひけり、

二

月に叢雲花に嵐、げに定めなきは浮世の習ひなりけり、吹く風も枝を鳴らさぬ大御代に、なに思すこともなく九重の奥ふかう御座しましつる宮方の御身の上さへ、たゞならぬ大事ぞ起りたりける、それなむ元弘の大亂にして、逆臣北條高時は選りに選りたる關東の荒武者數十萬を差し向け、範行時綱等將として雲霞の如き大軍は、獅々奮迅の勢にて都の中にぞ亂入したりける、

一百年來太平の夢あたゝかに、詩歌管絃にのみ耽りたりつる大宮人の驚きは云ふも更なり、宮方の御歎き、そも如何ばかりならむ、主上も今は是非なく九重の大宮裏を出でさせ給ひ、野末の露を踏み分けてはる〴〵笠置の山に行幸せさせ給ふなりけり、

あはれ昨日までは金殿玉樓の内に御座しまし〻玉體を、今日は僅に松の下蔭を隱家として便り給ふさへ梢の露の御袖を濡らし奉る、げに傷ましの極なり、さても木の下なる一夜の御假寢に見給ひし靈夢は現はれて、守護し奉りし益荒雄は、末頼母しく健氣にも見えたりしかど、衆寡の勢敵せん術なく、流れも清き菊水の勳高き楠の忠義の心は堅けれど、逆徒

の運や強かりけん、何事も大御心の儘ならで、畏くも一天萬乘の大君は、逆臣の計ひにて、隱岐の小島へ遷幸あらせ給ふ、淺間しき世の中とはなり果けり

三

世は苅菰と亂れ果てゝ、恐れ多くも大君は、荒波騷ぐ北の海なる一孤島、隱岐の小島に遷幸あらせ給ふと聞こし召されし姫宮の御歎きは如何ばかりならん、姫宮は騷ぎ亂るゝ胸を押し鎭め、いと健氣にも思し給ひけるやう『あゝ御父君は、荒磯波の打つ島べに遷幸し給ふを、われ一人如何で花の都に留りて、憂き月日を過すべき、願くば共に下り御傍に侍りて、朝夕慰め奉らむ、孝養盡し奉らなむ』と堅く心に定め給ひて、切に御供せんことを乞ひ給ひけり、さて帝には、數多の御子あらせらるゝ中に、皇女のたゞ一人かやうの御願ありしを、如何に思し召されけむ、やゝ暫時御思案の後『朕が行くさきは海山遠く、人も通はぬ千里の旅路、荒波騷ぐ小島の磯邊なり、かつ汝は可弱き女性の身にしあれば、宮の裏に留りて居ませよ、朕も疾く歸り來なむ、今暫時待ちて居ませ』と諭し給ひしも、姫宮は如何で思ひ止まり給ふべき『如何に險しき山坂越ゆる旅路なるとも如何に磯邊の蜑の苫屋なるとも、御心慰め奉らん爲には、何とて露程も厭ひ侍るべき、御父君の御敎訓をば深く忝しと思へども、わらはの眞心をも憐み給ひて、何卒御供許させ給へ、彼の島へ伴ひ給へ』とばかりにて、時ならぬ時雨ぞ御袖に注ぐなりける此詞を聞し召されし帝、此の態を見給ふ御父君、如何で憐れとも嬉しとも思召されざらん『斯くまで朕を慕ふ身を振り棄て行かんもたより無かるべし、然らば此の道づれ許さなむ』とて遂に御供し給ふこととなりける姫宮の御喜びは、何にか例へまつらむ、

四

遷幸に供奉する人々は定まりぬ、一條頭中將行房、六條少將忠顯、御介添三位局廉子、大納言典侍のたゞ四人ばかりなり、

そも〱上をも蕪みする逆賊が、何とて孝道わきま

へん、姫宮は御孝心のあまり供に下らむと思召し、帝も今は許させ給ひしものを、逆臣どもは宮の御供したまふことを拒み奉るなりけり、姫宮の御落膽はそも如何ばかりならむ、さりながら一度斯くと定め給ひしものを、如何でたやすくは思ひとゞまり給ふべき、如何にしてなりとも供に下らん術もがな、孝養盡し奉らむ術もがなと、小さき胸を千々に砕きたまひ、神佛かけて切に御願あらせ給ひしが、やがて思し立たれし一事はいとも畏し、彼の御介添たる三位局の女の童に御姿を窶して御供せんと、堅く覺悟せさせ給ひしなりけり、

あゝ姫君は、御父君へ孝養盡し奉らむ御一念に、金枝玉葉の御身をも賤の女に窶し給ふなりけり、かつ出でます先は人も通はぬ千里の旅路、荒波騷ぐ北の海なる一孤島、思ひやるさへ身の毛もよだつ、その聞くだにも怖ろしき島邊にも、いと健氣なる御一心故に、共に下らせ給ふなりけり、況して姫宮は御年僅に十六にならせ給ひて、御心のみか御姿も、いや芳ばしき花のごと、げに嚴寒の候たゞひとり、霜雪にあひていよゝ香ばしき梅の花、秋の千種も枯れ果し、御園に匂ふ白菊の如、薫りも高くいとも尊し、

海のほとり（ツルゲ子ーフ抄錄）

山田枯柳

一

私は其時から吾が母と一緒に或海邊の一小市に住んで居たのであつた、其時私は十七歳であつたが、母は未だ三十五歳にはならなかつた、母は至つて若年で結婚したのだ、吾父が此世を逝られたのは私の七歳の時であつたが、それでも私は能く父を記憶してゐる、吾母は毛髮の奇麗な、脊の餘り高くない、愛嬌のある併し常に悲しげな顔をしてゐる、其聲は柔かで疲れてゞもゐるやうな風で、そして寧ろ臆病らしい身振の人であつた、其妙齢の時に美人として評判せられてあつた、そして晩年まで佳麗にして人を

魅する面影は殘つてゐた、私は未だ嘗て母のやうな深い優しいそして悲しげな眼眸や、奇麗な軟かな毛髮を見た事はなかつた、又其纎手の佳麗なのも類はなかつた、私は實に母を尊敬してゐた、そして母は私を愛した、併しながら私共の生活は晴々した生活ではなかつた、或る秘密なる望みのない何の益もない悲哀が吾母の何處にも充滿てゐたやうであつた、此の悲哀は單に私父の死去の爲であると說明した許りでは物足らぬ、吾母は全心全意を以て我父を愛してゐた、何時までも其面影を忘れられないので、吾父の死を痛く悲しんだのであるが、常に惱める吾母の悲哀は、只だ是のみで說明は出來ぬ、否何か他の事がなくてはならぬ、私は何時までも母の柔和な變りのない眼で見、又嚴格に締つてゐるのではないが矢張り何時も一定の風で變りのない唇を見る時に、明らかに何々の秘密があるといふことを了解する事は出來ぬが、何となく朧ろに認むる者があつた、

私は前に我母は私を愛したといつた、併し時としては母は私を嫌ふ事があつた、その時には私が母の前にゐるのが母の爲には不愉快で耐へ得られぬやうな風に見えた、此のやうな場合には、母は意ならずも私に對して嫌惡の情を感じて慄然とした、そして後落淚して之を悔ひ、私を其胸に抱〆めた、私は母が此やうな一時の激情は、其健康のよろしからぬのと不幸な境遇にゐるのとから起ると思ひ慣れて居た、此やうな反對な感情は、或點までは罪惡の情緖の奇態なる破裂によつて生ずる者である、何故なるかは解する事は出來なかつたが是は自分にも時々起つた併し此惡い破裂は決して憎惡の念と共にする者ではなかつた、吾母は常に喪にゐるやうな黑衣を着けてゐられた、私共は可なりに暮してゐたが知人は至つて尠なかつた、

二

吾母は心を盡して所有注意を吾身の上に集中て居られた、母の生活は吾が生活に包まれてあつたのである、凡て親子の關係が此やうなのは總じて其子の爲

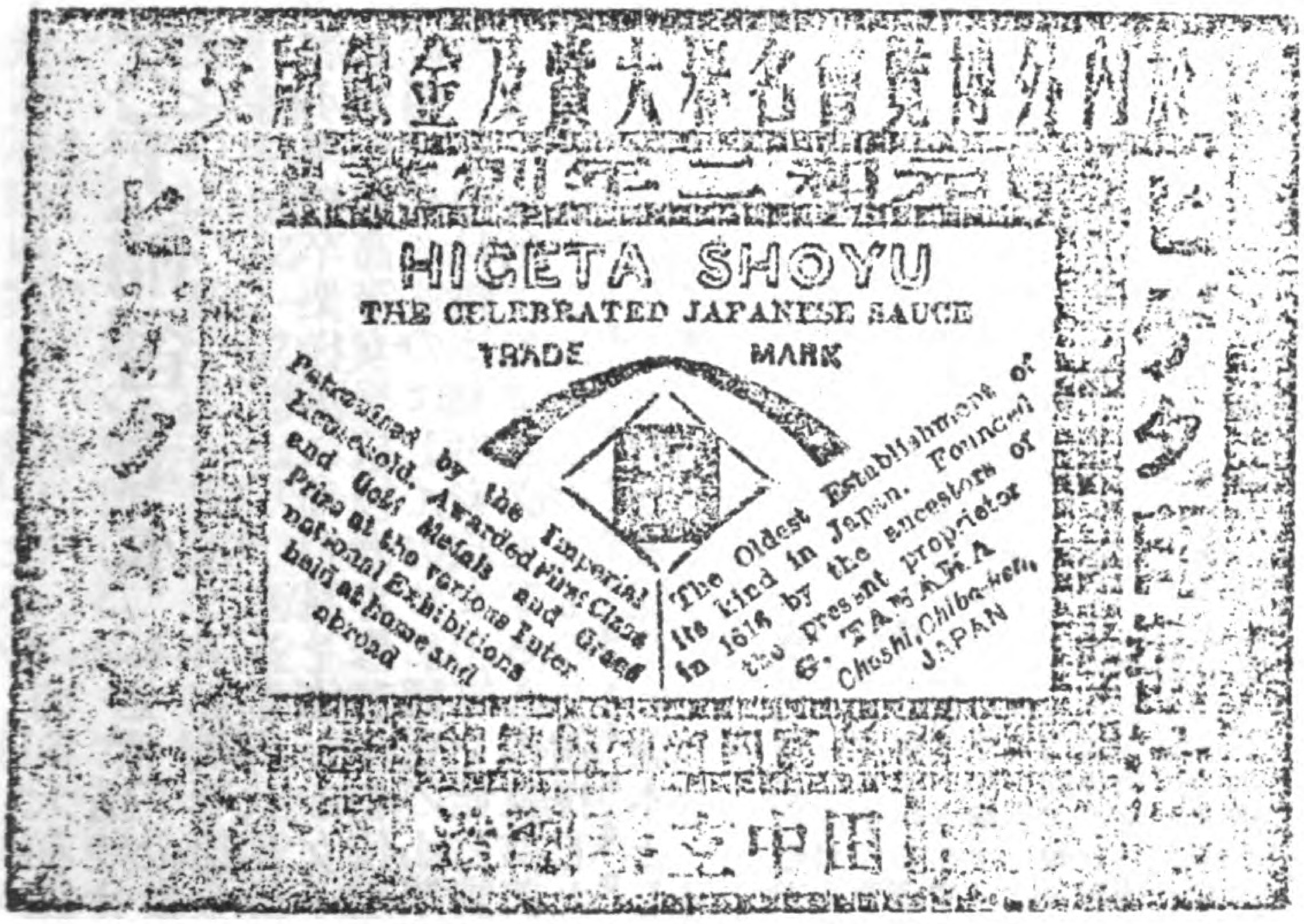
に善くないもので、寧ろ害ありと言つても可いくらゐだ、而己ならず私は母の獨一子で、一人子は得て偏よつて生長ものである、親は子を養つるに餘り痛く心配して世話をやき過ぎるから、それが善くない私は聊か外の子等とは違つて其等の爲に害を受けたことは無かつた、併し私の神經は一時の間亂れて居た、それに私の顔は母に似て居たが、母と同じく健康は少し勝れない方であつた、私は小供の時から遊び友垣を避けて、一人で靜かに居る方であつた、母とすらも言葉を交すことは尠なかつたのであつた、私の一番好きなのは讀書することや、寂しい所を散歩することや、夢みること等であつた、夢見ることは實に好きであつた、其見た夢の數々は中々茲に話すことも出來ないが、或時の夢に、私は半分開いた扉の前に立つてゐたやうであつた、其扉の中には何かの秘密が籠つてゐるやうで、半ば無感覺で立つて其を待つてゐる、併し扉の中へ這入らうともせず、其中に何事があるかと考へながら夢のさめる迄待つて居る、又或時は其儘で眠つてしまつた、若し私に詩人たるの天才があつたならば、恐らくは私は是より多くの詩を得たであらう、若し又宗教熱心の傾向があつたなら私は恐らくは寺院の中の人となつたであらう、併し私には其樣な傾向がなかつたので、私は夢みながら待つて居た、

三

私は常に夢や現の中に眠りに落ちることを申したが私は長く眠つて、夢は私の生活中の大部分であつた私は殆んど毎夜夢を見た、私は夢を忘れなかつた、私は夢に何かの意味を附け、之を何かの預報と思ひ其秘密なる意味を聖にすることを試みた、或夢の如きは、度々繰廻して見ましたので、痛く私を惱かしました、殊に或る一の夢は大に私を困らせました、其夢と云ふのは、私は或る頽廢た市の狭い道の惡い處を辿つて行つた、路の兩側には尖つた屋根の附いた層々たる石造の家屋が聳へてゐる、私は其時吾父を尋ねてゐた、父は死んでしまつたのではなく何か



有隣
生命保險株式會社
東京日本橋區南茅場町四十四
電話特浪花一四一 浪花一八一〇



HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronized by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the Present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

再版

理學博士坪井正五郎先生講述

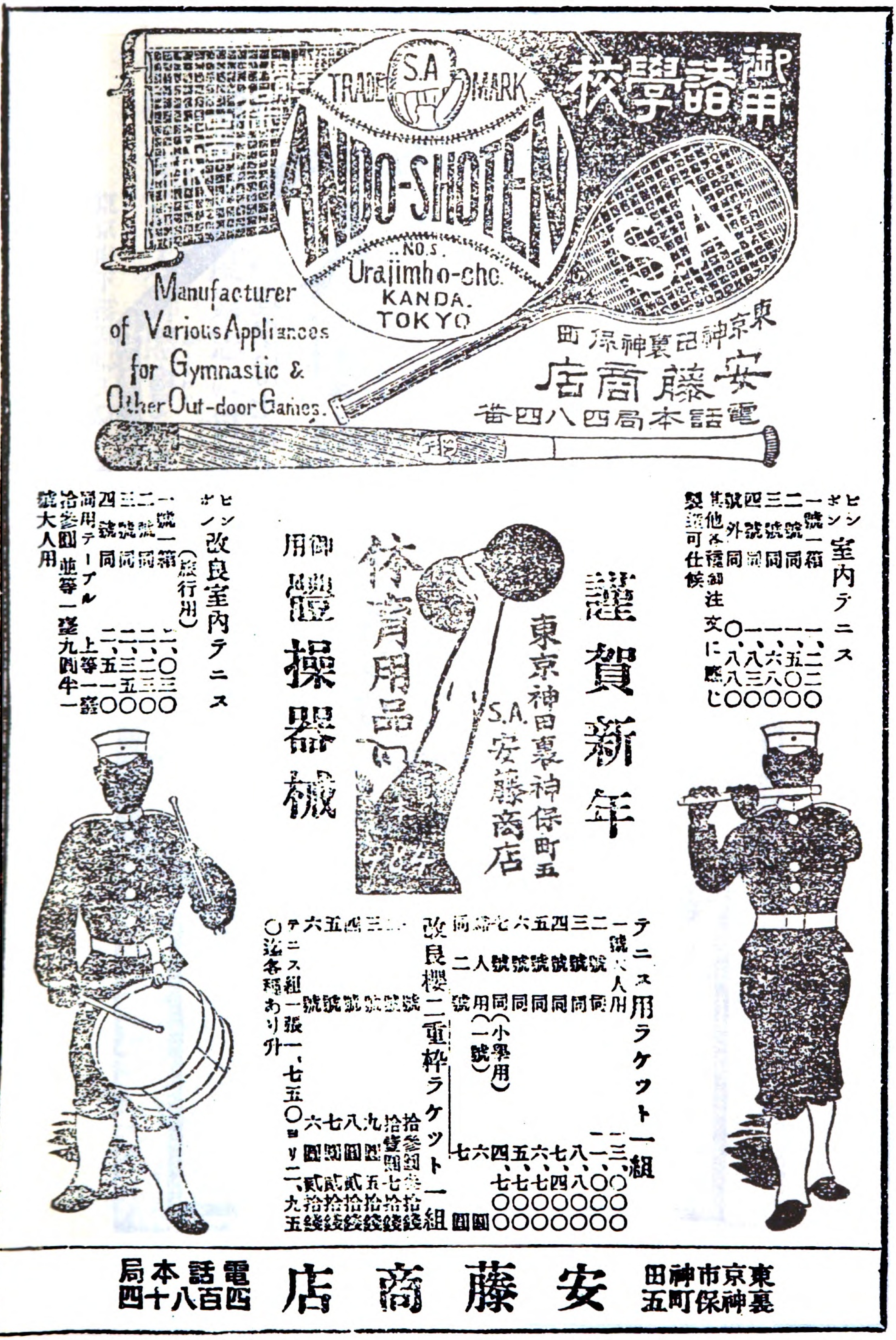
人類學講義

菊版洋裝全一冊
定價金壹圓拾錢
郵稅十錢

吾人の祖先は如何にして出現せしか出現せし當初は如何なる狀態なりしか如何にして文明の端緒は開かれしか如何にして今日の複雜なる社會を組織するに至りしか是れ人類學上最も趣味ある研究なるべし本書は我國に於て人類學の泰斗たる坪井博士の極めて平易なる言文一致にて講述せられし者なれば創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論、諸種族系統の探り方、人類の大別小別、日本種族、人類の本源地、人猿同祖論、等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたり歷史及人類を研究する人々には座右缺く可らざるの良書たるを信ず

再版

發行所
東京市京橋區築地二丁目
株式會社國光社
（電話新橋八八・二六九三）


御用諸學校
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
NO.5. Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
謹賀新年
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
體育用品
御用體操器械
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
簡用テーブル上等一臺拾參圓並等一臺九圓半
一號大人用
テニス用ラケット一組
一號大人用 二三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
[illegible]人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張一、七五〇ヨリ二、九五
〇其他各種あり升
東京神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

の理由で私共を離れて、此家屋の中の何處かに隱れてゐるのである、で私は陋ない出入口に進んで、此路は板や材木を堆高く積んである長い庭を横ぎつてゐて、遂に私を二個の圓窓が附いて居る小さい室に導いて、室の眞中には吾父は煙管を啣へながら長い上衣を着て居た、彼は私の眞の父とは少しも似てはゐなかつた、彼は背高く痩せて髮毛は黑く鼻は曲つてゐて眼は鋭どかつた、年は四十ばかりと見えた、彼は私が彼を見つけたのは不快に思つたらしい、私も彼に遭つたのをさう悦ばしいとは思はなかつた、で躊躇つて尙立つてゐた、彼は少しあちらの方に向いて何かぶつ〳〵言ひ始めそして小歩で室内を運動した、すると彼は小言を熄めずに次第に遠ざかつて絕えず肩越に此方を顧回つた、室は段々大きくなつて遂に霧の中に消え去つてしまつた、私は再び父を見失つたと思つて俄然として恐怖を感じ、彼の後を追つて突進した、併し最早や私は父を見ることが出來なかつた、唯だその熊の吠ゆるやうな怒聲を聞くことが出來るばかりであつた、私の心は恐怖れに沈んだ、私は眼醒めて後は長く再び眠ることが出來なかつた、次の日は一日此夢の事を考へて何事も手につかなかつたのであつた、

若葉かげ

小森松風

春の行方

田舍に來れば、菜の花めづらしく、豌豆、蠶豆の畑に雞の聲も淸らかなり、里川堤を行きて、城の跡を翁に訪へば、今しも、少女の一むれが、蕨を手折りつゝ下る、彼方の山よと敎へくれぬ、

さしかゝる山路に、老鶯の聲も聞えて、谷のほとりに、遲櫻の二つ三つ、春の名殘も惜まるゝ哉、

羇旅

岡の麓に一宇の堂あり、山吹の散る流れを傳ひて鐘の音淸く、下る筏も趣あり、

MISCELLANY IN ENGLISH.

Macbeth.

Soon after the Scottish and Pitchs had become one people, there lived a king of Scottland called Duncan, a very good old man. He had two sons; one was called Malcoln and the other Danalbain. But king Dancan was too old to lead his army into battle and his sons were too young to help him.

At that time Scottland and indeed France, and England and all the other countries of Europe, were much harried by the Dans. These were a very Fierce, warlike people who sailed from one place to another and landed with their armys on the coast, burning and destroying every thing they could find.

They were heathén and did not believe the bible, but thought only of Sloughter and plunder, when they came to the countries where the inhabitants were cowardly, they took possesion of the land, as the Saxon had taken possesion of Briton.

Sometimes they landed with their soldiers, stole what ever they could find, burned the houses and then got in board, hoisted

英文雜錄

マクベッス

スコット人とピッチスとが一國民に合併されましてから間もない頃スコットランドにダンカンと申す一人の年老つた良い王樣が御座いました。此王に二人の子息がありまして其一人をマルコルンと云ひ他の一人をダナルベンと申しました。併しダンカン王はもう年老つて居るから、自分が軍隊を率ゐて戰場に出る事が出來ずと云つて又其子息等は未だ幼くして王樣を助ける事も出來ませんでした。

其頃はスコットランドを始め實際佛蘭西も英蘭土も其他歐洲の諸國は皆ダン人の爲めに非常になやまされて居りました。此ダン人と云ふのは一の塲所から他の塲所に航海して其海岸から敵地へ上陸して何〆でも目付次第に燒拂らつたり破壞したりする樣な猛烈で戰爭好きな人民であります。

彼等は異端敎者で聖書を信じません只殺戮する事と分捕する事ばかり考へて居ります。で彼等が弱い人民の國へ行つた時には丁度サクソンがブリトンの所有權を取つた樣に其土地の所有權を取つて了うのです。

彼等が其兵隊を率ゐて上陸する時には何んでも目付かりさへすればそれを奪ひ又人家なぞを燒拂つて船へ歸へつて帆を上げ

their sail and sailed away again. They did so much mischief, that the people prayed god in the churches to drive away them from the rage of the Dans.

Now it happened in king Dancan's time, that a great Danish fleet Arrived in Scottland and threatened to take possesion of that prince. A numerous Scotch army were convocated to march against the enemy. The king, as I have told you, was too old to command this army, and his sons were too young.

He, therefore, sent out of his nearest relation who was called Macbeth; he was the son of Finel, who was Thane, as the governor of a province was then called, of Glamis.

Macbeth who was a brave soldier; put himself at the head of the Scotch army and marched against the Dans. He took with him one of his relation, called Banquo who was Thane of Lochaber and was also a very brave man.

A great battle then took place between the Dans and the Scotch, Macbeth and Banquo, the Scotch generals, defeated the Dans, and forced them to return to their ship, after a great many of their Soldiers had been killed or wounded.

Then Macbeth and his army

て再び行つて終ひます。彼等は方々の人民が其狂暴を避け様と思つて教會で神様に御祈りする位迄に損害を被らせて居ります。

偖此ダンカン王の時にダン人の一大艦隊がスコットランドへやつて來て此王の領分を取らうとして迫害したと云ふ事件が起りました。澤山のスコットランドの軍は敵軍に進撃する爲めに招集されました。が前にも申しました通り王様はあまり年を老り過ぎて居るから軍隊を指揮する事も出來ず又子供等もあまり少さ過ぎて何の役にも立ちません。

夫れ故にマクベッスと云へる自分の最も近い親類を派遣する事となりました。此人はファイチルと云ふ人の子で、其頃グラミスと申した縣の知事をして居る貴族でありました。

勇敢なる軍人たるマクベッスは自分自らスコットランド軍の先登に立つてダン人に向つて進軍致しました。彼はロッチャバーの貴族で是れも亦勇名猛けきバンコーと呼べる親類を連れて行きました。

大戰爭がダン人とスコットランド人との間に開かれました。スコットの將軍マクベッス及びバンコーは敵の大軍を殺したり或は負傷せしめて大にダン人を敗り其船に歸らしむる樣に突撃しました。

マクベッスと其軍隊は其勝利

marched back to a town in the north on the Scottland, Called Farres, rejoicing on account of their victory. Now There lived at this time three old women in the town of Farres, whom many people regarded as witches. It were believed that they could foretell what would come to pass. Nabody believes in such foolerys now-a-days except stupid and ignorant persons like those who consult gypsies; but in those time the people were much more ignorant, and even great mon like Macbeth believed that such person as these witches of Farres could really prophesy.

The old women saw that they were respected and feared, and so they cheated the people by pretending to foretell the future and recieved present for doing so.

So the three old women went out and stood by the wayside, in a great heath near Farres, and waited till Macbeth pass by. And then, steping before him, the first woman said, "Hail to thee, Macbeth!—Hail to thee, thane of gramis!" The second said, "Hail to thee, Macbeth!—Hail to thee, thane of Cawdor!" Then the third, missing to pay him still a higher Compliment, said, "Hail to thee, Macbeth, who shalt be king of Scottland.!"

Macbeth was very much sur-

を祝ひつゝスコットランドの北に當るファーレスと云ふ町迄引揚げて參りました。で此時其ファーレスの町に三人の老婆が居りました。此老婆は多くの人々から豫言者だと言ひはやされましたが、必ず軍隊が此處を通過すると此老婆が豫言した事が一般から信じられて居りました。只今では餘程愚鈍な無智な人ででもなければ此んな馬鹿らしい事を信じる人はありませんが、其頃の人はまだまだ夫れ以上に無教育でありましてマクベッスの樣な豪傑でさへ此ファーレスの豫言女等の樣な者が全く豫言し得るものと信じて了ひました。

此老婆等は人々が自分の事を畏敬して居るのを知つたので未來の事を豫言すると托言して巧みに人々をを欺きましてこんな事を言つては禮を貰つて居りました。

そこで此三人の老婆はファーレスに近い小亞灌木の林の道傍に行つて立つて居てマクベッスの來るのを待ち搆へて居りました、やがてマクベッスが來ると其前に進み出で第一番目の女は「マクベッス殿下萬歲！ グラミスの貴族萬歲」と申しますと二番目の女は「マクベッス殿下萬歲！カウダーの貴族萬歲！」と叫びました。其時三人目の女は十分敬意を拂らう積りで「未來のスコットランド王マクベッス殿下萬歲！」と云ひ誤りました。

此尊稱にマグベッスは非常に

prised at this titles, and while he was wondering what they could mean, Banquo steped foreward, and asked them, why they had nothing to say about him as about Macbeth, they said that he himself should never be king, but that his children should ascend the throne of Scottland the reign of many years.

Before Macbeth could recover from his surprise, there came a messenger, who announced to him that his father had died and that he was now thane of Gramis, and shortly came a messenger from the king to thank Macbeth for the great victory over the Dans and announced to him, that the thane of Cawdor have rebelled against the king and that the king had taken his office from him and have made Macbeth thane of Cowdor.

(to be continued)

驚いてマダ驚きの終らぬ間にバンコーはツカツカと前へ進み出で彼等に聞きますには何故マクベッスに云ふ樣に自分には何んにも云はぬかと詰りました所彼等は彼の方は王樣にはなれませんが彼の方の御子息はきつとスコットランドの王位に昇て永年の間王樣になられましようと答へました。

マクベッスが驚いてる最中に一人の使者が參りまして彼の父が死んで彼がグラミスの貴族となつたと云ふ事を報告しました。所へ間もなくダン人と戰つて大勝利を得た事を感謝する爲めに王から一人の使者が參りましてカウダーの貴族が王に謀叛した事と王が其官職を取り上げてマクベッスをカウダーの貴族とする事とをマクベッスに報告致しました。

（續く）

Too old to ....老いて——するに耐へぬ
Took possesion of ....——の所有權を奪ふ
What ever they could find ....見附け次第何物でも
Put himself at the head of...........自身——の先登に立つ
Took with him ....彼が伴ひ行いた
Took place ....起りた
Rejoicing on account of their victory..彼等の捷軍を祝しつゝ
Now a day ....現今
Hail to thee..............................殿下を賀し奉る

似たる岡、似たる川に、そゞろ故鄕の偲ばれて、小唄に一人たどる折しも、圖らず旅僧に行き逢ひて、道すがらの話、いと面白く、やがて別れを告ぐるや茲に日は暮れて、山庵に燈火も見えそめぬ、

藤下の宴

行く春の名殘をとめて咲ける藤の花蔭に、送別會を催しぬ、かはす盃、送る歌、ひく琵琶のねもあはれにて、吟詩の聲ぞ涼しげなる、

池に垂るゝ花房を引く鯉は、さながら君を留むる心地せられてなん、

初夏の上野山

花は散りぬ、若葉となりぬ、下髮を風になぶらせて立てる少女は、さながら、殘花の趣あり、

アサヒビール、エビスビールの旗は、喫茶店に飜りて、軍歌を歌ひ行く兒童の麥藁帽子も、涼しげに見え初めたり、金魚賣の翁は、今、南洲銅像の前に肩を休めぬ、木蔭うれしき頃にもなれる哉

端午の節句

太郎は小學校より歸り來りぬ、次郎曰く『お降りより柏餅を貰ひぬ』と、二人睦まじげに見上ぐる軒の鯉も十分にふくらみぬ

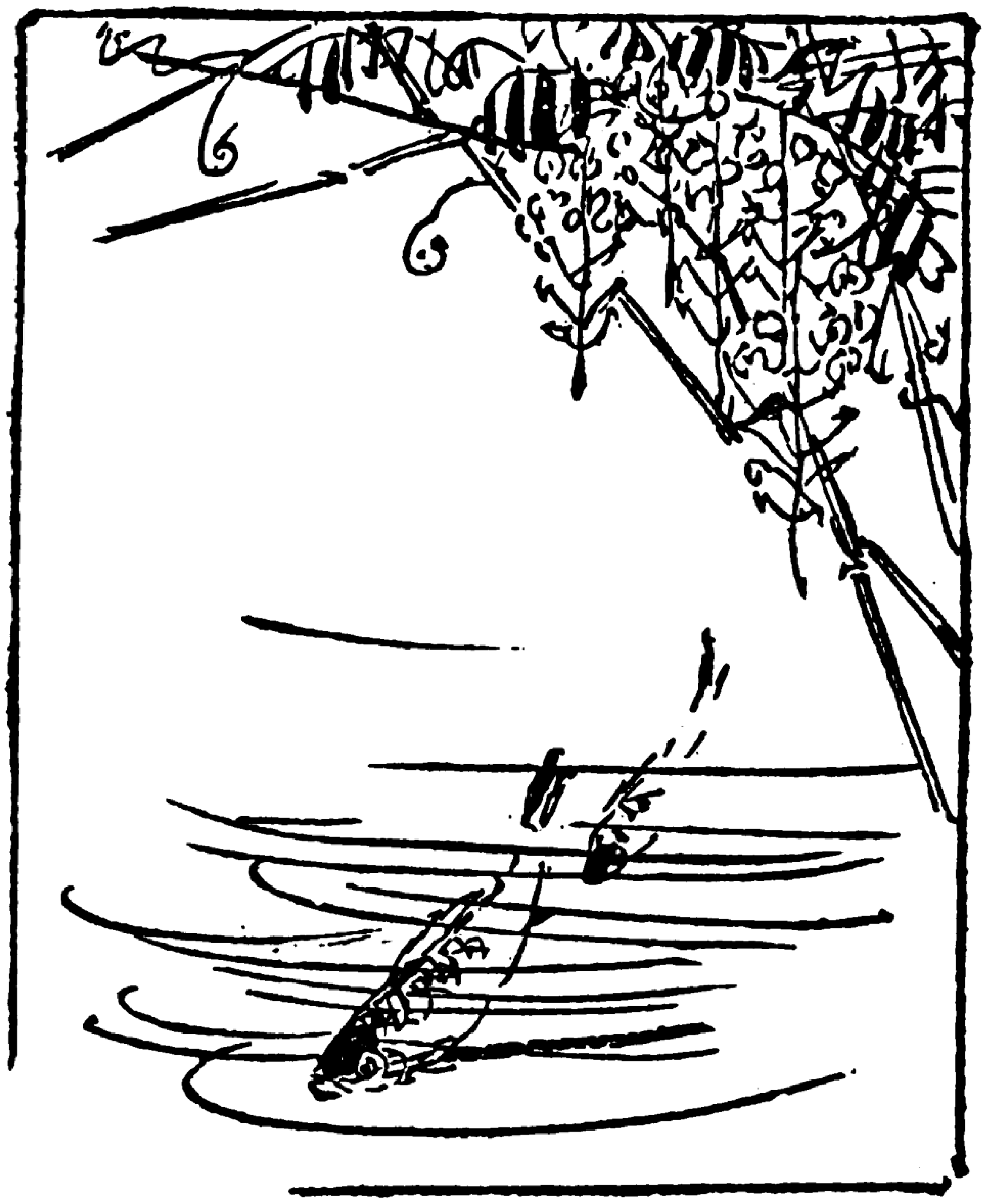
又、床の武者人形を喜びつゝ語り合ふさまに、嬉しく君がへりて、池の緋鯉に麩を與ふる、親の心や如何ならん、

楓幃獨語

橘　総子

◎媚ふる者を退くてふことは、すべての人にあらまほしとはいへ、こをあながちに嫌へばにや、眞心より其心ざまを慕ひて、親しうなれ來る者をも、佞諛のたぐひなりと見做して、むげにいやしみ、いとあいなくあしらふ人あり、そが心のつれなきさまぞ見らるゝ、いかにしてか此くすらん、來りつく者の性善からずとて其人を忌むか、こは友を撰ぶことにして、上なる人が、其下を迎ふる道に背けり、よしや

いさゝかのよからぬ性ありとも、こを他にして、なと特質の無からずやは、性あしかりと知らば、いよ〳〵親しくして、ひそかに其非を改めさするこそ、まことに愛の道にかなはめ、はたまれに、此ふるまひをもて媚を退くる明あることを示さんとて、かくするものあらば、理正しきに似たれども、こはいと容易からぬわざなれば、識別の智を豊に養はでは、かなはず、さなき者が、媚を退くてふことにのみなづみてかく行はゞ、ともすれば人を誤りて、善良なる者をも退け、其人に望を失はしむること多かり、されば、媚を悪むべきことを忘れずして、親しみ來れる者を退けずば、怨に遠ざかりて、亦大過あらざらんか、



◎心に慢をいだきて、殊更にほこりかにする人を、まのあたりほめたつるは心得ねど、さる心とも知らで、わが容、わが才、わが徳は、げに彼の人の言ふばかりなるらんと、自ら許して笑ましげなる者のきはこそ、おかしくもまたおろかなれ、わきて徳行に志せる者が、うきうきしき言をあかず喜びなば、やがて本性もあらはれて、いと心おとりせられてなん、容色の艶なる、才能の勝れたる、徳性の秀でたる、何れも其美しきを包みてこそ、人もこを敬ふなれ、さるを、志いやしきものは、己れを尊み、己れを褒む、かくて、慢り悪まれざらんことを願ふともいかで、免るゝ由あらんや、高きに縁りて

志を立て、卑きに就きて靈を養ふにあらずば、容色、才能、徳性の秀でたるは、皆嬌慢の梯となる也

◎少女の人の許ゆきたらんに、つとめて大人らしく言貌を飾りたらんは、いと見苦し、すべての事、過ぎたるはつたなく、興さむる心地すなるに、まいて、自ら備へたる眞善をすてゝ、身にも堪へぬふるまひを装ひ、心にもあらぬこと飾りて言ひたつるは童子にして觿を佩ぶるとひとしく、其性にたがひ、其美をそこなふ恐れあれば、年にふさはしくせんやう敎ふるこそよけれ、

◎きはめて打ち寛げる集ひならぬきはゝ、坐中の年少しと見ゆるが、さしいでゝ言多きは、いとさうさうしく見おとりせらるゝなり、能たらずとも、年長けたる人は、さま〳〵の經驗はた耳學にも富みたれば、默してかなひなば、言少きに若かず、言多ければ過多く耻多ければなり、君子は容貌愚なる如く、良賈は深く藏めて空しきが如くすと云へば、たとひ智慧多かりとも、自ら人に示さんとするは、すぐれておろかなる心ばせにして、厭ふべきふるまひにこそ、

◎人のよき事したらんをほむることあらば、かならずいましめのことをば添ふべし、あしき事したらんをいさむることあらば、かならずなだむることをば加ふべし、いましむればほこらず、なだむれば善きにすゝむ、とわが高祖登庵の君はおふせられき、まことにさることになん、

◎事をはかれば、心をこめて智惠に導き、過を認むれば、ひそかになだむてふ情ある人、誰かは慕はざらん、かゝる人、只長に之をひそめて、必その功にほこること勿れ、ひそかに敎へ、ひそかになだむとも、忽ち人にむかひて、我こそはこを敎へたれ我こそはこをなだめたれといはゞ、敎へられし人面なく、なだめられし人、心に耻づ

◎施は報ひ難しと、人のいひけんは、實に異なりかし、孝道を説かん人、世にあまたあれども、其言を食まざるもの、いたく稀なるを見ても、其他推して

知るべし、すべて人の恩を施すや、おほむね恩を利として、報を待つ者なり、只父母の子を養ふは、實にしからず、その什一の報を得ずとも、敢て恨むることをなさず、されば、たまゝゝ其子が報ゆる涓埃の孝も、其意をみたしむること、大牢の食にすぎ、其悦び深からしむること、王侯の富を得しにも超ゆまいて此より上なるをや、凡そ孝の道たる、其旨一にして、百の變化あり、幸うすき境遇に立ちて、勞すること極まらば、其孝夙にあらはるべけれど、いかにこれのみを孝といはんや、安らけき家庭にも、はた其父母と離居するにも、皆これに適ふべき孝道の類はありけり、げにこればかりたふとく慕はれて思ふ毎に己を愧ぢしむるはあらねども、わきてそがいとまめやかなるふるまひを、書の上にもあらず、人づてにもあらず、正目に見てし時は、涙さへ留めあへずなん、いつの頃なりしかわが知れる一人の孝女ありけり、世の常ならんには、數々の好めるもの父母に乞ひなどして、憂きてふことのいとぐちをだも知らですぎぬる齡なるを、千里をへだつる地に、父母と離居し、友あまたある身の、あたりきらびやかなる中に立ちて、己れひとり其家の貧しきを思ひて、見ぐるしき布衣をもいとはず、ひたふるに學業をいそしみて、わづかに得たりし黄金は、父母に代りて、弟妹が學事の資、被服の料に充て、いつくしみの深く、心づくしの至れること、母の子を見るに異ならず、いとまあれば、書を其家に寄せて、父母の心を安め、はた物送りなどし、身は寡欲を旨として、一の要なき物をだもとゞめざりき、父母かぎりなく其行を喜みして、人子の孝道、何ぞこれに過んやといふに至りしとなん、其心の潔ぎよき事氷雪のごとく、其よく忍べること松柏の操にも似たり、これ皆孝より生み出せる美德とやいふべき、人若し孝を說きて、孝子に親しまずば、其言ふ所僞なり、孝子わが右にあれども、こを知らざれば、孝をよみするものといはんや、古人の言に、友を見て此に善を知としいへば、得まほしきは、眞にかゝる友よ、

◎酒宴の席にはべりて、年若き女の、言多く容さわがしきは、いと品下りして見ゆる者なり、そうじて年三十に滿たざらんうちは、さるむしろにつらなりぬこそよけれど、いなみがたき時しもあれば、其心得忘るまじきなり、例へば、禮を保ちて侵されざらんこと、言笑よろしきに適ひて、いかめしきにも過ぎざらんこと、みだり酒くみかはしなどして興を助けざらんこと、醉たる人の言を迎ふるにも戲れをもてせざらんこと、酒飲み物多く食べまじきこと、長居すまじきことなどは、其あらましなり、

卑語女訓

桂林女史

◎習ふよりは慣れよ、書畫に堪能なる、音樂は妙を得たる、其他手工演藝に熟達せる等、其極々の秘訣は、蓋しゝに在ることならん、何事につけても、理屈と實地とは常に別物なるが如く、記憶と熟練とは又全く別物なり、頭の人は、必ずしも手の人に非ず學問上の大博士、往々にして實地上の素人にも劣ることあり、何事によらず、一藝に達し、一能に長せんと欲する者、心せでやは、

◎流るゝ水は腐らぬ　肉體常に働けば、肉體は益々強壯となり、思想常に働けば、思想は益々堅實となる、働く者には、麥の飯豆の菜も、珍膳佳肴の如く甘く、石の枕草の褥も、天鵞絨の安樂椅子の如く快よく、働くことをせざる者には、山海の珍味、口に味なく、瑤臺瓊樓も尙且心に懶さを覺ゆ、働くは祈るなりと聞く、げに神は、働く者を惠みて怠る者を罰し玉ふ、人若し之を疑はゞ、試に田舍に行きて見よ、重き鋤鍬を振り上げつゝ耕す野人の、如何に鐵よりも硬き屈强の腕を持つかを、見よ、脛も肘も露はして、畦に耘ぎる乙女等の、如何に健全にして樂しげなるかを、見よ、彼等には、胃病もなく、頭痛もなく、煩腦もなく、不眠症もなし、誰か手の業を賤む者ぞ、手の工程貴きはなく、坐して食ふ程

耻づべきはなし、古き歌にも

養生は只働らくにしくはなし
流るゝ水のくさらぬを見よ

◎他人の振り見て我振り直せ　善き人の善き振を見ては己が振の手本となし、惡き人の惡しき振を見ては、己が振の戒と爲す、起居、動作、言語、挨拶、家庭の模樣、子供の躾方等、聊かたりとも、修德の心掛ある婦人に取りては、如何なる社會も、皆以て自家修養の利材好料とならざるものあるなし、去るを徒に他人の缺點のみを擧げて、口喧しく、品評する抔は、誠に見苦しき極みならずや、然るに世間には、往々自分の事は、他人が云ふて呉れるから抔と申譯けて、高慢らしく、他人の垢を吹聽する婦人あり、おこの至りとや言はまし、

◎子に迷ふ親の眼なし　兎角迷ひの雲は眼を遮ると見ゆ、戀に迷ひて耻を忘れ、慾に迷ひて義理を忘る小供の愛に迷ふ親も、亦分別の眼を失ひたる者と云ふべし、斯る人は、何事に就きても我子を辯護し、何事に就きても我子を善とす　是却りて子を愛して子を毒し、子を助けて子を殺す者也、愛に溺れたる母の子は禍なる哉、驕傲にして人を賤しむ、是皆其結果なり、父の義、母の愛、造化自ら配劑ありと知るべし、

◎奉公人と鋏　奉公人と鋏とは仕ひ樣にて働くとは先づ適當なる比喩なりと謂ふべし、人は如何なる鈍物と雖も、一度び其主人たる者の恩に感じ、義に咽び、所謂感激する境に到れば、如何なる場合にも、常に誠心を以て事に當り、遂には二つなき生命までも、惜みなく抛つに至るもの也、主婦となり、主人公となり、數多の僕婢を取扱ふ者は、假染にも之を輕蔑して、奴隷視する如きことなく、朝夕膳を並べて喰ひ、恰も骨肉に於けるが如く、萬事に就き同情を以て別けへだてなく、待遇することを得ば、彼等は如何に喜ぶならん、假令身を碎き骨を粉にしても主家の爲ならんには如何で惜まんと思ふなるべし、僕婢の度々交迭する家庭には、何處にか必らず面白

優渥なる英國皇后の兒童教育　善美なる加納子爵の家庭

英國皇后と兒童教育

△親しき監督　英國皇宮のあるサンドリンハムの小學校實業學校は、勿論英國文部省の管轄に屬するけれど、其校舍の改築、擴張、維持するの費用は、すべて皇后陛下の御手許金中より支出せらるゝことになつて居り、陛下は閑暇ある毎に其學校に臨み、授業の模樣を御覽遊ばされ、時々生徒に對して御質問を試みられ又時には授業の一部を授け給ふこともある、此等の學校の生徒等は、毎日陛下の思召より出でたる特別の制服をつけて、通學するのであるが、殊に女生徒の外套は、皆一樣に深紅色なので、是れが村人の素朴なる服裝の中に立交りて日々になかしき朝夕の眺めとなるのである ところで、兒童等が愈々小學全科を卒業すると、兩親の事情が許すならば、大概實業學校に入らしむることゝなつて居る、此實業學校は陛下が特別に心を掛け給ふもので工業教育の旺んに行はるゝ陛下の故國丁抹の風を悉皆此處に移して、英國固有の風との調和を善く計りたる模範的工業學校なのである、されば其卒業生の成績も英國にある許多の工業學校中、常に其優位を占めて居るのである、今其男子部と女子部の模樣を一寸話して見やう、

△女子部　此部の特色として誇るところは其模範臺所である、此處で普通の家の膳に上すべき調理方も敎へらるれば、又將來富人の家に奉公したる時の用意にとて、其贅澤なる食卓を賑はすべき結構なる料理法をも修め得ることゝなつて居る、是れに次ぐ者は裁縫で、即ち裁つこと、組合はすこと仕上げをなすこと等、充分念入に敎へられ熟練なる裁縫師になり得る仕組になつて居る、元來皇后陛下は、極く同情に富んだ方で、人の性質が職業に對する適不適を判別するには、極めて早き眼を有つて居らるゝ、それでもし女生徒中で、或仕事が其者に適せずと見給ふならば、直ちに其性質に適し、健康に相應する他の仕事をさすやうに絶えず注意せらるゝので、同じ裁縫を學ぶ者でも、商家に入りてよき地位を得るもの、又自宅にありて仕事をなし得るもの、いづれにもよきやうに修業させるやうにする、其他刺繡、毛糸の編物、機織糸を紡ぐ事等又盛に奬勵せらるゝのである、別に糸を紡ぐ工場に丁抹の國旗を結付けた一の紡車がある、是は皇后陛下の御所有に屬するもので、陛下は時々此紡車に坐して學術の旨に叶ひたる方法にて、其車を動かし其手本を生徒等に示し給ふのである、なほ陛下は糸を紡ぐ事のみならず料理、裁縫、編物其他何方面を問はず、優れた技倆を有し給ふ方であり、優に學校の總教師となられて差支が無いのであるから、折々生徒に與へ給ふ注意は、奈何程彼等を裨益しつゝあるか計り知られぬのである、

△男子部　此部では大工、指物、彫刻、繪

物等の技術を主として教へて居る、學校の設備及教授方法は、すべて近世の發達進歩せる學術的方法の粹を抜いたもので、其生徒の手になりたる製作品の評判も、實行も頗るよく、仲々技倆の秀れた者が續々輩出する、其卒業生は何時でも宮内省に奉職し得る便利を與へられつゝあるが、隨分民間に出で、自家獨立の地位を造りて、豊かなる生計を營むものも尠くない、殊に皇后陛下は女子部と同一の興味を、男子部に有し給ふて、屢々生徒等の間に交りて、其製作品を品評され、始終奬勵の言葉を賜はるのである、

家庭の摸範

加納子爵の四人の令孃達が嚴格にして新趣味に富める父の子爵の薫陶を受けて、毎年の長途旅行に獨立的精神を養ひつゝあるにても知るべく、幾百の華族中にて家庭の摸範と稱へられ、家庭の趣味も亦格別なるが中に

△家庭懇話會と云ふ面白き會　の毎土曜日に開かる、慣例にて、其組織を聞くに、先づ子爵久宜氏と令夫人とを名譽會員に推薦し、嫡男久朗は會長に、令弟久憲は副會長の地位に立ち、其他四人の令妹を始めとして、下婢下僕に至るまで皆同一の資格を有する會員たり、毎土曜日の午後七時より一堂に相會して、演説會を開き、辯士は豫め抽籤にて四人づゝ定め置き其選に當りし辯士は交る〳〵立つて演説すれば、殘る會員は傍聽者の義務として、一々立ちて批評を試みざるべからざる事とて、時に或は主人の子爵の演説を、下僕が起つて滔々と批評することもあれば、時に或は若樣や、孃樣達の演説を、下婢が思ふまゝに批評する事もあり、茲に至つて、上主人なく下從者なし、誠に

△平等無差別の樂天地　は此の處に見る事を得べく、又折々大會と云ふものありて、附近より令息や令孃の學友や父兄を集むるなり、會員の中にて若し旅行などして歸り來りし者ある時は必ず土曜日の晩に家族、下婢、下僕一同の前にて一場の旅行談を試みざる可からず、恁くて、過般も日光より歸へられたる四人の令孃達の旅行談ありたるよし、家庭の狀態斯る次第なれば、夫れにつれて萬事萬端一として、規律的ならざるはなく、此の頃にては、朝は午前五時十五分のベルの音とともに起き、晩餐後毎夕六時までは必らず子爵の談話ありて、令孃達は七時三十分に臥床に入るを常とし、子爵は十時に寢室に入り、續いて下婢家僕の寢に就くが日々の規定なりと、されば四人の令孃達が平素華族女學校への通學も

△衣服は木綿筒袖　と一定し、靴の磨き掃除の如きも、決して下婢や下僕の手を借らず、何れも自分々々に其勞を取るべしとは常に父の子爵の嚴命にて、其質素なる服裝にて、下田學監も太く嘆美し居れり、又一月の學校用品は鉛筆何本、筆紙幾何許と定め、其以外には毫も徒費する事を許さず、又學費小使に至るまで夫人よりは直接に與へず、嫡男久朗先づ母より受取りて更に之を令弟と令妹とに配當する事、これ亦家憲の一にて、他の家庭には多く見ざる所、その兄弟姉妹間の睦しき事、他所の見る眼も羨しく、實に麗しき家庭の摸範にこそ

からぬ所あるものなり、家庭の清濁を方寸の裡に握れる主婦の責は、決して輕しと言ふべからず物も言ひ樣卵も切り樣、

言葉は、或る意味に於ては、心の姿なりとも云ふもよからん、品格志操身分職業大抵は其人の言葉の振りに寄つて、其一斑を窺ふを得べきものなり、特に會話の巧拙は、婦人の身に取りては、少なからぬ關係を有するものゝ如し、實に婦人は交際界の花なり、されど、婦人の花は其心の奧にあり、心の花は其言葉に顯はれて、彌や香ばしく咲き匂ふものなり、社交の事は暫く措き、小なる家庭の裡にありても、言葉の美なるは、何となく床しきものなり、吾人は屢々茅屋の家庭に遊びて、其情愛の甚濃やかなるにも似ず其言葉の餘りに鄙しくして品なきを遺憾に思ふこと度々なりき、言葉は大なる調和力を有すると同時に、又大なる挑發力を有す、物も言ひ樣とは此事也、言葉の習練も亦婦人たしなみの一たることを失はず、

言葉に就ては言ひ度き節かず〳〵なり、されども言葉の垢を笑はれん事を恐れて、謹みて玆に止めむ、

◎負うた子に敎へられて淺瀨を渡る　某詩人の歌ひし如く、げに小供は大人の父にぞある、小供ほど多くの感化力を有し、小供ほど多くの學ぶべき點を持てるものは、恐らくは他に多くはあらざるべし、我等は常に小供を敎へつゝ、小供に敎へられ、冥々の裡に、小供に導かれて、知らず〳〵人生の淺瀨を渡り行くものなり、げに小供は大人の父より、敎師なり、小供のある家庭は福ひなる哉、倘此事に就きては、題を改め記すことにしよう、

薔薇日記

紫陽女史

一

靑葉に暮れ行く春を惜しみて、愁思濃なる墨堤のほとり、詩を思ふ人もあらん此の頃、我が茅屋に吐、

軒もおほはるゝまでに紅白を競ふ花薔薇、心ある人に見せなむ、自然にも、花にも酔はん、

二

容貌美くして、心いぎたなき婦女の模型なりなど、いひきらはれし此の花、何時の頃よりか、人皆の愛で初めし今は大方の乙女の頭髪にかざられ、手に愛でられ、進みては最と甘き『愛』てふ言の葉の無聲の文字とまで尊まる、見たまはずや、神の御使の手に足に美しう畵かれたるは、大方此花なるを、我も又何が故にて此花をなつかしむか、しらず、我は只だこの花の、ほかの花にまして、詩神のかげの宿れるをしるのみ、

三

はつ夏の月、いとあはれなる夜、親しき友のみまかりたまひて、我は一夜、通夜をなしぬ、緑の色深う茂りあへる園生の、彼處、此處に、露を含めるしろ薔薇の、靜なる月の光に照され、微なる風の音につれて、吹き送るそがえならぬ香に、我又我ならず、世の累の我より逸し去らんとせる折しもあれ、彼方の小窓より、幽にひゞき來る歌の一曲、そも誰のしらべぞ、人靜まりし此の夜半、彼の人も我と同じき此夜のさまにやうたれたまへる、あはれ／＼、我、此の夜半の何時までも、忘れがたくて、麗しき薔薇の夜として、記しおきぬ、

四

夏の空の色も美しき日、二子山の麓まで上る、此處よりは湖水もはや近しと、暫時いこへば、人もおとづれぬ此の奥山の草蔭に、なつかしや、野薔薇の一本、包みかねたる高き香に、我は遲るゝことも忘れて、暫したち止まりぬ、摘みて枯さんは、心なき業としりつゝも、斯る深山に殘しおかんは、尙心なきなりと手折り來て、彼處の南窓の下に、さし植せしが、今や如何に、

五

淸き小川にのぞみて、洋風の一棟、鬱陶敷迄繁れる青葉のひまより、やゝ見ゆる薔薇の花壇、淡紅と、

白と、眞紅と薄き黄と、交りて咲けり、隔つる小川のなくば、そと入りて遊ばんに、さるにても、不思議よ、花影よりきこゆるやさしの御聲は、たしかに我等が覺ゆる御聲よとかたり合つ丶すゝめば、何處より來ましけん、老師の君だちの、不意に我等を驚かし給ひぬ、見まつれば、さきに我等がうちやみし薔薇は、胸毎に飾られたり、乞ひうけて、おし花となし置きたれど、今は色あせて、香もなくなりぬ、されど、其時のうれしさは永遠に、

六

嵯峨より平野神社に行く田舍路、春は青葉に暮れて緑にかこまる丶里の一つ家、小川にそひて今を盛りの花うばら、丈高くまとはせて、垣より垣にまで廣がりたる、其ぬしの心のほど、思ひやられてさしのぞけば、わざとならぬ文机に、同じばら一輪、讀みさしたらん書を守りてありき、ゆかしき此の家のぬし、今にも知るよしのなくて、

七

一日の遠足に、意氣地なく、勞れし足ひきずりて、やう／＼に歸り來し夕ッ方、摘み來し花も、蝙蝠も其處に投げすて丶、室に入れば、美しや、薔薇一枝『先程歸り候、これは御土産として、姉上樣に進じまゐらせ候』とおぼつかなき、筆の跡、思はず、手にとりて接吻しぬ、眞のやさしき此の愛には、足の勞れて、とみに癒えし心地せられて、

八

ふり續きし五月雨、今朝は名ごりなく晴れて、露冷やかなる芝生の上に紅と白と、白と紅と、亂れ散りて、又一入の美しさを裝ふ、友の、紅の花片とりてなげ給へば、まけじと、我は白きをとりぬ、斯して現世史の薔薇戰爭は、此芝生にひらかれ、『蘭カスター』家ならで『洋ク』家は勝利を得たりき、

九

今朝、思はずも美しき此の花得てしかば、病みませる友の御見舞にと、面白き歌書きつけておきしに、不思議や、いまだ我文机におきしと見し花の、何時

の間にか笑ひやさしく、友の枕邊に我をむかへてあらんとは、問ひまつれば、我の是の花と同じ花を得てしなりき「我より御見舞に送らんと思ひしものを」と語る恨み言のをかしとて笑つぼに入りぬ、

十

あはれくり返しごとの多き此の花、暖かき春の夢さめて、憂欝の人、多涙の詩人が、一人つよき愁想に苦む時、慰めんとてや來る、されど〳〵多くの人は汝によりて猶まさる愁を覺ゆ、さらば汝も亦罪深き花なるかな、

おもひ寐

紫菫女史

あはれをとめて故郷に、わが枯らさじと、殘し置きたる撫子の、いとし可愛の二人の稚兒、今日此頃は如何にかすらんとぞ忍ばるゝ、夏の暑さの堪へがたくとも、定めなき潮風に、朝夕膚を曝しなば、冷入りて腹や痛めん、あらがねの土砂も焦げん許りの炎天に、ものをも被らず、傘をもさゝで、長くな遊びそ、目も昏み行きて腦や痛めん、去年送りにし腹卷は、幅廣く縫ひたれば、去年にもまして、今年こそ用には足らぬ、家の後は、日影多かれば、其方にゆきて遊びなば快からん、わが心に勝りて、其許たちをはごくみたまふ祖母君の、想ひ惱みて煩ひ給ふにはあらねど、今年に去年はまさり行く老の坂道けはしきに、登り苦しき息を肩に洩して、ひまもなくいそしみたまふ日々夜々、甲斐なき妾を疎ましうしたまはで、殘し、稚兒も、父親に、後れ、母親に忌れられにし孫ぞと傅りたてたまふありがたさ、折に觸れては、一しほ淚もくはゝりて、すさびにたまふ八ツ時の菓子の餅も甘きに過ぐることあらずやと、思ひすぐしせらるゝほどぞはてなき、

いとしき子等よ祖母樣の御留守の閑とて、馳け入りて、厨の下なる水瓶の汲みための水な多く飲みそ、御堂の陰の涼しとて、筵敷きて遊ばんはよけれど、

階段の上の敷石の平たきを嬉しがりて、上にな登りそ、見よみよ、敷きたる筵もろともに轉び落ちなん心してよ、門の北なる石の階段幅狹くして、見上る許り高きが上に急しきを、ものともせで登り下り、あやうげなる振なせそ、外に善き遊びはなきか誤りて足踏み外しなば、悔ゆとて如何にかせん、かくては、生命もなからんものを、

思へば遠き故郷の臥牛の山にも、巴の海にも、あるときは人足繁き新道の夜の市にも、風靜かなる公園の摺鉢山にも將て行かましを、水清らなる吹上の池のあたりも逍遙はましを、われ其許たちと共に居らましかば、兩手の花といつくしみて、此月の八幡祭の御社には伴ひ行て、歸路の袂には、姉には酸漿、弟には風船買ひて予へんに、それも甲斐なし、われ其許たちの母は、何思ひてか獨り旅、鳥が啼くてふ東の空に詫すまゐし、離れがたき其許たちと別れ居ては、花の盛りも樂しからず、此處にすさふも、はや二年あまりとなりぬ、今年の夏はとく行きて、母は君の御心やすめ奉り、また其許たちをも訪はんものと、待ち明かしたる月日は早くも過ぎて、時は來ぬれどなか〳〵に、思はぬ事のみ、人の上我身の上に茂り來てさま〴〵の、障ることのみ多くなりぬ、女の兒は温雅とはいへども、六歳にもならはぬ姉に、三歳にもなるやならずの弟の、むつかり盛りの徒事に、わが母なる祖母樣と、朝夕をかしさいなみて、いかに苦しめたまふらん事のいとほしさ、せめて二人は大人しう、中好う睦び戯むれて、樂しき時を松浦の、浪風しげき祖母樣の胸の疲を、片時だに息めたまへ、

訪はじと思ひあきらめて、見る月影は淋しかりけり

晝の間は涼しき木陰をさまよひつゝ、風を容れんと立ち寄りしわが足許に、拔き棄てられし母子草、草さへ花も咲そふを、草にも劣りし我身なるかな、あやなくも浮べる母の面影は、少し上氣せし御面に、思ふ事なげに快う笑ひ給へる聲もして、傍らさらぬはらからの二ツの影もうつりけり、あとを見上ぐる

中空に姿も猛き鷲ありて、われ彼の翼に打ち乗りて今此の一時の間に訪ひてんものを、されど、こも思ふ許りのまことにて、絶へて適はぬ僞りの世の實景なりき、

・　・　・　・　・

いつしか廻る故郷の空、雲晴れがてなる峰を前方に見て建てられたる我家のうち、いとしづかなる窓の外面を見渡せば、斜にうちむかふ家居はそも幾とせの馴染にて、あやしくも物ふりたる小窓を僅に打ち開きたる其外壁の一面には、生ひ蔓りたるうつくしの花薔薇、朝鮮ばらの名も高き屋根の上まで覆ひかゝり、あくまでくれなゐなる花の露、滴る雫さへ匂ふかと疑ひつゝ、鼻に塗りたる人もありしとか、こちたきまでに茂りたる綠葉の露のひぬ間は、いとゞなほ映る朝日の影も涼し、母上、あれは薔薇の家とも申さんか、餘りに薔薇の花の美しう咲きみちたれば、おのばらのやの乙娘、近き頃みまかりぬと打ち聞きしが今日は早幾日になりけん、あはれのことよと打ち問へば、それよ、先つ月二十日餘り一日といふ日、何事もなう、常の如く臥せりけるに、俄に樣變りゆきて、五分斗りにて、其まゝ呼吸絶えぬ、年頃つもる病苦のさせたるわざとはいへ、羨ましくも愛たかりける臨終よ、年も二十一といひきといひつゝ、いそがはしげに立ちたまふ母の後影見送りつゝ二十一といふ歳の二十一といふ日に永き眠に就くといふ、事は偶然なるべけれど、物の數の寄る所、また不思議とこそいふべけれど、そゝろ事考へつゝ、ふりかへる後の方は、たゞ眞白なるペンキ塗の小學校並立てる窓の戶も入口も堅く鎖して物足らぬありさま、今は通ふ小兒もあらずなりぬとて廢校せしはつひ昨日今日と聞き及びしに、聞しにまさる寂しき昨日の面影を何處には見てん、折から母は、徐ろに坐をしめて、見よ、此子、昨日今日こそ、斯くも起き出で、外面にも遊び出づるやうなりたれ、先の日何なりけん忙しき事の他にありし其日より、病み出でけるが、其心遣ひいかなりしか、其方にも告げん

と思ひけるに、斯くも怠り行けば、告げで止みにきされど僅のひまに、この肉の瘦せ落ちし事よと、頬のあたりを打ち眺めつゝ、はや涙さしぐむを、脆くも支へあへぬ一雫、如何なる熱情のそはるらん、辱なくも有り難き母の心は、酌みてぞ知らるゝ、妾は胸も搔き亂れ、側についてゐたる子を見れば、程長き黑髮を搔き上げえせで、物うげに振り懸りたる額越しに我を見上ぐるいぢらしさ、赦し玉へと抱き上げんとする途端、遣戸の蔭より走り來れる小猫の、何物に驚きてか、キヤツト叫べる一聲に、やがて目覺し弟のすがた、あやしきまでに目を見張りたるがやがて其目を細うして、眠れるごとく、笑み傾むけて、笑へる顏容愛らしく、顏赤うして、轉ぶが如く母樣と走りつくよと見えにしは、是なん、さめて悔しき、思ひ寐の枕に契る、夢路に生ふるあとなし草見るまに果敢なくも枯れしぞ怨み深き、昨宵一夜、月を浴びたる紙障子の半打開きたるより通ひ入りしか、朝風ぞく〳〵と身に浸みぬ、まだ露深き朝空は幾夜々々の星の影をうつしきて、殘れる光は、二ッ三ッ、東叡山の鐘の聲、昔も今も長へに諸行無情と響くなり、曉いそぐ群烏、何をか家の簷に見て、聲喧しく異なくらん、夢と知りせば醒めざらましを夫は小町が戀の歌、是は子故の夢の跡、

くり返しまたもたづねん獨寐の
　夢にのみゆく故鄕のそら

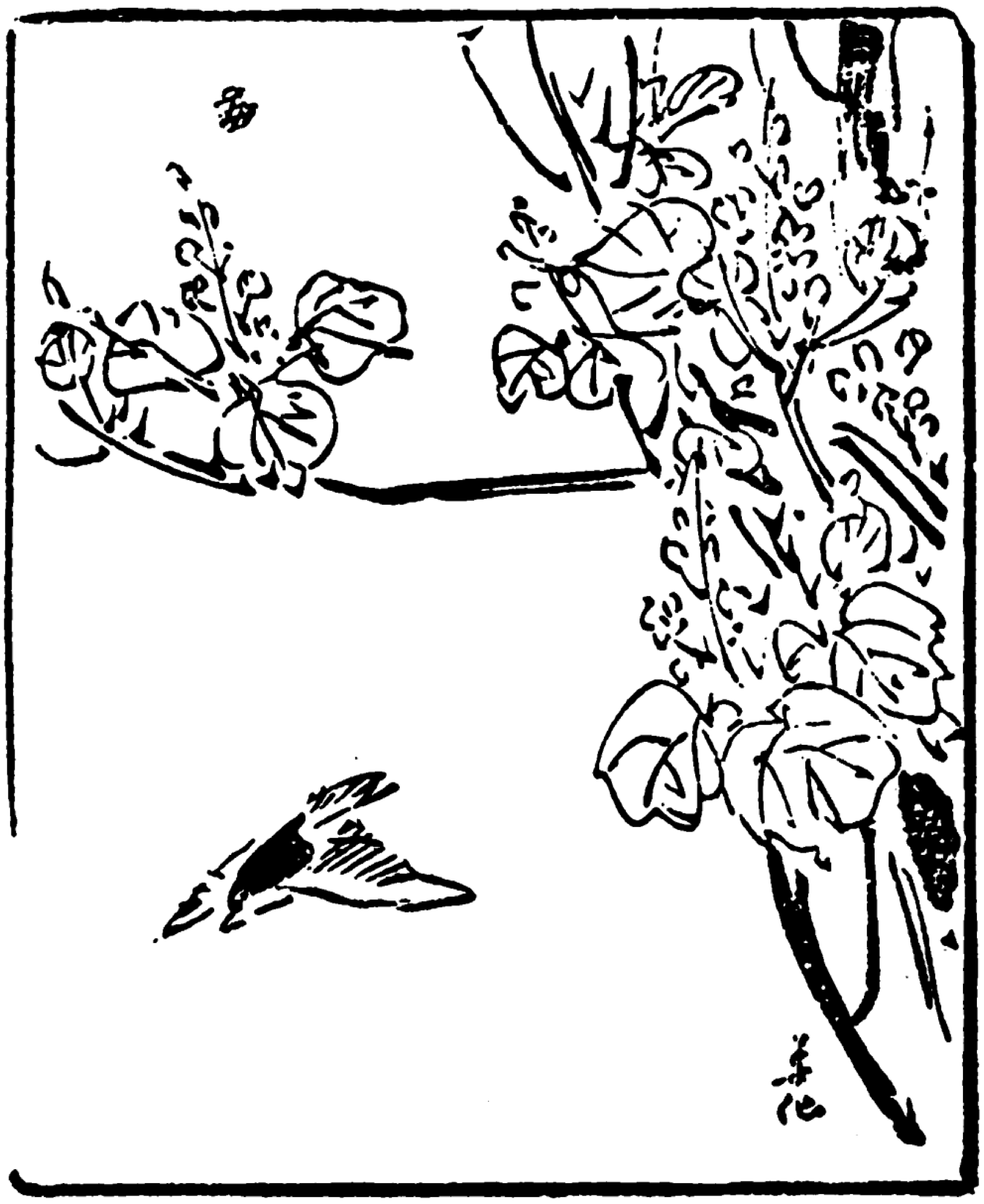
八重やまぶき

空山女史

一

水無月の四日、己もと學びの庭にすまひし給へる君がまかりしに、あまたまらうどときたり合せてければ、艸々と交ふるもの語りにも、一入の味をぞ添へける、四方八方の噺の末にてありき、ふと世の中の事柄にいたりしに、かたへの君、さるものですが秘密の傳なりとて、金銘の術よろしく三うんを心かく

べし、一に運、二に忍、三に鈍にして、生れつき怜悧敏達の人なりとも、運惡しくてはかなはじ、又いかほど運のよき人なりとも、その人耐忍ぶ心なくてはかなはじ、又いかほど忍ぶ心ありても、己れを愚者によそほふことあらずば、惡しかるべし、そはよそほふことなれば、利慾のことにかけては敏にし、金錢を費すことにかけては、態と心たりぬ樣をして人を欺くを云ふ、げにことわりにては侍らずや、と述給ひぬ、あはれ、世はいつの間に、金錢の世となりしか、もとより地獄の沙汰もなどの諺もあればやみなん、されど、我は常に金錢の軛より脱して、己が身に金錢の價値をひくうせしめんと思ひ居れり、など云ひければ、傍の君たち、大聲に笑ひ給ひて、氣樂なることな云ひ給ひて、今かゝる言の葉もうし給ふは、金錢に不自由なき父母の懐を出で給はぬが故なるべし今に年を經て妻子を設け給はんに、いかで金錢のこと思はざるべき、あはれ妾等も、今一度御身が如き年盛りの身にかへりてみたらんには、いかほどかうれしからんものをと異口同音にそゝのかし給ひぬ、あゝ我言の葉を信じ給はず、我が年の四五の坂越えぬとてか言ひ給ふや、我は金錢を貯へ、金錢につかはるゝが爲、世に出でしには非ず、など言ひにき、されど我は、爲して能はざるものなしてふ一の眞理を得ぬ、これ空山、年々ためし見て、こ



の言の葉の眞味を知りぬ、世の中のこと誠意これをつとめなば、如何なる事もなしとげみん、我はこゝに道を悟れり、總じて我が前途は遠し、達すべき所は、果よく實れる樂園なり、樂園は我が前にあり、など聞き給ふ君すらなきに、我はこぼしぬ、一人の君云ひけるやう、妾等年老いて杖つく頃、御身がもとに尋ねゆき、一夜の宿をもとめんに、我な拒み給ひそ、さればその頃は、おん身金錢のくびきを脱し給ひしときなるべし、さすれば、風流の道したひ給ひて、山に住み給はんは、云はずもがな、妾等の尋申さんに、ふるまひ給ふは、栗のゆか、住居は九尺二間のあばらやか、戸を掩ふ紙かふべき料なしとて御手製の萱戸か、内職に鞋をつくり給ひ、市に出してこを賣りつゝ日を送り給ふか、など、賴母敷からぬ艸々ならべ給ひ、さては己々腹をかゝへて笑ひ給ひければ、我も亦ともに笑ひぬ、たとへかゝる、味なしと思ふ日を送らんも、金錢の爲に、その身をからめられ、又は人の勞して得し利をしぼつて、その日を送るやからよりは、却りて樂もふかく、光風霽月の閑は、大かたこのうちならでは宿らざるべし、されば云ふをやめよ、たとひ金錢の軛を脱したりとて、かゝる目にもあはざるべし、それ報酬は天地の間、必ずあるべきことにして、勞してその慰勞に足るべき報酬を得るは、當然の事なり、もし我に得る所の財あらば、須くこれを妻孥に委ね、我はこれに關せざるを云へり要するに我は水淸き常北の山人なり金錢のくびきを脱せんが爲、都の塵界を去りて、故園に歸らんと欲するの情切なり、されど、こは出來得べきことならず、如何となれば、神の己に命じ給ひし業は、却りて塵の都に在らざれば能はざるなり、故に我は、故鄉のしづけきに艸の庵を營み、歳々通ひて神を慰むれば足れり、など、話もいつしか枝葉に渡りしが、夕ぐれ近くなりければ、私も間もなく暇つげて歸りぬ

二

怠りがたき病の爲にや、この四五日は、心地あしく

て、一人鬱々として日を送りぬ、たま〳〵知る人のもとに行き、心ゆく君たちと物語りするに、心も天にあくがるゝばかりうれし、今宵も嬉しさかぎりなかりければ、我は住家に歸り、室内をそゝろありきしぬ、いつもながら、物思ふ心のたえぬ、我なれば今日はわきて慾にそみし世の中の事どもをにくみ、獨言をもらしぬ、あゝ世も季となりしか、新聞のふりかなあてに、雜報みまさぐるうからやからも、金錢の威光には、その男眼に一種の光あり、心にかはりある人のそこに、その光とゞまるべし、あはれ金錢は、これを貯ふべきものなるか、よし貯ふべきものなりとするも、用るべきに用ゐず、費やすべきに費やさずして、やぶさかにしたらんには、ア、その貯は、たゞ人の血を絞るのみにとゞまり、人を救ひ人に施すことをなさずして終り、その人死る時は、熱を病み必ず氷を嚙みて死するに至るべし、聖なる敎につくなれる同胞よ、財の爲に心を勞する勿れ、又幼なかりけるとき、學びの庭に行きかよひける友に某々など云ふ人々ありたるが、今はいかになし給ひしか、つれなき我身のやつれしに引かへ、嘸かしすこやかに樂しくおはしますらん、故郷の君たちはつゝがなきか、ア、今頃歸りたらんには、懷かしき豆の花さかりにひらきて、我を迎ふるならんを、ア、歸らん哉、と我歩行もためにものうくなりぬ、たま〳〵かたへより器をとり、快壯の曲を奏づるに、悲しみ心あるが故にや、その音も自然にかなしくなり、おのづから袖ぬらすやうに覺えぬ、思へば遠き故郷に、只獨り歌このむ君のありけるよ、あゝ彼の君に、この曲きかせたし、今年故郷に歸らんには、この樂器もともに携へ行きて、かの君がかきならす十三絃に合せ、又この曲を是非きかせまし、過つる月、我歸るさに、新にあらはれし『都の春』てふ曲を君にまゐらせたるに、君には、終宵かきならし給ひ己が京に上るときには、ふしおもしろくかなで給ひき、など、心を種々にめぐらすうち、さる文學に名だゝる君の席ありけりとて、立寄り給ひたれば、相

ともに淋しき文の壇の話などし、さては書、音樂のことどもとり〴〵に語り合ひ、打寬ぎて晩酌の微醉にたのしみ、九時過る頃ほひ己が物したる美の神の壽を携へ、再會を期して牛込の寓舍に歸らせ給ひぬ。

俳人千代

坪内華外

◎千代と俳句　婦女子にして古池の閑寂を慕ひて、十七字詩に心を寄せて、其妙境を極め、後世風流雅致に名聲を傳へしもの尠からず、加賀の千代、勢州の園女、丹波の捨女、江戸の秋色、近江の智月尼、伊賀の梢風尼等、各々俳壇に幽妙赫々光を放ちたるなり、其の中にも千代女は別けて世人の激賞感歎を引き、貴賤老若となく能く其盛名を知り、俳聲の人口に膾炙されし傑吟に、他の俳女より其數多きより見るも、千代女は獨り他の女性俳人中より、一際拔き出でし女性俳人たるや明なりとす、

◎千代と家庭　千代女は元祿十五年出生にして、幼名を「ハツ」と云ひ、父を福增屋六兵衛と云ふ、加賀國石川郡松任の驛に、表具師を常業として、漸々糊口を凌ぎ得るの貧家なり、然れば千代女は、幼時より家事の手傳に忙しく敎育を受くるの暇とてあらざりき、

◎千代女出生と其當時の俳界　松尾芭蕉翁逝去されしより十年に近く、寶井其角、服部嵐雪、は東都に、各務支考は美濃にあり、東國俳諧行脚として鯉屋杉風、西國行脚として向井去來あり、其他上島鬼貫、小西來山等、各俳壇に旗を飜し、未來の俳豪谷口蕪村、龍門、曉臺、橫井也有、等世に出んとする俳界隆盛の時運に產聲を揚ぐ、

◎千代女と盧元坊里紅　千代女は幼時より俳句を好めども、加賀の僻邑にて、敎示を仰ぐの師なければ、出て良師を求めんとせし時會々俳士盧元坊行脚して、松任の驛に來りし事を聞きて、喜び駈せて旅舍を訪ひ、俳句嗜好の志望を陳べて敎を乞へり、盧元坊は直に之を許し、折しも初夏の候なれば「時鳥」の題を與へて、吟句を命じぬ、千代女は熱血を絞りて思考曉に及び、里紅は眼覺めて、咏句如何にと問ひければ、千代女

時鳥時鳥とて明けにけり

と、里紅枕を叩いて、是なり、と贊嘆措かず、即ち師弟の約を結びたり、

千代女の許にて里紅に句あり

涼風の配りや萩の亭主振り

◎千代女と支考　千代女は、其の後各務支考と交際深く、支考に就きて敎を受け、俳句の智識を得たる事少からず、支考は芭蕉翁十哲の一人にして、美濃派の元祖と稱やらるゝ人なり、支考千代女の許にやどりて時句あり。

　なしむなよ芙蓉の陰の雨舍り

◎千代女の婚姻　千代女は頓て妙齢に達したれば金澤市の表具師福川彌八に嫁したり、其輿入の日、初めて良人に見えて句あり、

　澁かろか知られど柿の初ちぎり

◎千代女良人に離別　千代女嫁して七年の後、良人彌八は不幸にも病死せり、其の時千代女に句あり、即ち

　起て見つ寐て見つ蚊帳の廣さかな

と死別離別の悲哀思ふべし。

◎千代女愛兒と死別　千代女には男兒一人ありしが、良人の忌中間もなく續いて愛兒に先立たるゝの不幸に際會せり、

　蜻蛉釣り今日は何處まで往たやら

　破る子のなくも障子の寒さ哉

親子の愛情眞にせまりて、涙胸襟を濕す、

◎千代女の剃髮　千代女は良人に別れ、愛兒を亡ひければ、松任の實家に歸る事となりぬ、其翌年剃髮して、圓頭方袖に姿を變して清淨貞操を守り、素園又は妙林と號し、俳諧に樂しむ事殆んど五十年に近し、

剃髮の折に句あり、

　髮を結ぶ年の隙明いて炬燵かな、

◎千代女と中川乙由　勢州の俳人、乙由の名聲を慕ひて、文通交際を結べり、或時乙由よりの文の端に、

　花さかぬ身は靜かなる柳かな

とあり、同時に出で同時頃に兩庵に到着せし千代女よりの文の端に

　花咲かぬ身に狂ひなき柳かな

とありたりと、

千代女は乙由の句を見て、思想に於ては吾が句と同案、同意なれども「狂」の一字「靜」はこに及ばざる所遠しと大に嘆賞せりと

◎千代女と繪畫　千代女は繪畫を好みて、越の梨後朋を師となし就て其極を究めたり、千代女の繪畫は可今澗多かりしと、

◎千代女と千代尼句集　千代尼の集は無外庵の編輯にして、京都の俳人閑東の序文を書かれし、千代女六十二才の生前に於ける句を集めたる書物なりと、

◎千代女と玉藻集　玉藻集の序に

「花の都の花にも月にもなれし風流人の、いにしへに名ある女の美しき句を集めて、玉藻集と名付け、櫻木にちりばめんなり、されば我れに此のはし書ませよとの勸めに、いなみ難くて、三せのやも子の枕をあげかの何むしの還ふごとく、いづる恥みふかきながら、筆染めぬる頃は、やよひの初めなりけらし」

と書きたりしは、千代女にして六十九才の高齢、老病の床にありし時なりけむ、玉藻集は寛永二年谷口蕪村、女流の俳句を撰校して一卷となしたる句集なり、

◎千代女の死亡　千代女は病痾に苦む事五ヶ年にして、安永四年九月八日七十四才に歸らぬ旅路に就かれたり、辞世の句に、

　月も見て我は此世をかしくかな



東京裁縫女學校

舜水女史

兎に角に、今日の所、女子技藝の第一に數へられたるは裁縫科で、裁縫を知らぬものは、女子の一員たる資格のないやうに思はるゝは、これも我國女子の美風として差支あるまい、されど裁縫の教授所は、多くは品格の卑い、前垂掛の男仕立屋と、なかば劇場の廣告屋なるお針屋であつて、苟も心あるものゝ子女を學ばしむるに足らぬものゝみであつたのは、さほど古き話ではなく、今も其處此處にその面影をとゞめて居るのであるが、斯る中に、裁縫術に於て幾多の發明をなし、教授法をつくり、如上の弊風を一洗して、裁縫術に重きを加へ、教授所の面目を一新した、其卒先者は、殊更に云ふまでもなき、渡邊辰五郎氏で、同氏の經營によつて、今日の盛大を見るに至つたのが、東京裁縫女學校である、

渡邊氏が今日の成功を見るに至つたのは、なか〳〵一朝一夕の話ではなく、現時日の出の勢を以て繁昌を極めたる、女子共立職業學校の如きも、氏の計畫に成り、當時本郷元町にありし同氏の宅を校舍として開校したものである、その後同校は神田錦町に移り、又今の一つ橋に轉じたのである、

同校は氏が裁縫の爲に大なる功績を擧げられた壇上で、同校の設立せらるゝや、氏は令閨邦子と力を協せ、刻苦勉勵、毎夜五更の鐘を聞くまで夜業を勵み、深く丹精を凝らし、今日の基礎を堅めたのである、

當時は、まだ洋服流行の當初であつたので、氏は女子師範學校の仕事を引受け、傍ら自宅に於ては、男洋服專門の生徒五十餘名を集め、專ら洋服の裁縫を教へ、且つ注文に應ずる等、非常なる多忙の中に、

廿九年迄職業學校に敎鞭を執り、此間研究に研究を重ね、工夫に工夫を積み、更に大に盡す所あらんとして、裁縫本位の女學校設立を企て、三十二年本郷東竹町三十五番地に校舍を新築し、諸般の改革を行ひ、學科に於ても國語、英語、編物、算術、修身等の諸科目を新設し、校務次第に整理に就き、入學者日に月に加はり、五百坪の新校舍も、俄に狹隘を告ぐるに至つて、增築に增築して、今や四階の大建物に溢る丶ばかりの生徒を收容して居る、

氏が裁縫に就ての經歷の一端を聞くに、始めて婦人服の改良を唱へられたるは氏で、氏は明治十五年改良服に就て種々考案を重ねたる結果、同三十一年に至り婦人改良服指南を著はし、新案を世に公にし、爾來改良説紛々として起り、弘田博士の如きも、氏によつて改良服の廣く行はれんことを望み、氏が種々工風の改良服は、現時女學校の着用せる改良服の魁となつたのである、又雛形式の如きものも、氏の手にて製せられたもので、その考案は、いとも神妙に、半紙一枚にて一つ身一枚、半紙三枚にて三つ身一枚、半紙四枚にて四つ身一枚、半紙六枚にて大人物一枚を作り得るのである、即ち半紙を以て尺を割出す仕方で、此考案によつて敎授する時は、時間と勞力とを省くことを得て、その便利なることは一通りでない、以上は其一端で、斯の如き



考案は枚擧に遑あらざる程である、
而して此校長を戴ける學校は評判はといへば、氏は教育熱心の篤實の人で、勤勉家で、職員の如きも、教頭幹事の如きは、令閨令息が熱心之に當り、教授科目及其程度等も宜に適ひ、品行上の制裁も中々嚴重である、即ち今日多數の生徒を收容し得た所以である、

女子商業學校の卒業式

愛氷散士

三四兩月は卒業式月で、女學校と名の付いた所へは大抵列席するの榮を得たのであるが、其式なるものは多くは千篇一律で、或はその一律なのがよいのかも知れぬ、されど一異彩を見とめて、最も快感を起さしめたのは、去る四月一日擧行したる、女子商業學校の卒業式である、
同校は學監嘉悅孝子氏の經營によつて、創立せられたもので、校長には和田垣博士を推戴し、今回漸く三回目の卒業式を擧ぐるに至つたのであるが、其の成績は授業年月の短きに拘らず、既に見るべきものが少くないのである、
さて今回卒業式の式場はといへば、斯文學會を借りたので、云はゞあはれな有樣で、恰も友達の家で、結婚の式を擧げるやうな感じが起つたのである、たゞ看版のみ大であつて、其成績面白からざるもの多き、學校林立の中に、いざといはゞ家借のあはれを示せる同校が、其反比例の好成績を示せるは、教育界の慶事といふ可く、殊に敬服したるは、かゝる中に規律の極めて正しい事である、
さて式は例によつて君ケ代の唱歌に初まり、卒業證書の授與があり、校長の式辭があつて、それまでは通例で、次は生徒の答辭、形式の侍る的文を朗讀するにはあらず、辯舌爽やかに學校の德と教師の恩を謝し、次に卒業生二名、小切手に就て、米に就て、といふ題下に演說をしたのであるが、それが中々男

の辯士裸足で、よく長時間を來賓に飽かしめざつたもので、小切手と米に就ての智識を得たことを、感謝したのも少くはなかつたやうに見受けたのである而も其の風姿に少しのお轉婆らしき所なく、さりとて人を見て顏をかくす如きではなく、言ふべき事あれば云ひ、行ふべき所あれば行ふといふ顏付、嘉悦氏の訓陶なか〳〵行屆いた所あるのを知られる、次に速算の實習、一列に算盤を持つて立ち、さて教師が「願ひましては」となると、立板に水を流す如く數を讀み續ける、いづれもパチ〳〵と珠を動かす、金と品との置分の如きも、一本の指でハヂキ出すのさへあつて、なか〳〵達者なものである、次にタイプライターの實習、これも誠に手際よく、予は其の一枚を紀念に申受けたのである、

これで式が終り、辨當の御馳走があつた、これは同校の生徒が、當日の來賓に饗する爲、午前三時頃より、これも家借で、成女學校の賄所へ、生徒一同があつまり、米四斗を鮓に仕上げ、それに洋食の料理を添ふるなど、式初まる間際まで働き、それから式へ出て、それが終ると、自分等で拵へた御馳走を、來賓に接待するのである、なか〳〵おすましをして、免狀を持つて氣取つて居るなどの騷ぎではない、さて午の仕度が濟むと、生徒の餘興がある、長唄がある、三曲がある、活人畫がある、英語唱歌がある、それ〳〵隱し藝を演じたのである、殊に異樣に感じたのは、珠算を置いた人、その手で、三絃を彈き、英語の唱歌を唱ひ、その口で琴の地を唱ふなど、まづ多藝に驚くよりは、學校で三絃を聞くに至つたのは、予が多年筆を切らし口を酸くせし理由に合して、實に得も云はれぬ愉快を感じたのである、願くば一歩進んでこの三絃を賤業婦の手より奪ひ、家庭の樂みを作るべき、高潔なものにしたいのである、この日の卒業式は、商賣をして、働いて、御馳走があつて、慰勞があるといふ風に、宛も家庭に在る如き感じがしたのである、

來賓中に村井吉兵衛氏の母堂、阿部泰藏氏の令閨を

はじめ、實業界に名ある人々の夫人を多く見受けたのは、やがて同校發展の聲となるべきものとして、同校の爲に名譽とし、廣く實業家の子女の爲に、大に喜ばしく思ふのである、

華族女學校の改革

去る八日華族女學校は、學習院に屬し、同院女學部と改稱するに至り、從來學監にして而も校長の實權を握りたりし下田歌子女史は、細川校長の辭任とゝもに、其名稱も女學部長となりたり、

◎華族令孃の勉學　前項の如く華族女學校は學習院女學部なる門標に掲け改められしが、去月卒業せし生徒四十六名のうち廿餘名は留りて、新に設置せし補修科に入學し、多くは技藝部を專修せんとの傾きあるのみならず、京都華族にして、同地高等女學校を卒業せし二三の令孃達も、進んで專修科に入るものあり、孰れも妙齡婚嫁の期に達せる華族の女子にして、三年の專修科生となり、規定の學科を修めんとする如きは、女子敎育上近來の進歩と稱すべし、

共立女子職業學校の現況

近來女子の思想向上するに從ひ、美術の如き特種の技藝を習得せんとする者、漸次多きを加ふるに至りたるが、神田錦町の共立女子職業學校の如きは、從來高等小學二年卒業の者は、無試驗にて本科に入學せしめ、乙科は尋常小學卒業生を入學せしめ來りたるも、昨年學期に至りて申込者千名以上に達し、申込順序に依りて入學を許したるより、實力有る者も爲に入學するを得ざるに至りたるが、其結果として、入學の上は學力の平均を缺ぎ、授業上非常の不便ありし爲、本學期より入學方法を變更したり、

▲入學試驗實施　本年の入學申込者、總數六百八十名にて、其内試驗合格者二百六十九名、外に高等女學校卒業生、八十名而して現在生徒總數は八百名

なり、又受驗の際算術の爲め落第せし者、頗る多かりし由、

▲志望者多き學科　同校にては學科を裁縫刺繡、編物、圖畫の四科に分ち、裁縫科は志望者頗る多く、全生徒の殆んど三分の一を占め、是に次ぐは造花科にて、本學期には校堂狹隘の爲め、百名餘の不入學者を出せり、

▲卒業後の生徒　多數は高等女學校、又は技藝學校等の敎員に聘せられ、何れも修得したる技術に依りて、獨立せらるゝも、年若き者に在りては、大抵結婚するとの事なり、

▲造花　此程三越呉服店より、伊太利皇族殿下に捧呈したる造花は、同校生徒の製作に係る櫻花にして、丈六尺許り、臺内に蓄電池及びオルガン等を備へ付け、一たび鍵を動かせば、電氣花心に點じ、同時にオルガン嚠喨として鳴り響く仕掛なり、這は東伏見宮殿下南清御航海の際、海上の徒然を慰むる爲め、御注文在らせられし物と同樣にて、殿下には甚く御好み在らせられたるやに承はりぬ尙ほ來月靖國神社に奉納すべき同仕掛の花籠は、薔薇の花にて、種々彩色せる數百の大花輪に、電氣を點ずる美麗の物なりと云ふ、

▲標本　同校の標本は酒井、溝口の兩伯爵家及び麻布の學農舍等より供給する由にて、標本室には大なる菊花、朝顏、薔薇、月桂樹等を備へありて、宛ら爛熳たる花園に入りし感あり、殊に月桂樹の標本は、東鄕大將に贈りし造花を作る際に用ひし物なりとぞ

珍らしき女學校

名物の櫻も最早散り失せて、靑葉の影流れに映る江戶川の片邊り、牛込區新小川町一丁目五番地に、私立東京家政女學校と銘打つて、河村春太郎、河村外吉、河村久吉、淺村金子、臼井政子と男女五名の標札を掲げたる一構へあり、抑も何者の設立に係るにやと其内情を探るに、其

△校長は女　にて、淺村金子(四十三)と呼び、職員には其妹臼井政子(三十七)其嫂河村貞子(三十六)と母の河村常子(六十)母子四人、百六十名の女生徒を預り教育しつゝあるが、其素性を問へば、

△最悲慘なる歴史　を有てり、元來常子は石川縣金澤の士族にして、同藩士河村吉行に嫁し、春太郎(四十)外吉(三十二)久吉(二十六)金子(四十三)政子(三十七)綾子(三十五)の三男三女を擧げたるが、維新後零落して、良人吉行は同市監獄署の看守となり、常子は古衣の賣買などして、漸く其日を送る中、春太郎は東京に出で、金子は淺村某方に縁付き、政子は師範學校女子部に入學し、夫婦は外吉、久吉、綾子の三子を連れて、遙々上京し、長男春太郎と共に麴町飯田町に一家を搆え、親子六人僅に賃仕事などして、細き烟を立る辛苦の中にも、常子は子女の教育を怠らず、三女綾子を東京府教育會家事科傳習所に入學せしめしが、長女金子は良人を亡ひて、嫁入先より小供を伴れたるまゝ、母の許に厄介となり居るにぞ、生計益々困難なりき、其中

△二女政子　郷里の師範學校を卒業し、小學校教師となり、更に某辯護士の許へ嫁きしが、是亦薄命にして良人に死訣れ、年まだ若き未亡人として上京し、金子と綾子は貧苦の中にも、家事科傳習所を卒業して、姉妹三人茲に教育家として世に立たんと決心を固むるに至りぬ、斯くて明治二十五年の五月頃、牛込下宮比町に樋口米子と云へる裁縫の教師あり、五六名の生徒を其のまゝに他に讓り度しとの事なりしが、此樋口女史は家事科傳習所の教師にて、淺村姉妹とは師弟の間柄なるより、相談忽ち纒まりて、河村母子打揃ひ引移る事となり、其當時は常子の良人世を去りて、母子姉妹何れも未亡人の身の上なりき、然るに爾來校運ますく隆盛に赴き、去三十一年十月今の處に移轉して、名も東京家政學校と改め、本年三月

△家政女學校　と改稱し、百六十名の生徒を收容し、兎に角一個の女學校として、恥かしからぬ設備ある

に至りぬ、是皆老母常子苦心の結果にして、我子に向つて云へるやう、おん身等の育つ頃は不如意の爲とは言ひながら、島田一つ結はせもせず、鼈甲がどんなものか知らせずに居たれど、今世間の娘達を見るにつけ、思ひ出せば親甲斐もなき事なりしよと、述懐談に、涙の袖を絞ることありと、さもあらん、因に記す河村家の主人公たる春太郎氏は、專ら學校の經營に盡し居りしが、近頃は大阪電球製作所なるもの丶主任となりて、彼地にあり、外吉氏は南北石油會社に、久吉氏は軍人にて出征し、去月凱旋して長兄の業務を扶け大阪にあれば、學校は專ら婦人のみにて經營しつ丶ありと、

日本女子大學校卒業式

日本女子大學校第三回及び附屬高等女學校等五回の卒業式は、新築落成せる豐明館、豐明圖書館の落成式を兼ねて、去る一日午後一時より豐明館にて執行せり、先づ君ケ代の奏樂を以て式を始め、學監麻生氏り簡單なる報告あり、財務委員澁澤男は豐明館建築の起源由來を說明し、續て敎務委員大隈伯は成瀨校長の熱心と、學監麻生氏の助力とを頌し、兩氏が終始一貫敎育のために身を盡せるを賛して、生徒の唱歌あり、次で成瀨校長は家政學部惣代北川春枝子國文學部卒業生惣代小林しげ子、英文學部卒業生惣代近藤英美子・附屬高等女學校卒業生惣代野口とみゑ子に、各部卒業生の證書を授與し、更らに告辭する所あり、大學三部卒業生惣代として、英文學部の大橋廣　高等女學校卒業生惣代として南波操の、右に對する答辭ありて、再び唱歌あり、牧野文相の祝辭に、次で西園寺首相の演說あるべかりしも、同相差支ありて出席されず、校長より其由の報告ありて式を終りしは、四時過ぐる頃なりき、尙は當日來賓の重なるは、前文相久保田氏、後藤新平氏、三井男等にして、卒業生の父兄姉妹等列席頗る盛會なりしが、右來賓には、式後茶菓を供し各敎場を縱覽せし

めたり、

若葉かげ

◎女子體操敎育と褓姆　女子敎育界に漸く體育尊重を認められ、頃に體操敎師の需要增し來るも、是れが養成機關としては、未だ甚だ尠く、僅かに九段牛ヶ淵に日本體育會體操學校女子部、向島花月華壇內東京府敎育會附屬體育會女子部、谷中なる東京女子體育音樂學校の三ヶ所にして、學期は六箇月乃至一年半卒業とし、卒業生は小學校高等女學校尋常師範學校に奉職し、月給十五圓乃至三十圓にて、文部省試驗合格者は三十圓以上の月俸にて歡迎せらるれど未だ容易に需用を充す能はずと、次に學齡未滿の兒童保育は、兒童敎育上必須の事なるが其の機關たる幼稚園亦甚だ尠く、全國僅かに二百八十餘に過ぎざれど、是れが必要は、世人の認むる所なれば、將來充分の餘地あり、されば保姆の需用今後頗る多かる可く、現今其俸給は普通十圓乃至二十圓にて、特に女子高師附屬幼稚園に於ては、二十五圓乃至三十五圓なり、而して其資格は尋常小學本科正準敎員、或は女高師附屬保姆養成所、幷に一ッ橋保姆養成所其他出身の者にて、是亦婦人職業として頗る好望也

◎女子師範の入學生　文部省にては、本年度女子高等師範學校本科生文科二十三名、理科二十五名、技藝科二十六名の入學を許可し、去廿日の官報を以て發表したり、

◎女子英學塾　大山侯爵夫人、津田梅子女史との管理せらるゝ同塾は、今回擴張の目的を以て、基本金寄附の勸誘に決し、村井貞之助、上野榮三郎の二氏委員として各方面に運動する由

新樹雨

あつさにもやがてたのむもの蔭なれや
若葉をそめて五月雨のふる

女學校出身者の給料

去る一日卒業證書を授與せられし日本女子大學の百三十四名を始め、女子職業學校、女子美術學校、東京裁縫女學校、其他官立にては女子高等師範の九十八名、東京音樂學校の甲種師範科の八名、是れ等何れも社會に出でゝ、良妻となり賢母となる者多き中に、地方女學校の教師として、赴任する者も亦鮮からざるが、其出身の學校によりて、月給の額に差異あること概ね、左の如くなりと云へり、果して然るか否やを知らず、たゞ消息通の報ずるまゝに

▲女子職業學校	自十七圓至二十圓
▲女子美術學校	自二十圓至廿二圓
▲東京裁縫女學校	自十五圓至廿二圓
▲日本女子大學校	自二十圓至卅二圓
▲女子高等師範(本科)	自三十圓至卅五圓
▲同上選科	自廿五圓至三十圓
▲東京音樂學校(甲種師範)	自廿五圓至卅五圓
▲女子英學塾	自二十圓至廿五圓

以上は孰れも交通不便の地方に赴任する者の相場なれど、琉球とか北海道とかへ赴任する者は、五割方も高しとなり、然れど以上の卒業生にても、東京にてチヨイと雇入れんとならば、先づ二三圓から十圓位までにて雇はる可く、市中の私立小學などに奉職し居る女教師の月給高を聞くに、大概は五六圓にて安きだけ、夫れだけ無責任にて、又腰掛的なるが多し、兎に角是等は一定の規則正しき學校を卒業せしものなれど、更に變則的速成を主とし早く月給を取りたしと云ふ側の夫れは、

▲女子計算員養成所	自六　圓至十五圓
▲寫眞學校女子部	自廿　圓至三十圓
▲女子體操音樂學校	自十五圓至卅　圓
▲秋穗割烹教授處	自十二圓至廿　圓
▲博愛看護婦會	日當五十錢以上
▲東京保姆養成所	自八　圓至十五圓

右の内秋穗割烹教授所以下は何れも雇主方へ泊り込みにて、月給(若くは日當)の外別に食費と云ふものあり、謂はゞ食つて幾干と云ふものにて、割合は比較的好い方なり、然れど何れも短きは二ケ月、長くて一年位の通學して、以上の金が取れるとすれば、

立派な學校を卒業した人より、實に有難き譯なり、そこで更に學問を要せぬ婦人の職業中、何か一番金になるかと言はゞ、今の所は『女髪結』に、次いで『女按摩』なる可く、最も女醫若くは産婆などの收入は例外なり、

こども博覽會

兒童は愉快に育たねば決して大きな人間となれぬ、清新にして趣味多き兒童の娯樂機關の必要なるは、言を俟たぬ處なるが、目下教育學術會が準備中なる『こども博覽會』の如きは、兒童の趣味を增進させ、爽快の感を注ぎ込むに於て、極めて有益なる事業と謂ふべし、此有益の事業は、愈よ來三日より現實にせらるべく、出品物も大方定まりたりと言へば、下に其が成立の順序と内容とを傳へんに、去る卅四年の春佛國巴里に於て、『こども博覽會』開催せられたる事あり、同國前大統領文部大臣下院議長等、之が奬勵者となりて、壯大の規摸目を愕かす會を開かせるが、當時巴里に在りし畫家久保田米齋高等師範學校教授樋口勘次郎の兩氏、此會を參觀して、甚だ有益の企てなるを感じ、日本にも斯るものは設けて、兒童教育に貢献したしとの考へを抱き、歸朝以后も、機會あらば此希望を事實にせんと思ひ居る中、昨年十月頃お伽噺の著述家福田琴月氏と會せる席上談、『こども博覽會』の事に及ぶや、戰爭も終ひになつたし、一つ遣つて見やうでないかと云ふ處より、一同大いに乘氣になり、然らば直ちに運動を開始せんと、先づ協力すべき同志を勸誘したる結果、前記三氏の外帝國大學人類學教室勤柴田常惠博物館員吉浦祐二大日本衞生會編輯關以雄同文館編輯員豊原清作、桑谷定逸、鹽谷壽作、沼田藤次の七氏幹事となり、伯爵東久世通禧氏を會長とし、略ぼ手筈定まるを待ちて、各所の教育團體に參加を求めたるに、何れも其趣意に賛同し、出品の申込をなせるもの數十の多きに上りたり、斯くて愈よ部門の定まりたるが、巴里

の『こども博覧會』は、即賣商品多くして、勸工場らしき處ありしに鑑み、此會は品格を保つ必要より、即賣商品などは毫も列べず、萬事營利的の手段を避け、純然たる教育上の貢献物となさん見込なり、部門の定まれるものを列記すれば、

△體操器械と兒童製作品　此部は樋口氏主任となり最新の體操器械を始めとし、在來の器械も悉く蒐め、製作品には文字、作文、手工品、手藝裁縫品等、主に高等師範學校附屬小學校生徒の優等品を蒐集すべし、次ぎは

△繪畫衣服調度玩具　にて、久保田氏主任者たり、此部には古來の小兒服を列ね、且つ特に乃木大將の許諾を得て、同將軍が少時の衣服、及び擊劍道具なども陳列する筈なり、

△衛生に關する玩具衣服　を主としたる部には、柴田氏主任者となり、兒童の衛生に必要なる諸種の器具玩具を集むる都合なり、尚此部には警視廳よりも多數の出品あるべしと云ふ、

△寫眞彫刻及び繪畫　寫眞と彫刻は、吉浦氏繪畫圖畫玩具にて福田氏主任となりたるが、繪畫の方にては、美術學校の諸教授及び和洋兩畫の各大家兒童に關する揮毫をなすべく、殊に洗鱗氏の揮毫に係る、神代より明治に至る子ども風俗五十圖は、珍らしき見物なるべしと傳へらる、其次ぎは

△玩具製作品住居文房具　の各部にて、豐原桑谷沼田鹽谷の諸氏各一部の主任となりたるが、此中特に見るべきは、住居に關するものなり、此部にては福地復一、松本孝次郎の兩氏の設計せる模範小兒遊戲室を宮内省御用達小林義雄氏に製作せしめて、陳列すべく、其他娯樂を主とせるものにて、電氣裝置の活動人形を澤山陳列し、柳原伯帝國博物館、帝國大學人類學教室等、また珍らしき出品をなすべし少年音樂隊は新作の『こども博覧會』の歌を吹奏して景氣を附け、五號館の空地には、繪葉書玩具書籍飲食店など五六箇所は設けらるゝならん、之に要する經費は約二千圓とは廉きものなり。



文學士 男爵 千秋季隆君選

卯の花

天

うの花の下ゆく水やにほふらん
おくしら露の玉川のさと

信濃 佐藤芳子

地

風そひて立つかとぞ思ふ玉川の
岸をうつ木の花のしら波

東京 稲葉春江子

人

宵闇を禁裏の苑にみかゞりの
消えて卯の花たゞしろきかな

松山 山脇幸子

秀逸

ほとゝぎすなほ一聲のなつかしく
下り立つ庭に卯の花の咲く

越路 松永しげ子

やれかきのひまもる月の影ふけて
いよ〳〵白し庭のうのはな

愛知 淺井愛子

ゆく春をへたての垣にうの花の
枝もたはゝにさきつゝきける

東京 青木たま子

ものゝふのよろひの色もしのはれて
なほなつかしき垣のうの花

秋田 長田せつ子

うの花のよるもかをりて見し春を
しのふか岡はゆふやみもなし

東京 佐野ふき子

ほとゝきすきゝつとかたる家つとに
み山のうつき折てかへらむ

東京 入江菊子

袖がきにかけてほしたる白たへの
ころもとみしは咲けるうの花　　奈良　天野照子

うの花の雪にはぬれぬ袖なれとゆふへすゝしきかはつらのさと　　東京　佐野富子

入相のかれの後にもうのはなのかきればかりはくれむともせず　　岐阜　中島楽子

月あはくうのはなしろくさく庭にたゝつむ少女かげおぼろなり　　東京　土田八重子

ときならぬ垣しろ妙となりにけりいまをさかりとさけるうの花　　大阪　池田英子

月ゆきにたくへてさけとうの花は雲も日かけもいとはさりけり　　松山　上原のふ子

山まくらはやくちりぬと歎くまにうの花かきははなになりけり　　松山　田村多豆子

ほとゝきすなきてきぬらし賤がやの垣根ましろにうつき花さく　　上野　木暮千代子

打よするなみさへ白しうの花のかきれながるゝさとの小川は　　熊本　吉住艶子

山さとの長閑けき春やすきぬらむなつ來にけりとさけるうの花　　東京　永島雪子

ますかゝみてるつきかともみゆる哉垣根つゝきにさけるうの花　　新潟　岩本芳子

夕やみにほのかに見えしゝろ妙はうのはな垣のにほふなりけり　　廣島　富樫てる子

ぬば玉のやみやながらむ賤がやの垣のうのはなにほふ夜ころは　　東京　神田けい子

ほとゝきすなけるあたりのうの花は月をよそなる心地こそすれ　　秋田　古瀬愷子

降つもるゆきにまがひてみゆる哉かきれまゝろにほふうの花　　野岡　岡田千穂子

ともし火もしばし忘れてながめけりましろにさける垣のうの花　　岡山　山松枝子

春すきてあをばがくれのうぐひすのこゑもへだてぬ垣のうの花　　秋田　細矢はる子

夏木立しげりてくらき谷にかけのいは根にしろくさけるうの花　　岐阜　盛田冬子

とふ人もなきやま里にさびしくも世をうの花のひとりにほへる　　和歌山　高内さくら子

うの花に小雨もよひのかきれ道かへるをとめのそでに花ちる　　長野　上田さい子

賤が家にさらせる布とおもひしはえだもたわゝのうつ木なりけ　　福岡　大石あや子

山さとはまださむければ咲きそめしうのはな垣も雪とみるらん　　伊豫　高松茂子

音なしの川にしらなみたつとまで見ゆる岸へのはなうゝ木かな　　東京　古谷花子

うの花の散りしくあたりひら／＼とおなしいろなる蝶まひ遊ぶ　　香川　松永茂子

見わたせば雪とみまがふしろ妙のうの花がなる川そひの道　　能登　栗倉菫子

山さとのながめになれぬみやびとは雪とやみらむかきのうの花　　東京　中島茂子

つくろはぬしづが垣根のうの花を獨りしめたるほとゝぎすかな　　東京　岩谷淺子

　　石見　青柳秀子

みつ枝さす樫のひろ葉のかけなから夕いそかぬ垣のうのはな　東京　萩原文子

たえ〳〵の琴の音ゆかしかふきやの垣根にしろくうの花の咲く　大和　栗山俊子

さゝなみやしかのみやこの古寺にむかしなからにさけるうの花　大和　栗山たか子

賤の女かすめるかき根にさくうつき色なつかしき夕くれのみち　埼玉　横田秋子

水鶏なくきしの舟つきおもしろしうの花つき夜いまさかりなり　埼玉　横田やな子

月もなきよひやみくらきのへのみちくれぬ光やうつきなるらん　清國　富成梓子

おのつからにはのなしへと山賤かまかきにきよくさけるうの花　東京　林瓔子

さなからにふる白雪とみるはかり垣のうつ木の咲きにけるかな　埼玉　横田政子

かつら川すゑくむさとの夕わたりうのはな月にはやくふれさせ　東京　林艶子

ゆふ月のほのめくころは水無瀬川きしのうの花ゆきかとそ見る　埼玉　村田なほ子

消えのこる雪と見るらんやま里にさくうの花のしろたへにして　肥後　友永常子

藤つゝじまた散りはてぬ山さとになついちしろくさけるうの花　肥後　友永章子

今までものこる雪かとうのはなをこゝろをさなくおもひける哉　岩代　菅野和子

山か家のかきれによするしら波のかへすと見えて匂ふうのはな　東京　高野もと子

こかくれにうの花さけるたそかれは暮むともせす川つらのさと　東京　西村直子

谷川の岸にさきたるうのはなはいはにくたくるなみかとそ見る　静岡　竹内光子

そて垣のやつれもわかすうゝ花のゆきにうもれてすむひとや誰　東京　小川政子

咲にほふかきねつゝきのうの花にさゝのなか道ゆきよかりけり　東京　河合象子

うの花の白妙にほふひかりにてふみよむまとはくらむともせす　東京　松本まつ子

このまもる月かと見えてうの花のさけるあたりは夕やみもなし　東京　玉卜嵐済子

しら波のおとなくたつと見つるかなうの花さけるかにつらの里　東京　小島栄子

このまよりもりくる月と見つるかな庭のうの花しろたへにして　東京　吉岡亀子

うの花の咲にほひたる袖かきはくまなく月のさすかとそ見る　播磨　横田春枝子

見わたせはおとなき波とまかふまて闇にもしろききしのうの花　伊賀　菊山かれ子

うの花を植ゑて待たるかひもあり香に誘はれてなくほとゝきす　愛媛　廣田政美子

ありあけの月かけとのみ立ちよれはなつかし垣にうつ木花さく　同　原田薫子

寺をのこ垣のうの花もとめけりしやかのみ堂の屋根やふくらん　東京　永井ふさ子

わか庭の垣根にさけるうのはなは雪かとはかりあやまたれける　讃岐　安藤光代子

わか庭のさくらの花のちりてよりとなりのかき根うの花のさく　茨城　稲見てる子

見し春の雪のおもかけにほはせてなつのかきれに咲けるうの花
大阪 紀藤育子

行く水につなげる卅も見えにけりあけほの清きうのはなのやと
千葉 木村きよ子

ゆふづき夜あはれをこめて小山田のしづか垣根ににほふ卯の花
東京 碓井のぶ子

卯の花のさきのさかりはしろたへによるゆく道も迷はさりけり
東京 美矢竹照子

ゆくりなくうつ木の下にやすらひて雪とみるまに花ぞちりける
三河 永井さい子

咲つゝく賤か垣ねの卯の花は月をあさむくにほひなりけり
伊勢 間宮陵子

卯の花の咲けるさゝ邊のゆふぐれは雪か月かとあやまたれつゝ
栃木 井上瑞枝子

夕つき夜誰かわすれにし白ゆふとたちより見ればうつ木花さく
東京 小林芳子

月かけとさなからまかふひさかたのかつらの里ににほふ卯の花
京都 下川登美子

あきつ葉の森のしたみちあさゆけは雪かとはかりさける卯の花
東京 美矢竹光子

白たへにさくやうつ木の花かきは雪のつもるとおもほえにけり
千葉 土屋きよ子

庭にさく卯の花かきのしろたへはおとなし川のなみとこそみれ
三河 榊原きみ子

水くるまさひしくめくる川そひにうつ木の花のいまさかりなり
下野 井上尚子

となりより夕月のせてわかやとの垣ねをこゆるうのはなのなみ
群馬 大澤肇子

つき影の匂ふと見えて卯の花のすかたうつくしたまかはの里
東京 伊藤竹子

しろたへの雪のさゝ波よる見えてうの花にほふたまかはのさと
東京 伊藤とし子

時ならずつもれる雪と見つるかなうの花にほふかきねつゝきを
東京 伊藤ふく子

うの花のにほふとなりの中垣にやみよもしらぬやとゝなりにき
東京 伊藤英子

うの花のま垣にさけるたそかれはまたきに月のさすかとぞ見る
上野 森ゆきよ子

やまさとは春もおくれてをちこちにのこる雪とも見ゆる卯の花
長野 北澤千枝子

卯の花のにほひを道のしるへにてあるじもしらぬ宿につきけり
愛媛 樋口孝子

みどりこき垣根に咲ける卯の花の色ひとしほに見ゆるゆふぐれ
筑前 山本きく子

しろたへの雪かとはかり見ゆるまでかたやま里に咲ける卯の花
備前 近藤繁子

うつし植えしまかきか下の卯花は匂ひゆかしく咲出でにけり
神奈川 由樹しづ子

なにそとも云はて微笑むあてひとか見かへりつゝ行く卯の花の垣
上野 佐藤浦子

柳ゆらく軒のほそみち石つたひゆのはなしろしはるさめの宿
東京 山口琴子

白妙への垣ねにさけるうの花はしつかほしたるころもかとみゆ
大分 福田春子

山のはにいりたるのちもわかやとの垣根をてらす卯のはなの月
東京 根津梅子

誰ひとかすまふなるらん草いほりかきねゆかしくにほふうの花
東京 根津文子

谷あひにのこれる雪とゝめくれはさきみたれたるやゑのうの花　上野　大竹しけ子

珍しうゑしうつ木の花も咲にけりやかて來鳴かん山ほとゝきす　伊勢　岡宮稜子

讀みさしゝつれ／＼草にしをりして卯の花くたす雨を見るかな　羽後　鈴木しゅん子

夏ながらなほ消えのこるしら雪は卯の花咲けるかきねなりけり　山口　村上操子

月のなき夜もつきかけを卯の花は賤かかきねに匂はせてさく　大阪　木村春江子

ほとゝきすひと聲もかななき人とめてしうの花いまそ咲くなる　秋田　古瀬りく子

泡ゆきのつもるとはかり見ゆるかなむら／＼さけり垣のうの花　同　佐藤のぶ子

わかれては伊倉のやまの花うつ木たれに見よとや咲き匂ふらむ　岐阜　山田房子

ときならぬ雪とも見えて谷かけのいはねもたわにさけるうの花　神奈川　汲田治子

ほゝときす初音またるゝ昨日今日われさきかけとさけるうの花　大阪　田中靜子

燦たりな卯の花つき夜うすつき夜今宵いつこにほとゝきす啼く　金澤　富田環子

夕やみの垣根の月のしろたへはいまをさかりのうつ木なりけり　名古屋　林田糸子

山の端にむら／＼咲ける卯の花の雪かとはかりあやまたれけり　東京　松岡かめ子

ましろなる卯の花かきのゆふ月夜手折るもをしく咲にほひけり　上州　大澤富久子

おくり來し君がなさけのうつ木花あたには見まし朝なゆふなに

わかやとの垣のうのはなゆふかせにしら浪たかくかに匂ふなり　伊勢　黒田代音子

つくろはぬこゝろもみえておも白ししづか垣根に咲ける卯の花　對馬　青木まさを子

小山田をゆきにかくすとおもふまでましろにさける道のうの花　陸前　前田河みさを子

おく霜かふるしら雪と見ゆるかなわかやれかきに咲ける卯の花　埼玉　池田たけ子

かざゝんにいつれの枝を折なんいかき根もたわに咲ける卯の花　大分　讃城鶴代子

るり燈のあわきひかりにかけひもる水に卯の花打たれつゝ見ゆ　神戸　藤木梅子

卯の花の咲初めしより賤かやにおもはぬひとのたつれ來ませる　宮城　大槻やす子

とよ年のしるしの雪とまかふかな田つらのいほに咲けるうの花　常陸　兒玉こう子

見渡せはおとせぬ浪と見ゆるまでさきつゝきたるきしの卯の花　廣島　當面千里子

蚊帳うりの來し日は氷し出て見れはにはの卯の花咲初めてけり　岐阜　粟山貞子

卯の花のかずかさなりて咲くみれはことしのみのり豊なるらん　陸前　前田河千年子

うき朝やしめりてさけるうの花の月に立つ乙女泣きにけるかな　神奈川　三谷さわ子

◎和歌兼題

六月　杜鵑　遠山の松　七月　夏月　螢　八月　朝顔　夕顔

渡し守

天

世の中を流れのまゝにわたし守
　棹にまかする身こそ安けれ
伊豆 廣田しの子

地

時の間に人さま〳〵の心をば
　おくり迎ふるわたし守かな
京都 都筑田鶴子

人

花にこき月にわたりてわたし守
　かはせやこゝろゆくせなるらん
松山 田村多豆子

秀逸

かもめなくすみた川原のわたしもり
　こゝろもうきて舟やこぐらむ
東京 松本まつ子

さし渡すみなれの竿を友として
　よるとしなみのいくかへりせし
東京 小林芳子

事もなくうき世をわたるわたし守
　人の爲こくふねにはあれとも
松山 上原のぶ子

渡し守る身こそ安けれ世の中の
　わらき浪風しらぬ川瀬に
常陸 兒玉こう子

みやこ鳥あそふ隅田の川ふねに
　こゝろものりてこぎ渡すらむ
東京 小川政子

渡しこぐみさをとゞめてたび人に
　家出せし子をまたもたづぬる
伊賀 菊山かね子

佳調

みやこ鳥あそふ隅たのわたし守むかしがたりをかけてこぐらむ
静岡 竹内光子

一もとの竿をちからにさす舟のふちせかはれと世をわたるらむ
岐阜 中島粂子

わたし守ゆかむかへらむあとよりもさきよりもよふ有根の川岸
山口 村上操子

東京 林環子

黒金のはしはかゝりぬ去年見てし渡しのおきないつちいにけむ
京都 下川登美子

ゆく水の定めなき世のうき瀬をはかろ／＼しくもわたし守かな
愛媛　脇田薫子
三年まへさをさしゝぬし今いづこ舟はくちたりはしあたらしく
奈良　天野照子
わたし守たよりもなみをこぐ舟にうきをわすれて世を渡るらん
對馬　青木まさを子
あさゆふに人をわたして渡し守かろくもよをはわたるなりけり
下野　井上倫子
棹よりも長き浮世をわたし守きしよりきしにおいてゆくらん
岩代　菅野和ゝ子
とろさをの身はいやしとてわたしもり繪の中の人うたの料の人
肥後　友永章子
のるひとのたえぬ今戸のわたし舟棹さすをちやひまなかるらむ
群馬　大澤肇子
春の川ゆるく流れてあなたこなたかすみをたどるわたしもる人
東京　碓井のぶ子
わたし守その日／＼のなりはひにこゝろやすくも世を渡るかな
千葉　木村きよ子
月花をみづにながめてうつし世の富をよそなるわたしもりかな
茨城　荷見てる子
すすさをも涼しく見ゆるわたし守なつの川瀬のゆふくれのふれ
三河　永井さい子
わたし守わたりわふらん春ふけてゆきけにまさるふし川のみづ
大阪　紀藤榮子
ひとり子は國に捧げて今日もまたあはれをきなのわたし守する
東京　松岡かめ子
あをやぎの烟るきし邊にふれ寄せて客まつ老のわたしもりかな
越路　松永しげ子
渡し守あしのまろやにいねつゝもうきせたえてといのりける哉
熊本　吉住艶子
さすさをの露のしつくに玉の緒をからくもつなくわたし守かな
大和　栗山たか子
花のなみ立川の瀬にみなれさをさして世わたるわたしもり哉
埼玉　池田たけ子
世渡りのわざとおもへばわたし守景色よしともおもはさるらむ
埼玉　横田政子
わたし守はや舟いだせ日はくれぬ佐野のわたりは雨くもりして
秋田　長田せつ子
うつらなくのらのをかはの渡し守むかしながらの足のおそさよ
宮城　大槻やす子
わたし守その日を櫂にあやつりてこゝろひまなく漕くらすらん
佐藤のふ子
事たらぬ身にしあられとなか／＼にうらやましきはわたし守哉
東京　西村直子
わたし守こゝろものりて渡すらむかもめもあそふすみ田川原を
岡山　小山松枝子
うちのればはやも棹さすわたし守したひてよべる子らを殘して
石見　青柳秀子
わたし守今日もいかだや下すらむかすみの奥にうたのきこゆる
東京　萩原文子
わたしもり棹のしつくの露ちりて水のあやなるさとがはのなみ
東京　土田八重子
すみ田川わたすふれ人こゝろせよそのみづの面に花のうつれば
松山　山脇幸子
雨の夜半風のあしたを老はてゝふれないのちのわたしもりかな
伊豫　高橋茂子
わたし守ったふ聲のみきこえけり朝きりふかくふれは見えれと
東京　古谷花子

なかれてはかへらぬ川にわたし守身をはたくへて老にけるかな　羽後　鈴木しゆん子

故郷のさまはむかしのまゝながらわたしのおきな人かはりたり　能登　栗倉すみれ子

老さきをたのみし子には先き立れかひをたよりの此わたしもり　秋田　古瀬惟子

こゝろなきとまやの渡し守さへも波しつかなるよをいのるかな　肥後　友永常子

かは水にこゝろすまして渡し守世のあら波も知らすやあるらむ　秋田　古瀬りく子

よの中をなかれ渡しのふなもりもさはる浮世はあるよなりけり　愛媛　樋口孝子

棹たてゝいこふひまなしわたし守ゆき來の人のたえ間なければ　大阪　池田英子

よる波をひたひによするわたしもり春となりては若かへりけり　備前　近藤繁子

そよふきし風もなごみて大堰川かすみにうかぶわたしぶね見ゆ　福岡　大石あや子

わたられぬ浮世はかりにわたし守こゝろひとつに岸さだめてん　長野　北澤千枝子

おきつ川のせてはかへすふな守のやすきこゝろも波のうへかな　東京　神田けい子

あをやきのけふるあたりに舟とめてひなうた謡ふわたし守かな　大坂　木村春江子

淀川のみづに棹さす渡しもりうたふ小うたのこゑもしづけき　大坂　田中靜子

さくら散るその花かげをわたし守しづかにかへるはろの夜の川　筑前　上原歌子

おぼろなる春のひよりのわたし守さくら見に行く人を待つらん　三河　榊原きく子

朝な夕なきよきなかれをわたしもろなれか心のいとくもりなき　上野　森ゆきよ子

呼ぶ聲にかすみをやぶりわたし守花のつゝみをくだる長閑けさ　栃木　井上瑞枝子

あらきよのなみ風しのぎ人をのみわたしゝて老うるわたし守かな　播磨　横田香枝子

たが人の身のすゑならんあすかがはわたしもる屋に詩人夢みる　東京　瀬藤ちよ子

すみ田川往き來るさのひとなみを漕ぎわけくらすわたもりかな　埼田　村田なほ子

景色よき利根の川邊に家居してからきうき世をよそに見るかな　東京　林　艶子

はろはなつは川風あめつちのめぐみあまねき渡しもりかな　陸前　前田河みさを子

わたしもり淀の川濱たゞぬまにいでいろふれにこゝろしゝ漕げ　埼玉　横田秋子

さと河のつゝみづたひのわたり口とま屋にしばし舟やまつらむ　埼玉　横田やな子

淀川のつゝみづたひのかちわたりやはたやま崎いそくたひゞと　秋田　細矢はる子

かたりあふ友なきよはの渡し守をおとづるものはのき津れの聲　岐阜　豐田ふゆ子

ゆき來する人をわたせる渡し守いかにしつらむよへとこたえし　岐阜　山田房子

わたし守今はいつこにゆきつらむなとか小舟に人をまたならん　陸前　前田河千年子

わたし守いて入ふれにこゝろせよ宇治の川かせふきたゞぬまと　神戸　藤木梅子

歌やなきむかしながらのたま川に花をひれもす漕くわたしもり　東京　中島茂子

こぐ舟はよこにゆけともすみた川すめるこゝろのわたし守かな　東京　谷岩浅子

わたしもりいざことゝはん隅田川こきゆくさきの花はいかにと　神奈川　三谷さわ子

破庵に世をしのびぬるさと川のわたしもりこそいとゆかしけれ　讃岐　藤井つぎ子

もゝ咲いて水あたゝかし渡しふれしらぬ人にもなかめかたりつ　東京　田中千賀子

竿さしつをきながほこりあだならでこゝしばらくは花の渡し場　筑前　山本きく子

にごりなき水にこゝろをくみとりてうき世を送る渡しもりかな　東京　禰津梅子

流れゆく音もしづけきかはみづのきよき眺めをともとしつゝも

短文

天賞

御利益　東京　外山よし子

雑子ケ谷の稲荷の森に狐の巣がある、これに御利益を授け玉へとて油揚を供へ、社にて御籤を引ける間に、その油揚既になし、願ひ事叶へる効験なるべしと、微笑しつゝ歸る姿を、あたりの野良猫は舌を出して笑ひき。

評　狐の隙に乗じて供物をせしむる猫の機敏さ、世の中は油断も隙もならぬ事なり、

地賞

空想と理想　静岡　田代雪子

空想に耽る人は、よく遊びたき人なり、手を働かせ足を働かせば、世の中にそれほどの暇はなき也、よき地位を得んことを空想するより、よき事を行ふを理想とせよ、

評　而してこの理想は自然に到着せん、

人賞

夕煙　東京　神田けい子

菅の根の長き春日も、早西山に入り果てつ、夕霞深く立ちこめて、物淋しき折柄、彼方の森蔭より立ち昇るものは、夕飯たく烟が、芥焚く烟か、やがて中空に一筋細く棚引き渡りぬ、あゝ彼の烟の末、遂に如何にならんとすらむ、

評　さびしき春の夕暮、魂この煙の末に迸ふなるべし、

胡蝶の巻

花すみれ　香川　松永茂子

霞こめたる春の野邊を、うねり〳〵て流るゝさゝ川に、誰の流しけむ、色濃き菫の二つ三つ、川下に下り行く、さるを盡させぬ契にや、蝶々は花をしたひて追ひ行くこそあはれなれ、やがて水に打たれて沈むならん、

評　蝶に追はるゝ花、のどけさの限りなるべし、

春の夕　　東京　永井ふさ子

靜かなる春の夕、獨り野邊に佇めは、心は恍惚として醉へるが如く、身は羽化登仙の思ひあり、空は紅、樺、紫と色をかへ、蝴蝶は花より花と飛び移り、頓て輕き羽を止めぬ、折しも一陣の風、花の梢を吹くよと見れば、清流花を浮べて流れ行きぬ、

評　ちりくる花片にはゝ、行水も濁らざるべし、

夕野　　東京　豐田とよ子

黃金しく菜の花の風も無きに二ひら三ひら散りて蝶の宿求め離ぬるも哀れに、山寺の鐘響きては、山懷に抱かるゝ村落も朧々と、夕霞の底に沈み、森も山も燃るか如くなりし空も、薄紫に淡れ行きて、たゞ塒に歸へる鴉の聲のみぞ聞ゆる、

評　蝶の宿からんとせし菜の花の散るさま、げにあはれ深し、

花陰の少女　　東京　槇野愛子

櫻花爛漫としてほゝ笑める闌干の花陰に、今しも菫の花束右手に、詩集、左手にしつ、逍遙ふ少女の風姿、いとも愛らしく、さながら春の花こふ胡蝶の、それにも似たらんかし。

評　その心のうはの空なられば、ことに愛でたからん、

春のあした　　群馬　大澤筆子

桃花水溫き渡良瀨の川、上る朝日にきらめいて、まばゆき事限りなし、立昇る煙は淡く低く棚引いて、末は薄れて霞とやなれる、そこはかとなく梅の香すなり、鶯もなけり、かざしにと手折りし花を慕ひてや胡蝶ひら〳〵三つ二つ相前後して、

評　手折れる人の花すがたに、蝶も慕ひ來しにはあらざりしか、

いさゝ川　　三河　栁原きく子

暖かなる春の日、清きさゝ川のほとりなさまよふ折しも、水上より誰が捨しにや、紫匂ふなつかしき、すみれの花の流れ來りぬ、そが上には愛らしき胡蝶の、あかずも花をしたひて行く樣のいとゞいぢらしかりき、

評　落花情あり、胡蝶豈意なかんやも、いとをかし、

花籠　　備前　小山松枝子

のどかなる野べにいろ〳〵の花を籠に入れて、今しもたはるゝ胡蝶をぢつとながめた小女は、どうかしてあの蝶々も一緒につれて歸つて、疑てらつしやる母樣に、見せて上げたいとつぶやいた、あゝ花も花であるが、其心の可愛らしさ、

評　蝶もそのやさしき心に慕ひよるらん、

花籠の巻

左の十四篇、いつれも行文すら〳〵と花やかなればとて

小さき友　　岩代　菅野和子

野遊びに疲れて歸るさ、紅梅の薫り床しう、人待ち顏に笑みくつれたり、一枝家つどにせんと谷の精にこへり「我は鶯なり許しませ」、口笛に其聲まねつゝ、枝ぶり見比べ居たるに、眞の友とや思ひけん、小さき鳥の頭の上に訪ひ、「ホ、ケキヨ」

評　谷の精に乞へる心と、我は鶯なりと其聲色をつかへる、まこともうそもかくてこそ罪はなけれ、

海岸の暮色　　常陸　兒玉こう子

岬の松原からスーと細い烟が靡いて、白帆の二ッ三ッを隱すと、今迄番小屋の貝殼屋根に、赤々と照つて居た夕日が見る〳〵沈んだ、頓て雲の色彩が一層複雜になつて、稍紫紺を帶びた時沖合からヤッシ〳〵と勇ましい櫓拍子。

評　夕暮の苫屋を急ぐ舟、色彩の複雜になりし空の色の書割、げに海岸の暮色なるべし

車の上　　備前　松本もと子

から〳〵と大川の板橋渡れば、ちら〳〵見ゆる、わが村！麥は青く菜は黄なり、あゝ美しき故鄕の春！老車夫の歩み遲々として、仰げば拭ふたるが如き春空に、銀鈴をふるが如き雲雀一羽！

評　心急きて步緩き車上、雲雀の聲のさても長閑けき

春の野色　　奈良　天野照子

春色駘にして、四方の山々霞をこめ、日は麗に風は柔らき身も、心もいと酔なり、田圃の麥葉緑濃に秀てゝ、箕子の歎を想はしめ菜花盛に開きて、黄金を飾る、雲雀高く空に囀りて、農夫は業をやめて仰視し、胡蝶軟翅翩かに花より花に飛び移りて莊周の想を懷かしむ、少女は籃を提げて面白く草を田畦の間に摘み、路人眼を四方に放ちて、步行おのづから遲し、あゝ春駘なるの野色、快樂遁りなき哉、

評　かくて世の人の多くは箕子の歎をなしつゝ、莊周の夢に此春を終るなり、

平和な春　　三重　奥瀨かすみ子

絵日傘が一ッ、二ッ三ッ續く河添ひの村十月、今紅梅の花はすかれて、紅桃の花美くしう、うららかな春の午下り、野邊の菜の花を見下して、雲雀はやかましく鳴いて居る。青い若草の牧場では今乳牛がモーと啼いた。

評　梅も桃も紅を選びたるに、絵日傘の取合せよし、

親の情　　上州　大澤富久子

隣家の老母曰く、舍の息は仕樣のない腕白小僧で云ふ事は聞かないし、いたづらはするやら、碌な事は一もしない、然し夜になつて、其無邪氣な寢顏を見ると、盆問の小言が可哀そうに覺えて、胸は一杯になると、あゝこれも親の情よ、

評　幾億萬人の一つなる親の心、今更ながらうなづかるゝ也、

渡しの夕暮　　筑前　上原歌子

日は既に入つて暫く、人待顔の渡守の太五作爺も、よぎなく歸路に歩を移した、鳴瀬川の渡しに爛熳と咲き亂れた山櫻は、白雲の舞下りた様、山寺の鐘の日暮れ報に、梵笛もかすかに聞ゆる、かくて渡しもどんぶり暮れ、瀬の音がゴー／＼と響くのみ。

評　太五作君の農事にいそしめるさま、よぎなくの四字いと働きあり、

朧夜　　石見　人の子

五日の月が淡く昇つて野も山もボーッと薄絹に包まれたやう、いさゝ川の音さらさら、折から「潮來出島の眞菰の中に」浮き立つ様な聲、やがて白手拭を姉様冠にした娘、歌の主であらう、その栄には一枝の櫻さへさして、

評　櫻衒ひて歸る里の少女、潮來出島では少しうつりが如何にや、

妾が天地　　愛媛　山脇幸子

妾が天地は三疊一ト室、けれども文庫と琴とを置くの余裕はあります、破机は倚妾が膝を支ふるに足るのです、禿筆は倚妾が思を述ぶるに足るのです、そして妾は終日こゝに閑居して古今幾多の聖人詩人に見えるのです。

評　さても悠々たるもの哉、又曰く古人は監督せず、慮り玉ふ勿れ、

我子の寢顔　　肥後　友永常子

ひるのつかれにすやすやとねむる、我子の顔、しばし衣縫ふ針の手を止めて見やれば、ほゝとばかり打ゑみぬ、いかにたのしき友と胡蝶追ひ、すみれ摘む夢やは見る、あゝ罪無き我子のね顔よ、

評　廿世紀の小兒、東郷大將にても夢に入らざりしか

花の夕くれ　　神田　藤掛ます子

田舍住居の長閑さと、さこそたがはぬ都の今日、花ちる夕くれるを上野の山へと走りぬ、月の光のあまりに澄し、たとへば姿よき姫を、殿高く簾を通して、燈火の細き處、遠きより眺むるが如し、今宵こゝを夢みたし、

評　さても念の入つた注文なるかな、夢といふだけがおもしろし、

春のあはれ　　東京　小田島ゆかり子

山門のほとり、目盲ひし母と共々に、人の袂に縋る女の兒の七つ許りなるが、涼しき眼さしの亡き妹に活き寫しなるに、淺ろ哀れの催されて白銅一つとらせぬ、嬉しと許り伏し拜む背の上に、時しも咲き誇る一重櫻のハラ／＼と零れつ。

評　花のこゝろにはへだてあらじと見ゆ、

落花　　千葉　木村きよ子

そゞろあるきの道すがら、えならぬ香のもれくるに、不圖かいまみれば、誰が住居にや、庭の佇ひたゞならで、なかしく燈籠の傍へなる紅梅は風もあらぬに、二片三片と散り行きて、芝生の上、まゝごとに餘念なき少女の、おさげにとまりぬ。

評　さても心にくき風情かな

お百姓　　讃岐　藤井つぎ子

みどり萠えたつ麥畑に、吹く風に襦袢の裾を拂はせて、農唄長閑に、其聲は如何に心の安らけきかを、あはせり、曉雲雀の聲に床をたち、入相の鐘に業を終へ、一掬の濁酒に一日の勞を慰さむる農夫の境遇、あなのぞまし、

評　お百姓のおの字まづ氣に入りたり、

さくら　　東京　關谷巳子

彌生の春にあこがれつゝ、敎の庭へといそぐ途、清う流るゝいさ

ゝ川の、水に映れる美しの櫻、床しきかほり、やさしき色、手折らんも口をしと、よそと過ぎにしに、落花狼藉見れば、あな無情、童の手に散らされき、

評　かゝる戀も、また花の風情あらずや

青葉の卷

嫁せし友　　　尾張　井口登代子

日頃妹の樣に可愛がつて下さつた淸樣が、明日嫁かれると云ふ前の晩わのお庭のあづまやで、二人はしかと抱きあふてないた時、淸樣が「登代さん女なんかに生まれるものじやないわ」と仰しやつた、あゝ其時のお顏色のわるかつたこと。

評　筆人情の機微に入る、

歌使ひ　　　東京　松岡龜子

綠の傘は松、銀の敷物は砂、妾は今藻の香に醉ふて、草履持つたまゝ、遙か水宮の灯を眺めて恍然としているると、忽爲妾の袖をひく者がある仰天して見ると、犬は一匹の愛らしい小鹿で有つた、オー是正しく神樣が賜つた歌使ひでは無いか、

評　この位の調子でなくは、面白い歌も出來まじ、

含滿ケ淵にて　　　井上倘子

岸の老杉淸き水、奇巖大石さながら仙境かと思はるゝ、水岩に碎けてか、石水を激してか、幾千の玉走らする、石にむせびて立つ水烟に、拙き詩想は蔽はれて句も成らず、このまゝ自然の中に消え入りたき心地のする。

評　感に入るはよし、藤村となり玉ふ勿れ、

故鄕　　　金澤　野田こさ子

噫まゝならぬ浮世と云ては、故鄕を偲み、噫待遠しと云ては鄕里を想ふ、剌苦は之に依て勵まされ、怠慢は之に依て制せらる、さてもなつかしきは故鄕なる哉、思の星、慈の雨、情の露、皆彼處にあり、琴線も一度之に觸るれば、無限の妙音を發す、

評　故鄕は忘るべからず、故鄕に錦をかざることも忘る可らず、

富嶽に登る　　　大阪　桝田益子

巍然たる蒼天の連岳、異姿輕裝、三伏の暑も、綠樹の凉を得て、虎吼え、龍嘯く、險崕絕壁、不毛の焦石を攀ち、巓に達す、風光佳絕、雲外の仙島、皇國の靈山なり、大前に參拜す、社司は富山の由來を誦じ、登山者は秀靈を賞す、誠に是千古の芙蓉峰。

評　富嶽曰く、虎吼え龍嘯くなどゝ仰せられては、登山者なきに至るべし、すこしお手やはらかに、

世はさま〳〵　　　東京　萩原文子

庭の白梅が祝砲の響に、二片三片散りそめた、『あゝ』去年の今日は、瀋陽占領の報に、國民歡呼一時に勇立し、一大紀念日にて、日は麗か、折しも知己より、凱旋祝の赤飯と、戰死後一週年の菓子折とを受けぬ、此家の悲しみ、彼家の嬉び、『あゝ』世はさま〳〵なる。

評　さま〳〵の世なればこそ面白けれ

涙の力　　　神戶　藤木梅子

人より與へらるゝ涙最こそ、人の眞価の標準なれ、劍筆よく人を傷れとも人を作らず、只涙ある人よく第二の吾を作る、涙なき教育者によりて人たらんとする、現時の士女は災なるかな、涙を用ゐよ、劍の代りに、筆の代りに、涙は神が人間に與へたる最良の教

様なり、

評　行はれぬ嫁に泣かんより、鬼ても笑ひて世に勵めかし、

春の夜　　東京　永井ふさ子

日深淵に沈みては、朧月野邊を輝し、櫻花光を受けて色ほの白く管絃の音絶えて夜は更けぬ、一陣の清風野山を吹けば、櫻花二つ三つ四つひら〳〵と地に落ちぬ、折しも歸雁一聲、野邊に響けば、いよ〳〵降りしきる花吹雪、

歸省　　東京　槇野愛子

都のかなた雲井へだてしふるさとに、卒業の業をになひつ歸省せしに、峰の櫻はうるはしく咲きそろひ、田面はみのり、小川さらさらに流れて、紋とせかはらぬ自然のけしき、おゝけふよりは、慈心深き父母の下に、再びたのしき田園生活を味ふこそうれしけれ、

過ぎし夏　　讃岐　安藤光代子

二年前の夏

愛國婦人會に就て、有志婦人が村役場に集つた、中に一人東都遊學の灰殺式部、活潑に來ていき嵜てしめた、殊に昔の友なりし自分は、鄙ひた風彩に消えも入度思てあつたが、其後聞けば居所が分らぬとの事である、

朧月夜　　長野　上田さい子

いそ〳〵と夕餉すましてさて風呂場の永きよ花よ、お好みとあつて去る日出來てきにけり花見衣、そと引い懸け、袖鏡おたり見廻し、莞爾と、また見ぬ夢をほゝぞ笑むなり、後ハ毛な氣にして、雪駄チヤラ〳〵朧月夜よ、

山家の春　　横濱　小林千代子

若草青む草家の上へ、すれ〳〵に十重二十重と、覆ひかぶさつた櫻の枝に、白きもの一とつ一たつ、風のまに〳〵動くは、胡蝶かはた又た初花か。

㕝地の友へ　　山城　松田雲子

封じて贈りまいらす、熱に燃ゆる南天の果、君が口紅の色とてもなむ、緑濃き松の葉の、君が丈に餘る御髮の艶とも見なめ、こを礎色の薄葉に包んで燈にかざせば、御地は今斯くや、紅梅の蕾の様にて、懐しきまゝ、

お土產　　千葉　鵜澤豐子

朝からお降りの秀ちやんと共に、遊びに出たまゝ歸らぬ美ちやんやがて一明頃門から小走に、にこ〳〵と笑ひながら、母ちやまお土產をと、さし出す花籠、みれば土筆二三本にすみれの花一束、

つかの間　　加賀　富田環子

花に狂ひて遊び疲れし白き蝶一羽、何處よりか來ては戻り、垂れし青柳に止りぬ。間もあらせず春風いと強ふ打動かせば、悩しの夢を破られて、蝶は身を去られぬ、名殘惜げに寄りては去りさりては寄る事四度五度、かくて風と共に、

みーちやん　　美濃　加藤よね子

美ちやん、美ちやん、あら美ちやんてば、いつの間にかもう眠て終つてよ、私のあげたお花を、大切さうにまあしつかりと持つて居ること、オヤ笑つてるわ、ほんとにどんな夢を見たんだらう、

たそがれ　　大阪　木村春江子

戀しき夫は家にあらず、年に一度の祭日とていとま遣はしたる、下女も未だ歸り來ず、身はひとりたそがれの空をながめて、思ふともなき思に泣きぬ、

ありのまゝ　　大分　護城鶴代子

年に一度は何處かの温泉場に、親族會合して、保養旁團欒を樂まうではないかとの相談が定つて、三回目の今年は、幽邃で閑雅で而も眺望に富む芝石にと撰定された、あゝ樂しき哉、妾は今我一族と與に平和の潮に浴しつゝある、

正月のたより　金澤　野田いの子

松の雪だに消えならなくにとか、花の都にて御袖別ちしは、早や一年の夢、結びて覺めて、あすか川流れて早きは、げに月日に候例の御花々しき御台戰、定めて數々の御功も候はん、御もらし下さらば、うれしかるべく候かしこ、

華嚴　大阪　田中靜子

萬雷谷にほへ叫ぶ此處華嚴の瀧、岩石峨々と聳え、白浪石に激して萬解の雪を碎くが如し、折しもあれや、と立ちたる一少年、すは身を躍らすよと見れば、や、や……身は早や斷崖、切り落す千丈の低、後は颯々たる瀧聲のみ、天嗟うして地暗し、

三世　大阪　藤田紫子

軍神廣瀨中佐は、臨終の際七生報告を嘔歌すと、實にも主從は三世を契るとや、花に嵐月に叢雲、充つれば欠くるの習、昨の大將軍も今は落武者、道の邊の芒にも心置かるゝ身の儚なく、粟津が原に、夕の嵐と散りし木曾が主從たゞ二人、

哀れ光ちやん　千葉　鴉澤豐子

去年の春まで光ちやんと、共に摘にし此若菜、若菜は變らず萠えたれど、千代まで共にと誓いし哀れ光ちやん、今何處、蒲公英れんげなど、去年のまゝには咲きたれど、今は摘むべき友もなくあゝ戀しきや去年の春、

ひがこと　下野　小花菫子

あゝ淺ましの人々よな、人の錦衣に己が身を飾る、白百合子の君の五色の糸と、松本もと子の君の俳句春雨とは、いつぞや見しと思はるゝ妾のみが世の知る人ぞ知るを、作者同じ、又は異人同作なれば、許してよ、妾の僻言、

妖怪　和歌山　高内さくら子

小雨そぼる暗の夜、とある柳のかげに、立ち現はれて、青白き顔に、おどろとかゝる黒髮これや妖怪――否々人にこび、人に僞り、人をそれみ、人をなやます、あゝ恐べし、これぞ眞の妖怪――

亡友　東京　松川ちよ子

月朧に霞み渡りて、靜けき春の夜の哀れいはん方なし、思ひ起すも涙の種、いにし年は、一つ心の友と袖つられて、清けき月に、我世樂しとうたひしを、あゝ思はざりき、今宵茲に、只獨り逝きませし君を忍びて、漲る思ひに、袖ぬらさんとは、

思ひ出　羽後　鈴木しゆん子

今夜のやうな月のよい晩であつた、妾は靜ちやんと遊んで居つたら、靜ちやんは心持が惡いつて、妾も共に歸つてあつたが、それがもとゝなつて、とう／＼死くなつて仕舞つた、あゝ靜ちやんは今頃何を遊ばして居るでせう。

浮世の春　能登　粟倉菫子

春姬のみ情に、今年の春もこぞの如、此處袖ヶ野の花も笑ひぬ、鳥も歌ひぬ、若草もえて蝶も舞ひぬ。噫されど如何せむ、我友靜子の君のいまさぬものを、さても思ひ出多き春なるかな、野邊なる哉、

二日の記　東京　新城はま子

三月二十八日
今日は學校から待ちに待つた成蹟があつて、妾は三番、一番と二

壽とは何方でしせう、上田さんと大橋さんかしら、卒業の通知を出す、
箏の音もはれてうれしき春の月
三月二十九日
明日の卒業式が待ち遠いこと、
おぼろ月別れともなき明日かな

行く春　　播摩　横田春枝子

佐保姫のみ車、紫霞む遠山の峰、夕榮美しき眞紅の空に、用意とゝのへば、落花ほろほろ、無數の小紋、オリーブの苔に、好もしき、被布模様、染め出して、岡のさゝ池水ぬるみ、澤には蛙鳴きそめつ、自然の配置うるはしき、春は永へにゆかんとす、

眞の趣味　　伊賀　菊山かね子

夕霜の朧、薄衣は次第に低う垂れて、羅紗に似た藁家からは、和氣な烟がスーと夢の様、時折音訪るゝ藁風は、破ぶれる手拭をまくのである、いざ急げ駒、汝が爲に秣を整へ、妾が爲に膳を供へて待つて居られよう、

特使殿下御登晃の折　　栃木　井上瑞枝

日英國旗を交叉した汽車が、停車場に入るや否や、幾千人のしぼり出した萬歳の聲は、天地をゆするばかり、可憐の小學生徒のふる兩國々旗に生けるウエルカムは現れて居る、當驛にて殿下御手づから旗打ふる様を御撮影遊されしとか、

◎原稿〆切　すべて前月十日着までにて、それ以後に着したるものは次號におくる

新體詩

天賞

草苅　　近江　井上鈴子

雪のかしらに弓のこし
青草もゆる野邊に出で
蝶とまりけり鎌の柄に
幾野の路もとほからぬ
過ぎし昔のしたはしく
根なき想にしづむなり
いまは昔のむかしなり
手をりて樂む草のはな
遊びくらしゝ事もあり
水のながれと人の身の
寂しき家にわれひとり
てる日は野邊に草を刈
さびしき今の我身には
苦しと思ふこともなし
やう〳〵世をば渡來ぬ
輕きころもを身に纏ひ
畠の小草を刈りぬれば
蝴蝶のすがた看めては
鎌をやすめてかり草の
年まだ若きはるの日に
蝴蝶たづねて此野邊に
妻はさきだち子に別れ
雨のふる日は繩なひつ
何樂しみもなけれども
直きこゝろを杖として

かくても春は花を見つ　秋は月見てけふまでを
疑らぬものは草刈りの　疲れて寢ぬる夢の間ぞ
殊に此身のなぐさなる

地賞

蝴蝶　東京　山本康子

風のまに〳〵片々と　舞ふ羽衣の袖かろく
草葉の下の菫すみれ　匂へる方に飛來れば
香にしむ露は飜落ち　蝴蝶の羽を濡すめり
羽濡されて飛もせず　露の香にゑひにしか
舞にし袖の疲れしか　蝴蝶は花を褥床にて
一夜をやどのかり枕　暫し夢路を辿りけり
如何なる夢を結けん　醒ればいつか自身は
木の間に集く笹蟹の　糸に掛りて秋の葉に
そよげる風の音高し　哀れ蝴蝶の身の行衛

人賞

胸のとゞろき　香川　松永茂子

柳櫻をこきまぜし、　都のふりは見えねども、
昨日にかはる我が面や、　桃の化粧は誰が爲ぞ、
あさ夕なれし手鏡に、　打向ふさへやさしきを、
今宵こひし君きが家に、　燈火あかきあやむしろ、
いかにまばゆく照すらん。
妹脊のちぎりくみ交す、　千代の盃うけんとき、
はづる面わの海もみぢ、　君が眼にも見えん時、
やさしき君がみ言葉の、　吾耳もとのもえんとき、
小さき胸のとゞろきの、　君が胸にもふれんとき、
いかに吾血は騷ぐらん。
思へは思へば昨日まで、　小指をりつゝ待わびし、
今日ぞ吾世の朝ぼらけ、　かみ永刧のよろこびに、
盡きぬ希望を亂しつゝ、　ゑにしの海にあびん身の
すゞろとゞろく吾胸や、　うら耻かしの風あらみ、
心のをどとみだすらん。

選外秀逸

朝霞　神戸　足立あさ子

花の色香もしら雲を。　わけつゝ歸る雁がねの。
行へ何處と見る空に。　立ちなへだてそ朝霞。

雨中の花　東京　筒井さく子

時しも春の彌生とて、　四方の山邊を見渡せば、霞

の奥は知らねども、見ゆる限りは白妙の、花又花の峯つゞき、雲か雪かとまがふなり、野には綠の百千草、花の色々競ひあひ、清き匂ひに我が袖も香りに迷ふ蝶々の姿も振りもしをらしや、今日しもふれる春雨に、軒の青柳うちけぶり、庭の櫻や桃の花、かつげる塵をはらはせて、實に麗しく見ゆるかな、花に情けをかけまくも、春を守りの佐保姬の、閑雅の香りかぐはしく、賤が伏家も櫻木の、此の春雨に色添へて、げに美しの姿かな、

藤なみ　神戸　足立えい子

松にむらさき春日野や。鹿に伴ふ猿澤の。池の藤浪たちよりて。うつせよ花の水かゞみ。

小督局　下野　井上尙子

み玉をかざる宮人の　錦の袖に御うたげの
御宴の盃に玉欄に　嵯峨野の奥のひと本の
松のこかげのくさの庵　しのぶ草生ふやれのきに
宿るは同じ秋のよの　そらにきらめく月の影、
月に思のたえかねて　調べいでにし想夫戀
床しき琴のつま音は　玉座の御すのひま洩れて
露けき秋をしのびます　君のみむねにかよふらん
妙なる琴のつま音は　雲井の月に響くなり。

春の思ひ　東京　永井ふさ子

盛りみじかき櫻花　無常の風にさそはれて
あはれ跡なく散り失せぬ　花ばかりかは人の身も
いつかは果つる世のならひ　思へば人に憂あり
花散りはてし夕空を　仰げば月に淚あり
櫻散りしく春の野に　ふせば蝴蝶も夢さめぬ
嗚無常なる此の風よ　み世に化を散らさずば
人の心に憂なく　月の面も淸らかに
蝴蝶の夢もさめざらん

春興　東京　槇野愛子

花笠ゆかし月姬の　春の園生におり給へ
ほゝ笑む花におとづれて　希望の光輝やかし
春うつくしき乙女子に　淸き理想をあたふらん

春雨催興　肥後　友永常子

今宵の雨のはれもせば　花もさかりに成ぬへし
旅も折よくなりぬへし　いさ我友よ明日はれは
名蹟の露のちらぬまに　行てながめむさくら花
往來の道の手すさひに　土產に手折む初わらひ

野遊び　新潟　竹內りつ子

いさやこれより　ろをいてゝ　はるのあそびは　にはよりも
ほかの野山を　へめくらん　となりにたけさん　ちよさんと
りんゑなささふ　ぬしの友　るゐ年むつむ　なちこちの

わが友どちを　かたらいて　よものてふ／＼の　たはむれも
禮義をまもり　それこれと　つむや若菜に　ねせりをも
なかにすみれや　らんの花　むつみあふ日の　うれしさよ
ゐなかも樂し　のに山に　おほくあそびて　くれぬまに
やがて釣する　またの日や　けふの家つと　ふうき草
こゝろ樂しく　えを渡り　てに籠さげて　あゆみ行
さても見事や　きゞの花　ゆききの人や　めの童
みせはや花の　しき島を　あひすにほころ　ひめ櫻
もゝ木の王ぞ　せかい一　すゝみとははや　なほほまれ

石見　千代延信子

柳の月

塵の巷を遁れ出て　獨りたゝづむ柳かげ
今宵は月も清ければ　胸に思ひの狂ふかな
櫻花ちる春の夜に　したしき友とたゞふたり
手に手をとりて辿りしも　今宵の如き夜半なりき
籬にちかく笛とりて　君がかきなす玉琴に
調べ合はせし其夜半も　今宵の如き夜半なりき
初めて君を見てし夜も　思のたけを打ちあけて
君にかたりし其夜半も　今宵の如き夜半なりき
月はいよ／＼澄行きて　川瀬の音の冴やけさよ
親しき友よ今何處　今宵の月を如何に見るらん。

長野　上田さい子

春の夕暮

花彩るや夕映の　空に雲雀の落ち來り
長堤靑草春の風　辿る繪日がさ三つ二つ」
誰が乘捨して鬼鹿毛ぞ　勇さむ其たび／＼を
朱鞭の躍る鞍壺に　しづ心なく花のちる」

横濱　小林千代子

櫻

霞か雲か、見迷ふばかり、　今を盛りと、匂ふた櫻、
翌日は見にとて、約束したを、　時もあらうに、風めが吹いて、
忙しない目の、仕度はおろか、　あたら櫻は、たゞ骨と皮、」

東京　美矢竹光子

櫻花

空うらゝかに風ぬるく　ふきてほころぶ櫻花
かほりを四方につたへきて　人まつさまの愛らしさ

東京　豐田とよ子

花精

櫻雲なす吉野の山の　上り下りの曲り小路を
春の月影おぼろ／＼に　かすみ渡れるはるか彼方に
あはれけだかき人の御すがた　花片ぞ匂へるながぬれ髮に
あゝあれこそは花の精靈かも

大阪　桝田益子

落花

雲か霞かと咲く花も　夜半のあらしのさとふきて、
惜むなしく散るまゝに　春のあはれも消にけり。
花の香匂ふ夕月の　影を霞めて散り來なり、
雲なす峯のさくら花　時めくよりもあはれなれ。

石見　青柳秀子

壽永の嵐

夢なりけらし保元の、　年ら壽永のあき風に、
枯野とかはる百敷の、　都の空はくもりたり。
浪路危く浮く船の、　漂ふ果ても不知火の、
筑紫の海は靜かなれど、　心ぞ騷ぐ關の聲。
色も夕日の影薄く、　赤旗しろし消て行く、
恨みを叫ぶ荒波の、　音ものすごし壇の浦。
大とのぶらひ勇ましく、　まけの命に白旗の、
靡きに逆ふ風もなく、　大平の曲ぞ世にひゞく。
業末の露もくだけとの、　仰もなさけあら鎌の、

刃に散る稚子のいとしさに、　慕ひて恋ふ蓮臺野。
蕾の花も色あせて、　紅そゝく練貫の、
小袖にこむる亡魂の、　怨みか空の流れ星。
冥土のしるべと乳人さへ、　葉末の露と消えてより。
たづき泣く音を忍べ共、　墨染衣風さびし。
霊魂呼ぶ宵の經机、　香にくすふれるされかうべ、
見るに心も狂はれて、　法衣の袖もかみくだく。
光ぞ冴ゆる星月夜、　わらふ敵仇な鎌倉の、
衛士が焚火にとめられて、　敢へなく飛る空の色。
此處も住憂き奈良のちに、　髑髏の尼とさけすまれ、
世に淺間しく歌はれて、　天下に閼伽汲む澤もなし。
薇のさはりの難波江を、　分けゆく沖の小夜千鳥、
葦をしるべにさす舟の、　影も波路のはて遠く。
飛沫に濡るゝ舷を、　月の照らすがつらきかな。
藻にすむ虫の餌食とも、　なりてぞ殘す恨みをば、
胡沙吹風に含めれば、　鎌倉山をすさひ去れ。
暖潮寄するちぬの浦、　淡路の島に近かれど、
かへすに難き亡骸を、　てるか篝火波を焚く。

鳥かげ

加賀　富田　環子

春日うらゝぐ離れ屋に。　逝き兄上を思ひ出で。
うつらくと丸窓の。　緋もゝの影を見つむれば。
いづこより來む鳥かげのして。

一家の笑み

三重　與瀬　かすみ子

坊やを草に寢かせつゝ、　畑に番をさせ、
父と母とは鎌持ちて、　いそがしいぞえ新米の、
刈り入れ時を夕べ迄、、　野良にかせげば星樣の、
平和の笑みも美しう、　月の光に泣く坊を、
ドレと母親引き寄せば、　父もにッこり笑ってる。

髪の結ひ初

大坂　田中　靜子

生れてこゝに十五年　洗ひたらしゝはらゝ髪
はじめて結ひし束髪や　前の鏡をそと見れば
われにもあらぬわれにして　面恥しく思ひけり
茶の間に居ます祖母君は　似合ひたりとぞのたまひぬ
衣縫ひ給ふ母上は　ほゝとしづかに笑み給ふ
さはれ耻し如何にせん　明日學校に行く時を

鶯の雫

山城　松田　雲子

雅芽の二寸柏の雨の、　光輕ふ溪水に寄る、
霧晴ふ保津の奥に、　住みなれて春の冷さ。
翡翠は尾をしだらして、　足早に巖をめぐりぬ、
苔にすべる肱にすがりて、　「やまめ」とる鶯の雛さよ。
鶯を埋めて京へ嫁くとて、　山の雨を欷歔にみだして、
木がくれに紅の花籠、　老の股の關は腐ちぬと。
父しまさば強れて小袖の、　京の灯に口紅やとかまし、
悲母獨りに山をゆずれと、　胸鏡に映るこれが鶯の影。
八つ下り悲母や寂しう、　岩飛ぶと鶯の小ゆれに、
青き雫夢破りけむ、　翡翠は親子鳴き集ふ。

君と吾

大阪　紀藤　榮子

瀧の流の君と吾れ　岩根木の根をくゞり來て、
逝く水濁る世の瀬に　注ぐ此の身の哀れさよ。
浮世の外の月影を　水に宿して美しく、
睡く戀の君と吾　行衛希望の光あり。
やさしき胸を打開き　雄々しき胸を吾開き、
妙へなる音に調べつゝ　谷又谷を流れけり。
哀れ汚れし世の人は　自然の色に湧き出でし、
吾と君とに習ひつゝ　汚れし手より擁びけり。

御空の星も月影も　塵の巷を厭ひては、
君と音とに大空の　深き心を明しけり。
岩にせかれて別れても　末は再び相逢ふて、
よしや浮世は濁るとも　いざ出で行かむ君と香れ。

鐘の音

伊賀　菊山かね子

思ひ出でゝは狂ほしう　夕、さびしき鐘の音に
ふと誘はれて逍遙ひぬ。
長き堤も黄昏れて　糸ものどかの青柳や
若き乙女の黒髪の　其れにも似たる姿かな。
そと音訪るゝやは風に　もつれ〳〵て美くしう
糸の心は知られども　いかで忘れん夢の跡。
そゞろありきに笛ふきて　やさしき訣にあはせつゝ
啼く音ゆかしき鶯を　露かしたる木陰かな。
釣竿たれて花束れ　落つる雲雀を追ひゆきて
すれて折りたる菫草　結びし糸は是れなりき。
それも今更夢なれや　果敢なきものは人の世の
春はむかしに若けれど　世は永久に春ならじ。
さかき手向くるおくつきに　さびしく眠る彼の君が
笛ふく呼吸もあらずして　欲きく耳もあらずして
ぼたりとこぼるゝ玉の露　ぬらしてけりな、やせし肩。
あはれ果敢なの思ひにて　疊る眼に見返へれば
猶さびしさの糸ゆうに　むすぼれかゝる朧月。

父のおくつき

播磨　横田春枝子

父失せましていくぞ年　千行の涙たえやらず
かわくひまなき袖の露　吹く春風にちらせつゝ
今し墓前に我たてば　たかき墓標のすみはげて
卒塔婆は土にたをれたり　花をそなへてぬかづけば
冷風一時さとふきて　永き春日も暮れゆきぬ

杜の夕

東京　松岡かめ子

入日は今を名残にと　靈樹寂寥の大古沼
射放ったりや金の征矢　水紅に燃え湧きて
白玉椿音もなう　落ちては夢のゆら〳〵と
水輪は廣く消えてゆく。
天壇洩るゝ冷風は　一千年の香をはきて
梢そよに動かせば　黄金と映えしまばたきを
星姫昇る姿かな。
罪におちたる人の子の　永劫にふるはぬ斧の味
禹王は勝りの眉あげてや　やはらぎ睡む虫の脳
世の虚偽は有らずして　聖くも眠る神の領、

雛の主

美濃　加藤よね子

古きつゞらの蓋あけて　紙のひゝなやたち雛や
出す笑顔のかはられど　かなしや錦きてはひし
ひなの主のあらざるに　涙のたれぞやるせなき
柳の糸のむすぼゝれ　つゆの白玉たえせねば
ちかき邊のうなひらが　雛の客とていさましく
訪れしかど如何にせむ　饗なす膳はならべども
去年に異りてぬしなきに　本意なう思ひ締るらん
雛のともしびうす暗く　雨つれ〳〵と降しけば
昔のさまのうつゝとも　夢とも分かでをさなごが
乳房にすがりかた言に　ひなの面をゆびさして
語りしことの可愛さは　忘られでこそ忍ばるれ

尼君

栃木　井上瑞枝子

あしたの鐘に先立て　日毎々々に人しらぬ、
小高き丘の其かげの、　小さき一つの木標に、
しばしたやさぬ花の香の、　手向の主はこの里に、

たへて稀なる都ぶり、　去ぬる睦月山寺に、
振のみ袖とさかしよの、　塵を拂ひて墨染の、
衣やさしき後姿、　御經に交る京訛、
年うら若き尼君の、　淋しき笑みやなげきこと、
ふりし玉章うつしゑや、　深きゑにしのあるべきに、
ひめてかたらず經机。

未亡人

東京　瀬藤千代子

胡沙吹く風は腥さく　夫は戰爭に旅立ちぬ
殘るは老ひし雙親の　外にいとしのうなゐ兒よ
かよわき身にも一筋に　夫の凱旋を慰安に
萱はひれもす夜もすがら　家の生計に餘念なき
忠義に鍛えし日本刀　仁愛こもる旭の御旗
進む所は草も木も　靡かぬものぞなかりけれ
旅順の城は開けたり　奉天城は陷いれり
東洋艦隊全滅し　寄せ來し波の跡もなし
暴威に狂ふ荒鷲も　我が天皇の御稜威に
面を向けんすべもなく　平和は永久に結ばれぬ
第一、第二、第三軍　四軍の將士還りまし
到る處の歡迎の　聲は天地を搖がしぬ
勝閧擧けて還りに、　四十餘萬の兵士の
中に吾夫影もなし　嗚呼吾夫の影ぞなき
愛たてきものは浮世かも　たのめしことはあだの空
人の勳功を聞くにつけ　さきだつものは涙のみ
長の黒髪なにかせん　神主に供へて眞心を
夫にかはりて雙親に　盡くすの外はあらざらめ
なみながらも吾が責任　いやが上にも重り來ぬ
かたみの稚兒を捕り立てゝ　いでや嬶さん國と家とに

亡父を思ふ

大分　護城鶴代子

身の幸なきをかこちつゝ　影も淋しく一人たち
無限の憂にしづむとき　山のかなたに日は落て
ゆくてを急ぐ旅人の　笠より暮るゝ野邊の色
入相つぐる鐘の音　靜けきひゞき傳へつゝ
あしの葉そよぐ川岸に　夕しほ漸くみちて來ぬ
思はずうつす水鏡　見るとしもなく見てあれば
まだうなゐにてありし時　蝶よ花よと父上の
撫で給ひたる黒髪は　心と共にやつれけり
其父上はぬば玉の　夢路ならでは逢ひがたし
母その陰の下露に　われは乙女となりにけり
われは乙女となりぬれど　身に憂き事の重なれば
心もともにひがまれて　行きかふ人のかへり見て
さゝやく事しも在る時は　我はそしるがあなうしと
若き血汐のみなぎりて　胸もさけなん思ひかな
あゝ世の人はなどてかく　我身獨りにつらるか
みどりの眼にも淸らけき　涙の露はあるものと
心からなろうさつらさ　かゝりし時はわきて猶
遠き御國へ逝きましゝ　父の御身ぞ慕はるゝ
いとしき子よと手をとりて　御空の月を仰ぎては
月やいくつと歌ひつゝ　めで給ひたる恩愛も
十年昔の事なりき　あゝ戀しきは父上よ
床しき花の香を受けて　父の御手にまつはりつ
野邊に小草を摘てしは　十年昔の事なりき

人なき折は只獨り　里川堤さまよひて
一人淋しく待ちぬれど　歸り來まさず父上は
今年も花は咲きぬれど　月は昔に變られど

和氣の君　　長崎　佐田秋江子

天より下ろす玉鉾の　道ある國のみ實を
穢れたる身に受け得んと　法の道説く舌の根に
こゝろ大くも罪業を　つくりし弓削の淫鏡が
胸のたくみのおそましや　たとへは清き白銀の
いすゞの川に注がんと　わきたちかへる濁り江よ
其の濁り江をそのかみの　臣みな堰きも得せずして
あはや濁らむ五十鈴川　清き心の清麿の
君が生命をにへにして　神のみ告をそのまゝに
つたへしことの健氣さよ　あなありがたき和氣の君。

折にふれて　　新潟　竹内りつ子

國は大和の八重櫻　光りたつとき日本國
光明かゝやく外國へ　花にまはゆく旭の光
社の森の東より　雲井を出る日光社
女をとは誰か新夫婦　東男に京女
鑑を採りて寫眞師の　早くも寫す姫鑑

立見銀髯將軍の凱旋を觀て感あり　　陸奥　堀口ふじ子

(一)弘前師團に凱旋す　立見陸軍中將を
歡迎せむと集ひにし　民衆は凡そ五千人
(二)吹く春風を身に浴びて　プラットホームに整列す
今や遲しと待ち焦る　南の空をながめつゝ
(三)おどろ〳〵と山嶽に　深き雪にそゞがれまに
黒き煙を吐きたてゝ　ほのかに見ゆる山の際
(四)汽笛一聲徐々と　汽車はつきぬ停車場
萬々歳と叫ぶ聲　俄かに起る喧囂と
(五)頭髮は白く目眥張り　威風凛たる將軍は
群衆に向ひ答禮す　半身出す窓の外
(六)溢るゝ名譽身に擔ひ　けふ弘前にかへるなに
謙讓何に譬ふべき　涙に咽ぶ外ぞなき、
(七)汽車の中を凝視れば　參謀長の由比の君
木原參謀に大野軍醫　稻井中尉も見えにけり
(八)思へば立見將軍の　東國健兒統率して
萬里の波濤蹴破りて　遠く滿洲に打渡り、
(九)世界戰史にためしなき　黒溝台の激戰に
數倍の敵を擊攘ふ　縱横左右に奮戰す、
(十)頃は一月末つかた　寒威凛烈風荒み
白雪ふりて朦朧と　咫尺辨せぬ折とかよ、
(十一)黒溝台の野にて　武勲奏せる其偉績
光彩陸離燦然と　萬國戰史に輝かむ、
(十二)振古未曾有の激戰に　振古未曾有の捷を奏す
凱歌揚げてけふかへる　立見將軍いさましや、
(十三)汽笛とゝもに轔轢と　將軍乘せし一列車
長蛇の如く蜿蜒と　ステーションをば離れたり、

(十四)又もや起る葛藤の　聲は天地を搖かして
将軍亦も厳かに　群衆に向ひ答禮す、
(十五)アー好将軍今立ちぬ　かゝる将軍ありてこそ
黒溝台や奉天に　勝利をこそは得たるなれ、
(十六)今や何處と眺むれば　已に汽車の音もなし
空に靉靆く淡烟は　龍の躍るにさも似たり、

祝凱旋

大阪　桝田益子

八洲の外にも輝やける　我すめらぎの大御稜威
君が功績とおひたちて　歸る今日こそめでたけれ
雲にいぶきし荒わしも　狩野の原の得ものとぞ
なれる羽ぬけのうつせ鳥　よそに見るこそ笑しけれ
火づゝの響しづまりて　枝もならさず海はらの
波はゆたかに治まれる　み代の春こそめでたけれ
枝もならさず安らけく　治れる御世のめでたさは
千里の外もひとつにて　皆ほぎまつる大御稜威
御稜威輝やく日の本の　我が大君にまつろはぬ
草木もなしや列なれる　とつ國人もかしこみて
ちゞに砕きしまごゝろの　誠ややがて身にあまる
高きほまれを故さとに　にしきを飾るいくさ人
たかき譽れを身におひて　遙けき空をふるさとへ
錦をかざるますら雄の　其たらちねやいかならん
嬉しかるらん露のまも　忘られかれて祈りつる
しるしはやがて人皆の　羨むばかりかゞやかん
一日も千夜の思ひして　つゝがなかれと祈つる
故郷人へのいへづとは　高きいさをの光りなり
玉のうてなも柴の戸も　思ひはおなじ民くさの
ちゞの寳ものかはと　喜びまつりいはふかな
萬づ世うたふ國たみの　聲は雲井をとよもして
朝日ににほふ日の御旗　輝く今日こそめでたけれ

短歌

天賞

林中花　長崎　遠藤つゆ子

初瀬山檜ばらのおくのさくら花
あらしの音もよそにきくらん

地賞

雨中早苗　東京　茂川近子

ふる雨も神の恵とちる露の
雫の田井に早苗とるなり

春月　神戸　足立あさ子

入りぬべき山は霞にとざゝれて
花に宿かる春の夜の月

山吹　岐阜　山田房子

やましろのいでのたま川ゆく水にうつりてさけるやまぶきの花

同　大阪　池田英子

たま川の六つのなかにもかぞへらる井出の山吹さきそめにけり

山吹を折て　東京　土田八重子

手折られて口惜しとこそ思ふらめいはぬ色なるやまぶきのはな

菖蒲　東京　松岡かめ子
花あやめながるゝ水にうつろかな繪日がさふたつ橋わたりゆく

夏夜深　神戸　添木梅子
夜振りする火影に答へかゝり焚く妹かこゝろを背や汲みぬらし

海邊月夜　名古屋　林田糸子
はてもなき濱ばらとほく月すみて男なみ女なみの色うつくしき

社頭梅花　東京　古谷花子
あめつちの手向なるらむ千早振るかみの御垣ににほふうめか枝

落梅　横濱　小林千代子
あだし夜の風に散りぬる梅か枝になにをたつれて鳥の來ぬらん

鶯　三重　奥瀬かすみ子
うくひすのはつ音を聞きし朝よりくりかへし見る花こよみかな

竹林鶯　埼玉　清水さだ子
竹のみのしげるはやしとおもひきや梅のあるらむうくひすの聲

鶯聲和琴　埼玉　横田やな子
琴とれば軒の松かせかよひきてこゝろひかるゝうくひすのこゑ

閑鶯呼客　松山　田村多豆子
この闇にくる人さそふうくひすはよその庭にはうつらさるらむ

春　神奈川　汲田治子
ひはりなく野邊のかなたを乙女子か走るあとより小蝶おひゆく

春海　大坂　木村春江子
眞帆かた帆かすみのなかに影きえて波おとひくしちぬの海つら

同　羽後　金子新子
このごろの朝けの風のあたゝかく梅のつほみもほころひにけり

春の野　千葉　木村きよ子
参あなく菜のはな黄なる春の野は胡蝶なられとしつこゝろなし

垣根の菫　上野　[illegible]ゆき子
消えのこる雪とも見えてかきの根に妹が手うゑの白すみれ咲く

春風　東京　伊藤竹子
袖ふりてこてふもおそふ山畑のすゝなかほりてはるかせそふく

春眺望　長崎　佐田秋江子
わか草のみとりつゝきにうら/\と牧方かけてかすむ野邊かな

同　群馬　石井寛
打わたす花のはるなも赤城根もにほるのけしきはかすみなりけり

春草　東京　神田けい子
見渡せは八重のかすみにつゝまれて遠きはうすき草のいろかな

名所の春草　上野　木暮千代子
むさしのゝ草もみとりになりにけり春のひかけのしけき惠みに

野雉子　東京　伊藤とし子
春雨にひなをはごくむ袖ぬれてのへのきゞすのねにたてゝなく

野霞　東京　礒井のぶ子
ひろ/\と霞たちけりむさし野の袖あたゝかになりにけるかな

野遊　岐阜　豐田ふゆ子
我袖にたわるゝてふもともならしすゝなさく野に遊ぶはるひは

春夜　東京　林環子
おほろ夜の花にあこかれ思ほへす家路はるけくたどり來にけり

春の月　大阪　紀藤榮子
おほ君の御くるまきしる音すなりみやこおほ路の春の夜のつき

春月朧　長野　岡田千穗子
やへかすみあまつみそらにたちこめて花もおほろの春のよの月

柳上月　松山　上原のぶ子
青柳のいとによらすばつきかけもかすみにはかく亂らさらまし

雨後春月　新潟　牧はぎ子
春雨のいつしかはれてときはやま松のこすゑにやとるつきかけ

同　新潟　石川しげ子
雨晴れて常磐のやまのまつのいろみとりいやますはるの夜の月

春雨　大阪　田中靜子
小さき蝶のつばさぬらしてふるあめをにくしと染めぬ花園日記

同　丹波　大槻とく枝子
わひしくも降りつゝきたる春雨に庭のさくらもひもときにけり

閑庭春雨　肥後　友永章子
かくれ家の庭のこけちにひとしほのみとりをそへて春雨そふろ

春夢　陸前　前田河千年子
よしの山はなの盛りをゆめちにてたとるもうれしはなの下かけ

同　陸前　前田河みさを子
ゆめならはさめさらましとおもふまて花の盛りを夢にみしかな

桃　栃木　井上瑞枝子
年わかき尼君をはすやまてらのかきれをめくる緋もゝしらもゝ

同　肥後　友永常子
乙女子かひゝなまつりの白さけにえゝるはかりの桃のくれなゐ

梨の花　備前　松本もと子
夕くれを小窓によれはさひしくもあめにちりゆくなしの花かな

蝶　福岡　大石あや子
さきほこる花よりはなに二つ三つむれつゝ蝶のあそふのとけさ

柳の風　香川　星野ひさ子
垣の根の犬もねむりてのとかなる風のまに〳〵なひくあをやき

行路柳　遠江　市川芳子
青柳のみとりの糸にひかれてやのとけさまさるたひ路なるらむ

名所花　愛知　淺井愛子
すゝろきし人はかへりてよしの山花にしづけくつきそかすめる

同　大阪　桝田益子
みよしのゝ青根か峯も名のみにて花のくもにぞうづもれにける

同　神戸　足立ゑい子
ふきおろす風のちからも花のうへにたゆみ顔なるみよし野の里

同　横濱　船串米子
よしの山花にこゝろも匂ふまて見わたすかきりさきみちにけり

同　栃木　加藤錦子
さく花にこゝろゆくまてなかめはやまた暮れのころ小金井の里

同　東京　牧遙子
あすか山見かへりかちに歸りけり花とつきとにこゝろのこして

同　神奈川　田邊房子
うち渡すさくらのおくもさくらにてくれなゐ深しみよし野の山

同　名古屋　淺井朝子
ほの〳〵とかすみのおくに色めきて花ににほへるみよしのゝ山

同　東京　鹽田園子
いつくにも花の名ところ多けれと吉野のやまのはなそまされる

同　三河　小林稻子
あまつ風天のしらくもふきおろしわかみよし野の花とやすらん

落花　神奈川　三谷さわ子
笙の音のかすかにひゞく夕ぐれのわが家の軒にうめの散るなり

同　石見　竹柳秀子
あたにふく風のこゝろに誘はれて行方も知らすちるさくらかな

餘花　愛知　淺井朝子
行春のなこりをしみてのこれるか夏のけしきをそふるこゝろか

蛙　東京　高野もと子
しつのをかかへすあらたのにこり水いつより住てかはつ鳴らむ

同　常陸　岡田萬子
やまふきの散りて流るゝたま川の岩瀬ともよしかはづ鳴くなり

藤　下野　井上尚子
池の面はさゝ波立ちてさよかせにゆるゝともなくゆるゝ藤かな

吉野山　東京　永井ふさ子
さきつゝく花に暮して吉野山かへるたもとのをしくもあるかな

木曾路にて　東京　佐藤のぶ子
たきゞこる人のつれこそ安からめつゝれの衣に身はつゝむとも

寫眞　長門　植原ひろ子
寫し繪のすかたはいとも老いにけり心はかりはおいせされとも

同　愛知　淺井愛子
うつしおくこの業なくはうみ山をへたてゝとほき友にあはめや

同　長門　松山春子
いかれるも笑る姿も其のまゝにうつるかゝみのそのうつしゑに

同　伊勢　間宮稜子
山川をへたてし里にすみながらきみかすかたを見るそうれしき

同　長門　松村ゆう子
をさな子の笑ひてむかふうつし繪は老ての後のかたみなりけり

同　讃岐　安藤みつよ
手箱よりまたもとり出てなき父のをゝしきおもひに袖絞るかな

同　長門　木村かつ子
ますらをもゑみてよりそふ手弱女も互にのこすまうつしのかけ

同　東京　萩原文子
おくりこしゝ友のうつしゑ取出てゝあかぬ面かけ見つゝ偲はん

同　東京　窪田その子
うつし繪の笑かほぞいとゞ偲ばるゝありしむかしの事し思へは

同　茨城　和田兼子
久しくもうちたえたりし友かきに逢ふそうれしきこれの寫し繪

海原　東京　槇野愛子
しらみゆくそらか水かの沖あひにつりふねうきてしろき鳥とぶ

うき草　新潟　岩本芳子
流れ江のいづこに春をたづぬべきつみすてられしうきくさの花

散歩　岩代　菅野和子
ゆきくれてやどかる里もなかりけり家どころ〱桃さきみだる

旅　伊勢　藤堂しげ子
今日もまた雨に暮ゆくつれ〱をみやこの空のしのばれてのみ

歸省所感　群馬　大澤笹子
かへり來てたゞなにとなく戀しきは梅さく宿のうぐひすのこゑ

美人　埼玉　横田秋子
をみなへしくれる姿のうつくしみ先こゝろこそうこきそめけれ

女學校　岐阜　中島榮子
をしへ草しける園生に少女らかたかきみさをゝつむそたのしき

心　和歌山　高内櫻子
秋の夜の空たかくすむ月のことあらまほしきはこゝろなりけり

馬　東京　西村直子
とつ國の馬もまぬきておほきみの大みくるまをひく世なりけり

同　東京　伊藤英子
ちさと行龍のあら駒えてしかなやしまのほかをときのまに見む

水車　伊勢　黒田代音子
水くるま廻るひゞきのきこゆなりやへのかすみに影は見えれど

滊車の中にて　能登　栗倉すみれ子
くろ金の道はしり行くくるまの上にむかしの旅を思ひこそやれ

折にふれて　越後　松永しげ子
松はらの小道をいそくゆふくれをひなうたゆるう牛引きそ行く

同　東京　萩原文子
愛こもるはなの一ひら文に添へおくりしいものこゝろゆかしき

同　岐阜　栗山貞子
雨晴れてほすからかさを飛ひまはる蝶に小猫のくろひけるかな

同　京都　高丘春子
せめてもと一えだ折りてかへらなん花のさかりを見ぬ人のため

同　大和　深山たか子
糸遊のひけるまに〱なにはおきてまつ野邊にのみゆく心かな

同　東京　豊田とよ子
夕くれのそよふく風にふりそてをまかせて立ちしおはしまの人

同　香川　松永茂子
里の子かとゝかぬ崖のくさいちこ來てはついはむ山からすかな

森鷗丸　京都　下川登美子
あり明の月てるもりのほとゝきす名乗りて出てし聲のさやけさ

浦島子

玉くしけひらかさりせはとこしへにとこよなとめに逢はまし物を　東京　伊藤ふく子

俳句

天賞

時鳥　下野　志田周子

ほとゝぎすわとは松かせ浪の音

地賞

雲の峰　東京　山田好子

目にあまる沼に水なし雲の峰

人賞

夕ざくら　常陸　兒玉こう子

米をとぐ手先にちるや夕ざくら

春の景物　神戸　足立ゑい子

動かねば猶も日永しかゝり船

狩り暮て雲に宿かる櫻かな

たつた今別れた人も霞みけり

折にふれて　松山　山脇幸子

泊り山寝耳に鳥の羽音かな

傾國の美女病あり暮の春

春題三句　東京　新城濱子

古里は桃咲く頃となり候

春の海繪島に舟をつけにけり

惣領は蜂にさゝれて泣きにけり

梅二題　石見　古柳秀子

白梅の下に飯くふ野人かな

冠に梅のかざしや四位三位

花と月　水戸　吉田靖子

小聲にて辻占買ふや朧月

散られ散れ小嵐に櫻雪のごと

夕鐘ば散る櫻かなかすみかな

摘草や芝生に乳兒の夢結ぶ

三尺ののきに梅が香せまりけり

春の花　伊賀　菊山かね子

紅梅や辻堂めぐるわかき僧

からにして置き所なき櫻かな

蝶を追ふ坊にあぶなき溝もあり

菖蒲　香川　松永茂子

美しき女使や花菖蒲

春一ダース　横須　高橋常子

祇園から吹かれに出たり春の風
春雨や紅梅寮の歌の會
雛祭り座に集ひたる梅櫻
面白き騷や花の俄雨
行く广を見送る雨の灯し哉
春の夜や四條五條の人通り
水温む里や乙女の布晒し
梅の里柳の里や水温む
菜の花の行きわたり也比翼塚
さればとて我に歌なし西行忌
思ふ事なくて嬉しき櫻哉
草餅や戀にやつれし歌納言

長閑けき春　常陸　兒玉好子

蝶飛ぶや繪日傘遠き麥畑
大佛の眠たさうなる日永かな
白魚の指につまれぬ春の草

筆留て志はし見惚れる月の梅　新潟　伊與部まつ子
からき世を夢にくらすか花の蝶
轉宅や妹が根分の菊の株　松山　曾藤さと子

船の灯に銀波金波や春の海　松山　岩崎きよ子
櫻見の戻り菜種の花さかり
井戸端の衣紋櫻の咲きにけり　神戸　足立あさ子
燕汽車の煙にかくれけり
あけぼのは花に譲りて夕柳
泊らせてあけぼの見せん家櫻
鶯や連歌のむしろにぎはしき　東京　堀田たけ子
高等の杖にちりくる櫻かな
公達に物乞ふ人や桃のみち
岩鮎や妹脊の岩をくゞりけり
菜の花や千鳥足なる二人連れ
春の川芹ゆる乙女蝸もゆる
梨つぼの歌仙めづべきおぼろ月
長き日や針の手とめて蝶を見る　能登　栗倉すみれ子
菫つむ乙女のかごにリボン哉
小春日や姫君野路を行き給ふ
青き雲の靜にうごく花野かな　尾張　野咲すみれ子
うごくともみえぬ白帆や春の海
靜けさや庭の櫻にかすむ月
春の野や乙女のかみに風の吹く
春や行く琵琶の秘曲に泣く夕
春風や濱の女の船も漕く
春の旅女の馬士もよかりけり　美濃　加藤よれ子
白粉を洗ひ落しぬ春の水
春寒むの鏡に湯氣の氷りけり
胡蝶舞ゆるくめぐるや春の水
牛鳴いて午靜かなり桃の村　三重　奥瀬かすみ子
鯉はれて小猫は伸びをしたりけり
夢に見る徒然草やはるの雨　神奈川　由樹靜子

詞藻

草臥れて寢た子の重し花戻り
木登りを今日は禁めけり花の枝
姫様の供して來れば散る櫻
追ふ蝶につかれてころぶ花の上
摘み草や長き日影のうつるまで
短夜や風邪からなりし朝寐坊
塵の世の塵も染まらぬ櫻かな
咄しから子にねだらるる花見かな
蝶高し低し萌え行く野の景色
谷一ツ枝切る駒鳥の高音かな
後れ毛をなぶるもにくや春の風
松蔭に一本長き蕨かな
陽炎や傘ほす家の五六軒
田螺鳴く小田に霞むや春の月
寢心や田中の庵の初蛙
花吹雪日傘にうけて土堤八町
古戰場弔ひ顔に月おぼろ
嫁殿の財産見たり土用干
分捕の砲に並べて土用干
水ぬるむ盥の海やいくさ艦
曲水や流に浮ぶ人の智慧
呼ひに出た兄も戻らず二日灸
折りかれてそつと放すや藤の花
山寺の鐘の音低し春の雨
山里の桃の花散る灌佛會
春の日や蝴蝶のせ行く渡し舟
夕暮の鐘に花散る隅田川
春の夜や柳にかすむ朧月
五月雨や針のさびと小窓かな

横濱　小林千代子
岐阜　柴山眞子
横濱　小林千代子
横濱　船串よれ子
東京　林　環子
備前　松本もと子
常陸　岡田萬子
京都　高丘春子
京都　石橋こう子
空知　武ひばり子
埼玉　清水さた子
大阪　木村春江子
東京　永井ふさ子
下野　井上尙子

五月雨や寫眞並べて今日もくれ
レースやみて人去る堤櫻ちる
花ちるやさとり顔なる石地藏
病む母に一度見せはや嵐山
渡し守の船に眠るや雲の峰
一枝は母の御墓に花菖蒲
春の水くみてへになばときにけり
笛持ちて磯に出にけり春の月
花吹雪朧月夜や春の暮
春の野や駒の背に吹く笛の音
肥舟に嫁入渡すや春の風
驢馬に乘つて地につく足や暖かき
海に石投げては春の日永哉
味噌汁の味わいもよし梨の花
すてた子の年數えけり花あやめ
春の日や裏打なする繪卷物
春の日や髮結ひあげて小買物
春の日や蒔繪研出す窓の人
春の日や網で曳き込む御庭石
春の日や風の繪を描く庭の先
濡れまじと筏に蝶の揚羽哉
梅に月これに囀る鳥もがな
傘さして乘る川舟や春の雨
雨雲の夜空佗しや歸る雁
散るを誘ふ雨や仇なる夕櫻
裏畑は南に遠し茶摘唄
ちる花をあびて歸るや朧ろ月
彼方此方ふくべの見えて吉野山
春の日や帽子にはさむ桃の花

讃岐　安藤光代子
東京　松岡かめ子
淡路　松永しげ子
愛知　山田いくよ子
長州　吉村雅子
尾張　山田いく子
神戸　水越美子
仙臺　山形幸子
東京　小路春子

春雨に昔我物語り聞く夜かな
會堂に讃美の歌や春の雨
交りや年々花に似もやらず
笑はせん眞似もなくて行く春や
曲水や太刀持つ稚子の眠り居る
春風やおもちやのせたる乳母車
仕官せし友に逢けり春の宵
泉水を迷ひ出けり春の魚
蛤の口開く桶や水ぬるむ
蝶々や金箔散りし畫師が庭
花陰や蝶々／＼のさゝめごと
春日和上野大路は人の山
無心した澁茶のうまし桃の宿
足おもし花に名殘をしまれて
詩に歌に文にもあかぬ菫かな
春風にまどふ胡蝶の二つ三つ
すみれつむ少女の袖に飛ぶ胡蝶
月うつろ池の中より蛙鳴く
神の灯に向て初鷄諸ひけり
逝く春や花見る人の醉ひ心地
祝はや御代を豐かに水祝
女の兒等の若菜摘野や供の下女
鑑池梅の月夜やます鑑
隆り行御代や芳野の花隆
盛大なさくらの下や小酒盛
鶯に起まけにけり今朝も又
梅か香のいと／＼ゆかしや君か袖
海棠に雨の隙飛ふ蝶かな
颯と風にひら／＼蝶の行衛哉

筑前 田島栄霞子
横須賀 末吉さかえ子
相模 倉橋よし江子
東京 小林よし子
上毛 大竹しげ子
長崎 秋山とら子
筑前 上原歌子
陸奥 堀口ふじ子
札幌 杉山清子
大阪 紀藤栄子
新潟 竹内りつ子
新潟 富樫いと子
松山 越智むら子

藻を拾ふ春の夕の干潟かな
古里の花も添へたる初便り
摘草の振袖ながき恨かな
朧夜や橋半分はあらはれず
朧夜の橋に立ちたる狂女かな
寄宿舎の裏は花野の景色哉
これが皆散るとは惜しゝ櫻ばな
二心なくて浮世は柳かな
山吹に小鮎くむ子や宵の月
花桐や貴船の里の女繪師
紅梅の艶に過ぎたり寺の庭
鶯に噺しとらるゝ朝茶かな
月出でゝ流れも清し花の山
花も月も朧に匂ふ昨日今日
花の下我思ふ人はかすみけり
行春や白川戀ふる影法師
卯の花や庭のすみなる籔の中
仰ぐかな達族が門の初のぼり
獨り庭を秋思へとや春の雨
梨の花歌よむ人の欄による
橋錢に拂つて越しぬ春の川
菜の花や厄と連立つ京はづれ
春風や足弱ながら須磨明石
別れ行く熊野が小袖に落花哉
春雨や岸に舟待つ蛇の目傘
長閑さに食道樂を讀みにけり
堤行く少女に吹くや春の風
借りて來た乳兒に物言ふ日永なか
足弱き叔母も出てたる彼岸哉

大阪 紀藤のぶ子
東京 江田延代子
大阪 田中靜子
東京 古谷花子
石見 春の家すみれ子
新潟 岩本芳子
上州 大澤富久子
大阪 藤田栄子
栃木 井上瑞枝子
長崎 秋山虎子
長野 上田さい子
東京 永瀬茂子
伊賀 木津きみ子
東京 森井秋子

道に摘みし土筆持つ手や幼稚園
山吹の覗く小池に朱鯉かな
雪三尺桃なき里のひな祭り　東京　岸　常子
ちこ醫の白酒に醉ふ雛祭り
花吹雪雌蝶雄蝶の夢淡き
妾宅の薹閑にして日永かな　浦和　目黒ひろ子
菫摘まゝごと遊び莚かな
小さき手に摘へもちたる菫草
東風吹て朝炊烟ろ村十戸
紅梅や五候の邸に酒薫ず
草もちや春野の色をしめしけり　群馬　石井寛子
川添えや舟行りながら花を見る　新潟　石川しげ子
すみれさき蝶のむれとぶ日和哉
長閑さや蝶のはなれぬ旅の路　新潟　牧　はぎ子
餘念なく稚子にたはむる胡蝶哉
愛らしき稚子のあと追ふ胡蝶哉

投書家の諸嬢に告ぐ

本欄は諸嬢の筆戰場にて、諸嬢の投稿は大に歡迎する所なれば、成るべくは掲載することにつとめたり、然るに投書中の半數は、これが女子の筆蹟かと思はるゝばかりのなぐり書にて、選者の迷惑一方ならず、文のよきもの必ずしも字よしとは行かず、されど解るやうにといふ事は、少しの注意によることとなるべし、僅かに一二枚の清書、個々にとりては何程の手數にてもあるまじ、幸に撰者をして此言なからしめんことをこそ願はしけれ、

能筆の投書家

本誌への投書家中、筆蹟の佳なるは左の諸嬢なり

▲文字の美しき

東京　林　艶子
岐阜　中島　素子
神奈川　由利しづ子
岩代　菅野　和子
東京　小林　芳子
大阪　舟越小仙子
伊豆　廣田しげ子
香川　松永　茂子

▲文字の達者なる

東京　佐野　富子
東京　外山よし子
大和　栗山　俊子
東京　松本まつ子
京都　下川登美子
越後　松永　繁子

▲文字のよく解る

東京　永井ふさ子
東京　天野　照子
大阪　池田　英子
伊豫　上原のぶ子

[illegible]　[illegible]

茨城　荷見てる子　能登　粟倉　菫子
千葉　木村きよ子　群馬　大澤　筆子
伊勢　間宮　清子　神奈川　汲田　治子

佳作の小説

應募小說中、紙面の都合により、秀逸の作品の掲載を洩れたるもの左の如し、

雪の夜語　山城　鈴木菊子君
浮草　信濃　近藤周子君
薄命怨　近江　室谷由加利女史君
施療患者　東京　鈴木つね子君
黑髮　薩摩　郡山元子君
歸省　奈良　小林福子君
春風　能登　粟倉菫子君
雨の夜嵐　伊豫　山脇幸子君
希望　山形　岡田南無子君
雪の日　東京　松原千代子君
菫　陸奥　相馬冬子君
思出の記　横濱　鈴木麻津子君

◎日本廢兵慰問會のこと　振古未曾有の一大事變たりし日露戰役は、既に平和克復して、我遠征の陸海軍諸將陸續凱旋し、國民は日夜歡迎して其の勞を慰むるに力めけるが、此時に當りて最も悲慘を感ずるは、數萬の廢兵にして、これを慰藉するの道は、政府事業にのみ委すべきものにあらずとて、山根正次氏を會長とし、日本廢兵慰問會と稱するものを組織し、博く博愛仁慈の好紀念をつくらんと計畫せるよし、而して其資を得るの一端として、同會にては、一は凱旋大觀兵式の紀念とし、乃木、東郷兩大將の肖像墨蹟寫眞版額面をつくり、そを希望者(一枚金廿錢)に頒つ由

◎饑饉地兒女の着京　岡山孤兒院に收容せらるべき、東北の兒女七十五名は、去る廿四日午後六時上野に着し、直に神田元柳原町の原胤昭氏方に至りて宿泊したるが、翌廿五日午後零時三十分新橋發の汽車にて岡山に向ひたり、あゝこのあはれなる兒女、いかに成長し行くらん、

新刊紹介

◎帆立貝　　京橋築地二ノ廿五　俳書堂發行

冠して寫生文集とし云ふ、俳文の大家四方太、虚子兩氏の合著にて活社會、眠社會、遊社會、あらゆる方面の形狀を、目と筆を器用に働せて寫生したるもの、文字美にして而も活氣あり、殊に四方太氏の飛島山と盆梅、虚子氏の片々文學おもしろし、左に寫生見本を示さん

多くは我々同様に、素見連ばかりで、あまり愉快さうな顔付は見えない、下戸は一生の樂みに一割方の損があるよといふ顔「人の騒ぐのを見て居るのは馬鹿々々しいといふ顔、飛島山の花見は俗でいけないといふ顔、風俗壞亂を取締まらんじやいかんといふ顔風が寒くて水ッ洟が出るといふ顔、お餅が食べたいといふ顔、など様々不景氣な顔を並べてポンヤリとして居る、(飛鳥山)

さう決心すると間もなく第一發を放す、いかにも冷性のやつが無造作にスーと出る、しかもそのスーがあまり短い方で無い、可なり殘して置くやうにせぬと、後が困ると思つたが、長い尾を引いて殘りなく出て終ふ、そこで第二發の工夫をする、徐に乳の下あたりから腹の下を撫下ろす、腸の迂曲蟠椈を考へて、臍の周圍を撫でまはす、何處かに固まりが出來たやうで、だん〳〵その固まりが大きくなつて來るやうで、終に首尾よく第二發を放す『以下十發までの苦心を舒す』(片々文學のうち)

全篇一字も厭味を覺ゆるものなし、多くの家庭に推選す(定價一圓)

◎野ぎくの墓　　同　俳書堂發行

これも俳壇の驍將左千夫氏の艷筆に成りたるものなり、十五歳の政夫と、十七歳の民子とが可憐なる相思の情を舒したるものにて、野ぎくの墓といふは、民子が政夫を慕ふの餘、憂鬱終に死に至り、政夫が民子の生前野菊を愛せし所より、其の墓に詣でゝ野菊を植え、地下の靈を慰むるによれる也、行文流暢、些の俗臭なく、近時得難き家庭小説書といふべし(定價三拾錢)

◎母の書翰　　京橋南紺屋町　實業之日本社發行

本書は家庭小説を以て濟新の筆を有せる堀内新泉氏の著にして、母の書翰に辭を托し、多くの女學生の爲に寓稿したるもの也、目次に曰く、學問の目的を教ふる、友人の撰擇を教ふる、奢侈の惡習を戒むる、下宿屋住居を戒むる、容儀の大切なることを教ふる、交際の要訣を教ふる、愛敬の極意を教ふる、化粧法の神髓を教ふる、時間の活用を教ふる、其他習慣の大切、愛と從順の關係、手跡の事、自重心の事、快活の必要、日常談話、音樂の必要、吝嗇の不可、優美の品性、嫉妬心を戒む等懇々訓諭教誨せるものにて、女學生諸子は是非一讀を經べき良書なり(定價四十錢)

◎女子職業案内　　本郷區妻戀坂　便利堂發行

本書は菅原臥龍氏の編にして、女子の職業を求むる人の便利の爲に世に出せるものなるべし、即ち女子の職業を獨立的、處女的、副業的に區分し、現時の狀況を詳記せるものなり、備新職業のこと、及び附錄として、尾崎行雄、上田萬年、鷲山彌生、安部磯雄四氏の女子職業法あり(定價二十錢)

口繪の解説

◎粕壁の藤　むらさき匂ふ名所の藤なみ、今を盛りと咲ほこりたる花のすがた、實にうつくしきながめなりけり、

◎五月の花　堀切の菖蒲に清水谷の藤の花にもと、本誌に色を添えてけり、手折らまほしき感の起らずや、

◎徳川田安家　貴族中博學多識にして、而も温厚篤實なる德川伯爵の家庭にして、前號の令孃と併せ觀ば、奥床しき同家の家庭を想像し得らるべし、

◎華族女學校卒業式　これぞ華族女學校の名を冠する最後の卒業式なり、

◎幼兒の就膳　これは井伊直方君が意匠撮影に成れる幼兒百態の一として掲載したるものにて、今後續々、この種の無邪氣ある印畫を本誌に觀るを得べし、

◎繪畫の稽古　現時閨秀丹青界の大立者なる跡見玉枝女史が、繪畫教授の狀態にして、この中には貴族の令孃も三四名打まじり居るよし因に曰ふ、前號に其小照を出したる小笠原、池田、宍戸の諸名媛皆同女史の門に繪畫を學びつゝあるなり、

◎女子商業學校の卒業式　東京の一名物として設立せられ、且つ今春の卒業式に異彩を放ちたる、女子商業學校の卒業生諸氏なり、定めて此中より多くの良妻君出づるなるべし、

◎水戸高等女學校卒業式　地方高等女學校にて評判よき同校の卒業生を撮影したるもの、校長は本田嘉種氏、

定價

一册	前金貳拾錢
三册	前金五拾七錢
六册	前金壹圓拾錢
拾貳册	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年四月廿八日印刷
明治三十九年五月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社 國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社 國光社（電話新橋二六九三番）（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ●女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價（模樣ノ巻四十銭・模樣ノ巻五十銭・編物ノ巻五十銭）（續ノ巻五十五銭・模樣ノ巻五十五銭）郵税各二銭
- 棚橋絢子著 ●女道叢話 全 定價金三十銭 郵税金四銭
- 三輪田眞佐子著 ●女子之本分 全 定價金二十五銭 郵税金四銭
- 三輪田眞佐子著 ●女子處世論 全 定價金二十銭 郵税金四銭
- 磯部武者五郎著 ●家計簿記法 全 定價金十五銭 郵税金二銭
- 藤野天城著 ●女子小觀 全 定價金二十銭 郵税金四銭
- 堀内新泉著 ●女樂師 全 定價金卅五銭 郵税金六銭
- 松川霓州著 ●結婚と家庭 全 定價金十五銭 郵税金四銭
- 堀内新泉著 ●家庭の鑑 全 定價金十八銭 郵税金四銭
- 女鑑編輯局編 ●近刊 ひめかゞみ 全 定價金二十五銭 郵税金四銭

◀國光社出版圖書目錄▶

著者	書名	冊數	定價	郵税
梅澤清一著	◉清少納言と紫式部	全	金廿五錢	金六錢
澁谷愛著	◉萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀內新泉著	◉少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	◉常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林雨搭著	◉勾當の內侍	全	金十三錢	金二錢
濱田廉著	◉袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	◉靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	◉顏世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	◉家庭訓歌 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀬眞卿著	◉學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	◉女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

東京高等師範學校附屬小學校編纂　學校生活　全　定價金廿錢　郵稅金四錢

樋口勘次郎著　教育者と國家社會主義　全　定價金八十錢　郵稅金八錢

雜書類

登張竹風著　讀書と修養　全　定價金三十錢　郵稅金四錢

幸田露伴編　四季物語　全　定價金五十錢　郵稅金四錢

佐藤天風著　クレオパトラ　全　定價金廿五錢　郵稅金四錢

醫學博士森鷗外著　長曾我部信親　全　定價金十錢　郵稅金二錢

安部正人編　泥舟遺稿　全　定價金四十五錢　郵稅金六錢

伯爵副島種臣題辭　從二位尾崎忠治題辭　鹿川宮內默藏著　王學指掌　全　定價金一圓　郵稅金十錢

從六位內藤耻叟序　故正三位文學博士栗田寬著　天朝正學　全　定價金卅五錢　郵稅金四錢

文學士吉丸一昌編　名家修養談叢　全　定價金卅六錢　郵稅金八錢

榎本虎彥著　櫻痴居士と市川團十郎　全　定價金卅錢　郵稅金四錢

小谷幾次郎著　腦力增進論　全　定價金卅五錢　郵稅金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

著者	書名	冊數	定價	郵税
清藤正輔謹編	⦿皇后陛下御略記 坤徳	上製 並製	上製金卅五錢 並製金廿五錢	各四錢
小畠幾次郎著	⦿體力增進論	全	金四拾錢	送料金六錢
清藤正輔編	⦿西郷從道	全	金廿五錢	金四錢
清藤正輔編	⦿聖徳太子傳	全	金十錢	金二錢
福本日南著	⦿筑前誌	全	金一圓廿錢	金十錢
第五回内國勸業博覽會事務局御編輯	⦿第五回内國勸業博覽會 出品審査概況	全	金十五錢	金四錢
宮崎滔天著	⦿卅三年之夢	全	金卅三錢	金八錢
宮崎滔天著	⦿狂人譚	全	金二十錢	金四錢
澁澤男爵題字 高瀬魁介編纂	⦿澁澤男爵 最近實業談	全	上製金七十錢 並製金六十錢	各金十錢
北海道廳拓殖課御編纂	⦿北海道殖民圖解	全	金八錢	金二錢
富田鐵之助題字 須田毎六著	⦿銀行利用法	全	金四十錢	金六錢
故品川彌次郎 平田東助 共著	⦿信用組合法提要	全	金五錢	金二錢
獨乙大博士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著 平田東助、平塚湯次郎、湯川寛吉共譯	⦿商工經濟論	全二冊	金一圓八十錢	金十五錢
濱口吉右衛門著	⦿財政と國力	全	金廿三錢	金四錢

絶好紀念

◉肖像墨蹟は東郷乃木兩大將

◉凱旋大觀兵式（四月三十日）唯一紀念

乃木大將 肖像墨蹟寫眞 **版** 額面

◉一回刷用紙アート紙幅一尺五寸長二尺

◉定價一枚金貳拾錢◉發送料金拾錢

大將の快諾を得て謹寫せし半身像、上に大將が陣中吟の傑作を揭ぐ、本會の爲に大將が揮はれたる眞筆也、颯々たる英姿、淋漓たる墨根と相俟て、眞個凱旋好紀念

◉日本海大海戰（五月廿七日）唯一紀念

東郷大將肖像 石版 額面

◉用紙鳥の子◉幅一尺八寸長二尺三寸

◉肖像は知名の肖像畵家が心力を注ぎて謹寫したる大將が等身大の半身像を極彩色三十回刷と爲せしもの、毛髮鬚眉の細一々眞に迫り、人をして親しく大將に接するの想あらしむ

◉**東郷大將墨蹟額面** 用紙畵箋紙◉竪額横額の二種にして

竪額の大は肖像畵と同じ◉横額は竪一尺二寸横四尺五寸

墨蹟『**在此一戰**』の四大字、彼の大海戰に於ける大將の信號中の警句は今や

大將の筆に上りて鶴舞ひ鴻飛べり、肖像の溫容と相對して、世間何物か是に優るの好紀念品あるべき

◉右肖像墨蹟（竪額横額何れにても）二枚一組定價金壹圓

◉一枚賣は肖像一枚八拾錢墨蹟一枚參拾錢◉發送料金拾錢

◉申込は總て前金若くは代金引換の事◉郵便爲換は京橋區築地郵便局宛振込まるべし

◉利益は悉皆癈兵院に寄附

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

日本癈兵慰問會

（電話新橋特二八六九八三）

女鑑

明治三十九年五月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾六年第六號　第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷